松江市文化財調査報告書　第92集

（仮）とねり団地・（仮）レークタウン国屋造成工事に伴う

舎人遺跡・荒隅城跡（小十太郎地区）発掘調査報告書

2002年11月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書　第92集

（仮）とねり団地・（仮）レークタウン国屋造成工事に伴う

舎人遺跡・荒隅城跡（小十太郎地区）
発 掘 調 査 報 告 書

2002年11月

松 江 市 教 育 委 員 会
財団法人松江市教育文化振興事業団

例　　言

1. 本書は、有限会社不動産ラインズから松江市教育委員会が依頼を受け分布調査を行い、平成12・13年度に財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した（仮称）とねり団地・（仮称）レークタウン国屋造成工事に伴う舎人遺跡・荒隅城跡（小十太郎地区）発掘調査にかかる報告書である。
2. 調査の組織は下記のとおりである。

平成12・13年度　　舎人遺跡発掘調査

依 頼 者　有限会社不動産ラインズ

事 務 局　松江市教育委員会　　教　育　長　伊　藤　忠　志（平成13年3月31日まで）

山　本　弘　正（平成13年4月1日から）

生涯学習課　文化財室（平成13年3月31日まで）

文化財室室長　岡　崎　雄二郎

文化財室主幹　吉　岡　弘　行

文化財課（平成13年4月1日から）

課　　長　岡　崎　雄二郎

係　　長　飯　塚　康　行

主　　任　古　藤　博　昭

調 査 者　財団法人松江市教育文化振興事業団　埋蔵文化財課

調査担当者　調　査　員　石　川　　崇

調査補助員　宮　本　亜希子

平成13年度　荒隅城跡（小十太郎地区）発掘調査

事 務 局　松江市教育委員会　　教　育　長　山　本　弘　正

文化財課　　課　　長　岡　崎　雄二郎

係　　長　飯　塚　康　行

主　　任　古　藤　博　昭

調 査 者　財団法人松江市教育文化振興事業団　埋蔵文化財課

調査担当者　調　査　員　石　川　　崇

臨時職員　時　安　順　子（平成13年7月～9月）

調査補助員　金　坂　有　史（平成13年10月から）

平成14年度　舎人遺跡・荒隅城跡（小十太郎地区）発掘調査報告書作成事業

事 務 局　松江市教育委員会　　教　育　長　山　本　弘　正

文化財課　　課　　長　岡　崎　雄二郎

係　　長　飯　塚　康　行

調 査 者　　財団法人松江市教育文化振興事業団　埋蔵文化財課

調査担当者　調　査　員　　石　川　　崇

調査補助員　　花　田　陽　子

3. 調査の実施・報告書の作成には次の方々の指導と協力を得た。感謝の意を表わす次第である。

村上　勇（広島県立美術館）、山根正明（松江南高校教諭）、椿　真治（島根県教育委員会）

阿部賢治（斐川町教育委員会臨時職員）

4. 本書の作成にあたっては下記のものが携わった。

（遺物実測）　石川・花田・宮本・時安・金坂・阿部・中山愉希恵・和田守加奈

（浄　　書）　石川・花田・福田万里・松尾澄美

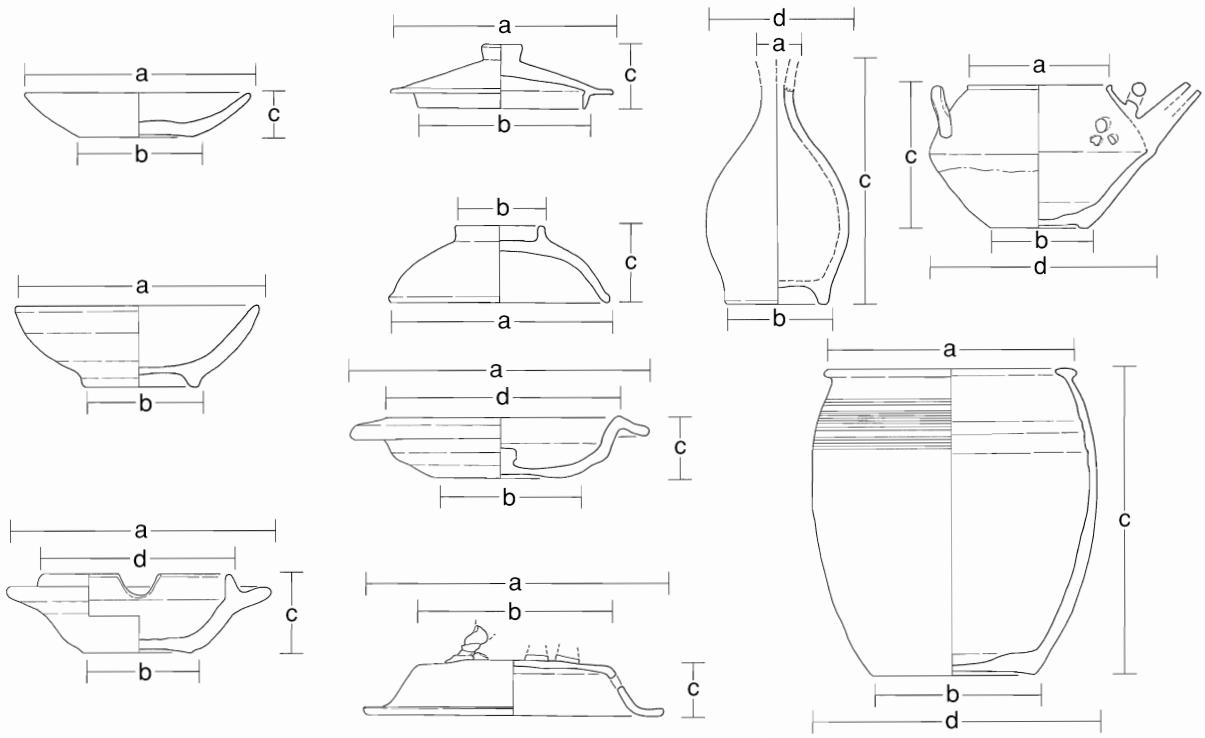
（拓　　本）　花田・福田・松尾

5. 本書に掲載した写真は石川が撮影した。

6. 出土遺物はすべて松江市教育委員会で保管している。

7. 本書の執筆は及び編集は石川が行い、花田がこれを助けた。

8. 一覧表の計測箇所については以下の付図のとおりである。（単位は㎝）



目　　次

カラー図版

Ⅰ　調査にいたる経緯 …… 1

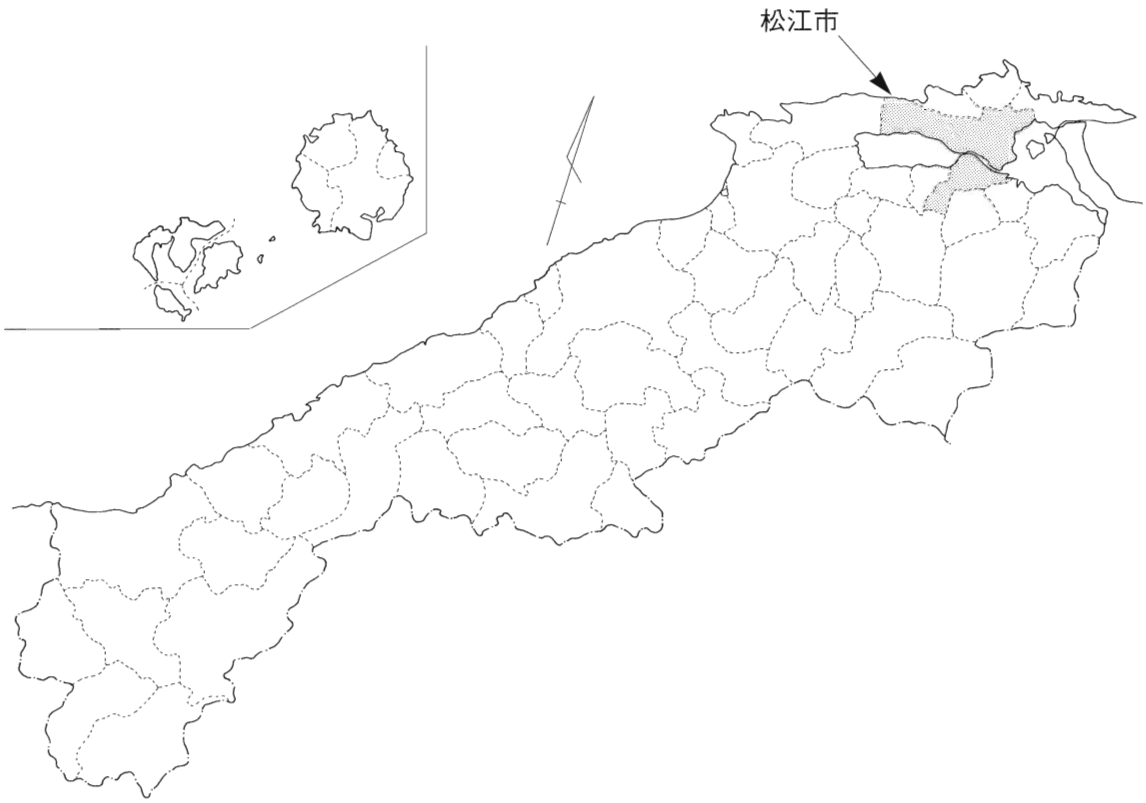
Ⅱ　周辺の歴史的環境 …… 2

Ⅲ　調査報告 …… 4

ｉ．舎人遺跡 …… 5

ｉｉ．荒隈城跡（小十太郎地区） …… 14

Ⅳ　ま　と　め …… 74



第１図　松江市位置図

挿　図　目　次

第１図　松江市位置図
第２図　舎人遺跡・荒隈城跡位置図 …… 1
第３図　周辺の遺跡位置図 …… 3
第４図　調査前地形測量図及びトレンチ設定図 …… 4
第５図　調査成果図 …… 5
第６図　土層断面図 …… 6～7
第７図　頂上部平坦面遺構配置図 …… 8
第８図　頂上部平坦面　SX－01実測図 …… 9
第９図　東側調査区　遺構配置図 …… 10
第10図　南側調査区　SK－01実測図 …… 11
第11図　出土遺物実測図 …… 12
第12図　調査前地形測量図及びトレンチ設定図 …… 14
第13図　調査前地形測量図及び加工段位置図 …… 14
第14図　東側調査区調査前地形測量図 …… 15
第15図　東側調査区調査成果図 …… 16
第16図　T－１　出土遺物実測図（1） …… 17
第17図　T－１　出土遺物実測図（2） …… 18
第18図　T－１　出土遺物実測図（3） …… 18
第19図　T－２・３　出土遺物実測図 …… 19
第20図　１号墓　実測図 …… 20
第21図　１号墓　SK－01実測図 …… 21
第22図　１号墓　出土遺物実測図 …… 21
第23図　SK－02　実測図 …… 22
第24図　２号墓　出土遺物実測図 …… 22
第25図　３号墓　出土遺物実測図（1） …… 23
第26図　３号墓　出土遺物実測図（2） …… 24
第27図　３号墓　出土遺物実測図（3） …… 25
第28図　３号墓　出土遺物実測図（4） …… 26
第29図　３号墓　出土遺物実測図（5） …… 27
第30図　４号墓　実測図 …… 28
第31図　４号墓　SK－03実測図 …… 29
第32図　４号墓　出土遺物実測図（1） …… 30

第33図　４号墓　出土遺物実測図（2）　30
第34図　４号墓　SK－03内出土遺物　31
第35図　SX－01実測図及び土層断面図　32
第36図　SX－02・SD－01実測図　33
第37図　SK－04実測図　33
第38図　墓域周辺　出土遺物実測図（1）　34
第39図　墓域周辺　出土遺物実測図（2）　34
第40図　墓域周辺　出土遺物実測図（3）　35
第41図　墓域周辺　出土遺物実測図（4）　36
第42図　墓域周辺　出土遺物実測図（5）　37
第43図　墓域周辺　出土遺物実測図（6）　38
第44図　墓域周辺　出土遺物実測図（7）　39
第45図　墓域周辺　出土遺物実測図（8）　39
第46図　墓域周辺　出土遺物実測図（9）　40
第47図　墓域周辺　出土遺物実測図（10）　41
第48図　北側調査区　調査前地形測量図及びトレンチ設定図　42
第49図　北側調査区（１・２区）調査成果図　43
第50図　北側１区上　出土遺物（1）　43
第51図　北側１区上　出土遺物（2）　44
第52図　北側１区上　出土遺物（3）　44
第53図　SX－06（加工段）出土遺物　45
第54図　北側１区下　遺構配置図　46
第55図　北側１区下　出土遺物（1）　47
第56図　北側１区下　出土遺物（2）　48
第57図　北側１区下　出土遺物（3）　49
第58図　北側１区下　出土遺物（4）　49
第59図　SX－04（土器溜）　実測図　50
第60図　SX－04（土器溜）　出土遺物実測図（1）　51
第61図　SX－04（土器溜）　出土遺物実測図（2）　52
第62図　SX－04（土器溜）　出土遺物実測図（3）　53
第63図　SX－04（土器溜）　出土遺物実測図（4）　54
第64図　SX－04（土器溜）　出土遺物実測図（5）　54
第65図　SX－04（土器溜）　出土遺物実測図（6）　55
第66図　SK－06　実測図　56
第67図　SK－07　実測図　57

第68図　北側２区下　遺構配置図 …… 58
第69図　SK－12　実測図 …… 59
第70図　SK－13　実測図 …… 60
第71図　SK－13　出土遺物実測図 …… 60
第72図　SK－14　実測図 …… 61
第73図　北側２区上　出土遺物実測図（1） …… 61
第74図　北側２区上　出土遺物実測図（2） …… 62
第75図　北側２区上　土器溜出土遺物実測図（1） …… 63
第76図　北側２区上　土器溜出土遺物実測図（2） …… 64
第77図　北側２区上　土器溜出土遺物実測図（3） …… 65
第78図　北側３区　出土遺物実測図（1） …… 66
第79図　北側３区　出土遺物実測図（2） …… 66
第80図　頂上部調査区　調査前地形測量図及びトレンチ設定図 …… 67
第81図　頂上部調査区　東側遺構配置図 …… 68
第82図　SD－04・05・06　実測図 …… 68
第83図　SX－08・09　実測図 …… 69
第84図　SX－10　実測図 …… 70
第85図　SK－15　実測図 …… 71
第86図　SK－16　実測図 …… 72
第87図　SK－17　実測図 …… 73
第88図　頂上調査区出土遺物実測図（1） …… 73
第89図　頂上調査区出土遺物実測図（2） …… 73

図　版　目　次

舎人遺跡

図版１　東側調査区
SD－02完掘状況（北側から）
SD－01完掘状況（北側から）
SD－01内遺物出土状況

図版２　南側調査区
SK－01　土層断面
SK－01　完掘状況（西側から）

図版３　頂上部調査区
完掘状況（南側から）
完掘状況（北側から）
SX－01完掘状況（東側から）

図版４　西側調査区
完掘状況（南西側から）
完掘状況（北西側から）

荒隈城跡（小十太郎地区）

図版５　東側調査区
１号墓調査前全体（西側から）
１号墓SK－01完掘状況

図版６　東側調査区
４号墓調査前全体（南側から）
４号墓SK－03完掘状況

図版７　東側調査区
SK－02完掘状況
SK－04完掘状況
SX－01完掘状況

図版８　東側調査区
SX－02完掘状況
SD－01完掘状況
SX－02・SD－01完掘状況

図版９　北側調査１区
SK－05完掘状況
SK－07完掘状況
SX－03完掘状況

図版10　北側調査１区
完掘状況（東側から）
完掘状況（西側から）

図版11　北側調査２区
SK－12完掘状況
SK－13完掘状況
SX－07完掘状況

図版12　北側調査２区
完掘状況（西側から）
完掘状況（東側から）

図版13　頂上部調査区（東側）
調査前（東側から）
調査前（北東側から）
調査前（西側から）

図版14　頂上部調査区　SK－15完掘状況
SK－16完掘状況
SK－17完掘状況

図版15　頂上部調査区　SX－10土層断面図(1)
SX－10土層断面図（2）
SX－10土層断面図（3）

図版16　頂上部調査区
SX－10完掘状況（1)(南東側から）
SX－10完掘状況（2)(東側から）

舎人遺跡

図版17　出土遺物

荒隈城跡（小十太郎地区）

図版18　T－１出土遺物（1）
図版19　T－１出土遺物（2）
図版20　１号墓・２号墓・４号墓出土遺物
図版21　３号墓出土遺物（1）
図版22　３号墓出土遺物（2）
図版23　３号墓出土遺物（3）
図版24　３号墓出土遺物（4）
図版25　３号墓出土遺物（5）
図版26　墓域周辺出土遺物（1）
図版27　墓域周辺出土遺物（2）
図版28　墓域周辺出土遺物（3）
図版29　墓域周辺出土遺物（4）
図版30　墓域周辺出土遺物（5）
図版31　墓域周辺出土遺物（6）
図版32　墓域周辺出土遺物（7）
図版33　墓域周辺出土遺物（8）
図版34　北側調査１区上
SX－06（加工段）出土遺物
図版35　北側調査１区下　出土遺物（1）
図版36　北側調査１区下　出土遺物（2）
図版37　北側調査１区下　出土遺物（3）
図版38　北側調査１区下
SX－03（土器溜）出土遺物（1）
図版39　SX－03（土器溜）出土遺物（2）
図版40　SX－03（土器溜）出土遺物（3）
図版41　SX－03（土器溜）出土遺物（4）
図版42　北側調査２区上　出土遺物
図版43　北側調査２区上
土器溜出土遺物（1）
図版44　土器溜出土遺物（2）
図版45　北側調査３区　出土遺物
図版46　頂上部調査区出土遺物・古銭
図版47　碗・蓋の見込み部分の文様など

Ⅰ　調査にいたる経緯

松江市街地西方にあたる宍道湖北岸部には低丘陵地帯が広がっており、この地形を利用して戦国時代には毛利軍によって荒隈城が築かれていたことが知られている。

平成12年度において、有限会社不動産ラインズがこの地に住宅団地の開発を２箇所計画し、平成12年７月３日付けで（仮称）とねり団地造成工事、同年７月５日付けで（仮称）レークタウン国屋にかかる埋蔵文化財分布調査依頼書が提出された。これを受けて松江市教育委員会では同年７月19日に（仮称）レークタウン国屋、同年７月27日に（仮称）とねり団地にかかる埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果、（仮称）レークタウン国屋予定地では区域北半部の丘陵地で斜面を人為的に階段状に加工した形跡が見られ、荒隈城関連の遺跡であると判断されたことから、土地の字名より「荒隈城跡（小十太郎地区）」と命名された。また（仮称）とねり団地予定地でも、丘陵頂上部に人為的に加工されたと見られる平坦地および斜面部に階段状地形が見られたことから、城郭関連の遺跡であると判断され、土地の字名から「舎人遺跡」と命名された。その後の取扱い協議の結果、両遺跡の保存は困難であることから全面発掘調査を実施することとなった。調査は財団法人松江市教育文化振興事業団に委託して実施した。調査期間は舎人遺跡が平成12年11月13日～平成13年４月28日までの５ヶ月半間、荒隈城跡（小十太郎地区）が平成13年７月10日～平成14年２月28日までの６ヶ月間である。

第２図　舎人遺跡・荒隈城跡位置図

Ⅱ　周辺の歴史的環境

舎人遺跡①は松江市国屋町・黒田町に、荒隈城跡（小十太郎地区）②は国屋町地内の尾根上に位置する。この尾根は松江市の北側、北山山地から南に伸びたもので両遺跡の尾根は隣り合わせになり、舎人遺跡の方が東側の尾根になる。

この国屋町・黒田町では周知されている遺跡は少ない。特に縄文・弥生時代の遺跡になると極端に少ない。散布地として天倫寺前遺跡③があり、黒曜石や石器類が採集されているものの実態はあまり分かっていない。

古墳時代になっても状況はあまり変わらず、法吉町や春日町に比べて古墳の数が少なく、比津町に全長26ｍの前方後方墳の小丸山古墳④[1] がある。

横穴になると多少数が増えてくる。とねり坂横穴群⑤は舎人遺跡の南東側の同じ丘陵に位置する。計３穴確認され、うち３号穴は床面が有縁屍床、天井部は天地根元造りであった。副葬品はほとんどが須恵器で、頭骨も出土した。[2]

向遺跡⑥は舎人遺跡の南側の谷部に位置する。掘立柱建物跡が10棟検出され、土師器や須恵器、中近世土器が出土した。生活域として古墳時代前期から平安時代までの長期間の集落遺跡と思われる。[3]

荒隈城⑦は今までに宍道湖寄りで２度調査されている。昭和43年には島根県愛護協会が調査し、尾根の頂上部で掘立柱建物跡を５棟検出し、かわらけや輸入陶磁器が出土した。[4] 昭和57年には松江市教育委員会が調査し、曲輪跡や土塁などを検出し、かわらけや耳坏形土器などの土師質土器や輪花白磁や輪花青磁の小皿などの輸入陶磁器、和鏡・古銭などが出土した。[5]

満願寺城⑧は松江市の西側、現在の満願寺、警察学校の周辺に位置する。地理的環境から水軍もしくは水運の重要拠点と考えられ、毛利・尼子の争奪戦が繰り広げられた。

末次城⑨は松江城のある亀田山か荒隈城の周辺にある幸魂山にあったとされる。天文３年（1534年）の塩冶興久の乱や尼子復興戦で舞台となった。

松江城⑩は亀田山に築かれた平山城で、慶長５年（1600年）の関ヶ原の戦いの戦功により、堀尾吉春が浜松から出雲・隠岐18万石の領主として入国した。当初は月山冨田城を本拠地としたが、地理的・軍事的な観点から本拠地を松江に移し松江城を築いた。

註

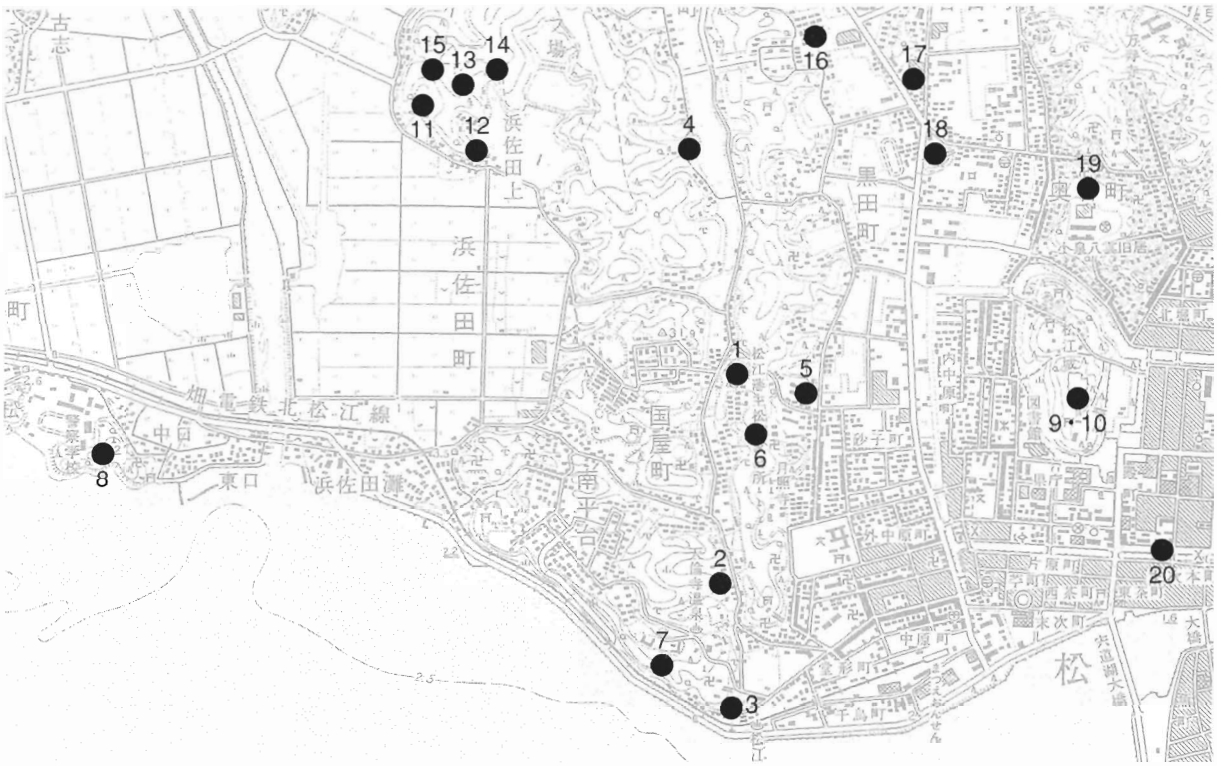
1）山本清「出雲国における方形墳と前方後方墳について」『島根大学論集１号』　島根大学　1951

2）近藤正「松江・とねり坂横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告書第Ⅰ集』　島根県教育委員会　1969

3）『向遺跡発掘調査報告書』　松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団　1994

4）『季刊文化財第６号』　島根県文化財愛護協会　1968

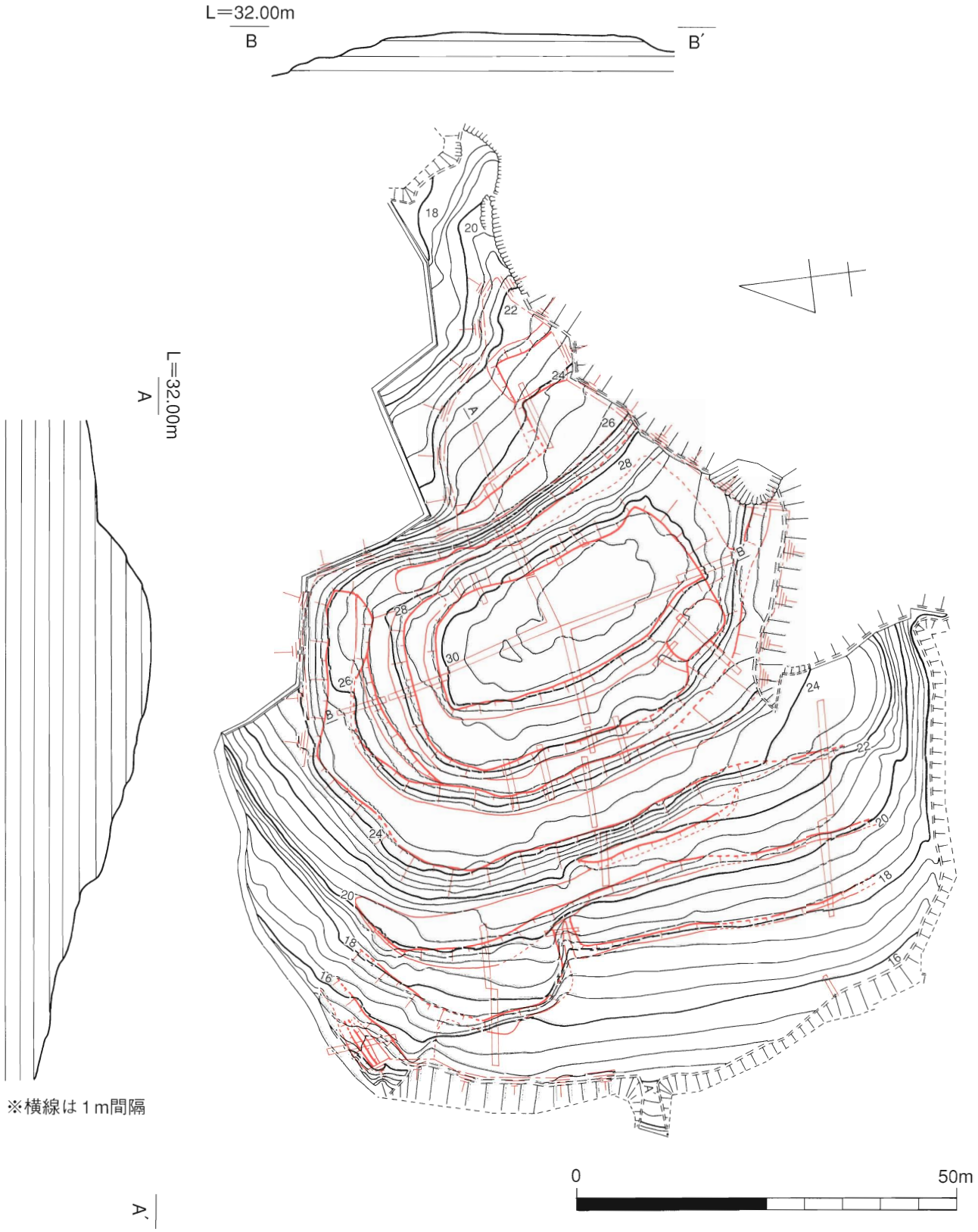
5）『荒隈城跡』　松江市教育委員会　1982



第３図　周辺の遺跡位置図

1. 舎人遺跡	2. 荒隈城（小十太郎地区）	3. 天倫寺前遺跡	4. 小丸山古墳
5. とねり坂横穴群	6. 向遺跡	7. 荒隈城	8. 満願寺城
9. 末次城	10. 松江城	11. 石田遺跡	12. 東前横穴群
13. 殿山横穴群	14. 小池台横穴群	15. 薦津殿山城	16. 春日遺跡
17. 法吉小学校裏横穴群	18. 摩利支天横穴群	19. 赤山横穴群	20. 茶町遺跡

Ⅲ　調　査　報　告

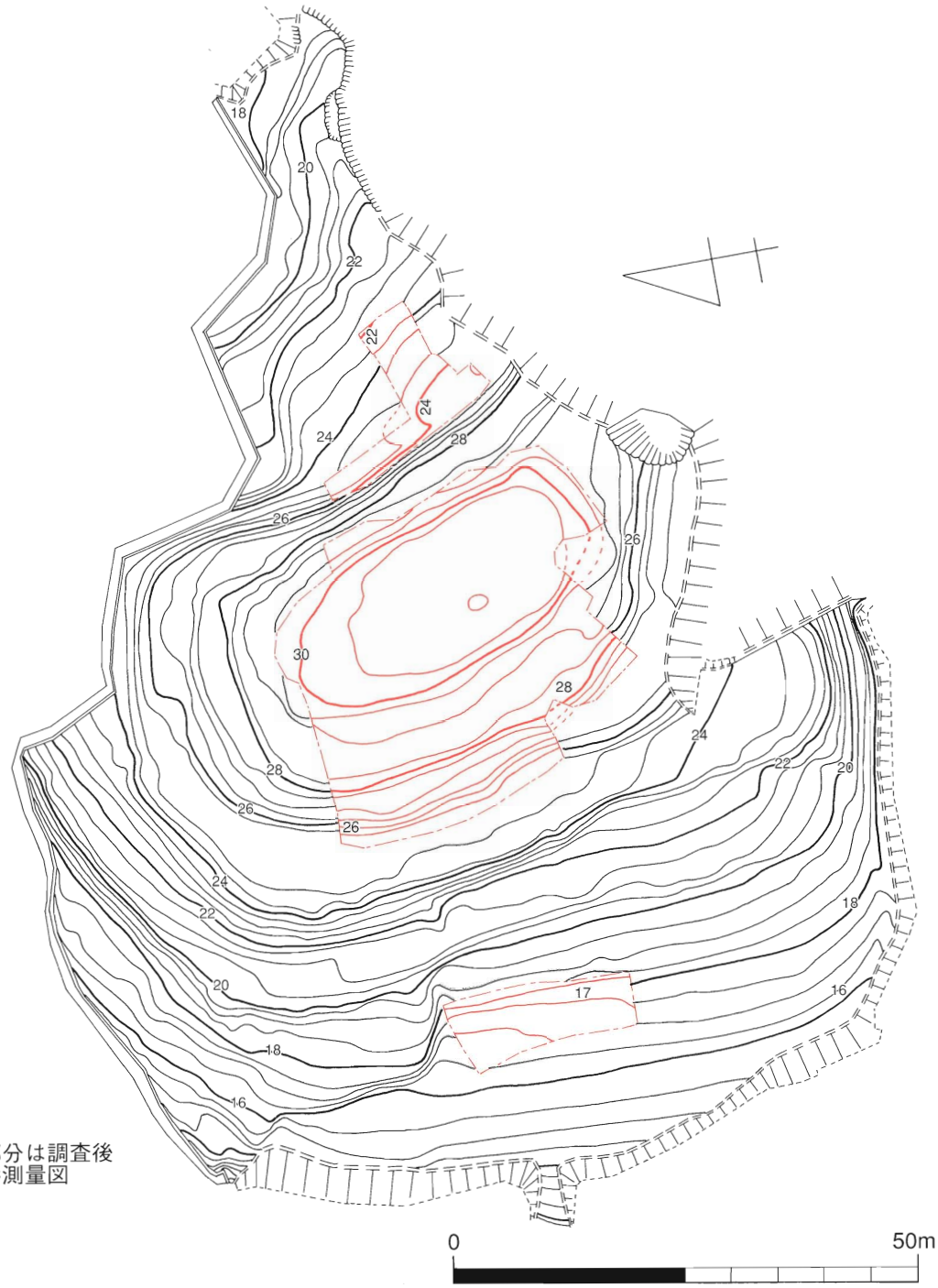


第４図　調査前地形測量図及びトレンチ設定図

i　舎　人　遺　跡

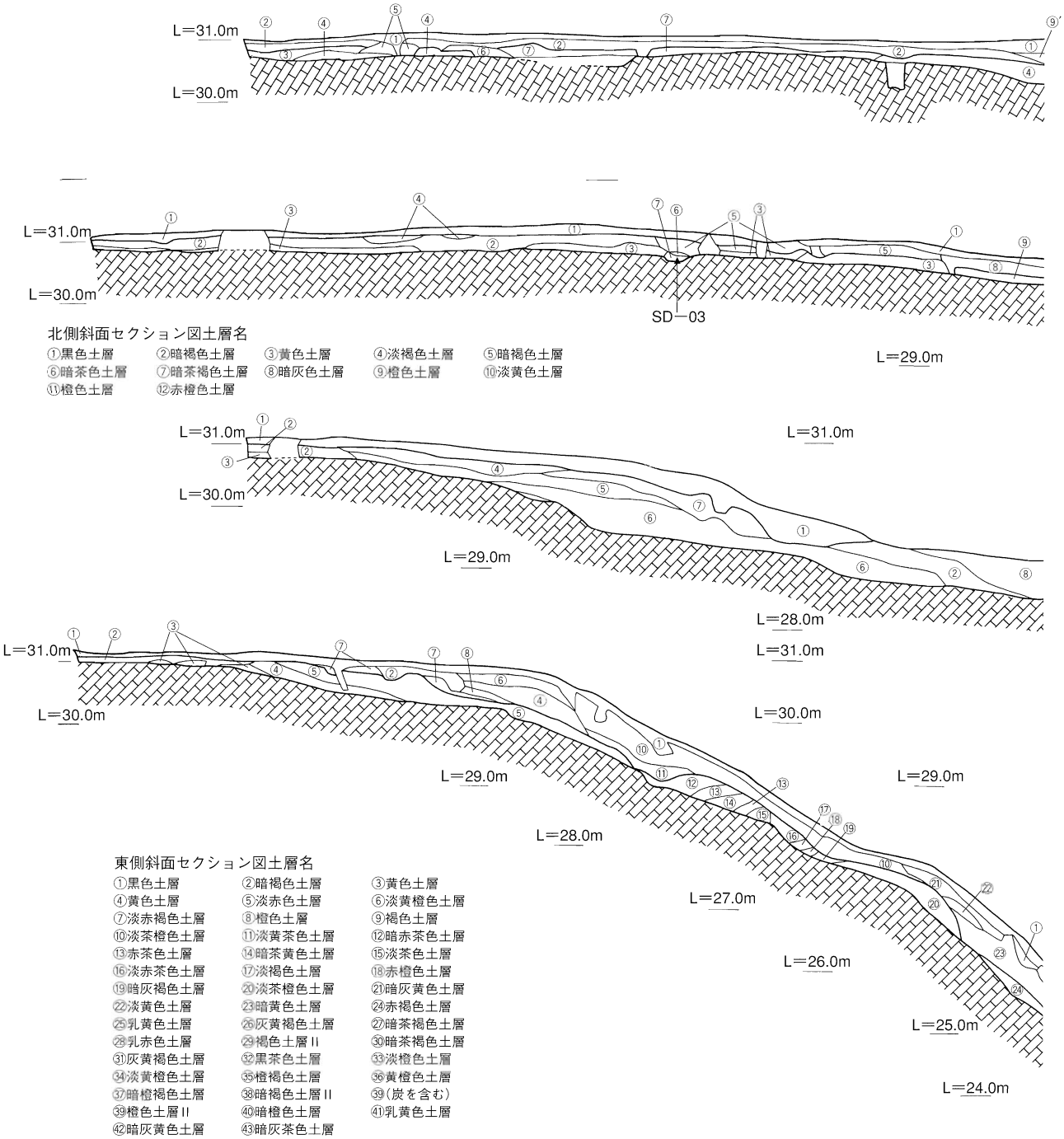
1．調査の概要

本遺跡は表面観察の段階で東西15ｍ、南北35ｍの広さをもつ頂上平坦面と、東西南北４方向のすべての斜面に加工段を数段持っていることが確認されていた。南側の加工段は以前の住宅地建設の擁壁のためにすでに削平されていて正確な段数はわからず、北側も宅地造成のため削平されているが、２～３段以上あったと思われる。東側の地形は急斜面で、加工段は１段で斜面が終わるとその後、緩

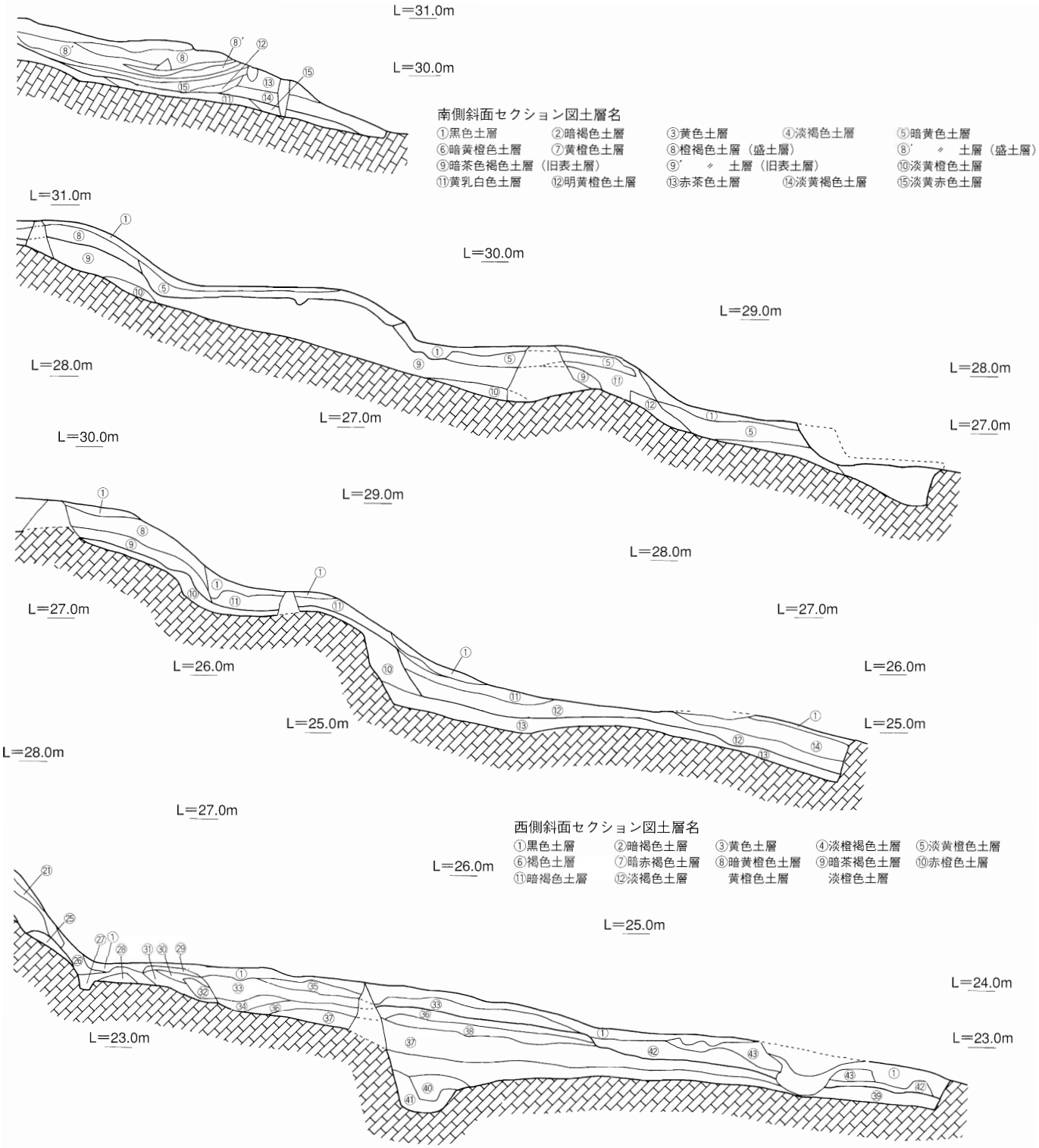


※赤線部分は調査後
の地形測量図

第５図　調査成果図


L=31.0m
L=30.0m
SD—03
L=29.0m
L=28.0m
L=27.0m
L=26.0m
L=25.0m
L=24.0m
北側斜面セクション図土層名
①黒色土層 ②暗褐色土層 ③黄色土層 ④淡褐色土層 ⑤暗褐色土層
⑥暗茶色土層 ⑦暗茶褐色土層 ⑧暗灰色土層 ⑨橙色土層 ⑩淡黄色土層
⑪橙色土層 ⑫赤橙色土層
東側斜面セクション図土層名
①黒色土層 ②暗褐色土層 ③黄色土層
④黄色土層 ⑤淡赤色土層 ⑥淡黄橙色土層
⑦淡赤褐色土層 ⑧橙色土層 ⑨褐色土層
⑩淡茶橙色土層 ⑪淡黄茶色土層 ⑫暗赤茶色土層
⑬赤茶色土層 ⑭暗茶黄色土層 ⑮淡茶色土層
⑯淡赤茶色土層 ⑰淡褐色土層 ⑱赤橙色土層
⑲暗灰褐色土層 ⑳淡茶橙色土層 ㉑暗灰黄色土層
㉒淡黄色土層 ㉓暗黄色土層 ㉔赤褐色土層
㉕乳黄色土層 ㉖灰黄褐色土層 ㉗暗茶褐色土層
㉘乳赤色土層 ㉙褐色土層Ⅱ ㉚暗茶褐色土層
㉛灰黄褐色土層 ㉜黒茶色土層 ㉝淡橙色土層
㉞淡黄橙色土層 ㉟橙褐色土層 ㊱黄橙色土層
㊲暗橙褐色土層 ㊳暗褐色土層Ⅱ ㊴(炭を含む)
㊴橙色土層Ⅱ ㊵暗橙色土層 ㊶乳黄色土層
㊷暗灰黄色土層 ㊸暗灰茶色土層
0
5m

第６図　土層断面図


L=31.0m
L=30.0m
南側斜面セクション図土層名
①黒色土層 ②暗褐色土層 ③黄色土層 ④淡褐色土層 ⑤暗黄色土層
⑥暗黄橙色土層 ⑦黄橙色土層 ⑧橙褐色土層（盛土層） ⑧′ 〃 土層（盛土層）
⑨暗茶色褐色土層（旧表土層） ⑨′ 〃 土層（旧表土層） ⑩淡黄橙色土層
⑪黄乳白色土層 ⑫明黄橙色土層 ⑬赤茶色土層 ⑭淡黄褐色土層 ⑮淡黄赤色土層
L=31.0m
L=30.0m
L=29.0m
L=28.0m
L=28.0m
L=27.0m
L=27.0m
L=30.0m
L=29.0m
L=28.0m
L=27.0m
L=27.0m
L=26.0m
L=26.0m
L=25.0m
L=25.0m
L=28.0m
L=27.0m
西側斜面セクション図土層名
①黒色土層 ②暗褐色土層 ③黄色土層 ④淡橙褐色土層 ⑤淡黄橙色土層
⑥褐色土層 ⑦暗赤褐色土層 ⑧暗黄橙色土層 ⑨暗茶褐色土層 ⑩赤橙色土層
⑪暗褐色土層 ⑫淡褐色土層 黄橙色土層 淡橙色土層
L=26.0m
L=25.0m
L=24.0m
L=23.0m
L=23.0m

斜面が続く。西側は加工段が５～６段確認された。

頂上部平坦面は十字形にトレンチを設定し、斜面は加工段と思われる場所にトレンチを設定し（計28本）、遺構の拡がりに応じて拡張して調査した。（第４図）

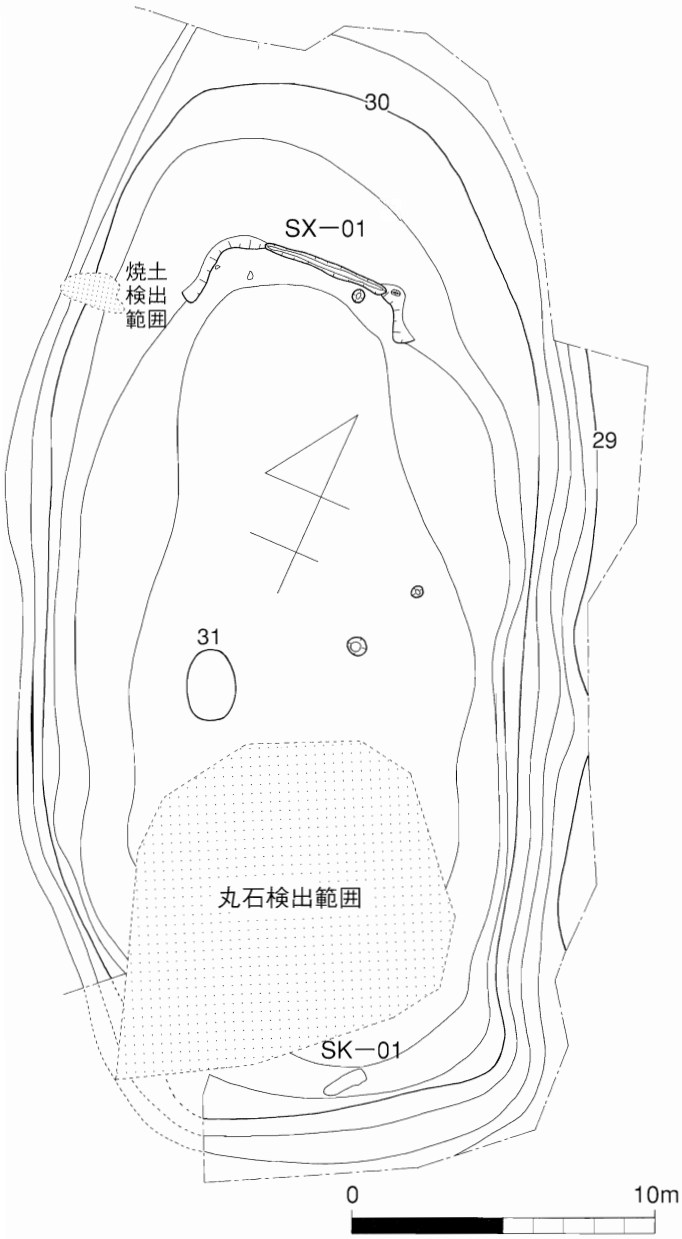
２．頂上部平坦面（第７図）

（1）ＳＸ－01（第８図　図版３－３）

頂上中央部のやや北よりから加工段状遺構（ＳＸ―01）が検出された。東西方向に走り、平面形は南に向かって逆コの字状で、長さ7.9ｍ、高低差は最高で約30㎝を測り、中央部分には長さ4.1ｍ、幅20～30㎝、深さ10㎝を測る浅い溝状遺構になっている。用途は頂上部の平坦面を区切る遺構ではないかと考えられる。この遺構から遺物が出土しなかったため時期は不明である。

また加工段の上から石が２個検出された。いずれも15～25㎝、厚さが10㎝程度で、また同じ並びにピットが１つ確認された。それ以外の石やピットが確認できなかったためこの場所に建物があったかは不明であり、石も礎石に使用されたかは不明である。遺物など時期を限定できるものは出土しなかった。

このピット・石とＳＸ－01が関連した遺構かは不明である。

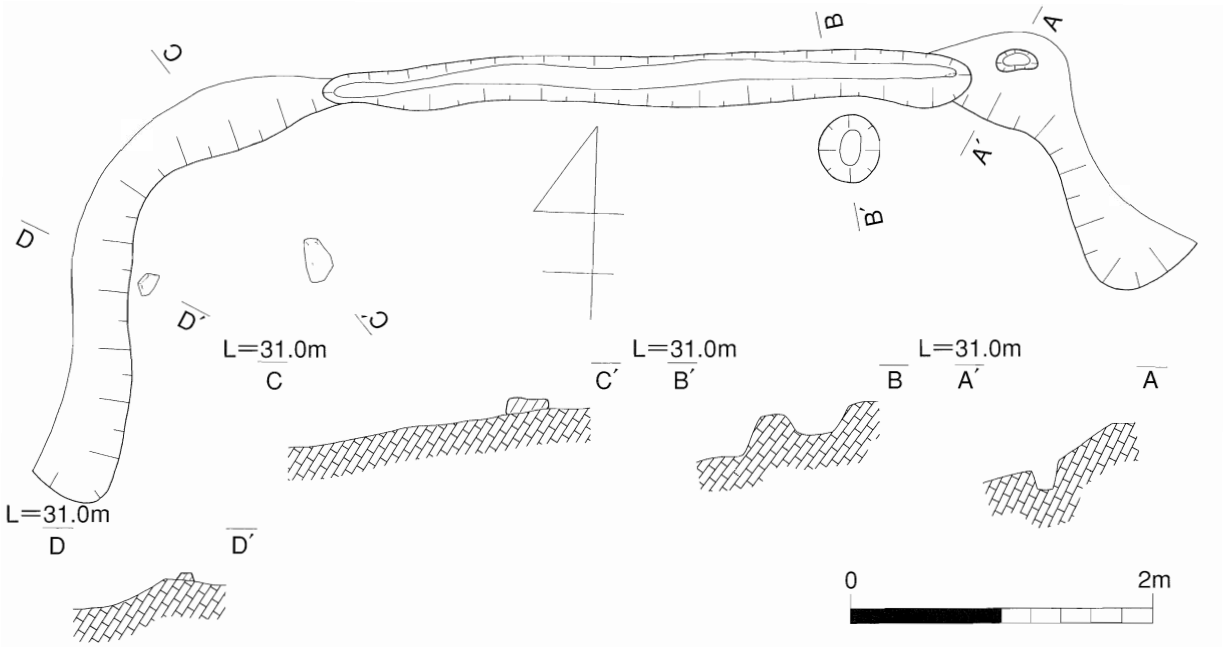


第７図　頂上部平坦面遺構配置図

頂上部平坦面の南側は直径10～15㎝程度の丸石が表土から第２層にわたって大量に散乱していた。その範囲は南北約10.6ｍ、東西10.2ｍに及んだ。しかしその他の遺構や遺物が確認できなかったため、詳細については不明である。これらの石はもともとこの丘陵や付近にあったものではなく、またこの周辺でも見られないことから他の場所から持ち込んだものと考えられる。

この頂上部には近所の方の話によると戦前に祠のような建物があったと話を聞いていることから、これらの石は祠に関係があるかもしれない。

この頂上部平坦面の南端付近は盛土による整地が行われた可能性がある。第６図の土層断面図（南側斜面セクション図）によ



第８図　頂上部平坦面　SX－01実測図

ると、⑨・⑨′の旧表土と思われる層と⑧・⑧′の盛土層と思われる層が確認された。しかしいずれの層からも遺物が出土しなかったため時期については不明だが、平坦面を拡張する為に行われたものと思われる。

西側の平坦面の端、肩口付近から焼土や炭化物が検出された。平面形は不整楕円形を呈し、規模は東西２ｍ、南北1.2ｍ、深さは１㎝程度であった。しかし明確に掘り込んで火を炊いたものではなく、また繰り返し火を炊いたものとも考えにくく、遺物なども出土しなかったことから用途や性格など詳細については不明である。

３．東側斜面

東側は他の３方向の斜面に比べ傾斜がきつく、途中の平坦面も幅が狭く、斜面が終わってからはなだらかな緩斜面が舌状に続く地形である。トレンチ調査の段階で斜面の土層断面から旧表土を削平し、盛土をしたような痕跡が確認された。（第６図の土層断面図－東側斜面セクション図）

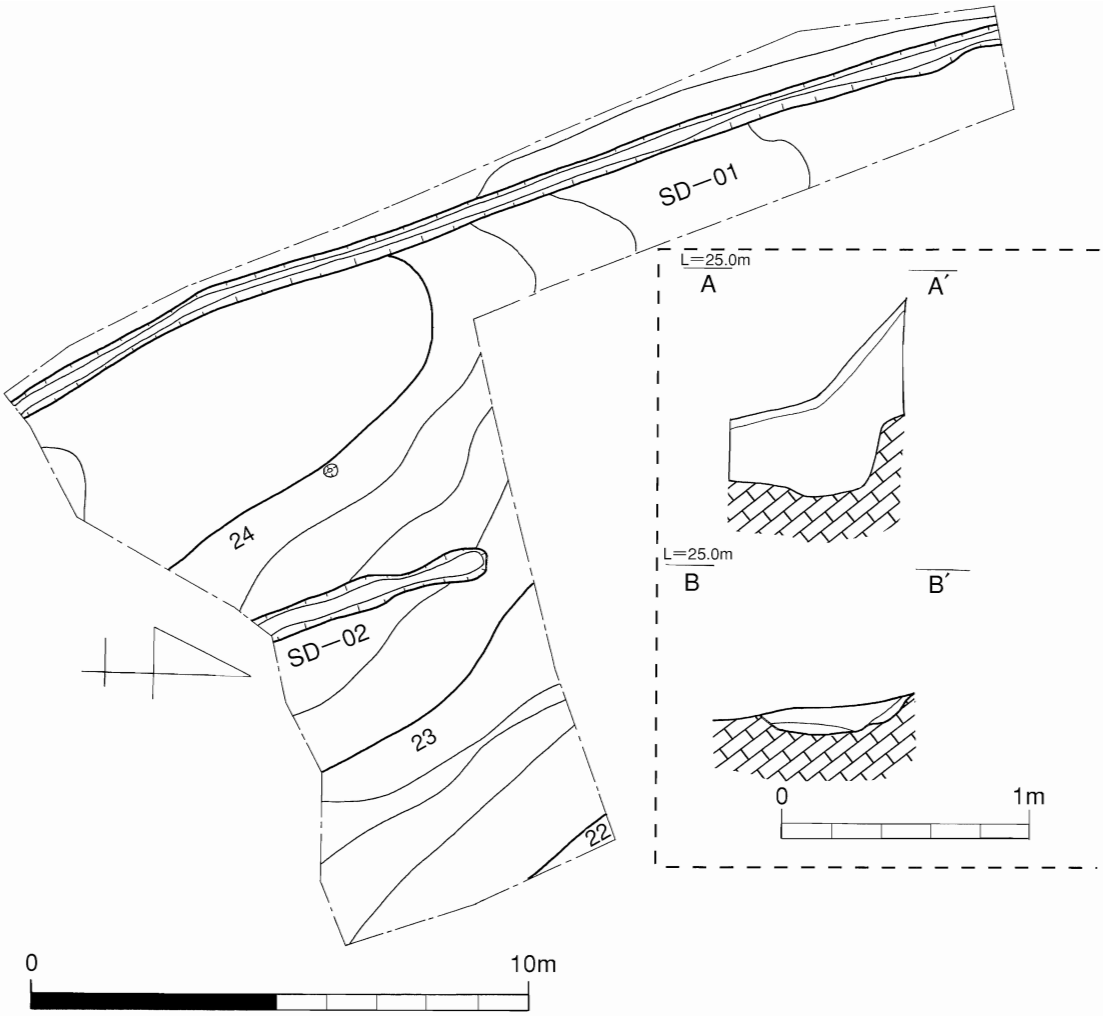
そこでここ以外に斜面の数ヶ所にトレンチを設定してその拡がりを確認しようとしたが、他のトレンチからは旧表土らしき土層は確認できるものの、明確に旧表土を削平し、盛土をした痕跡はなく、平面的には確認できなかった。

調査の結果、緩斜面からは溝状遺構が２条（ＳＤ―01・02）確認された（第９図、図版１）。

（1）ＳＤ－01（図版１－２）

ＳＤ－01は斜面と緩斜面との境を全体にわたって南北方向に走るもので、平面形はほぼ直線形で、長さは21ｍ以上、幅は50～20㎝、深さは５～60㎝を測る。覆土中からは陶器の壺が１点出土した（第11－５図、図版17－６）。

この溝は現在の地形に則して作られており、出土した壺は近世末から近代にかけてのものであり、埋土は表土の黒色土が入り込んでいた。以上のことから溝が掘られた時期も埋没したのも近世末か



第９図　東側調査区　遺構配置図

ら近代・現代にかけてと思われる。

(2) ＳＤ－02（図版１－１）

ＳＤ－02は斜面に直行し、南北に走る。平面形は直線形を呈し、長さは4.7ｍ、幅は60～30㎝、深さは５～10㎝を測る。非常に浅く、自然のくぼみに上部層が入り込んだ可能性が高い。

これらの溝に関しては、畑などの農作業にかかわるものの可能性もある。ＳＤ－01のように細く、深くそして全面にわたって作られるのは、竹などの根が入り込まないように掘る場合もあり、ＳＤ－02は畑の区画などに使われたとも考えられる。

４．南側斜面

南側斜面は以前の住宅地建設の擁壁のためすでに削平されており、加工段は１段しか確認できなかった。伐採した木々の運搬のために重機が通ったために加工段もかなり改変されてしまった。

調査の結果、加工段の平坦面から土壙（**ＳＫ－01**）が確認された。

(1) ＳＫ－01（第10図、図版２－２）

ＳＫ－01は平面形が長方形、断面形は逆台形を呈し、規模は上端が180×52㎝、下端が114×42㎝、

深さは検出時に上部が重機によって削平されていたために正確にはわからないが、現状では最深40㎝を測る。覆土中から大きさ20×10×10㎝の角石が出土したが、それ以外は出土しなかった。

形状から埋葬施設と考えられるが、副葬品などは出土せず、また時期などについても断定はできない。また検出時にすでに上面が削平されていたため、どこから掘り込まれていたか正確には把握できず、頂上部との関連を含めて詳細については今のところ不明である。

5．北側斜面

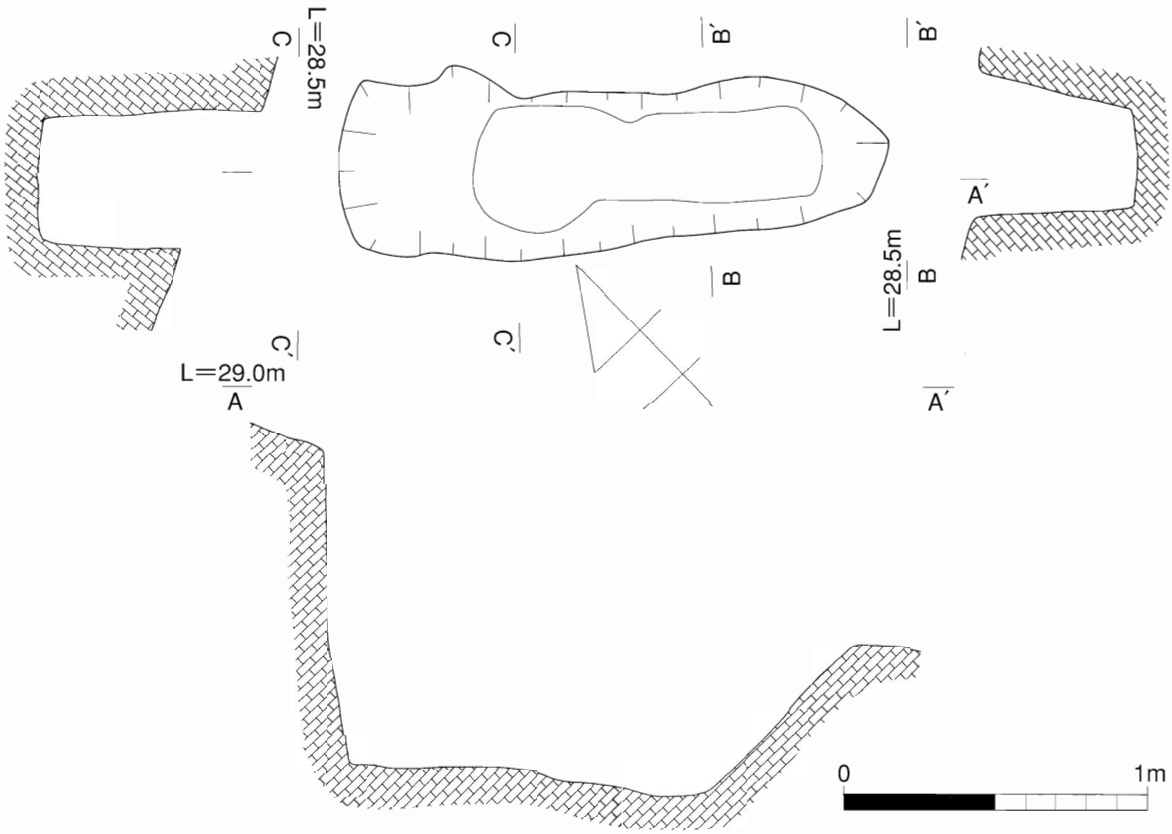
北側も南側と同様に以前の住宅地建設に伴う擁壁のためすでに削平されており、加工段の数は正確には把握できなかった。

調査の結果、遺物は出土せず、加工段が比較的表土に近いところで掘削されているため、後世になってからの削平・加工と思われる。

6．西側斜面

西側は調査前の表面観察の段階で加工段とも思われる段差が５～６段確認されていた。トレンチ調査の段階で斜面の上部からは旧表土のような土層が見られるものの、西側斜面のように盛土の痕跡は明確には見られず、その他の遺構も検出できなかった。

斜面の下部に行くにしたがって旧表土すら検出できなかった。また最下部の方ではトレンチ調査では加工段や溝のような痕跡が見られたが、加工段は表土直下から切り込まれていることや付近からは近代の陶磁器しか出土しないことなどから後世の削平によるものと考えられる。また溝状遺構のような痕跡は平面的には広がらずに、自然のくぼみに土が入ったものと判断した。



第10図　南側調査区　SK－01実測図

７．遺物

遺物の大半は現代に近い陶磁器片や瓦片であった。特に瓦片は頂上部平坦面に、陶磁器片は遺跡のいたるところに散乱していた。おそらくは瓦はこの付近にあったと思われる祠に使用されたものと思われ、散乱している陶磁器は投棄されたものと考えられる。

土師質土器（かわらけ）の破片が10数点出土している。個体数だと２～３点である。出土地点は西側の頂上部の端の肩口付近や斜面の上部の第２層淡褐色土層から出土している。おそらくは頂上部平坦面で使用したものが流れ落ちたものと思われる。これらのかわらけの形態的特徴は底部に回転糸切り痕を持つものであった。これら以外の遺物は東側の緩斜面から回転糸切痕を持つ平安時代頃の須恵器の坏が４点出土した。いずれも図化には至らなかった。

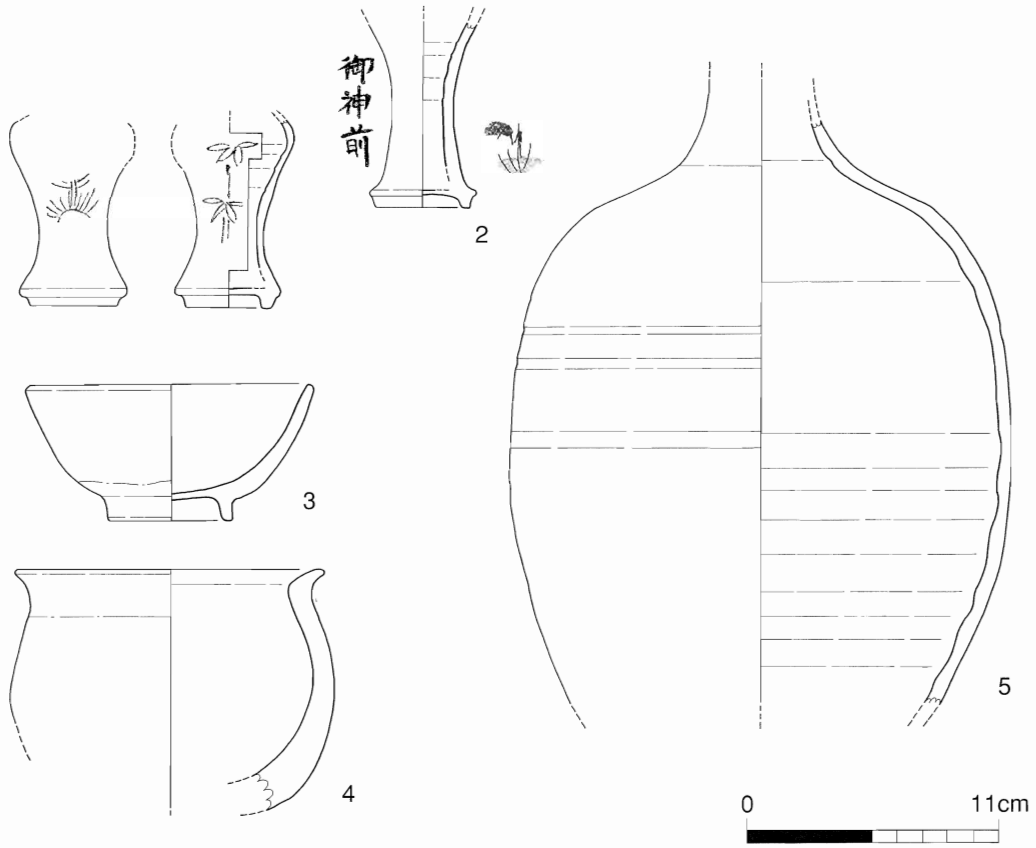
図化できたものは以下のとおりである。

Ａ．瓶類（第11－１・２図、図版17－１～３）

御神酒徳利は磁器製で計３点、頂上部平坦面から出土した。「御神前」と朱色でかかれたものが２点、笹が描かれたものが１点であった。形状は全て同じで、肩部が膨らみ胴部がくびれる御神酒徳利である。おそらく肥前系磁器と考えられる。頂上部平坦面に祠があったとされることからおそらくはそこで使用されたものと思われる。

Ｂ．碗（第11－３図、図版17－４）

頂上部平坦面から出土した陶器製の平形碗で、貼付高台で高台脇まで釉薬が施されている。高台



第11図　出土遺物実測図

は削り出し高台である。

Ｃ．壺（第11－４図、図版17－５）

頂上部平坦面から出土した青磁の胴丸形の壺である。形状は底部はないがおそらく丸底であろう。頸部がややくびれて胴部が膨らむものである。

Ｄ．瓶（第11－５図、図版11－６）

東側調査区のＳＤ－01の覆土層から出土した陶器製の肩張形の瓶である。頸部から胴部しかないが、ものの全面施釉されている。

８．まとめ

本遺跡は歴史的な位置関係から毛利元就が白鹿城攻めの際に陣を置いた荒隅城と程近く、その荒隅城の一部と考えられた。また尼子復興戦の際には現在の松江城のある亀田山にあったとされる末次城付近に山中鹿之助が陣を置いている。その亀田山とはほぼ真西に当たり、防衛ラインを築くために使用されたと推測された。

しかし調査の結果は明確にそれらを示す遺構が確認できず、戦中戦後にわたって畑によって改変を受けていることが判明した。頂上部平坦面にあったと思われる祠など、ごく最近まで使用していたらしく、また周りの伐採した木の切株の年輪からほとんどが50年前後のものであった。おそらくは50年ぐらい前までは人の手が加わっていたと推測される。

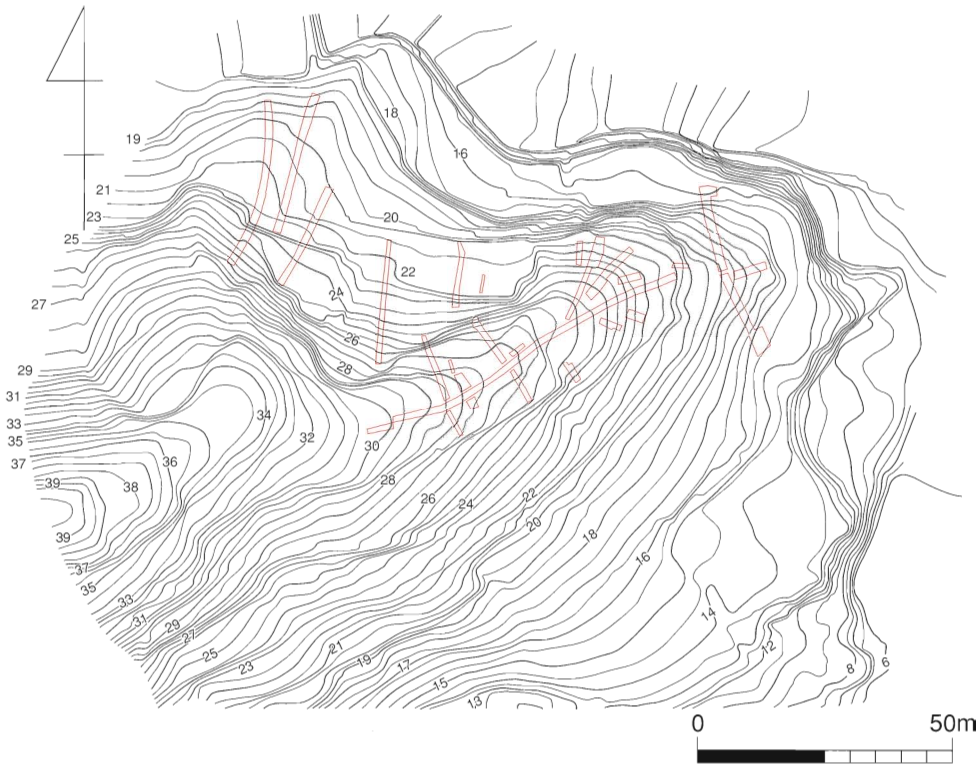
本遺跡は頂上部平坦面や斜面の加工段、特に斜面上部は当初城郭の加工段としてあったものを畑に再利用したと思われるが、西側斜面下部に関しては畑の造成によるものと考えられる。

出土遺物は古くは底部回転糸切痕を持つ須恵器が見られることから平安時代前後には何らかの人の手が加わった可能性が考えられる。南側には古墳時代前期から平安時代まで生活域があった向遺跡があり、関連が考えられる。

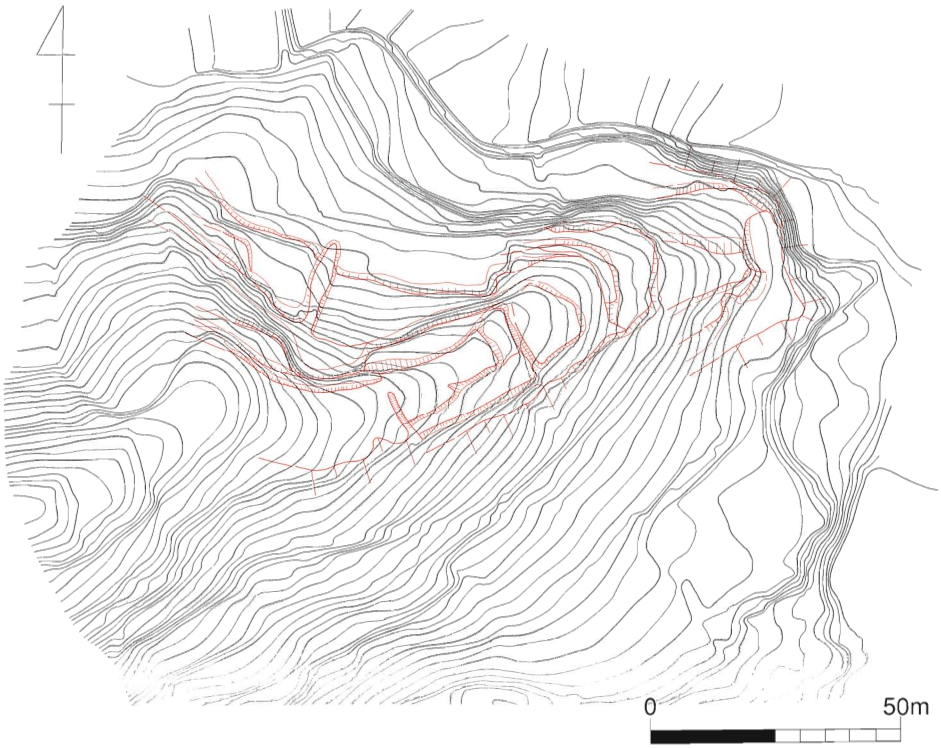
それ以外は近世末から近代にかけての陶磁器が大半で、陶器の大部分は在地系、特に布志名系が多く見られる。遺構に関係するものはなく、ほとんどが投棄されたものと思われる。

ii 荒隈城跡（小十太郎地区）

1．調査の概要



第12図　調査前地形測量図及びトレンチ設定図



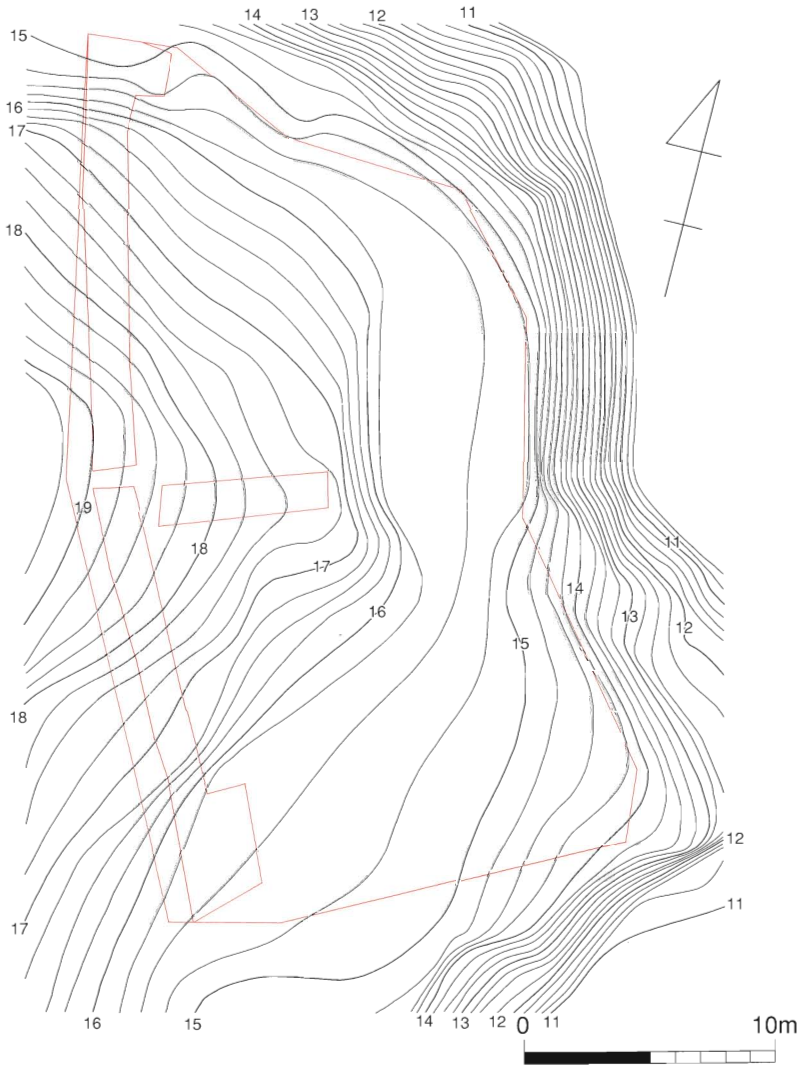
第13図　調査前地形測量図及び加工段位置図

本地区は分布調査で頂上部に広い平坦面と東側の延びる尾根筋の斜面に数段の加工段を持ち、北側に広い平坦面を持つ遺跡が確認された。本地区の南約500ｍの丘陵伝いに荒隈城の詰曲輪があり、本地区は荒隈城の一部ではないかと考えられた。

荒隈城の詰曲輪とされる場所については1968年（昭和43年）に島根県教育委員会が（報告書未刊）、1980～81年（昭和55年～56年）に松江市教育委員会が発掘調査を行い、（報告書は1982年に刊行）掘立柱建物跡や曲輪跡などが検出され、土師質土器（かわらけ）や輸入陶磁器などが出土した。

本調査では伐採した木々や廃土置き場の確保のため、東側調査区（墓地推定地）、北側調査区（屋敷跡推定地）、頂上部調査区（城跡推定地）の３ヶ所に分けて行った。各調査区に任意でトレンチを設定し、遺構の有無の確認調査を行い、遺構がある場合には拡がりに応じて周辺の全面調査を行った。（第12図）

全調査区で表面から近世末以降の陶磁器類の破片が採取され、特に東側・北側調査区では数多く出土したことなどから、荒隈城が存在した16世紀以降にも大きな地形的改変を受けた可能性が高いと思われた。



第14図　東側調査区調査前地形測量図

２．東側調査区

本調査区は東西約17ｍ、南北約35ｍの調査範囲で、尾根筋の比較的なだらかな丘陵地形と東側にある平坦面で構成される。調査区東側の平坦面は尾根を削平して造られたと思われ、幅約4.5ｍで東側から南側に回り込むように造られている。北側にも平坦面があるものの約２ｍ前後と幅が狭い。

調査区外にも所々平坦面が認められ、東側の一段下がったところの平坦面や、調査区南側へ続く平坦面には墓石があり、享保年間銘や天保年間銘が刻まれている墓石が安置もしくは投棄されている。また調査前の段階で円形や方形状のマウンドが数ヶ所確認されていることから、本調査区は江戸時代後期以降の墓地と想定された。

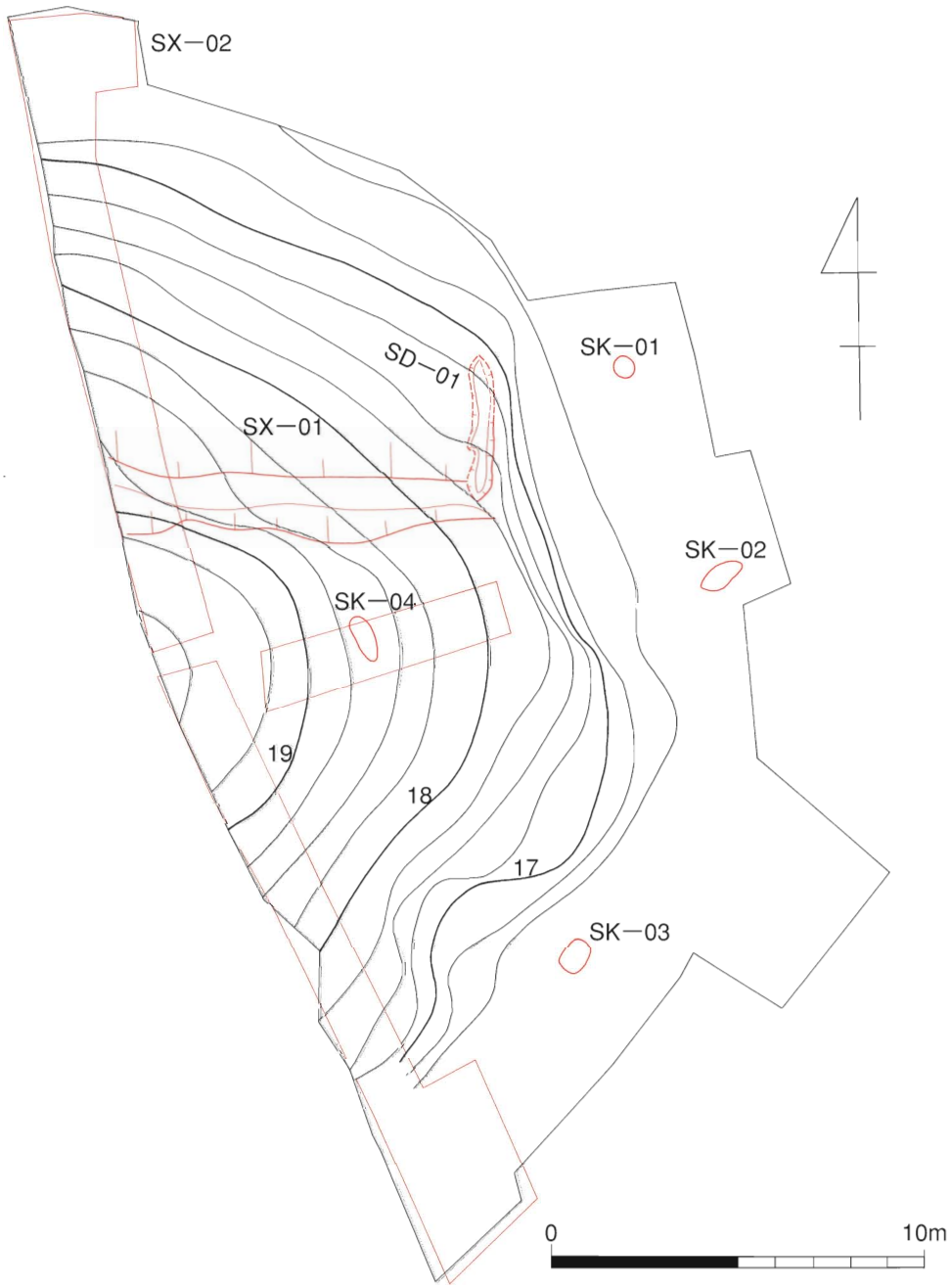
調査は丘陵上から南北両方向に丘陵下まで、東側は丘陵端までトレンチを設定した。調査の結果、平坦部分からは墓壙と思われる土壙が２基、それ以外の土壙が２基、溝状遺構が１条、加工段が１段を確認した。また北側では石垣が崩落したところも確認した。

① 遺物

ここでは各トレンチから出土した遺物を列挙した。

A． 皿類（第16－１図）

Ｔ－１から出土した陶器製の小形平皿。内面の全体と外面の口縁部周辺に施釉されている。底部



第15図　東側調査区調査成果図

には回転糸切痕が見られる。灯明皿（油皿）として使用されていたと思われる。

B．鉢類（第16－２・３図、図版18－１・２）

Ｔ－１から出土した陶器製の小形薬味用擂鉢。**２・３**が同一個体である可能性もある。全体に擂目があるのではなく、７本１セットで刻まれている。

C．瓶類（第16－４図、図版18－３）

Ｔ－１から出土した陶器製の小形徳利。胴部の部分が押圧によって３ヶ所くぼめられ、底部には回転糸切痕が見られ、胴部下まで施釉されている。「ペコカン徳利」のミニチュア製品と思われ、供膳用もしくは玩具用として使用されたと考えられる。

D．皿類（2）（第17図－５図、図版18－４）

Ｔ－１から出土した土師質の平皿で、七輪などの厨房具の付属品「目皿」として使われたものである。底部には回転糸切痕が見られ、目穴が４つないし５つあったものと思われる。

E．蓋（第17図－６・７図、図版18－５・６）

Ｔ－１から出土した陶器製の蓋で、**６**は鍋用蓋で施釉されておらず、つまみ部分に装飾が施され口唇部には指頭圧痕が残る。**７**は土瓶用蓋でつまみ部分は円形で、外面だけ施釉されている。

F．急須（第17－８図、図版18－８）

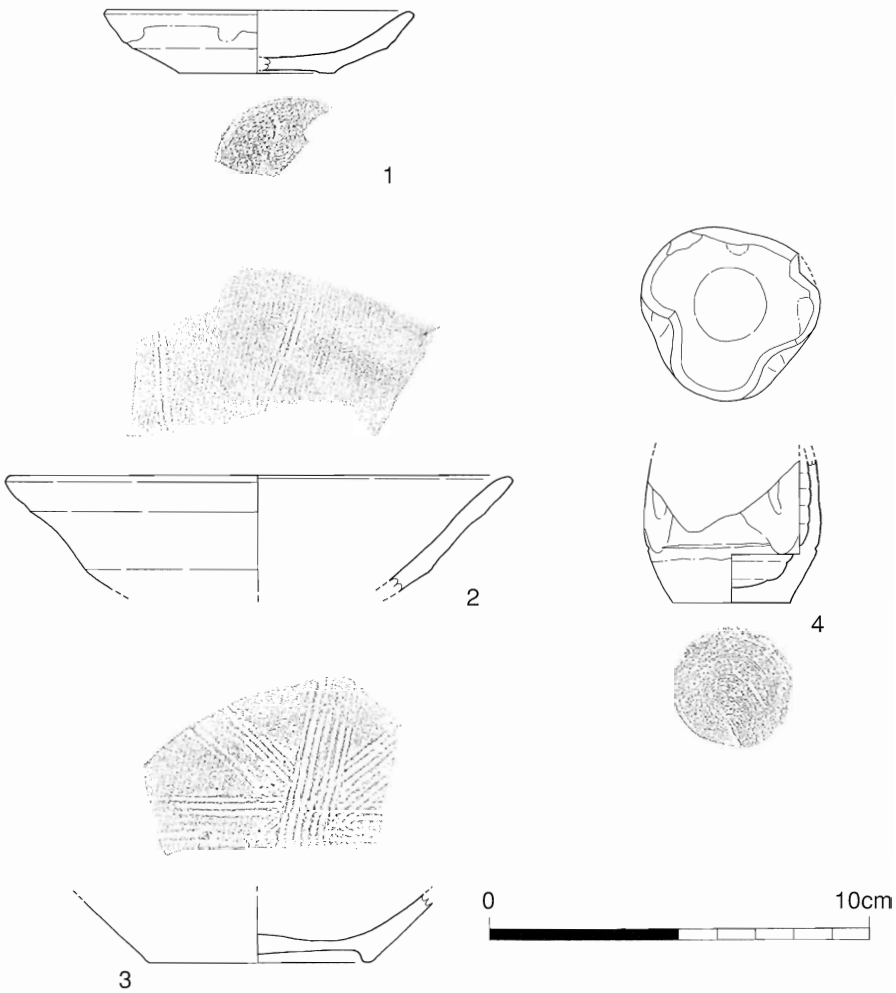
Ｔ－１から出土した陶器製の隠元形急須。外面は全面施釉されている。

G．土瓶（第17－９図）

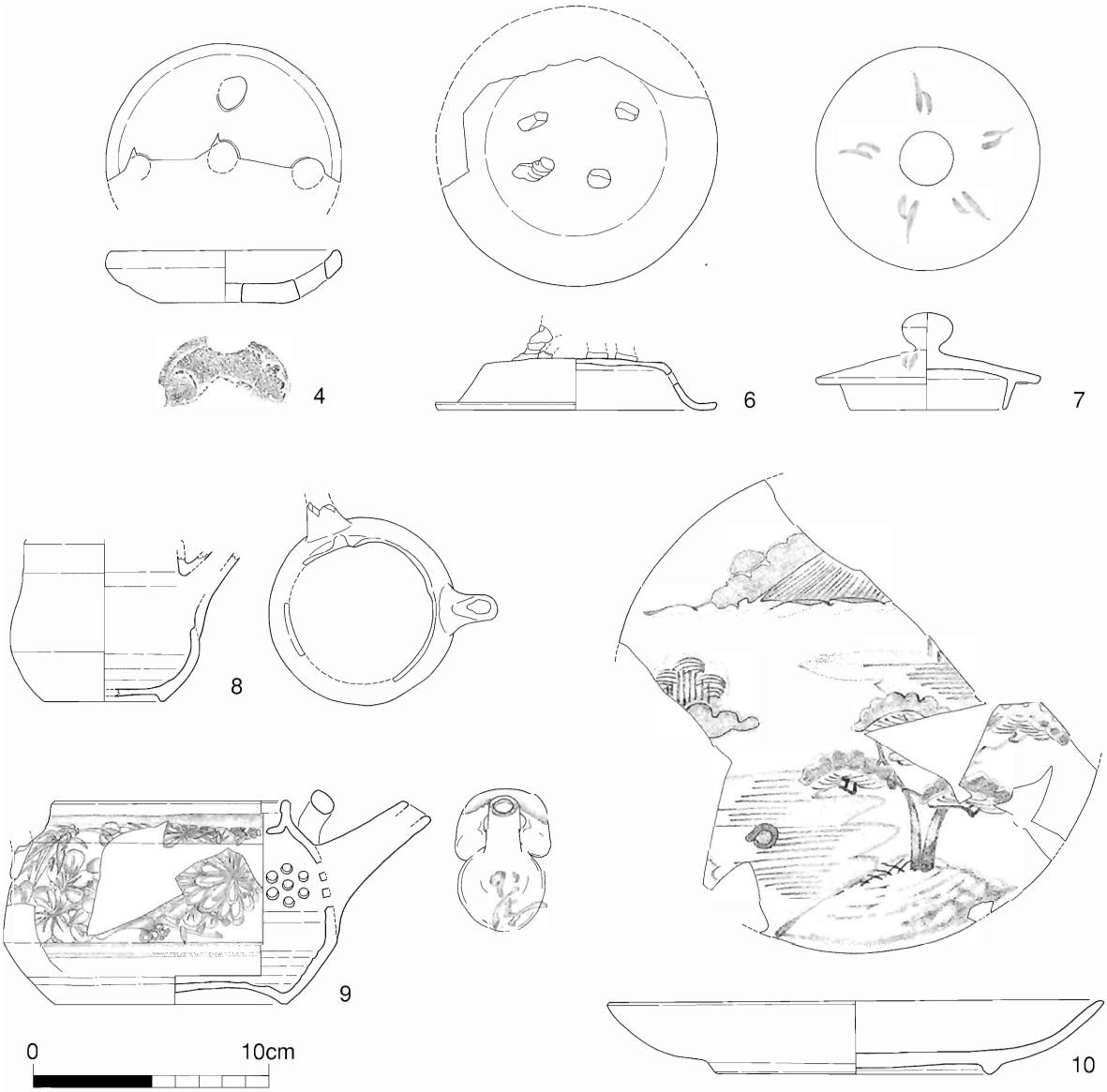
Ｔ－１から出土した陶器製の茶釜形土瓶。胴部中央よりやや下まで施釉されており、胴部下には被熱痕が見られた。

H．皿類（3）（第17図－10図・第18－11～13図、図版19－３～６）

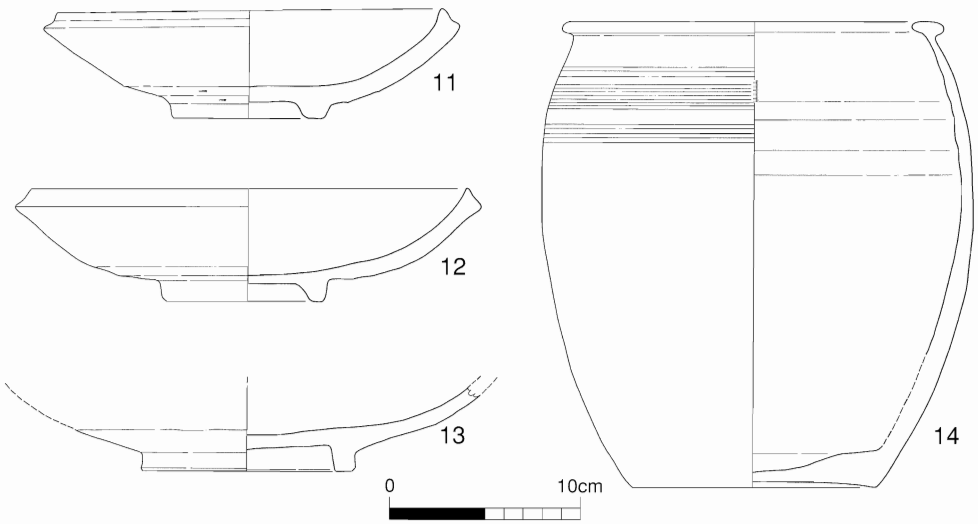
Ｔ－１から出土した中形の平皿。**10**は磁器製の染付、見込には浜



第16図　Ｔ－１　出土遺物実測図(1)



第17図　T－１　出土遺物実測図(2)



第18図　T－１　出土遺物実測図(3)

景が描かれている。**11・12**は土師質で胴部下にはケズリ痕が残る。**13**は陶器製で見込み部分にハリが残る。

Ｉ．壺類（第18－14図、図版19－７）

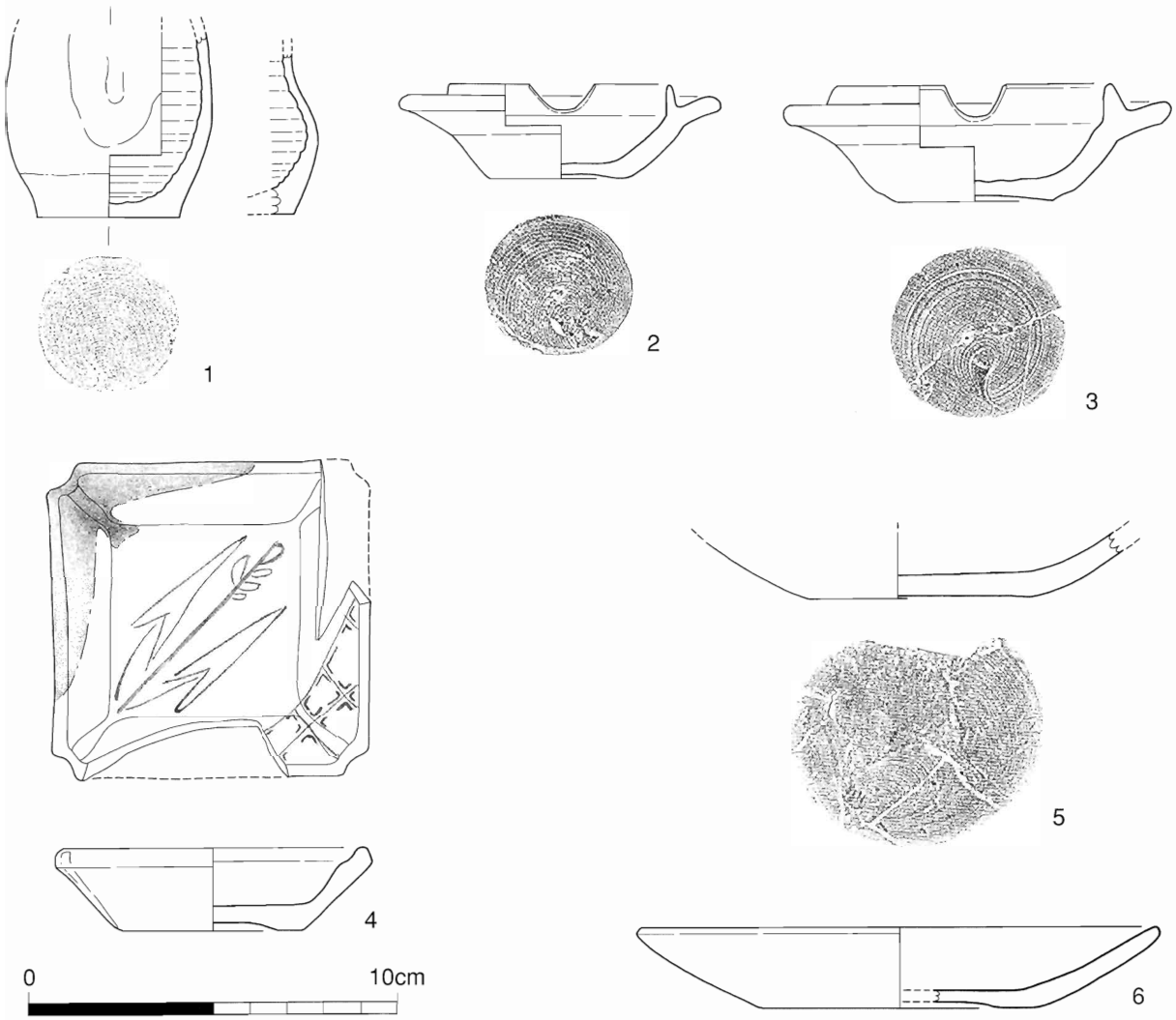
Ｔ－１から出土した陶器製の胴丸形壺。口唇部は玉縁形になっている。

Ｊ．瓶類（2）（第19－１図）

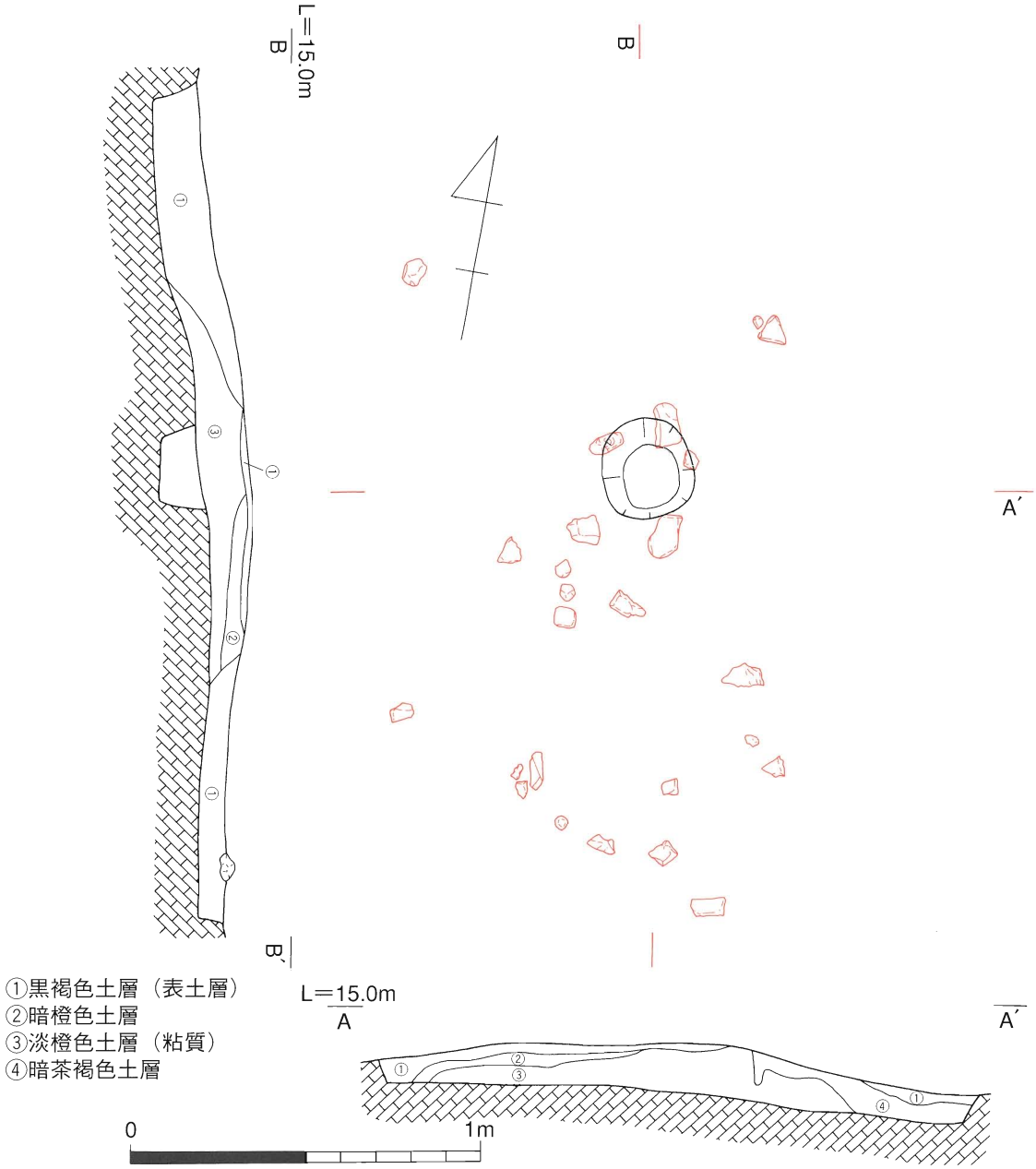
Ｔ－２から出土した陶器製のミニチュア徳利で、**第16－４図**と同様である。

Ｋ．皿類（4）（第19－２～６）

２・３は陶器製の皿で、用途は**第16－１図**と同じ灯明皿だが、口縁内側に環状の受皿が巡らされている。受皿には滴り落ちた油を皿部中央に回収する為の開口部を設けている。**４**は陶器製の隅切方形皿である。全面施釉されており、底部は凹形。**５・６**は土師質の皿で底部に回転糸切痕を持つ。用途は**第16－１図**と同じく灯明皿と思われる。



第19図　Ｔ－２・３　出土遺物実測図



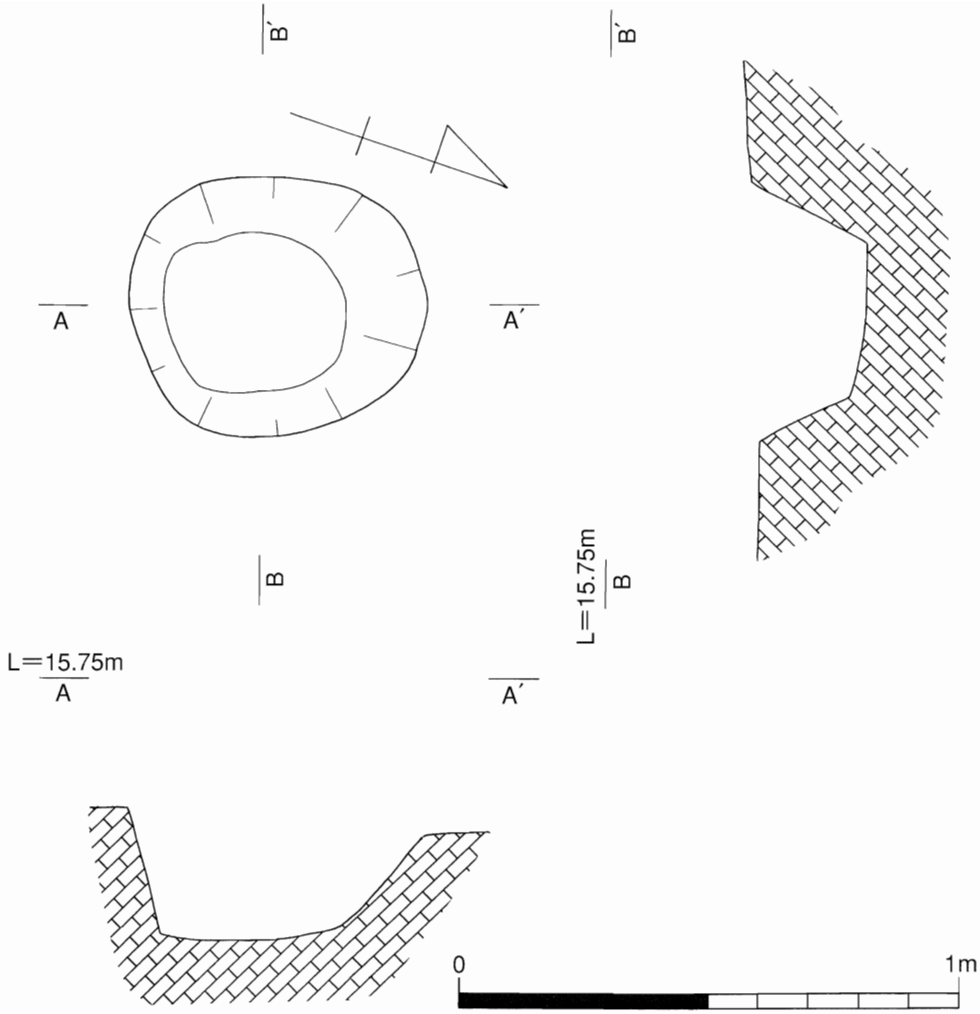
第20図　１号墓　実測図

(1)　１号墓（第20図、図版５）

１号墓は調査区東側平坦面の中央よりやや北に位置する。直径約2.5ｍ、高さ約20㎝の円形状のマウンドが認められた。そのマウンド上やその周辺から15×25㎝前後の加工痕のある石や自然石が20数点確認されており、墓に使用されたと思われる。

①ＳＫ－02（第21図、図版５－２）

調査の結果、マウンドは厚さ約20㎝程度淡橙色土が盛られていたが、旧表土と思われる層は確認できなかった。マウンドのほぼ中央から上端径52～60㎝、下端径32～36㎝、深さ25㎝の円形状の土壙を検出した。土壙は小さく、内部からは人骨や副葬品が出土しなかったが、形状やその他の状況から墓壙と考えられる。



第21図　1号墓　SK－01実測図

②遺物

1号墓周辺から出土した遺物は墓とあまり関係がないと思われる。

A．蓋（第22－1図、図版20－2）

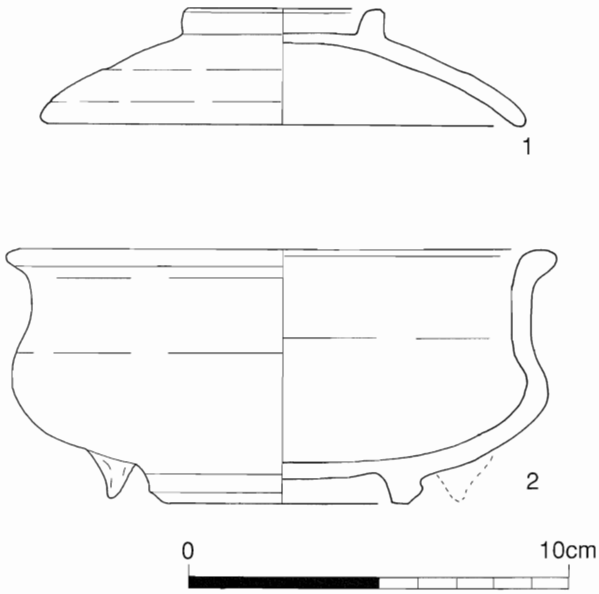
陶器製の蓋で、行平に使用されていたものと思われる。

B．香炉（第22－2図、図版20－1）

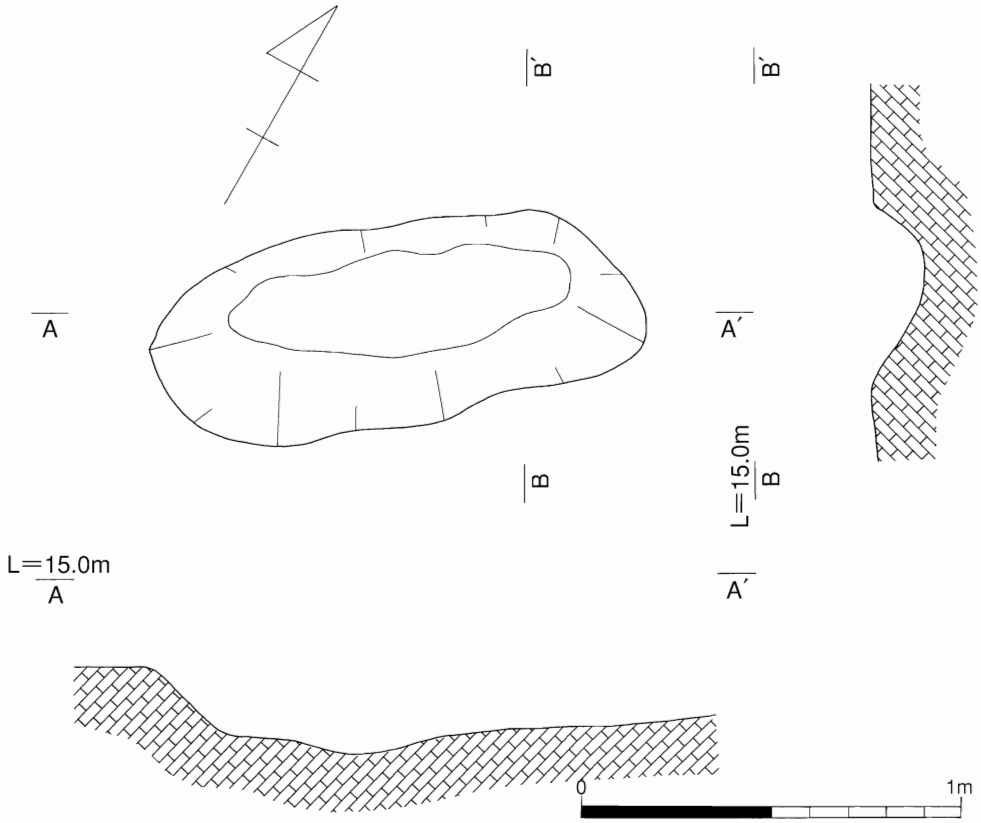
陶器製の有足香炉で、胴部が膨らみ、頸部がくびれる。全面施釉されている。

(2)　2号墓

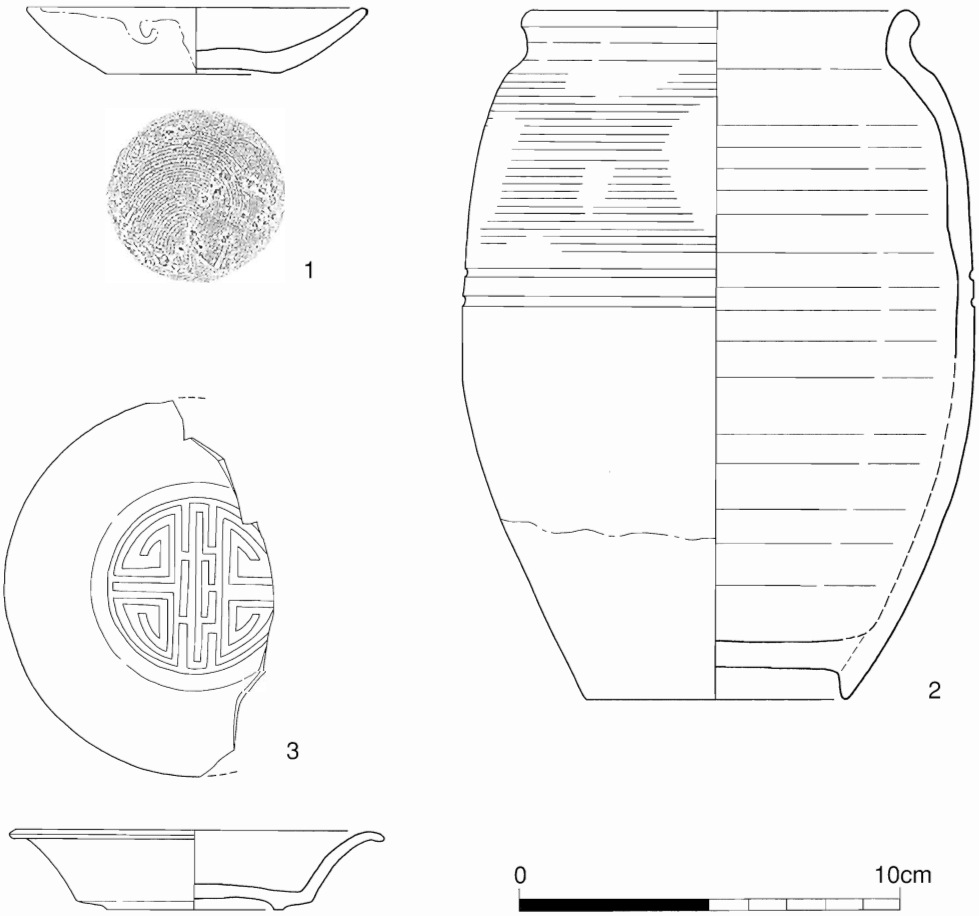
2号墓は直径約2.5m、高さ約15cmの円形状のマウンドと考えられた。1号墓とは異なり加工痕のある石は見られず、自然石がまばらにしか



第22図　1号墓　出土遺物実測図



第23図　SK－02　実測図



第24図　2号墓　出土遺物実測図

見られなかった。

①ＳＫ－02（第23図、図版７－１）

調査の結果、盛土らしき層は確認できなかった。墓域の中央やや南側から上端が長軸133㎝、短軸53㎝、下端が長軸91㎝、短軸26㎝、深さ15㎝の細長い楕円形状の土壙が検出された。土壙内からは遺物が出土せず、形状や規模から“墓壙”の可能性は低い。

②　遺物

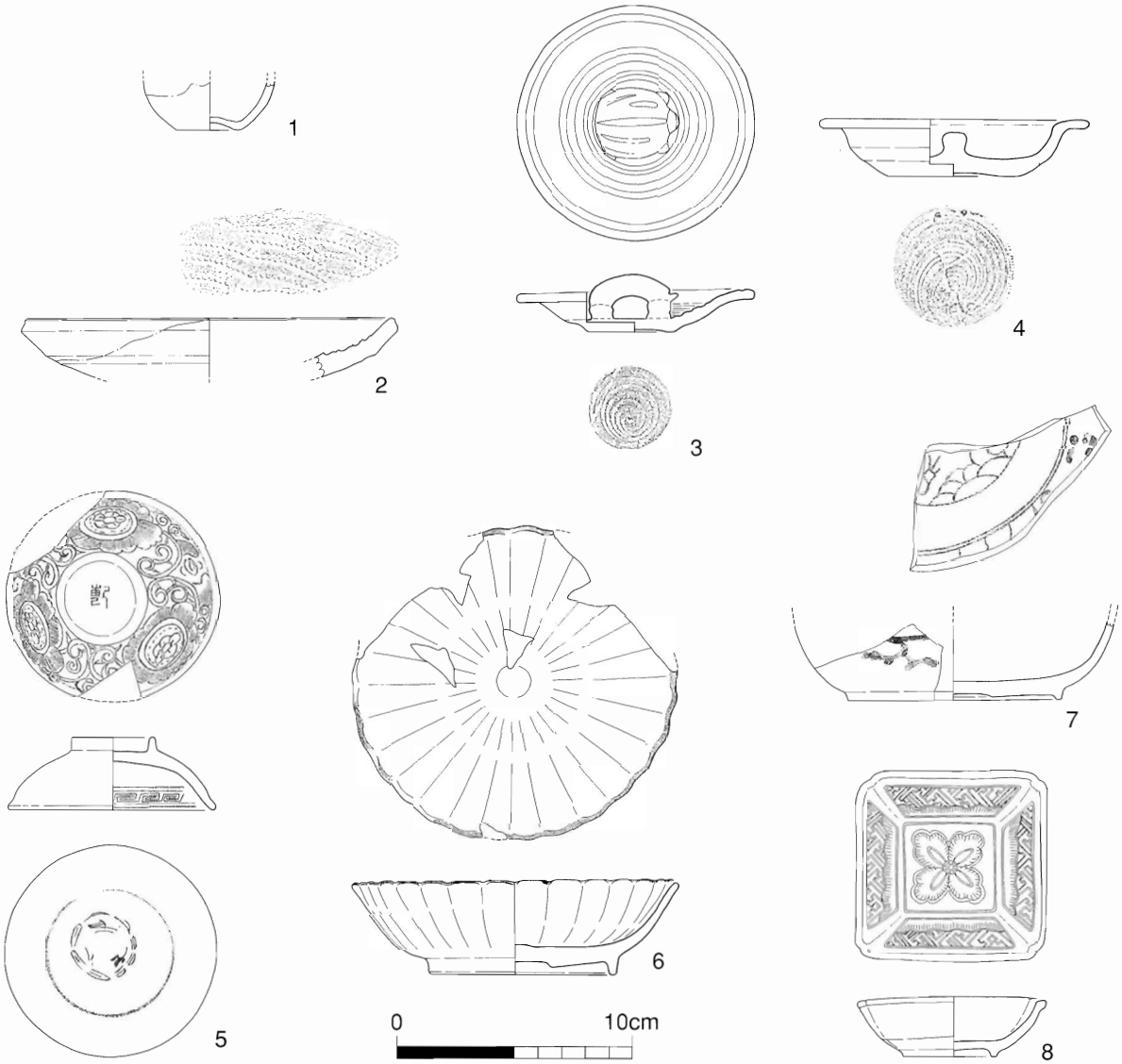
２号墓周辺から出土した遺物は破片が多く、代表的なものだけを図化した。

Ａ．皿類（第24－１・２、図版20－３）

１は陶器製の平形皿で、内面全体と外面口縁部が施釉され、底部には回転糸切痕があり、灯明皿と思われる。**２**は磁器製の稜皿。底部は凹形で、見込に「壽」型打ちされている。

Ｂ．壺類（第24－３、図版20－４）

陶器製の胴丸形壺で、全面施釉されている。底部は凹形で、頸部がややくびれている。



第25図　３号墓　出土遺物実測図（1）

(3) 3号墓

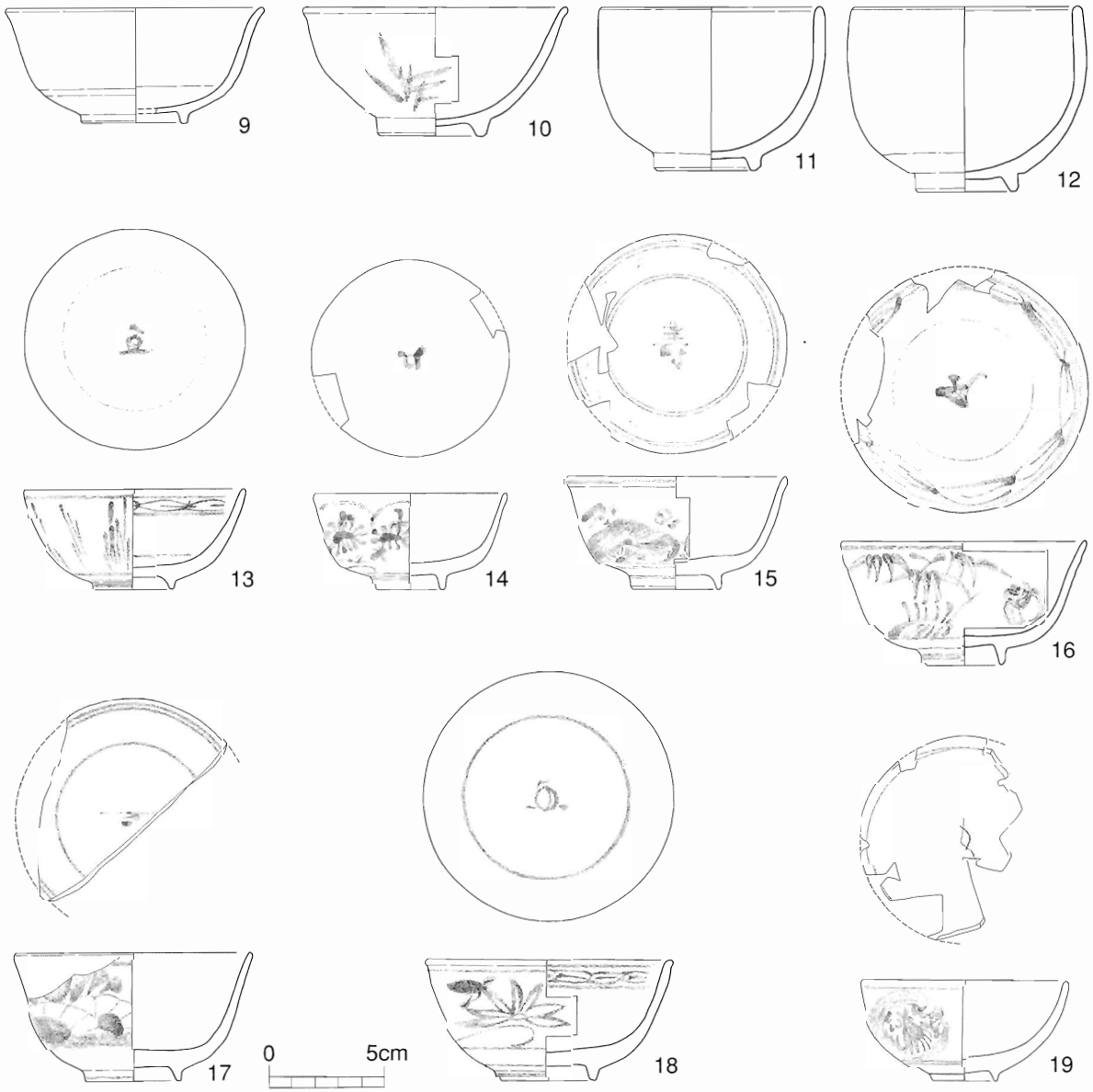
3号墓は東西約5ｍ、南北約4ｍ、高さ約25㎝の方形状の土壇であった。また表土から古銭（寛永通寶）が3枚出土した。

調査の結果、遺構はなく、土壇は盛土によるものとわかったが、旧表土らしい層は見当たらず、盛土層内ともに遺物が出土しなかったため、時期や目的などについては不明である。以上のことから3号墓は墓ではないと思われる。また北東隅から貝殻や炭とともに陶磁器類の破片が出土する土壙を検出したが、ゴミ捨て用の廃棄土壙でゴミと共に廃棄されて焼却されたものと思われる。

① 遺物

A．不明遺物（第25－1図、図版21－1）

陶器製のミニチュアの盃もしくは徳利。手づくね製で底部はくぼみ、上部に釉薬がかかる。



第26図　3号墓　出土遺物実測図(2)

B．おろし皿（第25－２図、図版21－２）

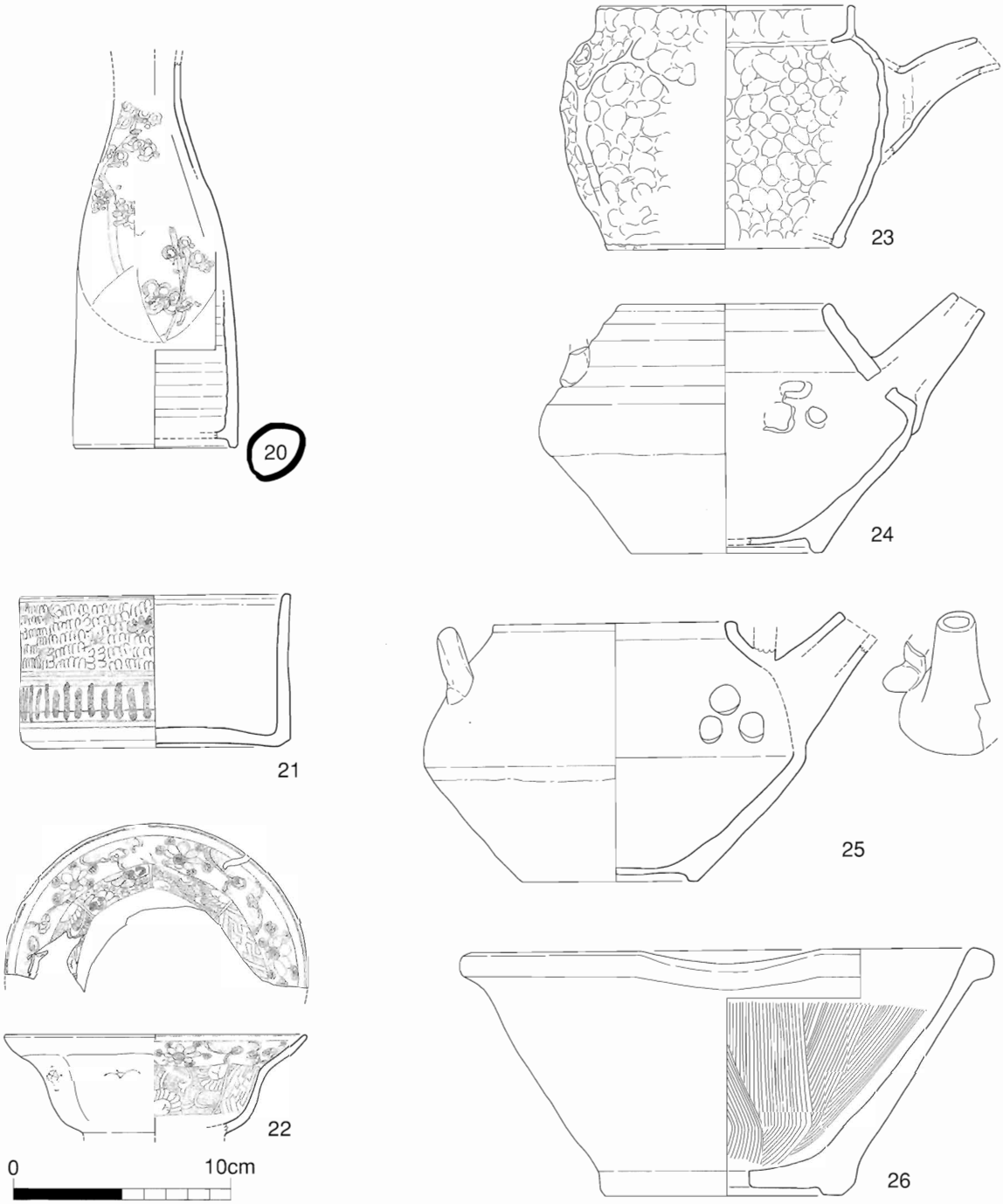
陶器製のおろし皿。

C．蓋類（第25－３～５図、図版21－３～５）

3・4 は陶器製の壺蓋。底部には回転糸切痕があり、つまみ部分は **3** が亀形、**4** が丸形を呈する。**5** は磁器製の碗用染付蓋。見込には環状松竹梅が描かれている。

D．皿類（第25－６～８、図版６～７）

6 は磁器製の輪花皿。底部は蛇の目凹形を呈する。**7** は磁器製の皿。**8** は磁器製の隅切方形皿



第27図　３号墓　出土遺物実測図(3)

で、内側は紗綾形、見込に四弁花が陽刻されている。

E．碗類（第26－９～19図、図版22－１～10）

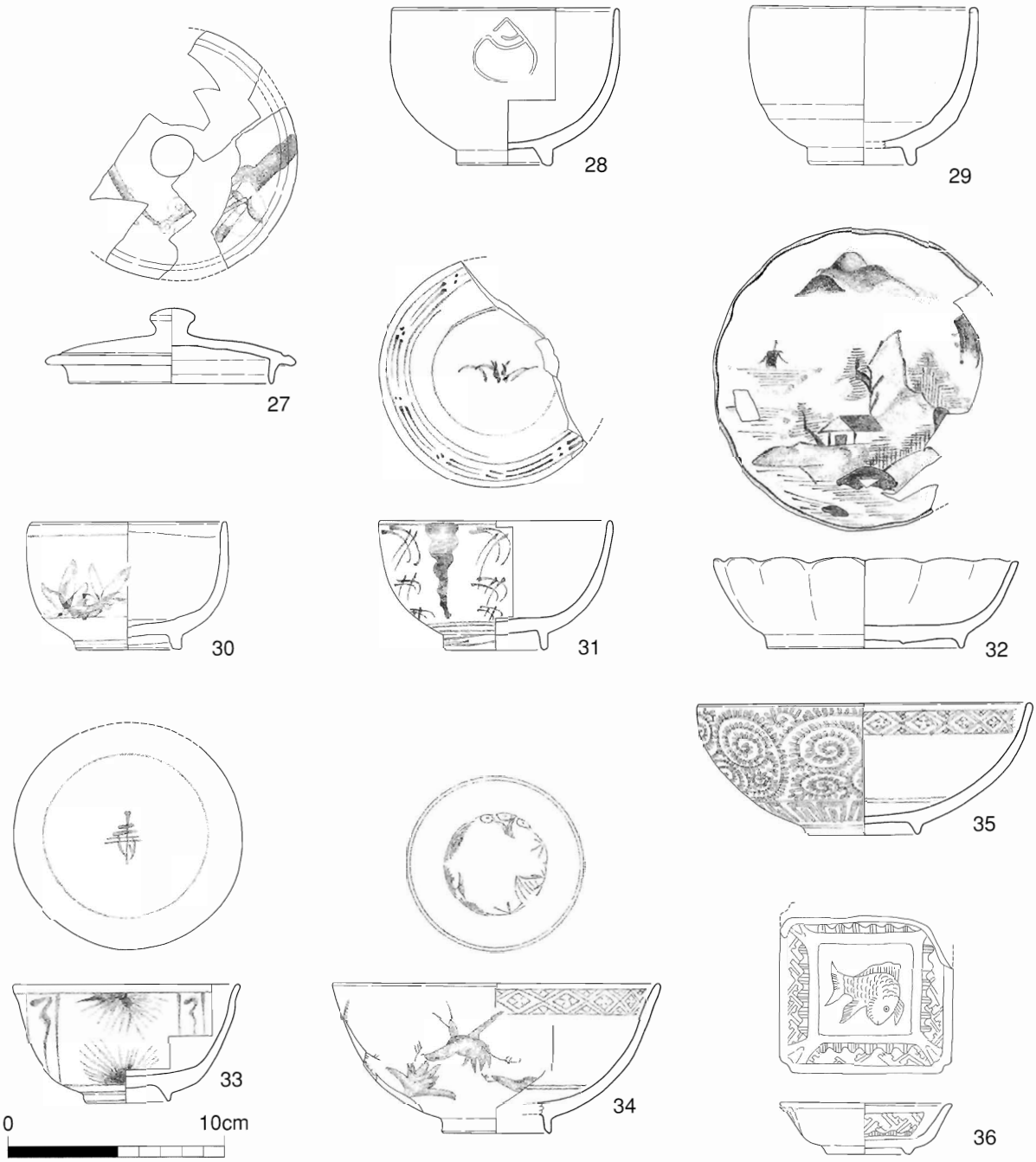
９～12は陶器製で、**９・10**が端反形、**11・12**が半球形を呈する「ボテボテ碗」と呼ばれる茶碗である。**13～19**は磁器製で口縁部がわずかに反り、底部が広い形状である。

F．徳利（第27－20図、図版23－１）

陶器製の燗徳利、外面には梅花が描かれている。

G．段重（第27－21図、図版23－１）

磁器製の染付段重。外面には微塵唐草が描かれている。



第28図　３号墓　出土遺物実測図(4)

Ｈ．鉢（第27－22図、図版23－３）

磁器製の色絵の折縁面取鉢。胴部は少し膨らみ、頸部はくびれている。

Ｉ．土瓶（第27－23～25図、図版23－４～６）

すべて陶器製。**23**は胴丸形で手づくね製、全面に指頭圧痕が残る。**24・25**は轆轤製で、釉薬が胴部中央やや下まで施されている。

Ｊ．擂鉢（第27－26図、図版23－７）

陶器製の擂鉢。底部中央に穴が穿たれており、恐らく植木鉢に転用したものと思われる。

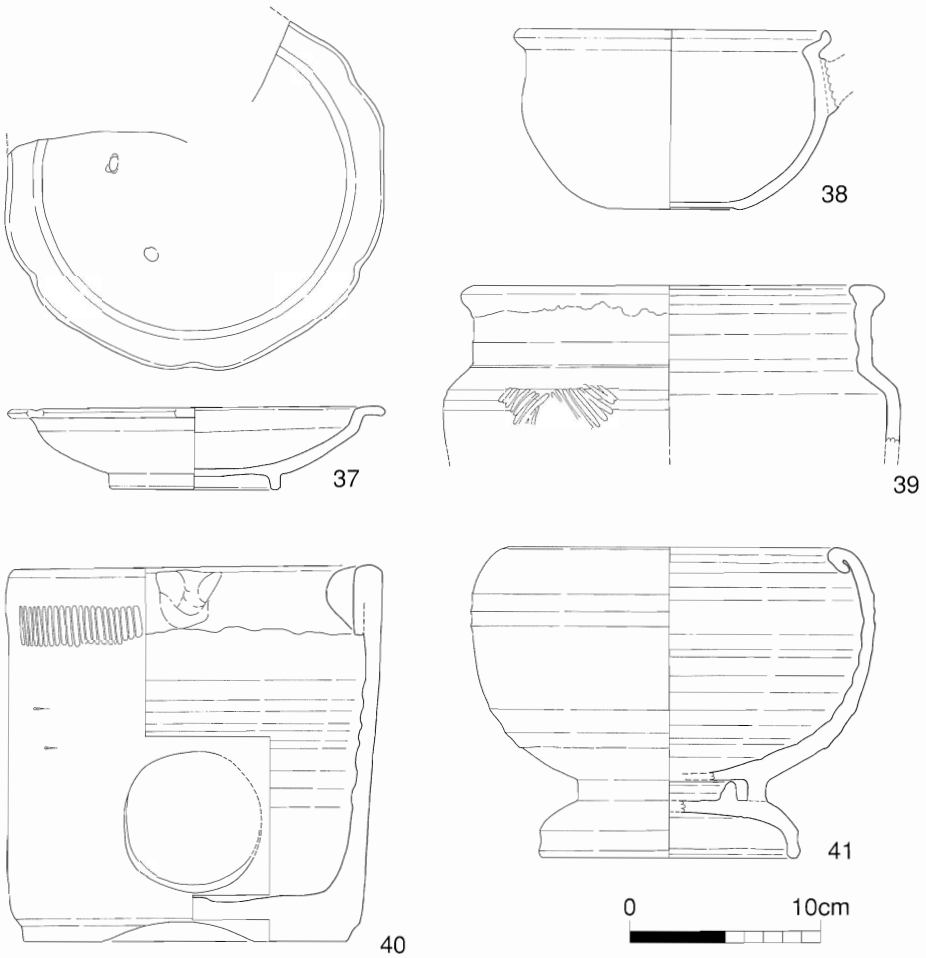
これ以後は第２層から出土したものである。

Ａ．蓋（第28－27図、図版24－１）

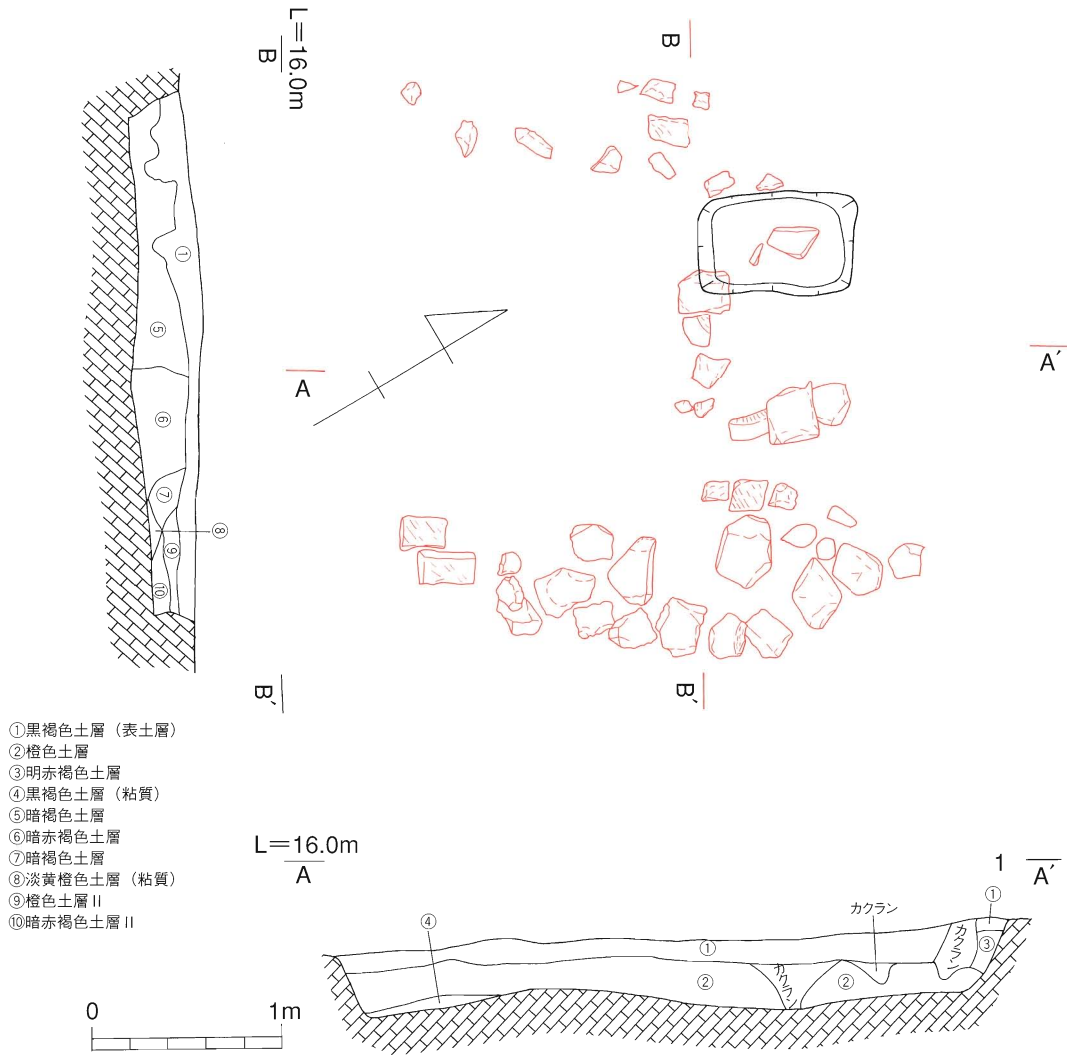
陶器製の土瓶用蓋。外面には鉄絵で梅花が描かれている。

Ｂ．碗類（第28－28～31・33～35、図版24－３～10）

28・29は陶器製の半球形碗。**第26－11・12**と同様に「ボテボテ碗」と思われる。**30・31**は磁器の丸形染付碗で、口縁部が反らずに底部が広めの形状。**33**は磁器の端反形染付碗。**35・36**は磁器の平形染付碗でやや大きめ、口縁部が反らない形状。



第29図　３号墓　出土遺物実測図(5)



第30図　４号墓　実測図

Ｃ．皿類（第28－32・36図・第29－37図、図版25－１～３）

32は磁器製の輪花染付皿。見込に浜景が描かれている。**36**は白磁製の隅切方形皿。内側に紗綾形文、見込に鯛が陽刻されている。**37**は磁器製の鰐縁輪花皿。見込にハリが残っている。

Ｄ．行平（第20－38図、図版25－４）

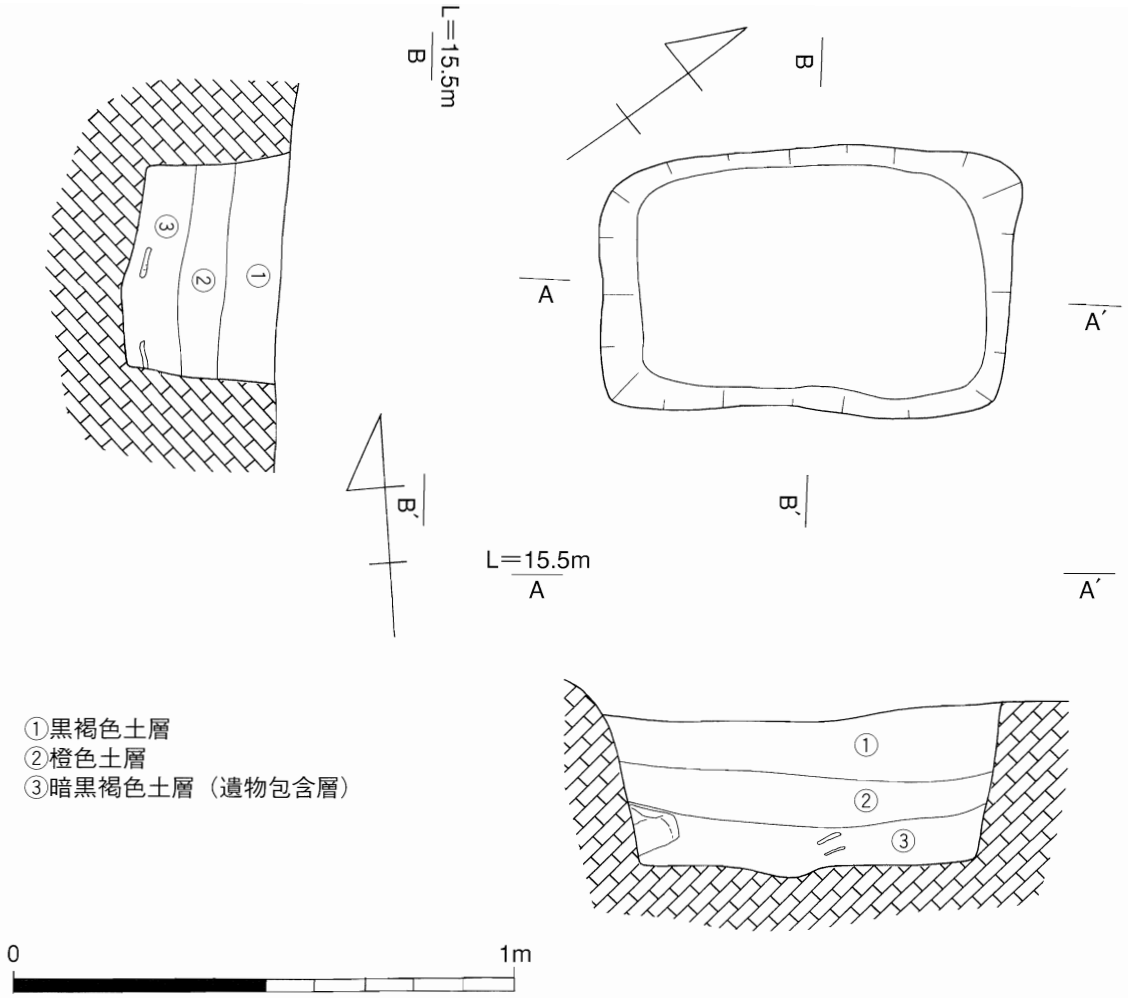
陶器製の行平鍋。胴部下には被熱痕が残っている。

Ｅ．火鉢類（第29－39～41図、図版25－５～６）

39・41は陶器製の火鉢。**39**は口縁部のみ。**41**は下部の台の内部にも釉薬が施され、口縁部は内側に玉縁状になっている。**40**は土師質の七輪。胴部上はタタキ痕が、胴部中央より下はケズリ痕が残っている。

(4)　４号墓（第30図、図版61）

４号墓は東西約2.8ｍ、南北約３ｍ、高さ約15㎝の円形状のマウンドと考えられていた。南側に加工した石や自然石が東西約１ｍにわたって配列され、マウンド上やその周辺にも石が散乱しており、こ



第31図　４号墓　SK－03実測図

れらの石は墓に使用していたものと思われる。

調査の結果、マウンドの中心から北東に約１ｍのところから隅丸方形状の土壙が検出された。

①　ＳＫ－03（第31図、図版６－２）

平面形は隅丸方形、断面形は逆台形状を呈する。上端53～80㎝、下端46～70㎝、深さ35㎝を測る。覆土第３層（暗黒褐色土層）からは布志名系の皿や緑釉のかかった陶器などの陶磁器類、古銭（寛永通寶）が１枚出土したため、近世末期の遺構と考えられる。

また出土した古銭は埋葬儀礼である“六道銭”に使用されたものと思われるが、覆土の中からはこれ以外は出土せず、マウンド上から数枚出土している。また土壙内からは人骨が出土せず、棺に使用されたと思われる釘や金具等の鉄製品が出土しなかった。

②　遺　物

マウンド上やその周辺、覆土層の中から出土している。

Ａ．石製品（第32－１図、図版25－５）

流紋岩製の砥石。細かい擦痕が残る。

B．皿類（第32－２・３）

土師質の平形皿。灯明皿に使用されたと思われる。

C．鉢（第32－４図、図版25－６）

磁器製の筍干形鉢染付。内面に雷文・茄子・蝶が描かれている。

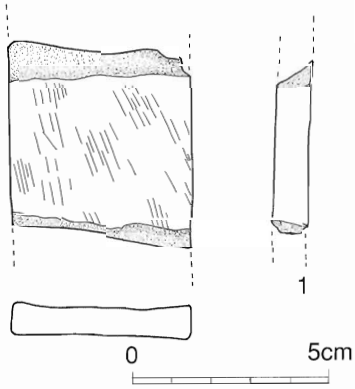
以下は**ＳＫ－03**の覆土３層（黒褐色土層層）から出土したものである。

A．皿類（第34－５・６図、図版20－７・８）

5 は陶器製の高台のない平形皿。**6** は陶器製の高台がつく平形皿。見込には印花が刻まれている。

B．碗 or 鉢（第34－７図）

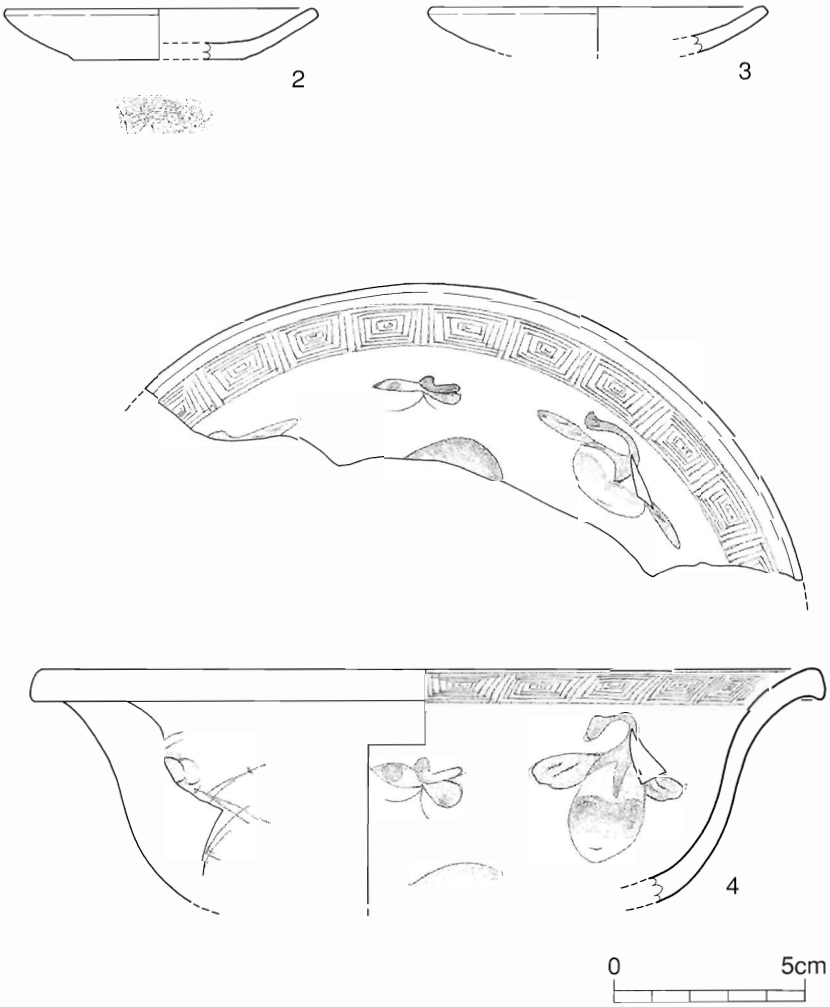
陶器製。口縁部はわずかに反り、波状になっている。高台は貼り付け。



第32図
4号墓　出土遺物実測図(1)

(5) ＳＸ－01（第35図、図版７－３）

尾根の丘陵を北側に下がったところの約２ｍ四方の平坦面から検出した。大きさは40～50㎝前後の



第33図　4号墓　出土遺物実測図(2)

方形の石が10数点検出された（ＳＸ－02）。いくつかの石に鑿のような工具による加工痕が見られ、西に約１ｍ、高さにして約１ｍ上にも同様の加工痕を持つ石が２個並んでおり、第35図の土層断面図の④・⑤にある石である。下の石は⑮の位置から出土した。

おそらくは上に残っている石の周辺に置かれていた石が土砂崩れ等によって崩落したものと思われる。埋土は黒褐色土であり、近世末期の陶磁器類の破片が出土していることなどから、近世末期に崩落したものではないかと推測される。

(6) ＳＸ－02・ＳＤ－01（第36図、図版８）

尾根の中心線よりやや北側から長さ10ｍ以上、高低差20㎝、幅80㎝の平坦面を持つ加工段（**ＳＸ－01**）が検出され、まださらに調査区西側に続くと考えられる。**ＳＸ－01**の東端から検出された溝（**ＳＤ－01**）は規模が長さ3.9ｍ、幅は上端が56㎝、下端が27㎝、深さ10㎝を測る。

双方とも遺物が出土しなかったため、時期や性格など詳細は不明で、双方の関連も不明である。

(7) ＳＫ－04（第37図、図版７－２）

尾根のほぼ中心線上からは上端が長軸130㎝、短軸49㎝、下端が長軸118㎝、短軸39㎝、深さ25㎝の細長い楕円形状の土壙が検出された。遺物が出土しなかったため、時期や性格など詳細は不明である。

(8) 遺物

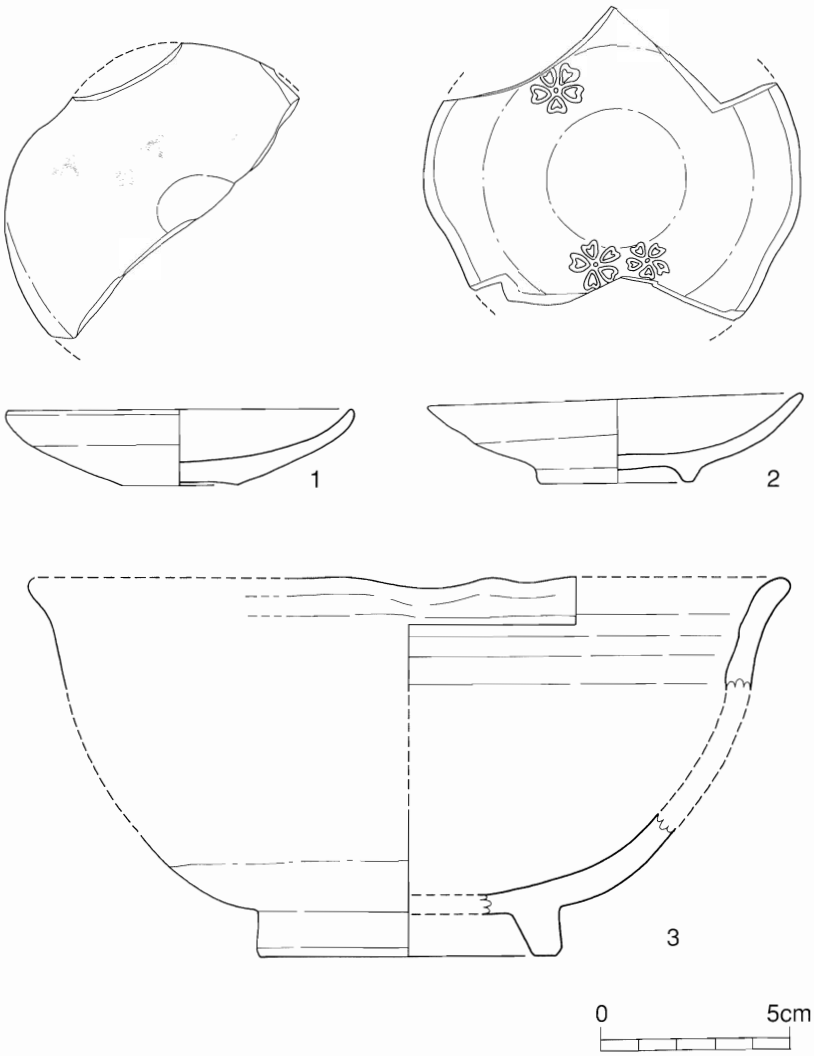
墓域の周辺や丘陵斜面から出土した遺物である。大部分が第１層からの出土である。

Ａ．石器（第39－１図、図版26－１）

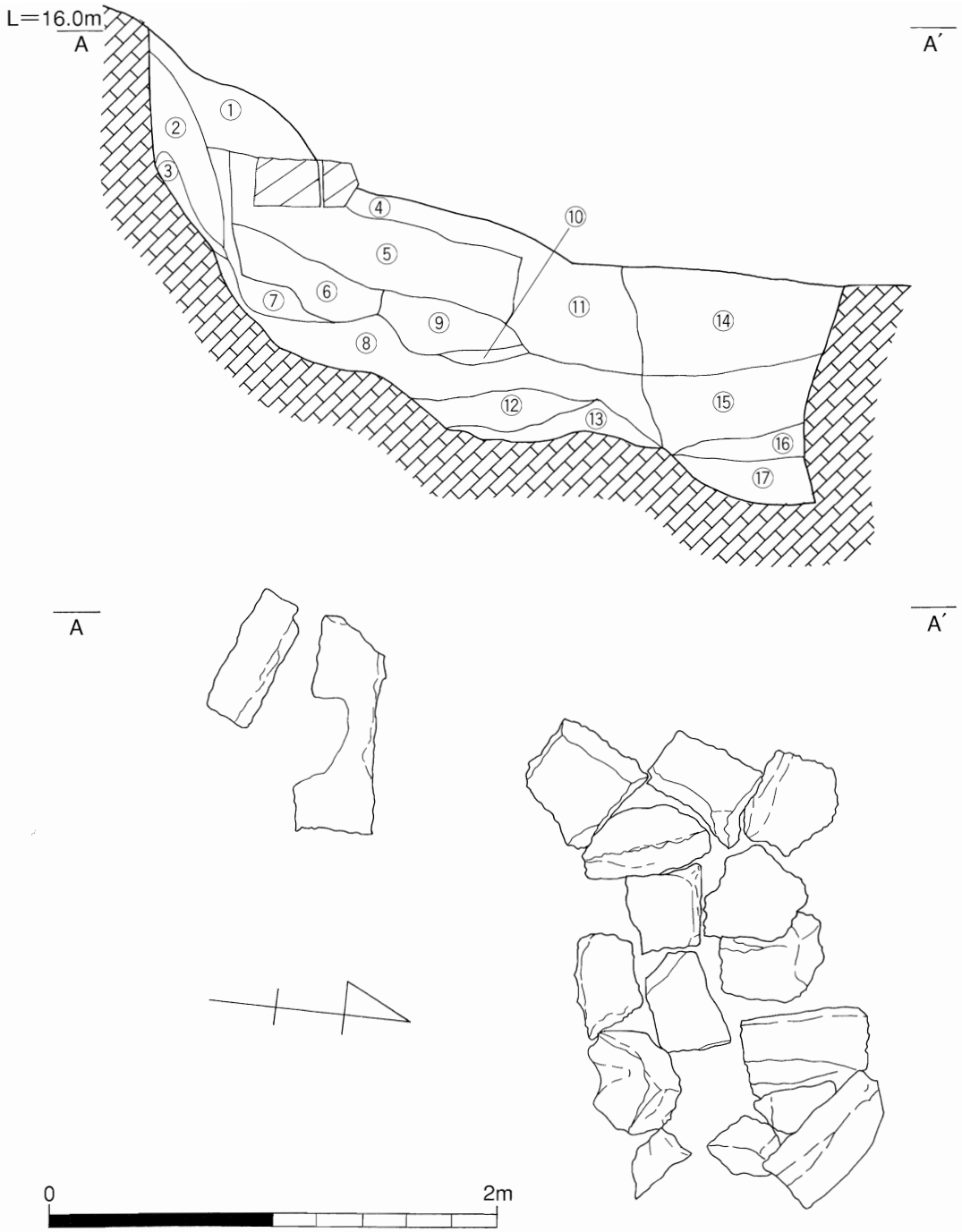
黒曜石製のスクレイパー。表土から出土したため時期は不明。

Ｂ．ミニチュア製品（第39－２～７図、図版26－２～５）

２・３は陶器製、**４**は磁器製の瓶で、**５**は陶器製の小壺、全体に釉薬が掛けられている。**６**は陶器製の小杯で、内面全体と外面胴部中央まで施釉されている。



第34図　４号墓　SK－03内出土遺物



第35図　SX－01実測図及び土層断面図

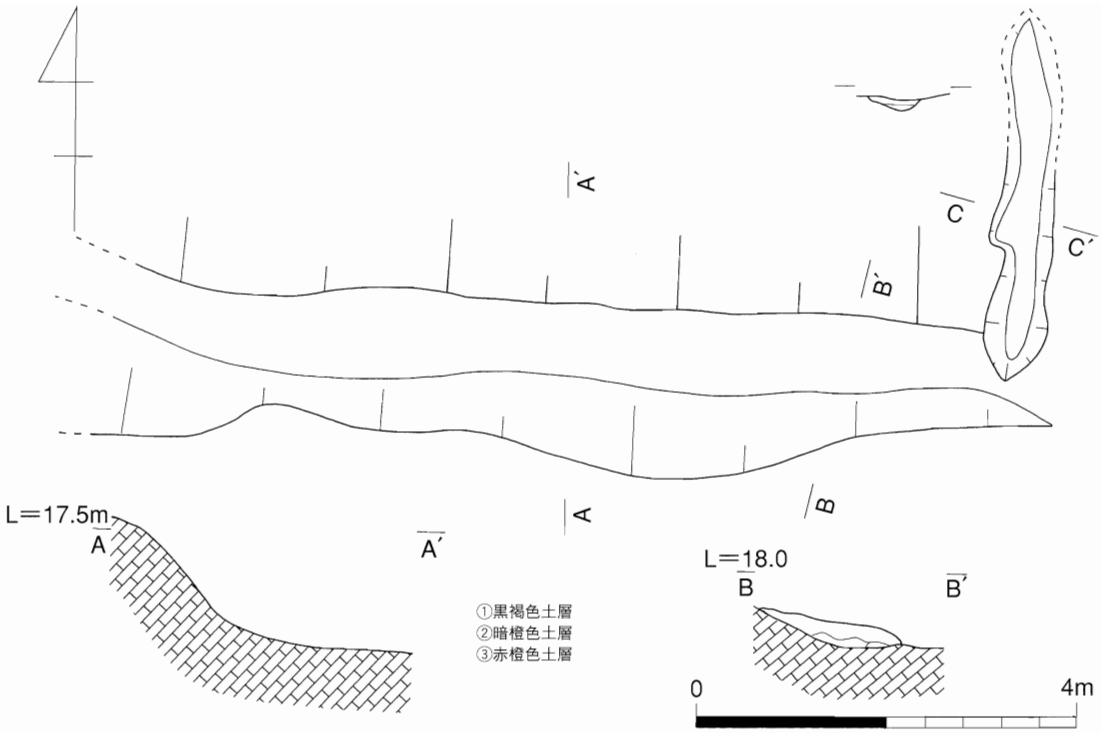
7 は陶器製の羽釜。いずれも供膳用もしくは玩具用と思われる。

C．坏類（第39－８～11図、図版26－６～９）

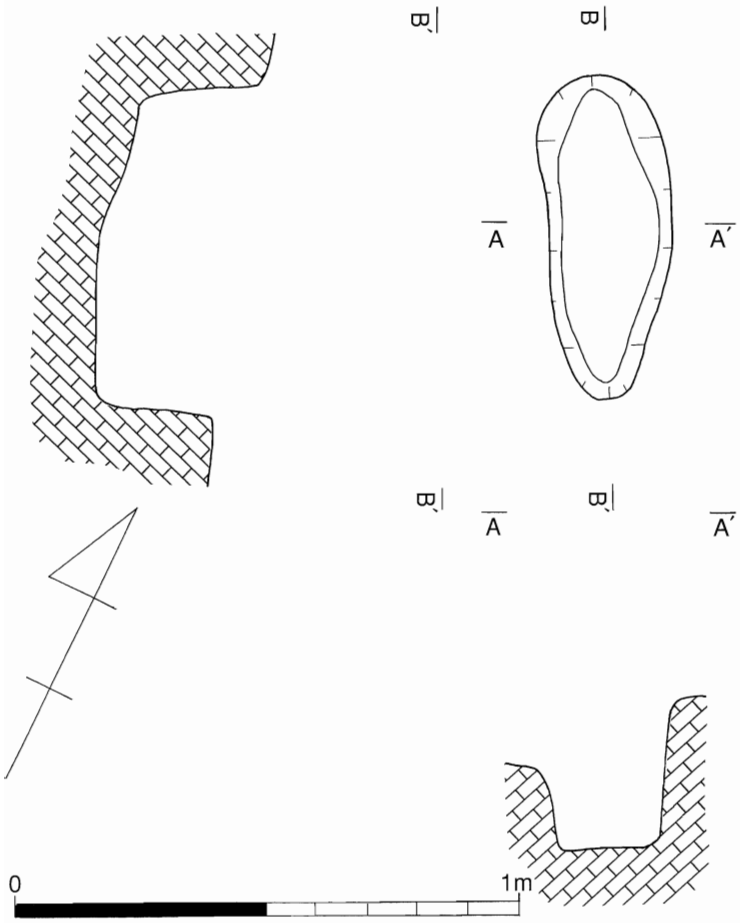
いずれも磁器製。**8** は端反形で、見込に絵付けが施されている。**10**は丸形染付小杯で、外面の染付は関西系の絵師によるものと思われる。**11**は染付小杯で外面に草花が描かれている。

D．瓶類（第39－12・13図、図版26－10・11）

いずれも磁器製の辣韮形染付瓶。**12**は外面に草花、**13**は星梅鉢が描かれている。



第36図　SX－02・SD－01実測図



第37図　SK－04実測図

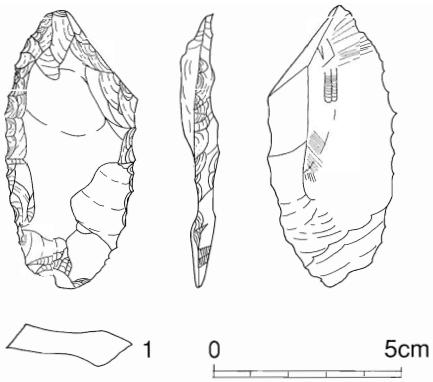
E．皿類（1）（第40－12～28、図版27）

14～18は土師質、**19～21**は陶器製の平形皿。底部に回転糸切痕があり（**14・21**は不明）、灯明皿と思われる。**22・23**は陶器の平形皿。**22**は高台がなく、口唇部が内側に曲げられている。**23**は高台があり、腰の付近で折れ曲がっている。**24**は陶器の変形皿。内側に菊花が型押されている。**25・26**は磁器製の平形皿。見込は蛇の目状に釉剥ぎ痕が残る。**27**は磁器製の輪花染付皿。見込に浜形が描かれている。**28**は磁器製の隅切方形皿で、内側には半菊花、見込に鯛が型押され、鯛の周りは呉須が塗られている。

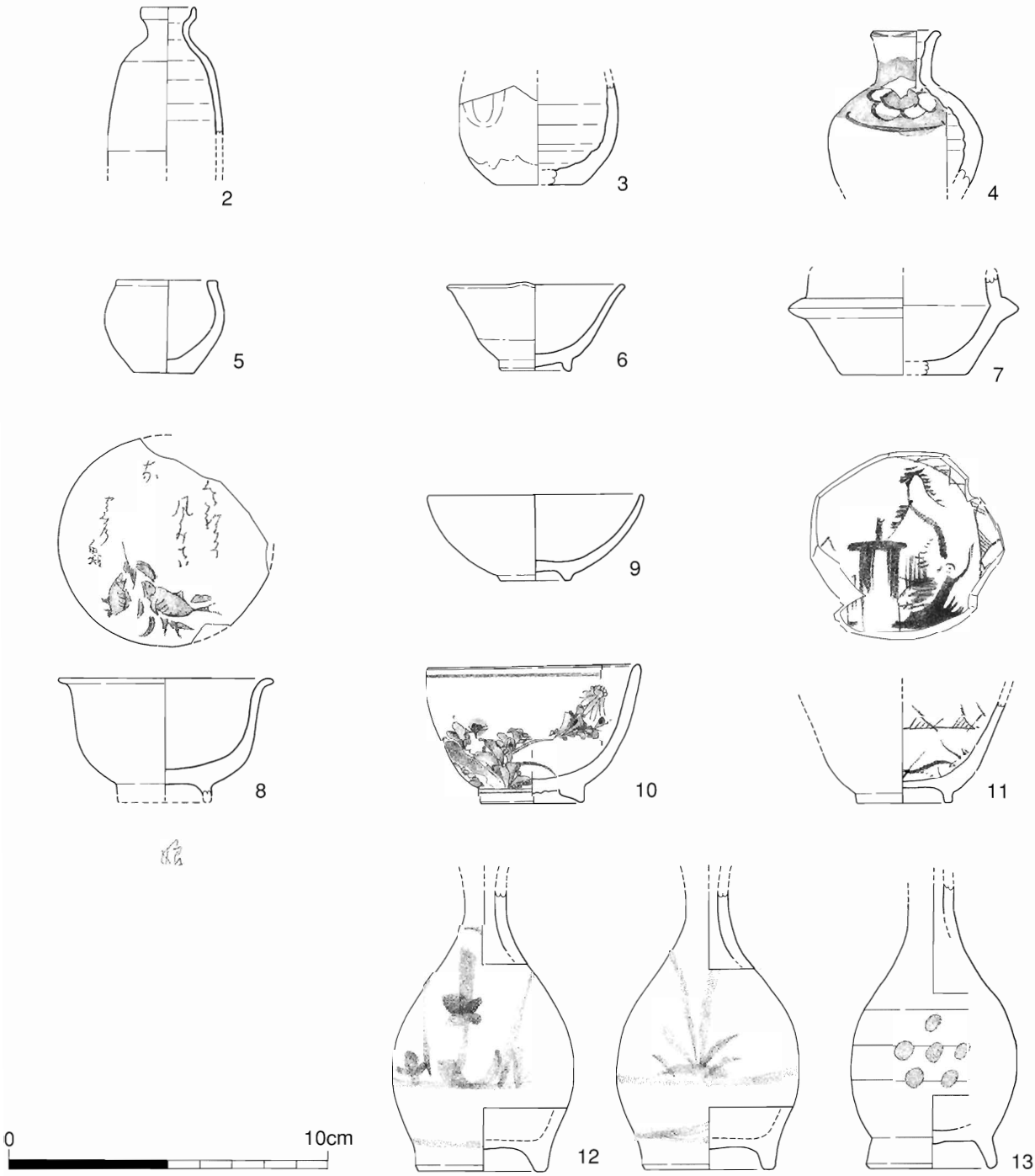
F．蓋類

（第41－29～37図、図版28－１～８）

29～33は陶器製の壺蓋。**29～32**は底部に回転糸切痕があり、つまみ部分は円形もしくは擬宝珠形。**33**は底部には回転糸切痕はなく、つまみ部分は耳状になっている。**34～36**は陶器製の行平蓋。**37**は磁器製の碗用染付蓋。外



第38図　墓域周辺　出土遺物実測図（1）



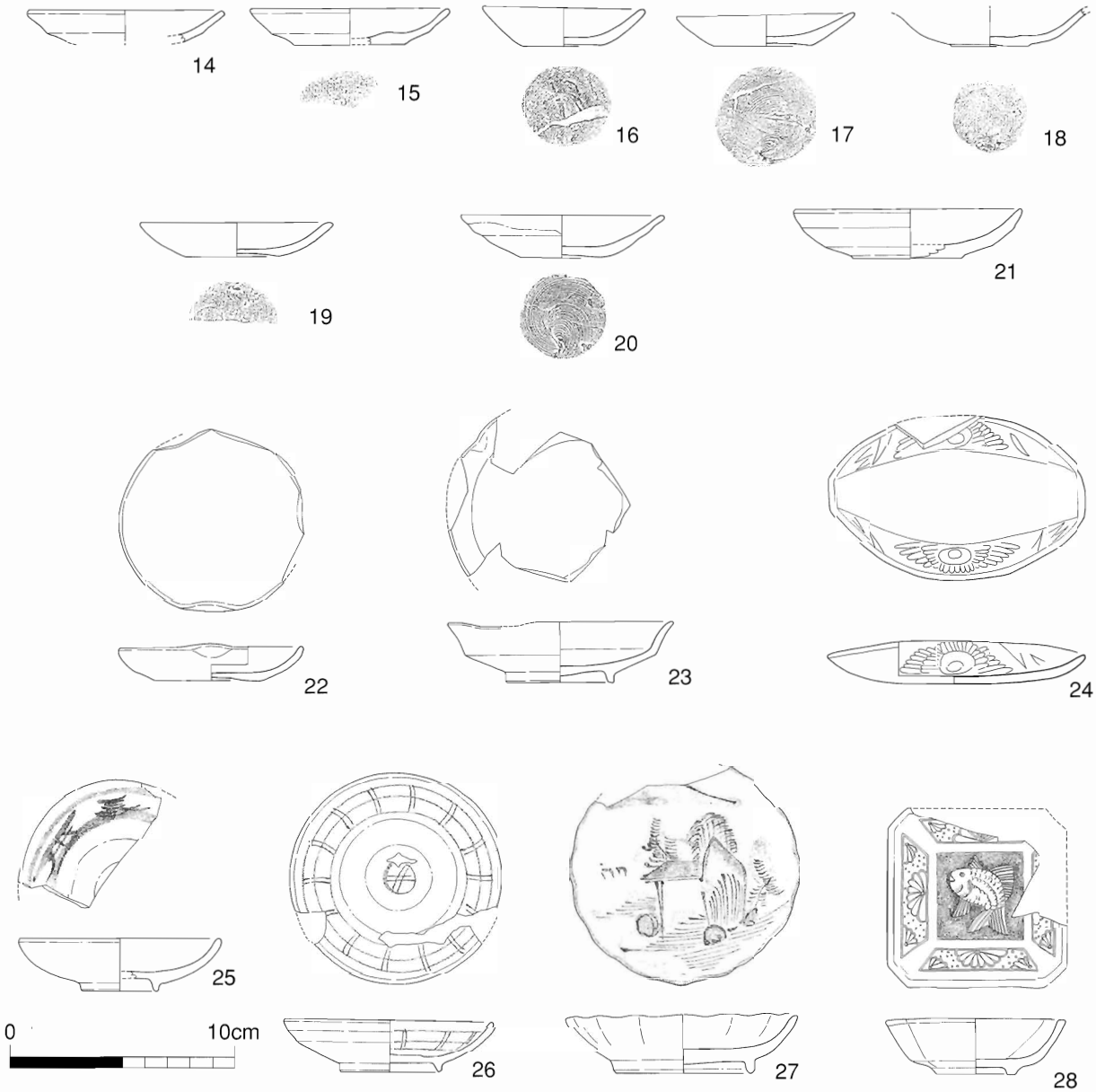
第39図　墓域周辺　出土遺物実測図(2)

面に松竹梅、見込部分には環状松竹梅が描かれている。

G．碗　類（第42－38～52図・第43－53～62図・第44－63～67図）

（図版29－１～12・図版30－１～10・図版31－１～８）

38は陶器製の筒丸形碗、湯飲み碗と思われる。**39～42・44～47**は陶器製の端反形碗。**43**は平形碗。**41～43**は高台が低く、**41・42**の高台内は蛇の目凹形を呈する。**48・49**は陶器製の半球形碗。**50**は磁器製の平形染付碗で、「くらわんか碗」と呼ばれるものである。**51～60・62**は磁器製の端反形染付碗で底部が広めで、染付は呉須によるもの。**61**は磁器製の半球形染付碗。**63**は磁器製の丸形染付碗。**64～67**は磁器製の端反碗で底部が広めで、染付はコバルトによるもの。



第40図　墓域周辺　出土遺物実測図(3)

H．皿類（2）（第45－69・70図、図版33－７・８）

いずれも磁器製の染付輪花皿。**69**の見込には環状松竹梅が、**70**の見込に水草・魚が描かれている。

I．壺類（第46－71・72図、図版32－１）

71は陶器製の大海形壺。**72**は陶器製の胴丸形壺。

J．鉢（第46－73図、図版32－４）

陶器製の擂鉢

K．瓶類（2）（第46－74・75図、図版32－２・３）

いずれも陶器製の撫肩燗徳利。

L．土瓶（第46－76～80図、図版32－５～９）

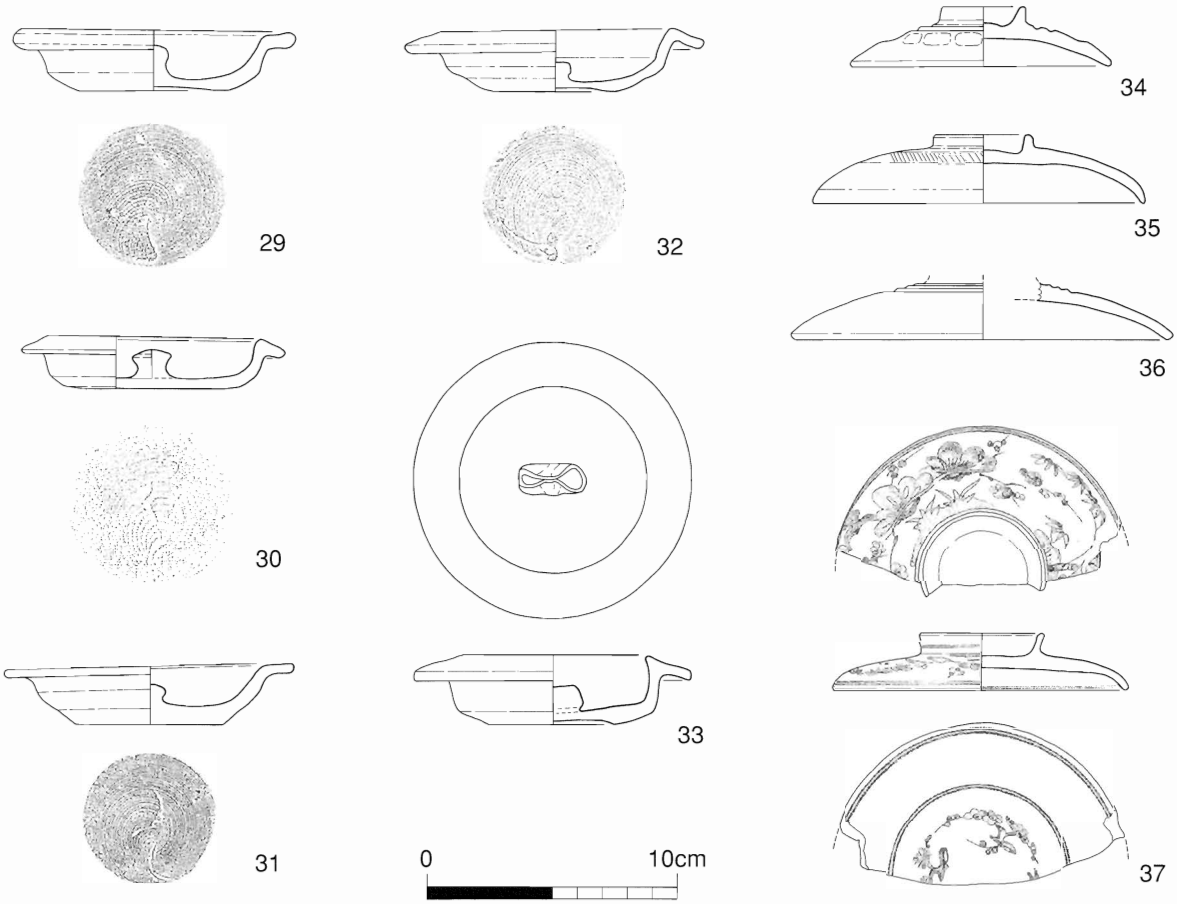
いずれも陶器製。**76～78・80**は算盤形、**79**は丸形を呈する。**79**には模様が描かれ、**80**には縄目が施されている。**76～79**は布志名系、**80**は石見系。

M．段重（第47－81図、図版33－２）

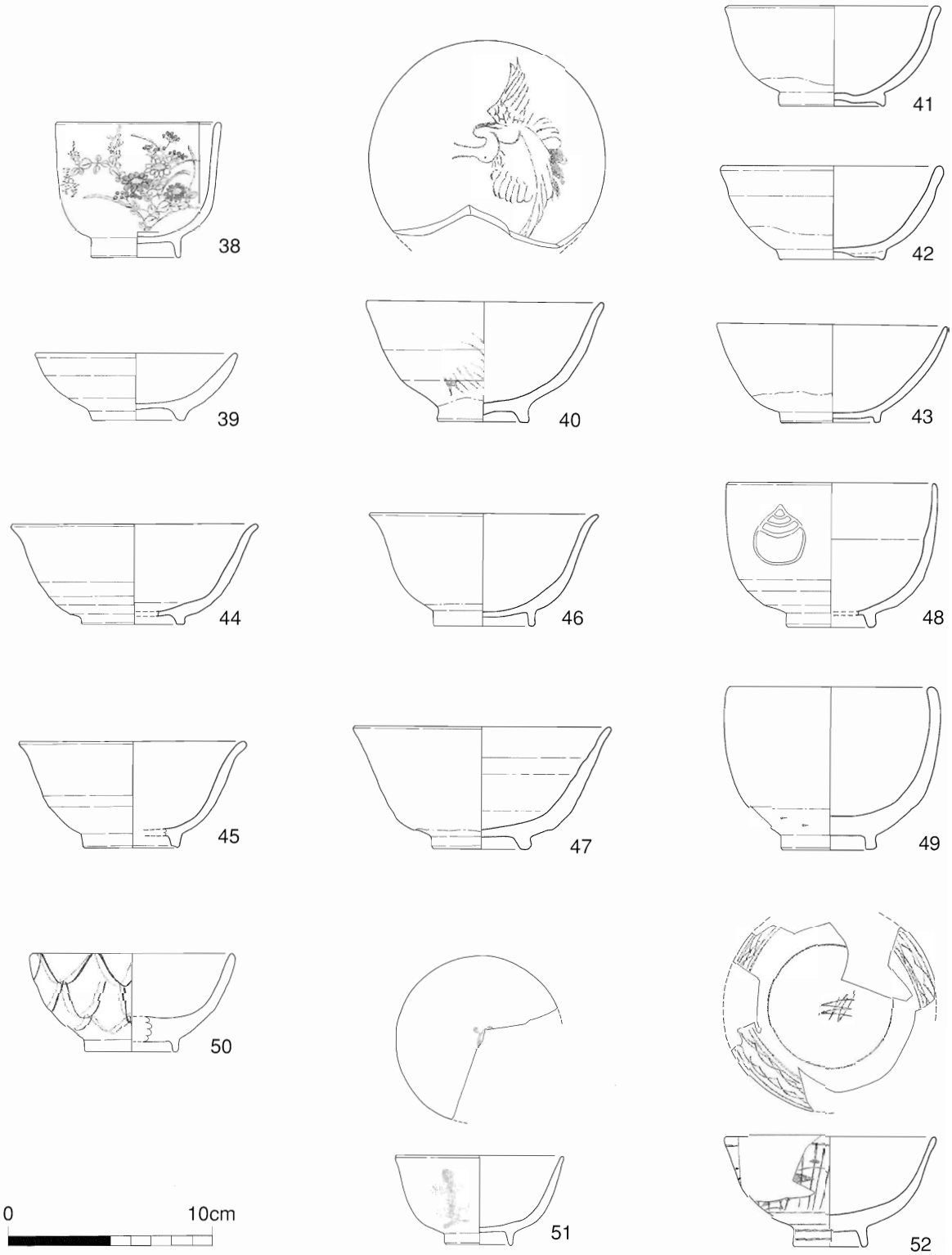
磁器製の染付段重。外面に六角形の模様が描かれている。

N．鉢（第47－82図、図版33－１）

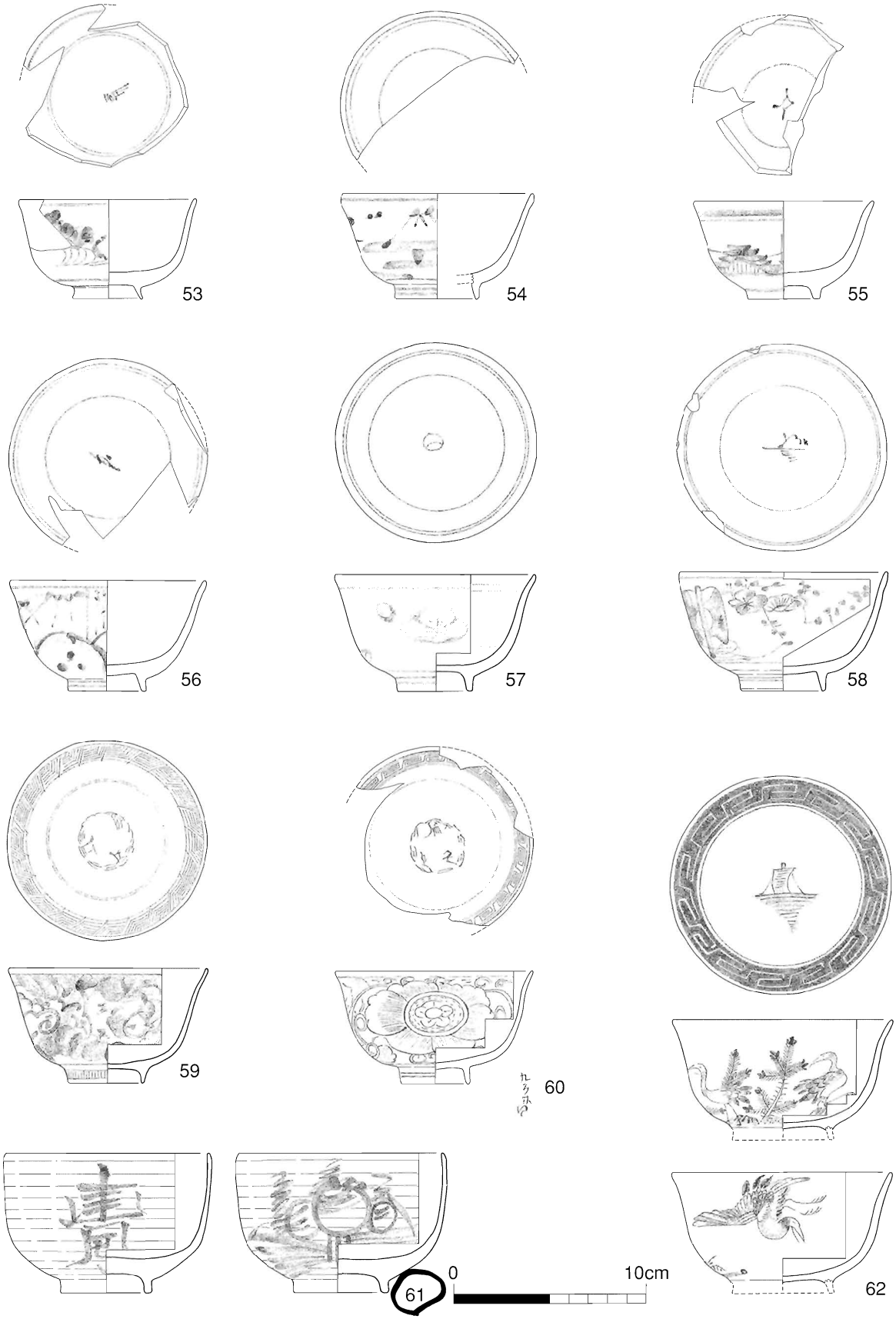
陶器製の腰張形鉢。外面に鉄絵で笹が描かれている。



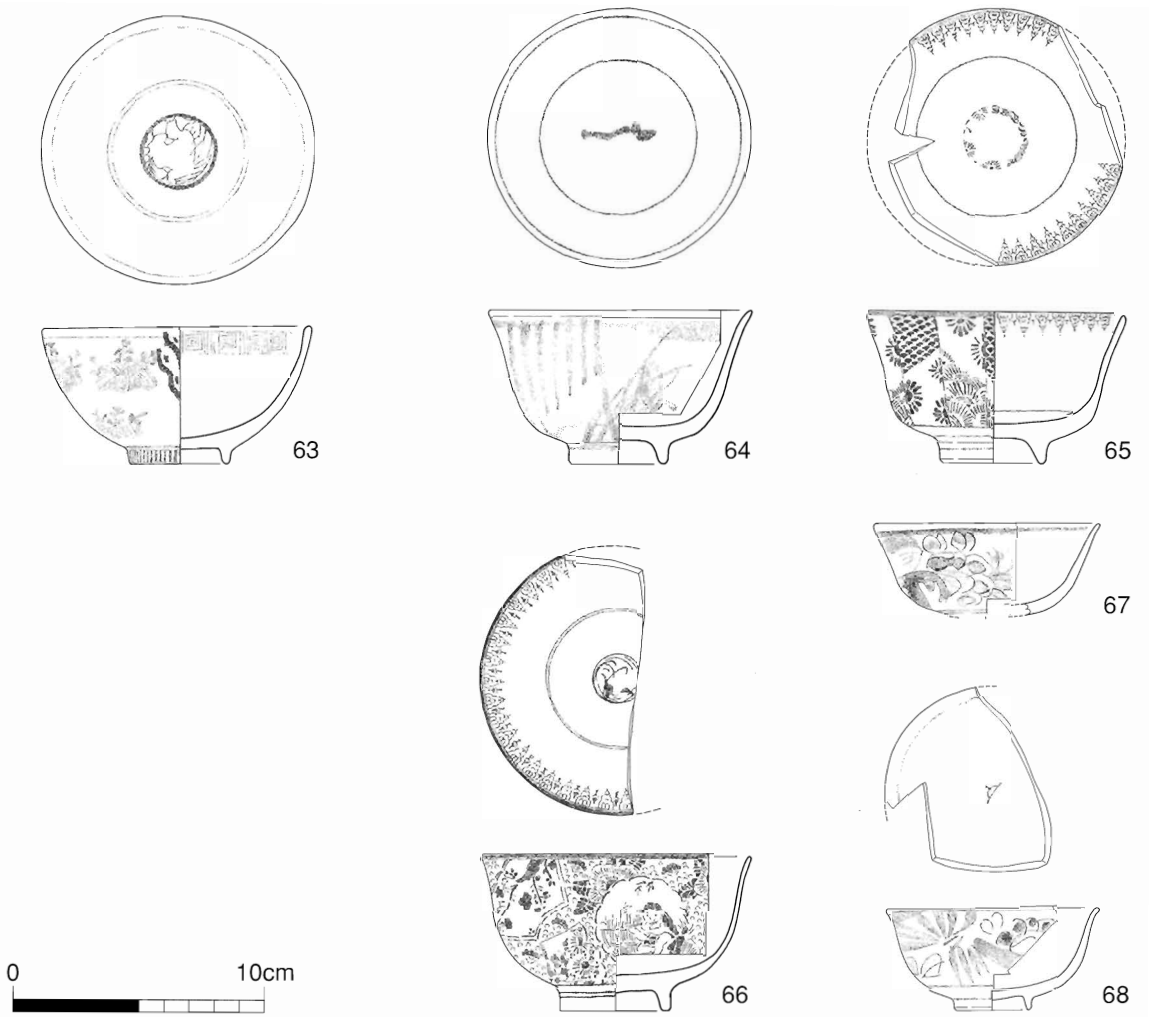
第41図　墓域周辺　出土遺物実測図(4)



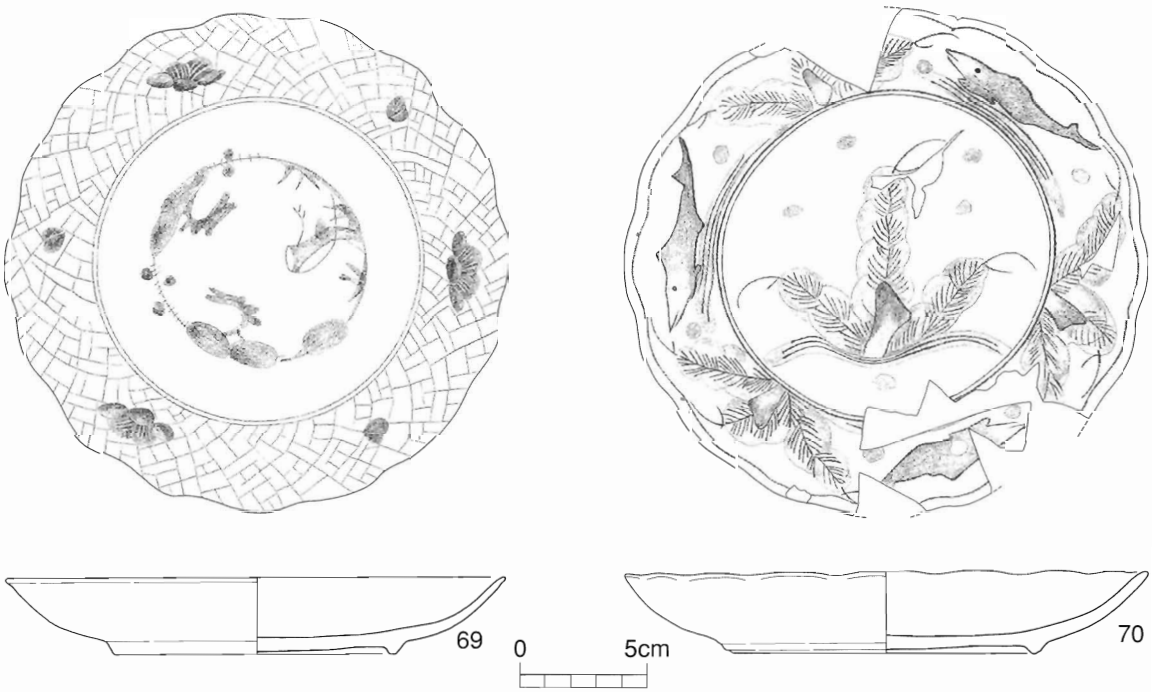
第42図　墓域周辺　出土遺物実測図(5)



第43図　墓域周辺　出土遺物実測図(6)



第44図　墓域周辺出土遺物実測図(7)

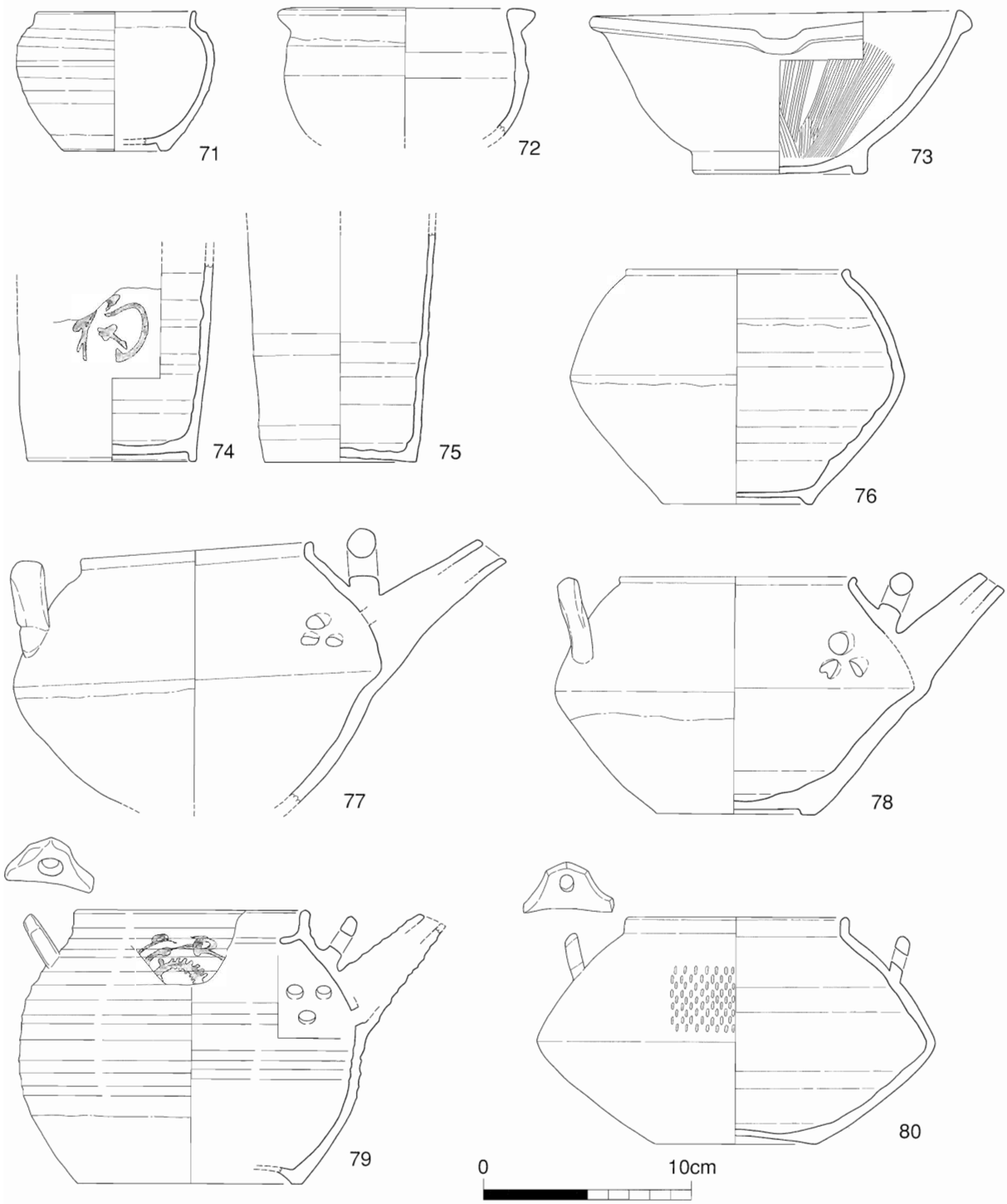


第45図　墓域周辺　出土遺物実測図(8)

O．皿類（3）（第47－83～85図、図版33－３～５）

82・83は陶器製で、**82**は口唇部が玉縁形、内面全体と外面の胴部まで施釉されている。**83**は口縁部が折れ曲がり、内面が施釉され、胴部下にはケズリ痕が残る。**84**は土師質で口縁部が折れ曲がり、内面が施釉され、胴部下にはケズリ痕が残る。

P．甕類（第47－86図、図版33－６）

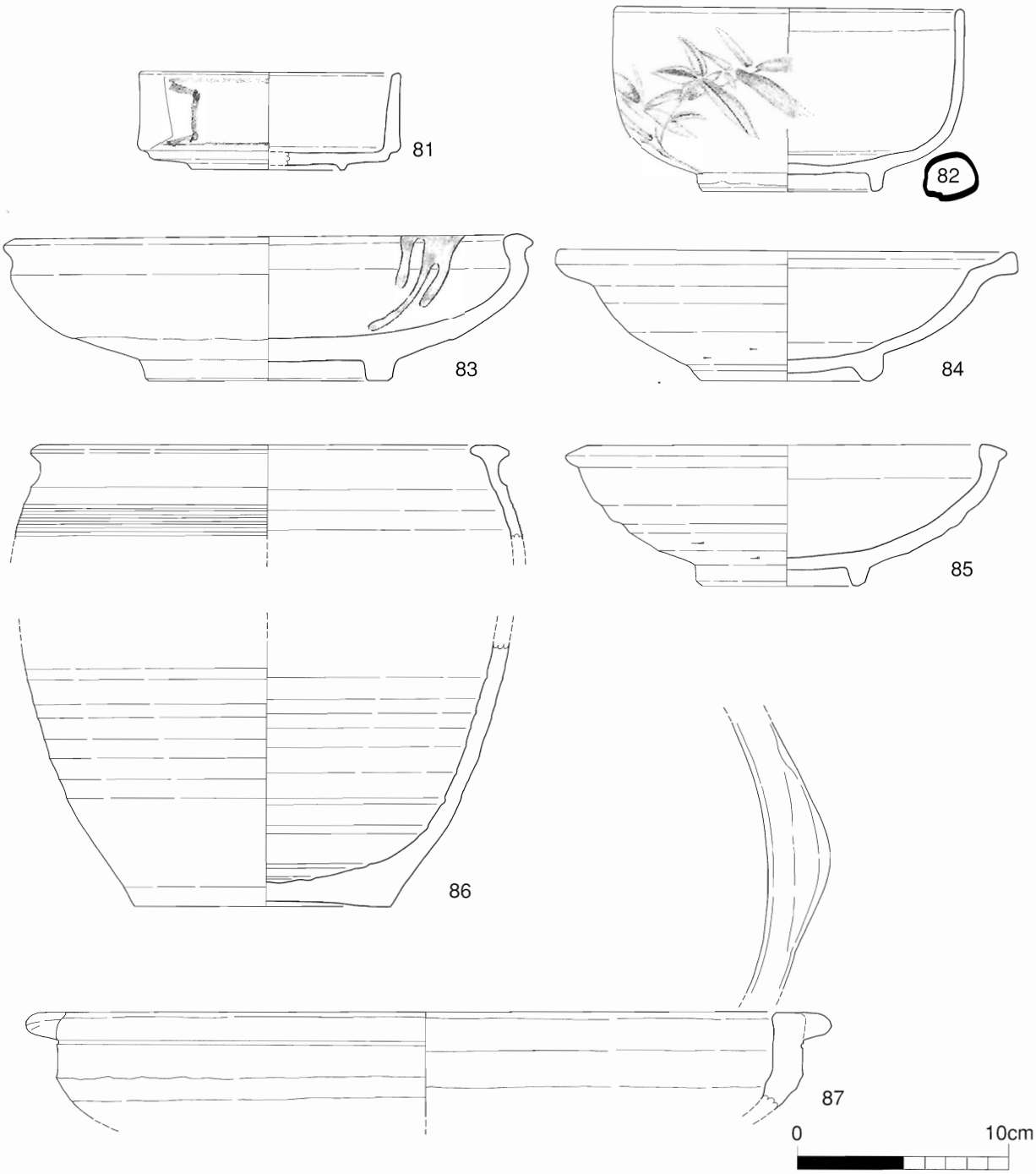


第46図　墓域周辺　出土遺物実測図(9)

陶器製の寸胴形甕。口縁部は平らで頚部がくびれている。

Q．焙　烙（第47－87図）

土師質の外耳丸底焙烙。



第47図　墓域周辺　出土遺物実測図(10)

３．北側調査区

本調査区は約60ｍ四方の範囲を伐採した木々や廃土の置き場所の確保のため、３つ（北側１・２・３区）に分けた。各調査区にトレンチを任意で６本設定し、遺構を検出した場合、その周辺を全面調査することにした。

１　北側１区

１区は約10ｍ四方の下段の平坦面と東西7.5ｍ、南北３ｍの上段の平坦面があり、高さ約１ｍの急斜面によって分けられている。また北東隅には素掘りの直径約120㎝、深さ約２ｍの井戸があり（井戸１）、陶磁器類の破片や加工痕を持つ石が表面からも見られた。

調査の結果、上段平坦面では陶磁器類の破片や加工段（ＳＸ－03）が検出された。

（1）遺物

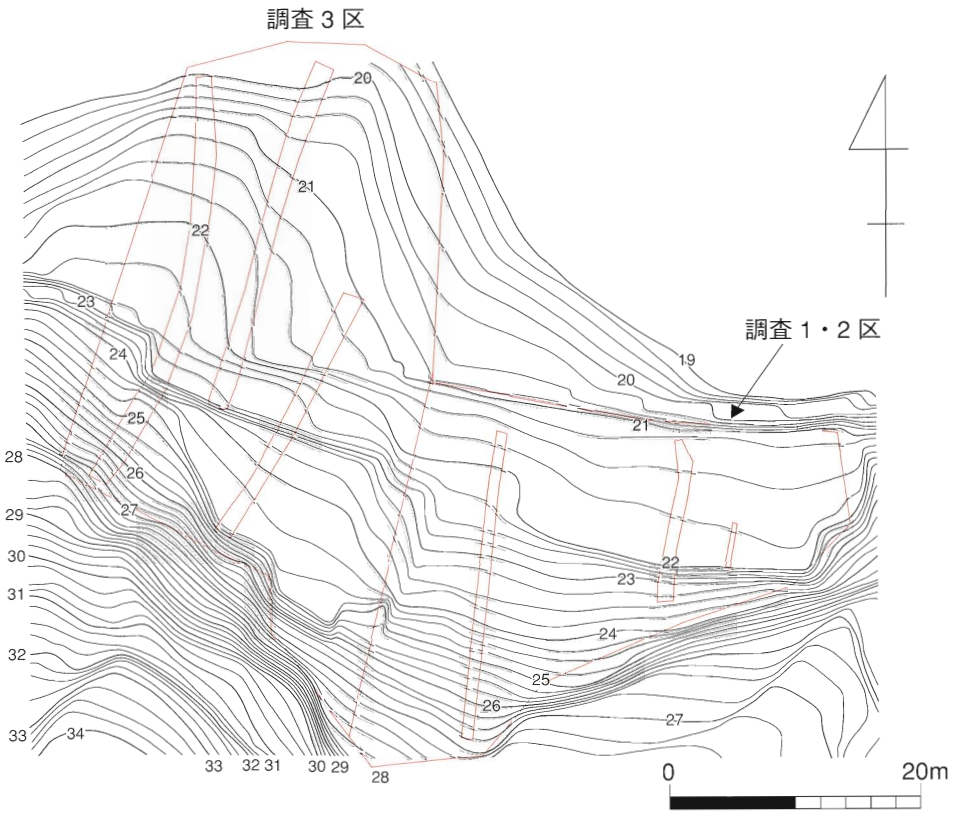
ここでは１区上から出土した遺物を図化したものである。

Ａ．皿類（第50－１・２図、図版34－１・２）

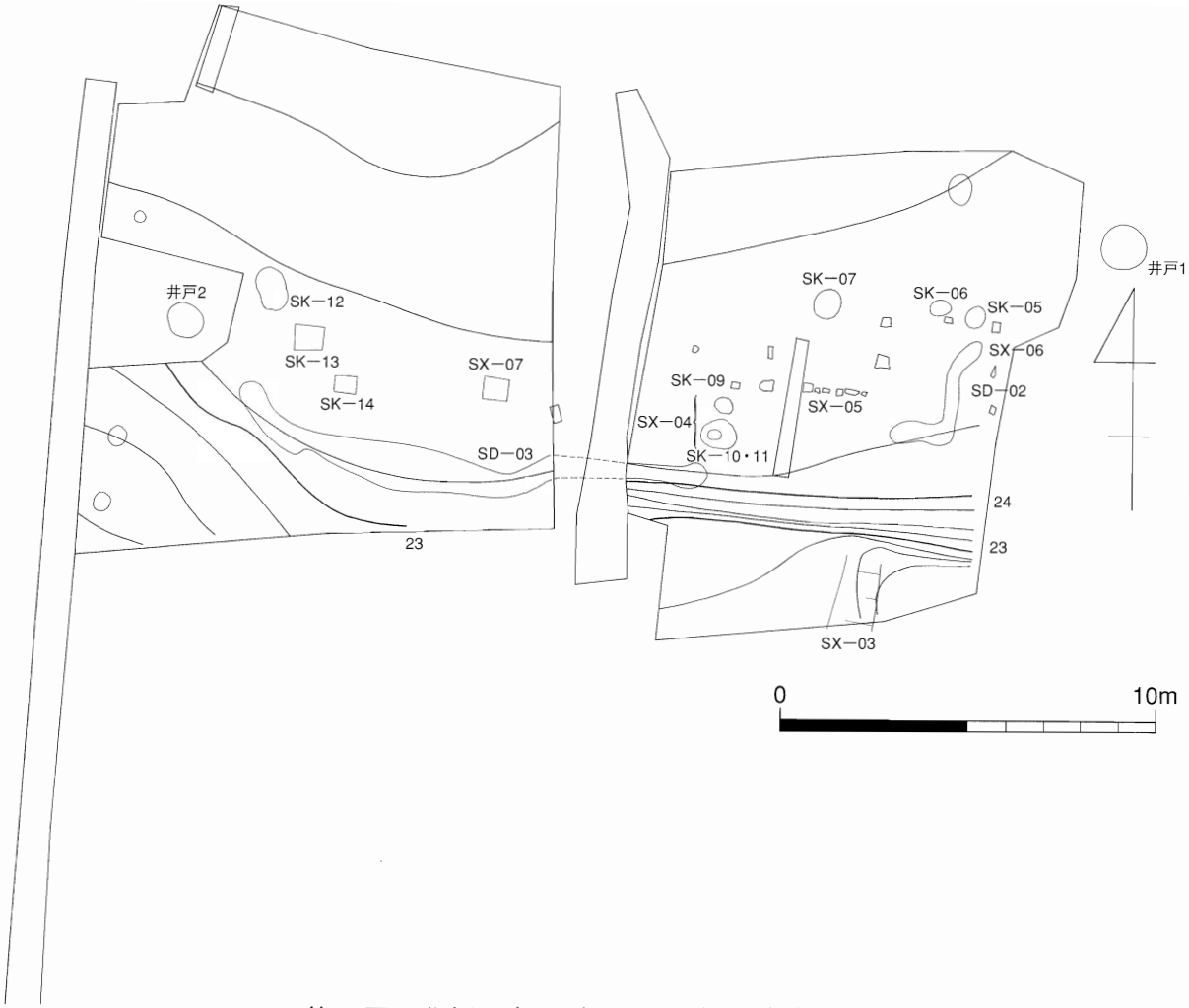
いずれも陶器製．１は底部に回転糸切痕を持つ受皿付灯明皿。２は削り出し高台の中皿。内外面ともに塗土されている。

Ｂ．厨房具類（第51－３～６図、図版34－３～５）

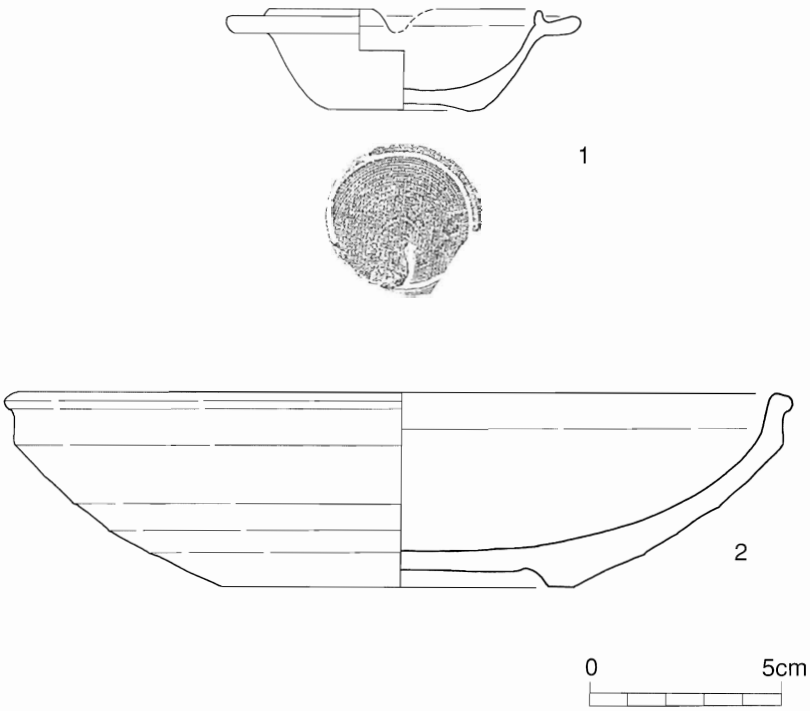
いずれも土師質の七輪。**３～５**は胴部にケズリ痕が残り、**４**はけずった後に叩いている。**６**は**３・４**に比べて開口部が大きい。



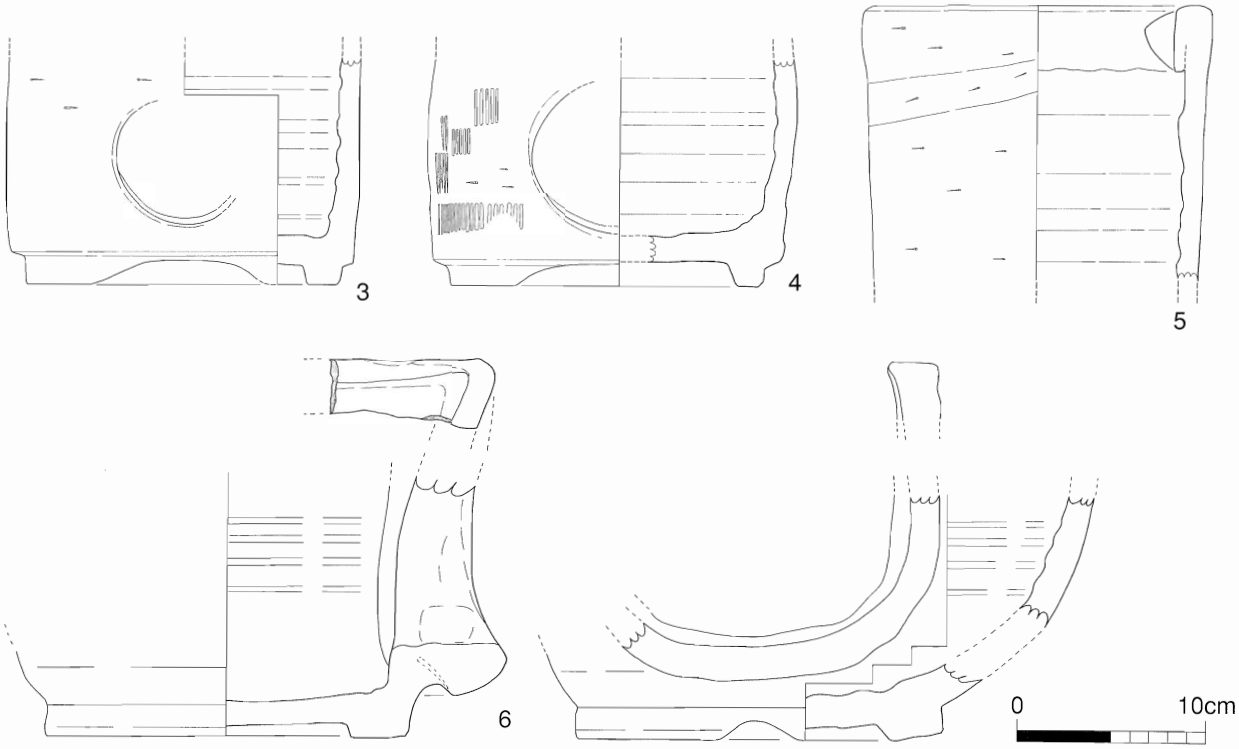
第48図　北側調査区　調査前地形測量図及びトレンチ設定図



第49図　北側調査区（１・２区）調査成果図



第50図　北側１区上　出土遺物(1)



第51図　北側１区上　出土遺物(2)

ここからは第２層から出土したものである。

Ａ．鉢類（第52－７図）

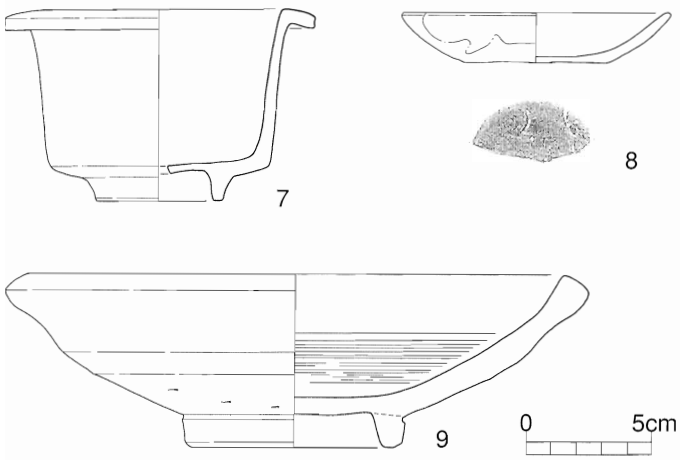
陶器製の植木鉢。中央部に穴を穿っており、第27－26図のような擂鉢を転用した植木鉢ではなく、植木鉢として作られたものである。

Ｂ．皿類（第52－８・９図）

８は陶器製の平形皿。底部には回転糸切痕を持ち、内面全体と外面口縁部に施釉されている。**９**は土師質の中形皿。胴部下にはケズリ痕が残っている。

(2)　ＳＸ－03

南北方向に約２ｍ、幅1.1ｍ、高低差38㎝を測る。用途については不明だが、埋土から出土した遺物から近世末から近代に埋没したものと思われる。



第52図　北側１区上　出土遺物(3)

①　遺物

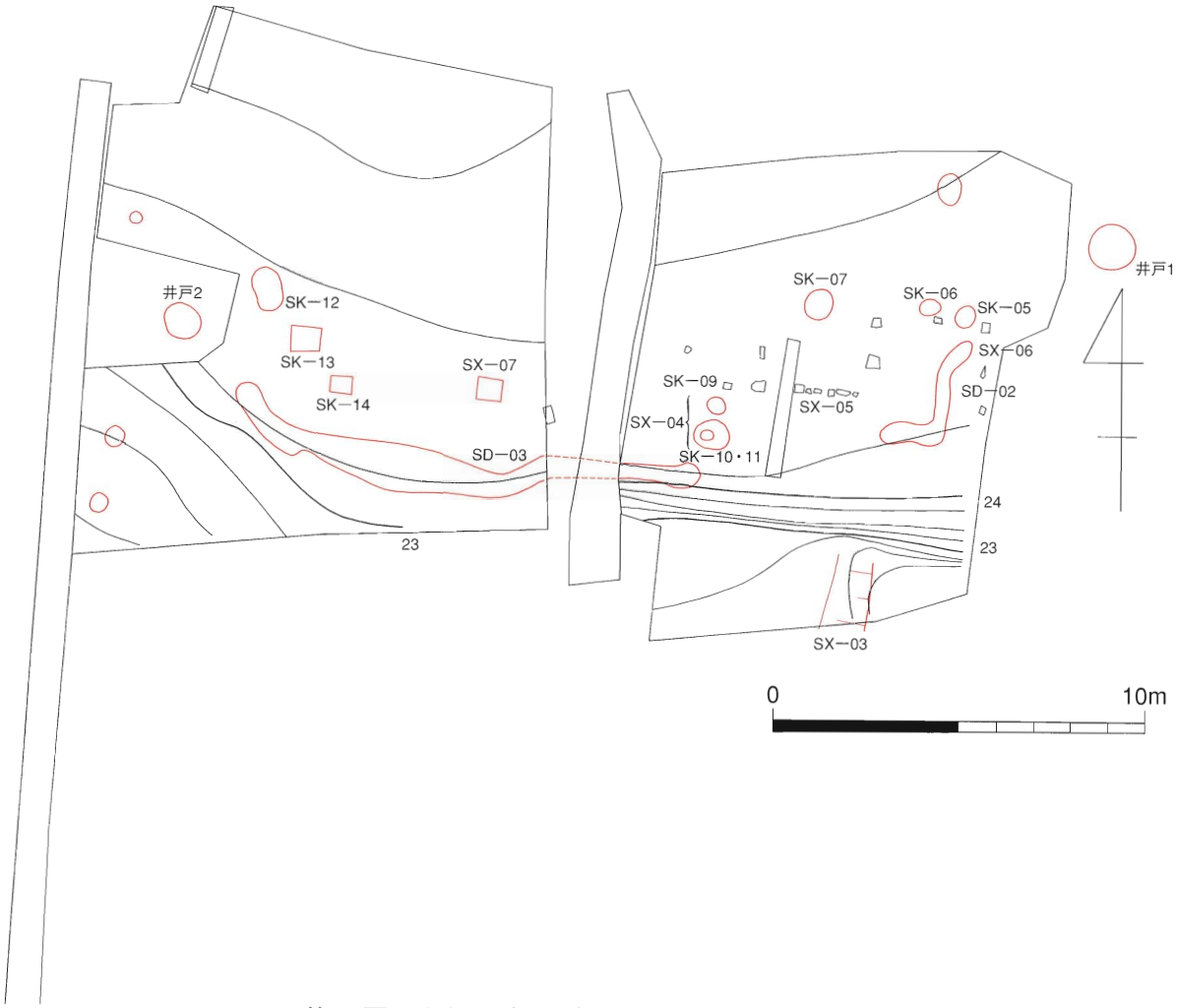
加工段の埋土（黒褐色土層）から出土した遺物である。

Ａ．坏（第53－１図、図版34－６）

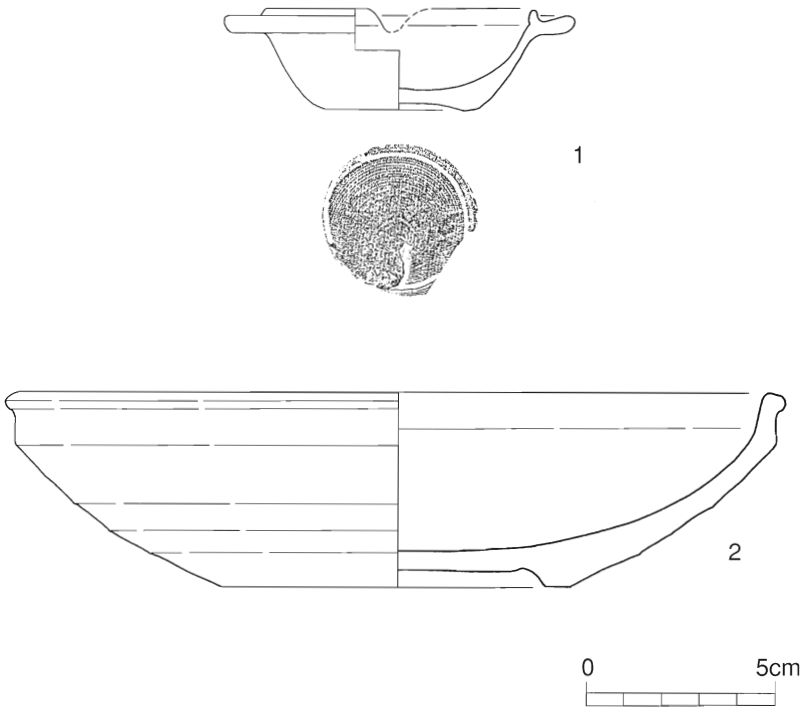
磁器製の丸形染付小杯。呉須で模様が描かれている。

Ｂ．皿類（第53－２～５図、図版34－７～10）

２・３は土師質の平形皿。底部には回



第49図　北側調査区（１・２区）調査成果図



第50図　北側１区上　出土遺物(1)

転糸切痕を持ち、口唇部には油煙痕が残る。灯明皿として使用していたと思われる。**4・5**は**第17－5図**と同じく「目皿」で、いずれも土師質で、**4**は皿形で底部に回転糸切痕を持ち、**5**は円盤形を呈する。

下段では土壙や石列、溝状遺構などが検出された。遺構外から出土した遺物は大部分が第1層からの出土したものであり、多種多様である。

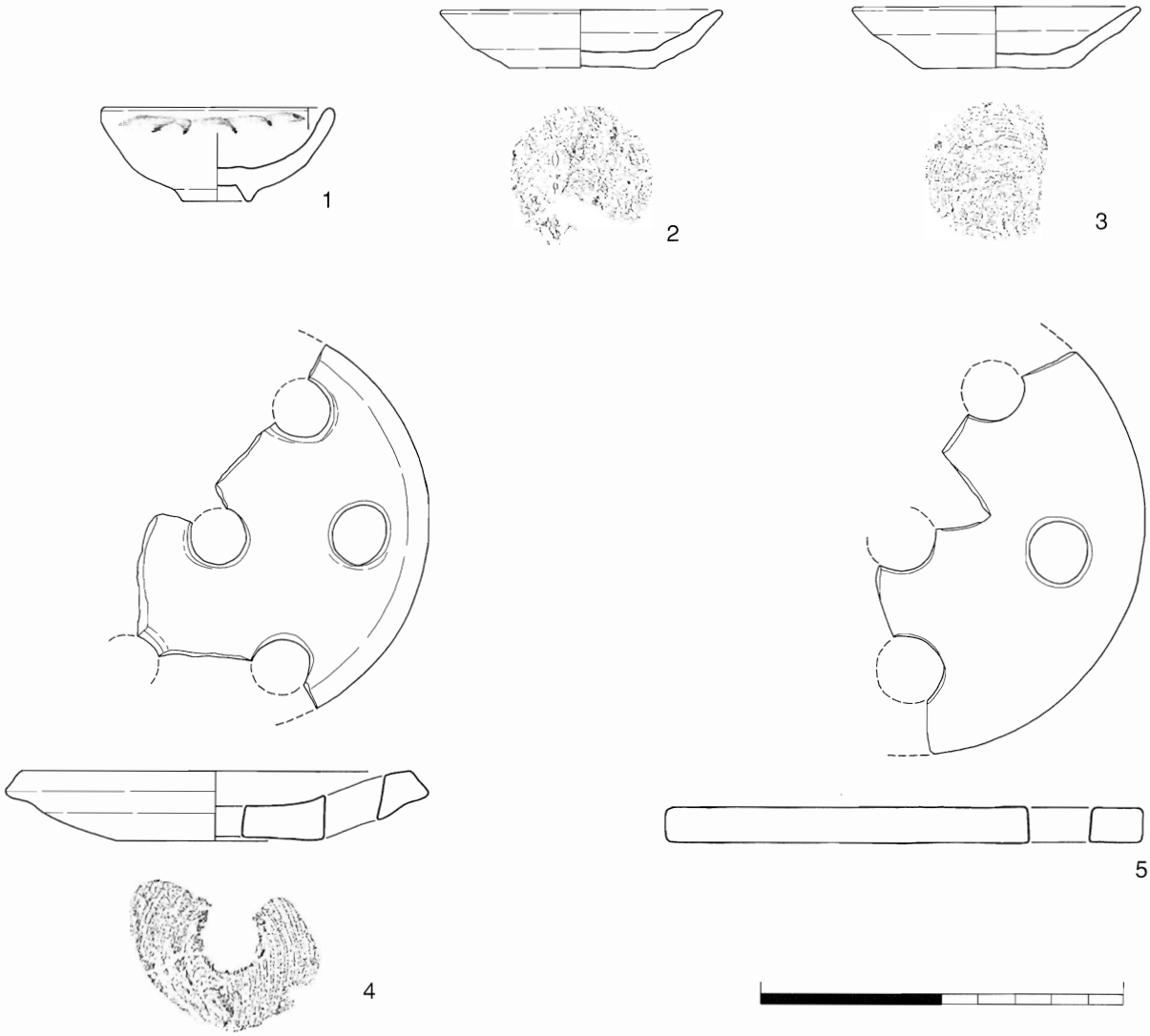
①　遺物

A．人形（第55－1図、図版35－1）

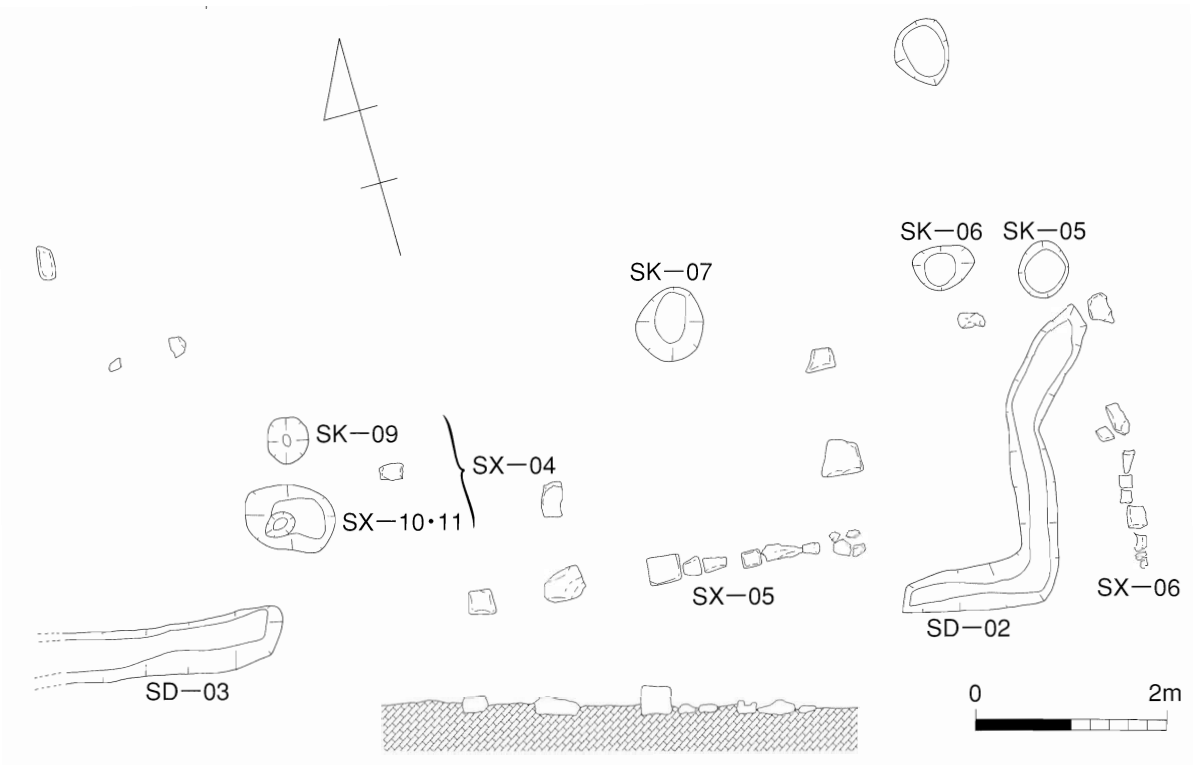
陶器製の人形。布袋神と思われる。

B．瓶類（第55－2・3図、図版35－2・3）

いずれもミニチュアの陶器製。**2**は胴部上に押圧によるくぼみがあり、「ペコカン徳利」と思われる。**3**は辣韮形瓶。底部に回転糸切痕を持つ。供膳用もしくは玩具用と思われる。



第53図　SX－06（加工段）出土遺物



第54図　北側１区下　遺構配置図

C．坏類（第55－４～７図、図版35－４～６）

いずれも陶器製。４・５は白磁小杯、６・７は呉須による染付小杯。

D．皿類（第55－８～11図・第56－12～16図、図版36－１～４）

8は土師質、**9**・**10**は陶器製で内面と外面口縁部に施釉されている。いずれも底部に回転糸切痕を持つ灯明皿。**11**は陶器製の底部に回転糸切痕を持つ受皿付灯明皿。**12**は陶器製の六角形皿。**13**は磁器製の平形染付皿。見込に蛇の目状の釉剥ぎ痕が残る。**14**は磁器瀬の菱形染付皿。見込には宝珠・巻物が描かれている。**15**は丸形染付皿。見込には龍が描かれている。**16**は磁器製の丸形染付皿。底部は蛇の目凹形を呈する。

E．蓋類（第56－17～19図、図版36－５～７）

17は陶器製の蓋。行平もしくは小さな鍋に使われていたものと思われる。**18**・**19**は磁器製の染付碗用の蓋。口縁部がわずかに反り返る形状。

G．碗類（第56－20～22図、図版36－８～10）

20は磁器製の端反形染付碗。**21**・**22**は磁器製の丸形染付碗。

H．皿類（2）（第57－23～25図、図版37－１～３）

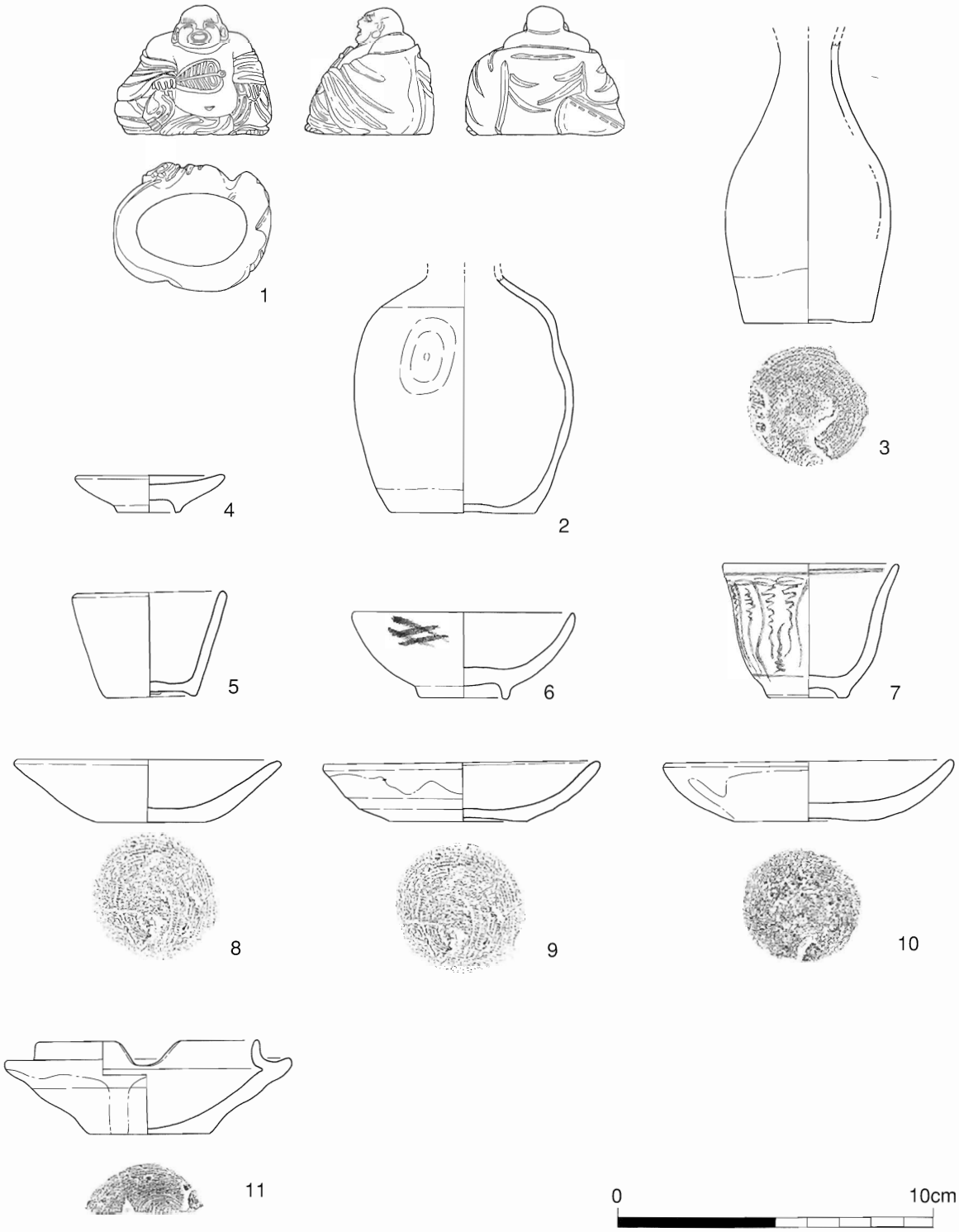
23は磁器製の輪花皿．見込に浜景が描かれている。底部は蛇の目凹形を呈し、その中央には銘が押されている。**24**は磁器製の輪花染付皿。見込みにコンニャク印判があり、高台裏には「大明成化年製」とかかれている。**25**は磁器製の丸形染付皿。

I．石製品（第58－26図）

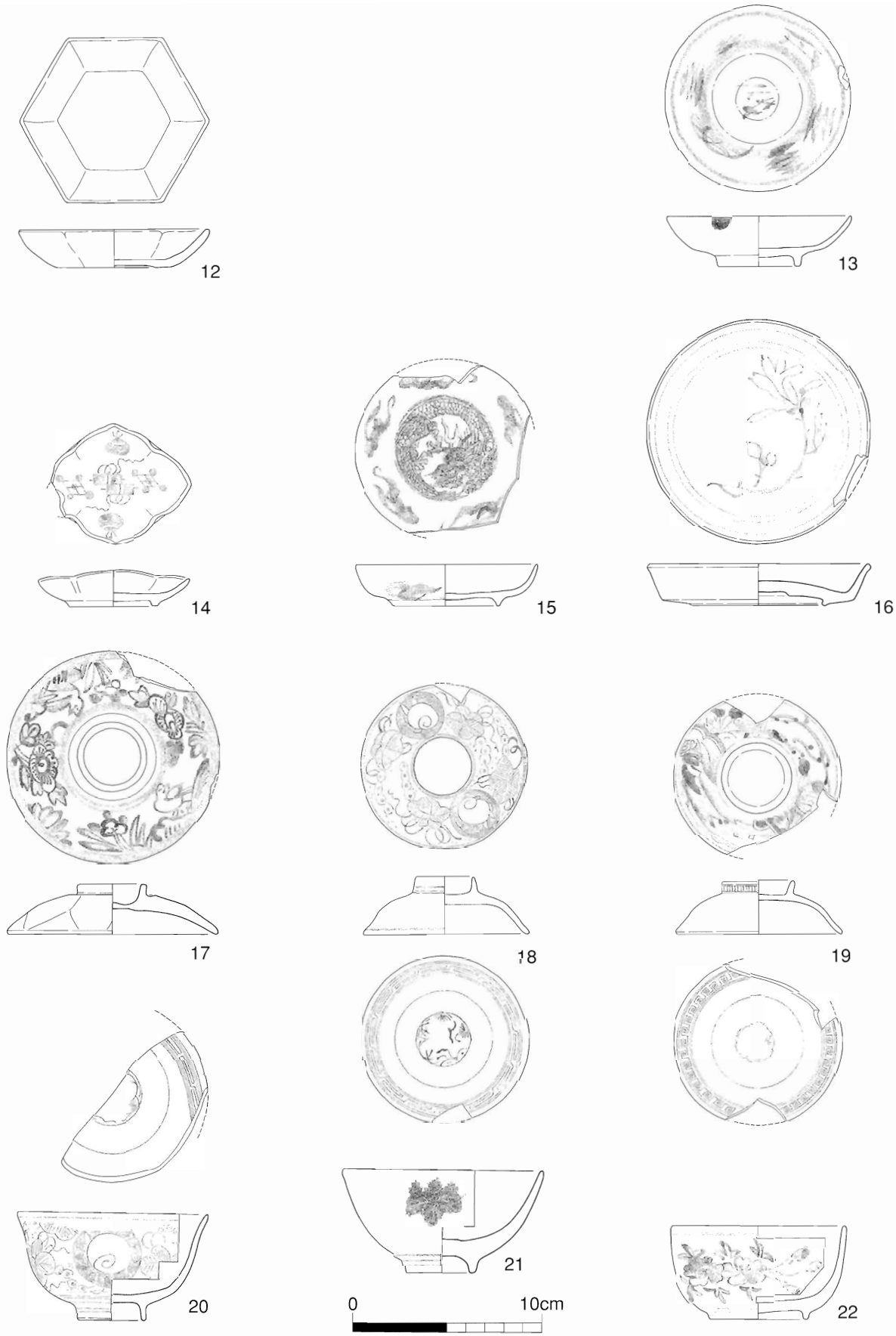
凝灰岩製の硯。中央に使用痕と思われる擦痕が見られる。

（2）ＳＸ－04（第59図、図版９－３）

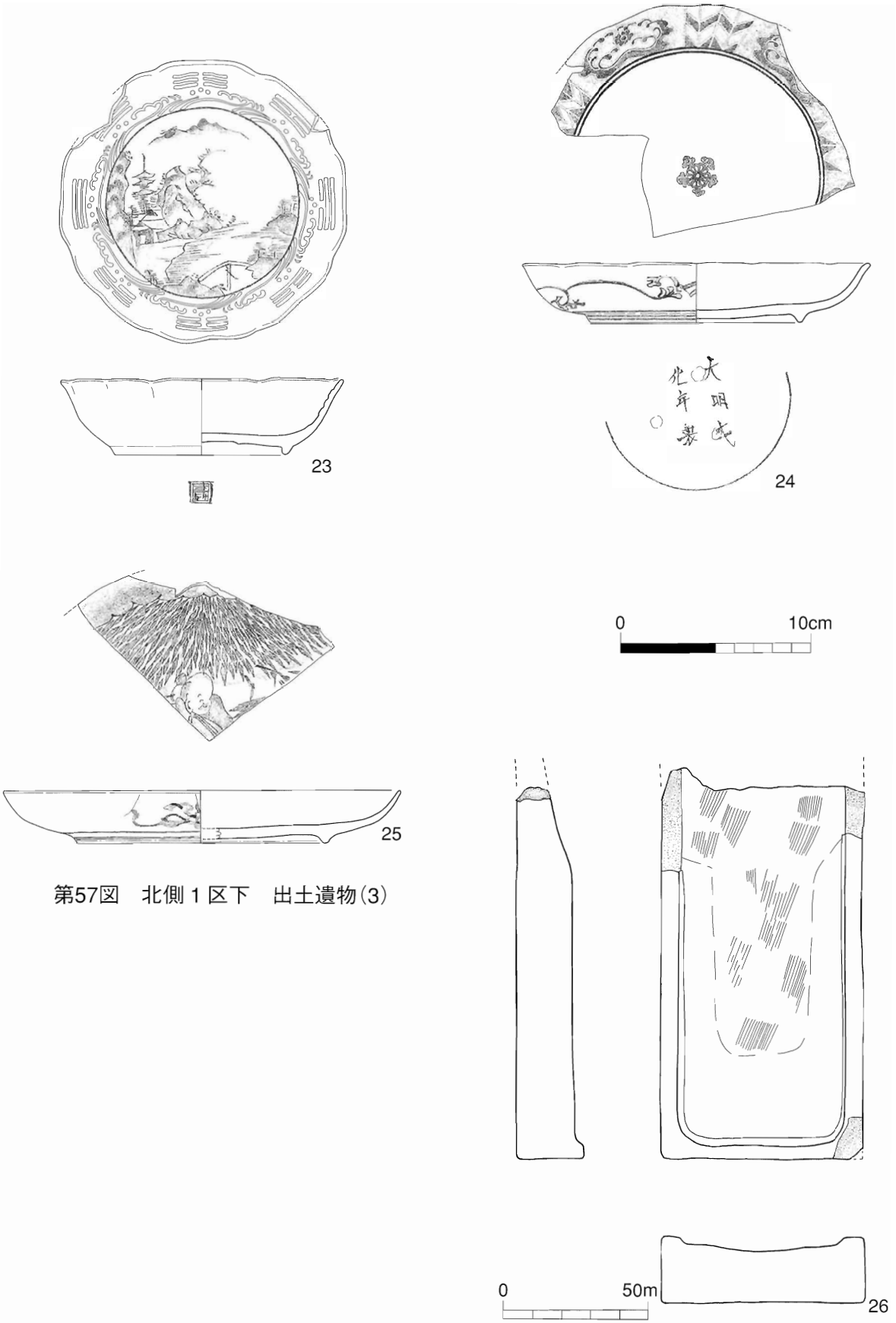
ＳＸ－04は調査区西側から検出された遺構である。検出状況は２ｍ四方の範囲に最大で40×30㎝前後の加工痕のある石や自然石が集まっている状態で、埋土は黒色土であった。黒色土からは炭や焼土に混じって陶磁器類の破片が多く出土した。調査の結果、ＳＸ－04内からは土壙が３基（Ｓ



第55図　北側１区下　出土遺物(1)

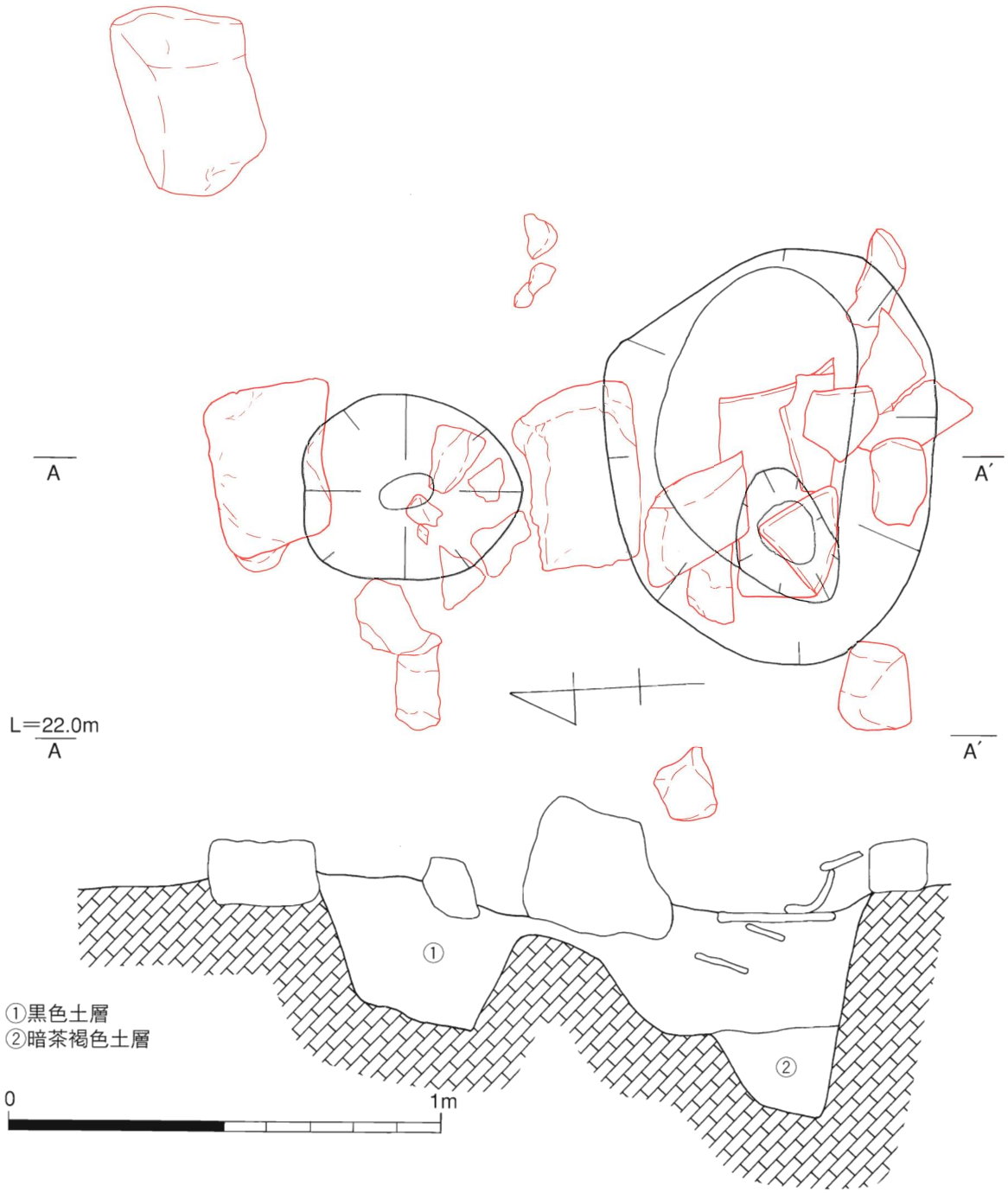


第56図　北側１区下　出土遺物(2)



第57図　北側１区下　出土遺物(3)

第58図　北側１区下　出土遺物(4)



第59図　SX－04（土器溜）実測図

K－09～11）検出された。

SK－09は上端径75～92㎝、下端径45～75㎝、深さ16～36㎝を測り、形状は不整楕円形を呈する。内部に土壙（**SK－10**）があり、規模は上端径22～35㎝、下端径12～15㎝、深さ13㎝を測り、形状は不整円形を呈する。

SK－11は**SK－09**の北側約80㎝のところから検出されたもので、上端径42～50㎝、下端径７㎝、深さ32㎝を測り、形状は不整円形を呈する。

埋土からは炭や貝殻と一緒に陶磁器類や瓦片が多く出土したことなどから、これらの土壙はゴミ

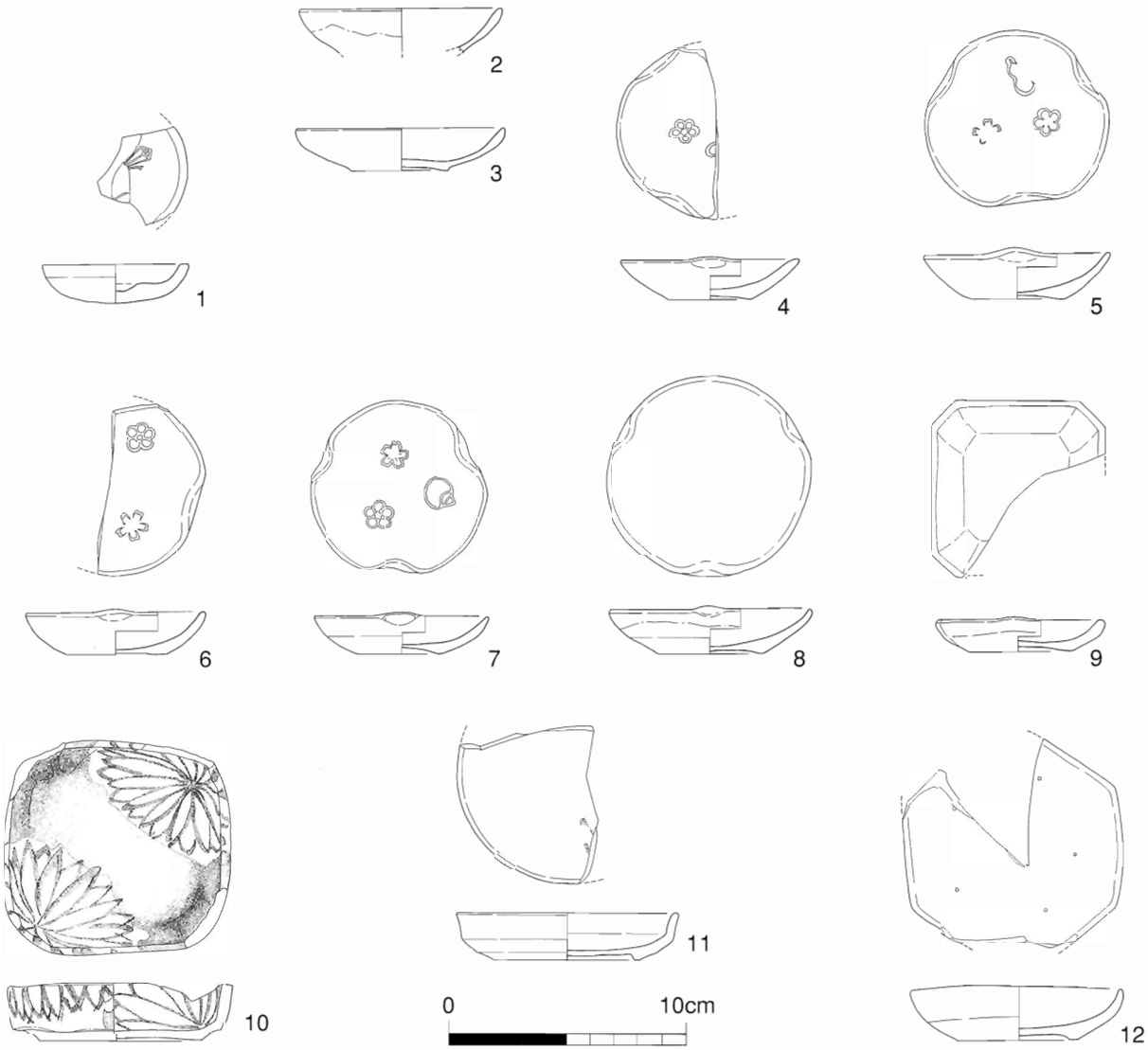
と一緒に陶磁器類や瓦を廃棄し焼却するための土壙と考えられる。出土した陶磁器類は近世末期から近代にかけてのものが多く、おそらくその時期に廃棄・焼却したと思われる。

① 遺物

ＳＸ－04から出土した遺物である。

Ａ．皿類（第60－１～12図・第61－13～20図、図版38－１～10）

1は土師質で、手づくね製の皿で、見込には剣のような模様が陰刻されている。**2**・**3**は陶器製の平形皿で、灯明皿と思われる。**4**～**8**は陶器製の平形皿で、口唇部が**3**ヵ所内側に押し込まれる形状である。**8**以外は見込に宝珠・梅花・桜花のいずれかが陰刻されている。**9**・**10**は陶器製の隅切方形皿で、**9**は高台がないため器高が低く、**10**は見込に鉄絵で菊花が描かれている。**13**～**18**は陶器製の腰折形皿で、腰の部分で折れて、口縁部が反り返る形状である。**19**は磁器製の変形染付皿で、**20**は磁器製の稜皿、見込には「壽」と型打ちされている。



第60図　SX－04（土器溜）出土遺物実測図(1)

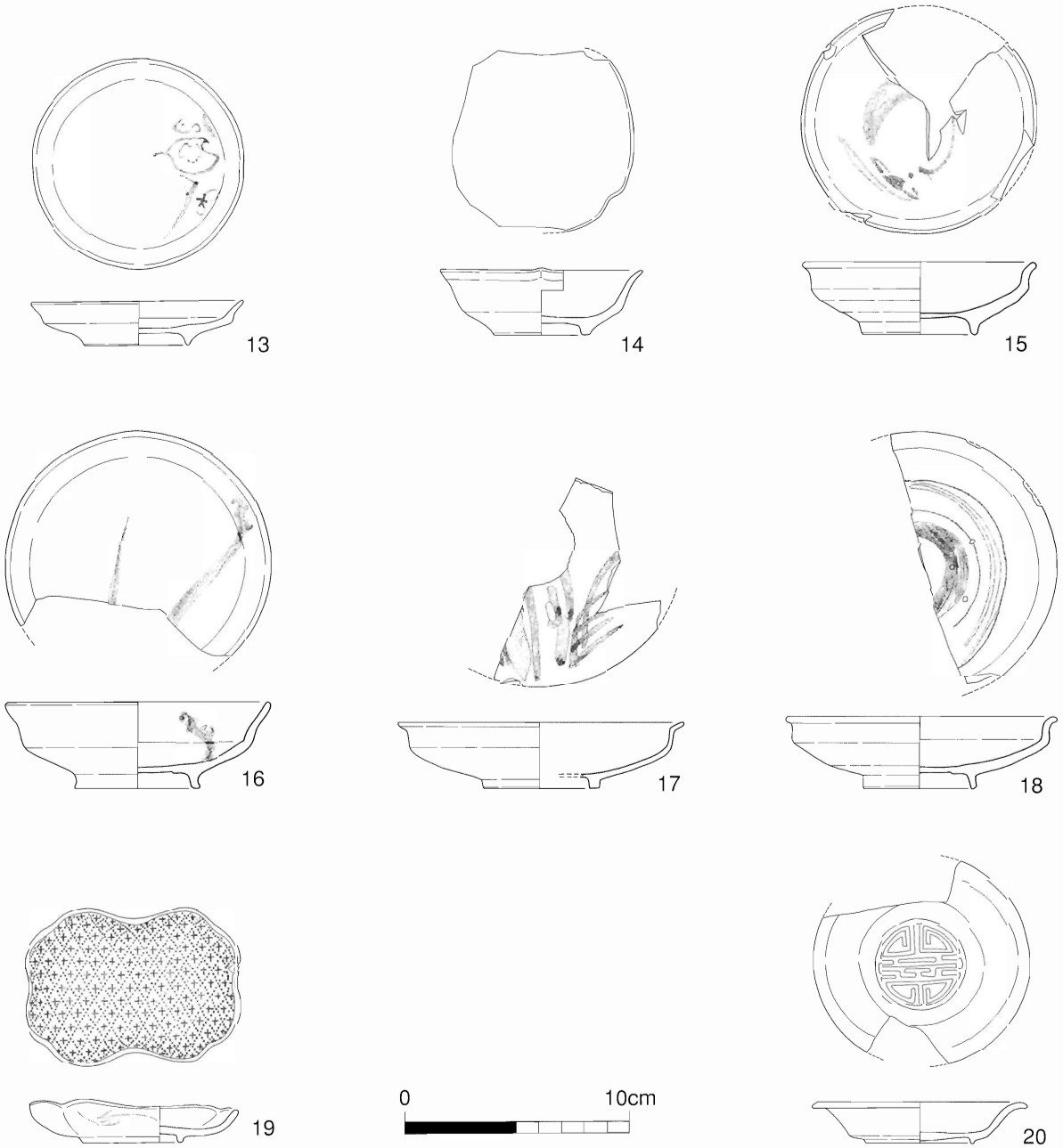
B．蓋類（第62－21～28図、第63－29・31・32図、図版39－１～９）

21・22は陶器製の土瓶用蓋である。**23・24**は陶器製の壺蓋で、**23**は底部に回転糸切痕はなく、つまみ部分は亀が装飾されている。**24**は底部に回転糸切痕を持ち、つまみ部分は何らかの装飾がされている。**25～28**は磁器製の碗用染付蓋で、**25～27**は呉須による染付、**28**はコバルトによる染付である。**29**は土師質の蓋で、火消し壺用の蓋と思われる。**31・32**は磁器製の段重用染付蓋で、**31**は**30**とセットになっており、**32**にはつまみが付いている。

C．段重（第63－30図、図版39－10）

磁器製の染付段重で、外側に青海波紋と花弁が描かれている。

D．皿類(2)（第64－33・34図、図版41－４・５）



第61図　SX－04（土器溜）出土遺物実測図(2)

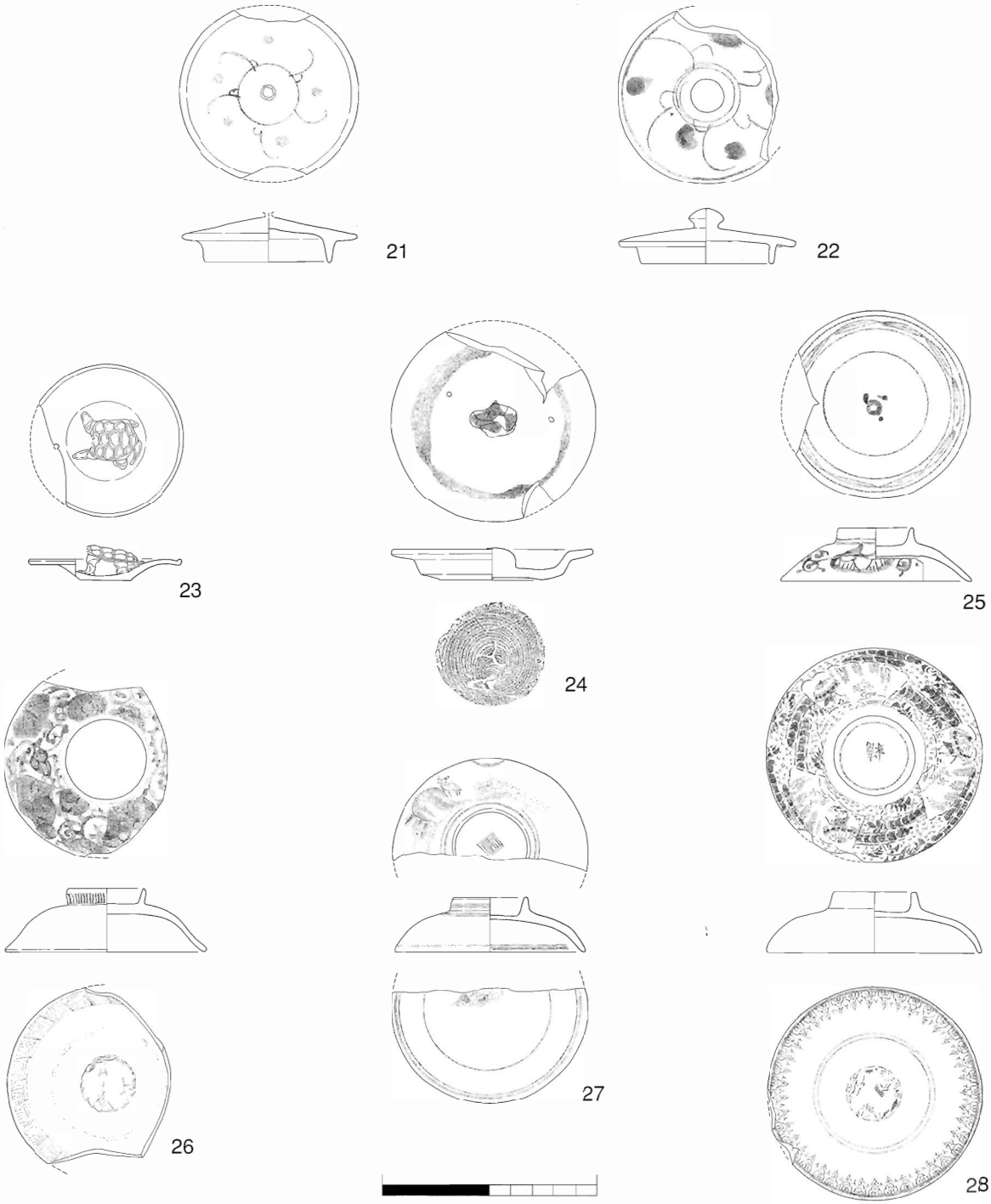
33は陶器製の折縁丸形中皿で、胴部で折れ曲がり、頸部がくびれる形状。**34**は磁器製の端反形染付中皿で、見込には海浜・内山が描かれている。

E．瓶（第64－35図、図版41－６）

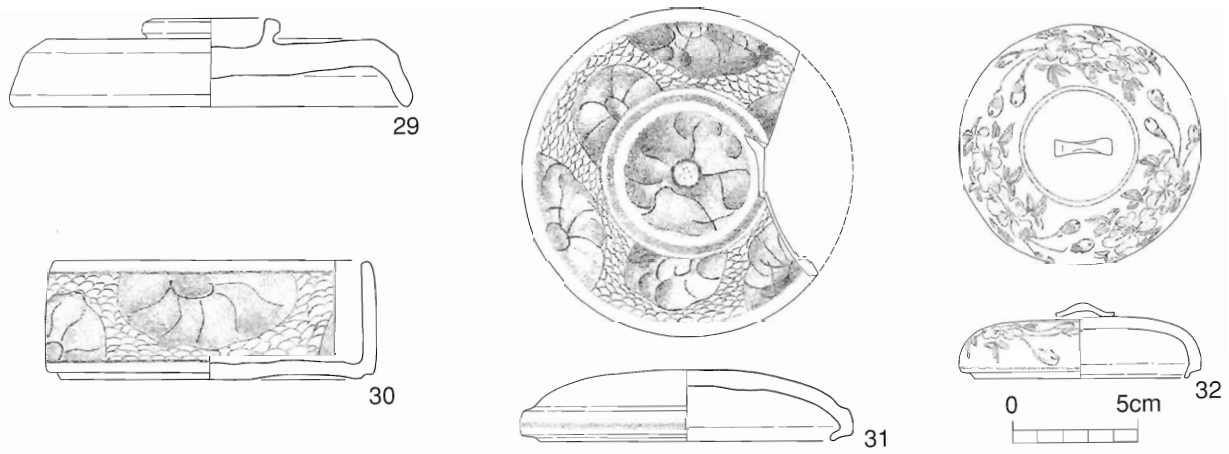
陶器製の肩張徳利で、高台脇に印判が押されている。

F．壺（第64－36図）

陶器製の胴丸形壺で、全面施釉されている。**43・50**に比べて大形である。



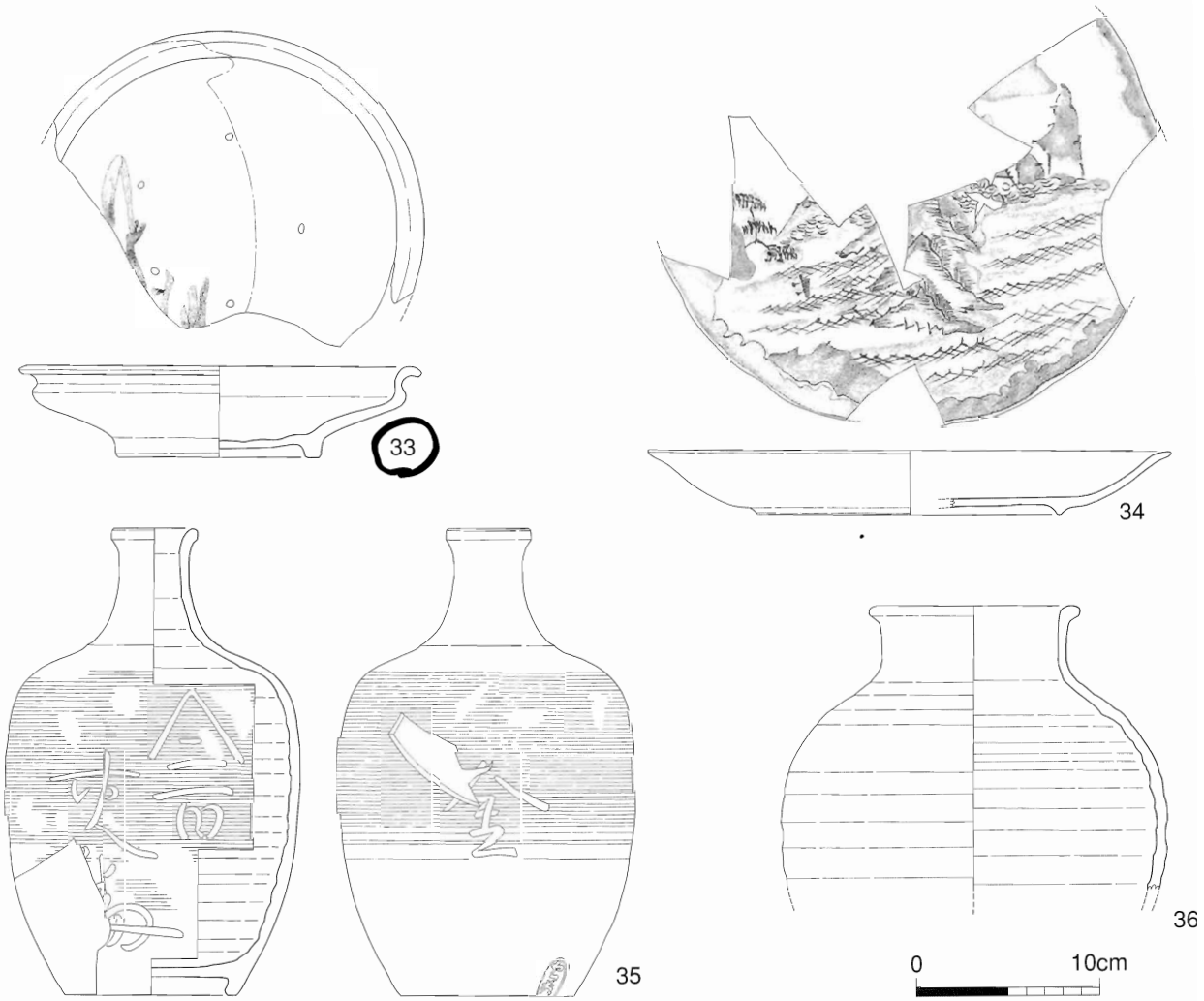
第62図　SX－04（土器溜）出土遺物実測図(3)



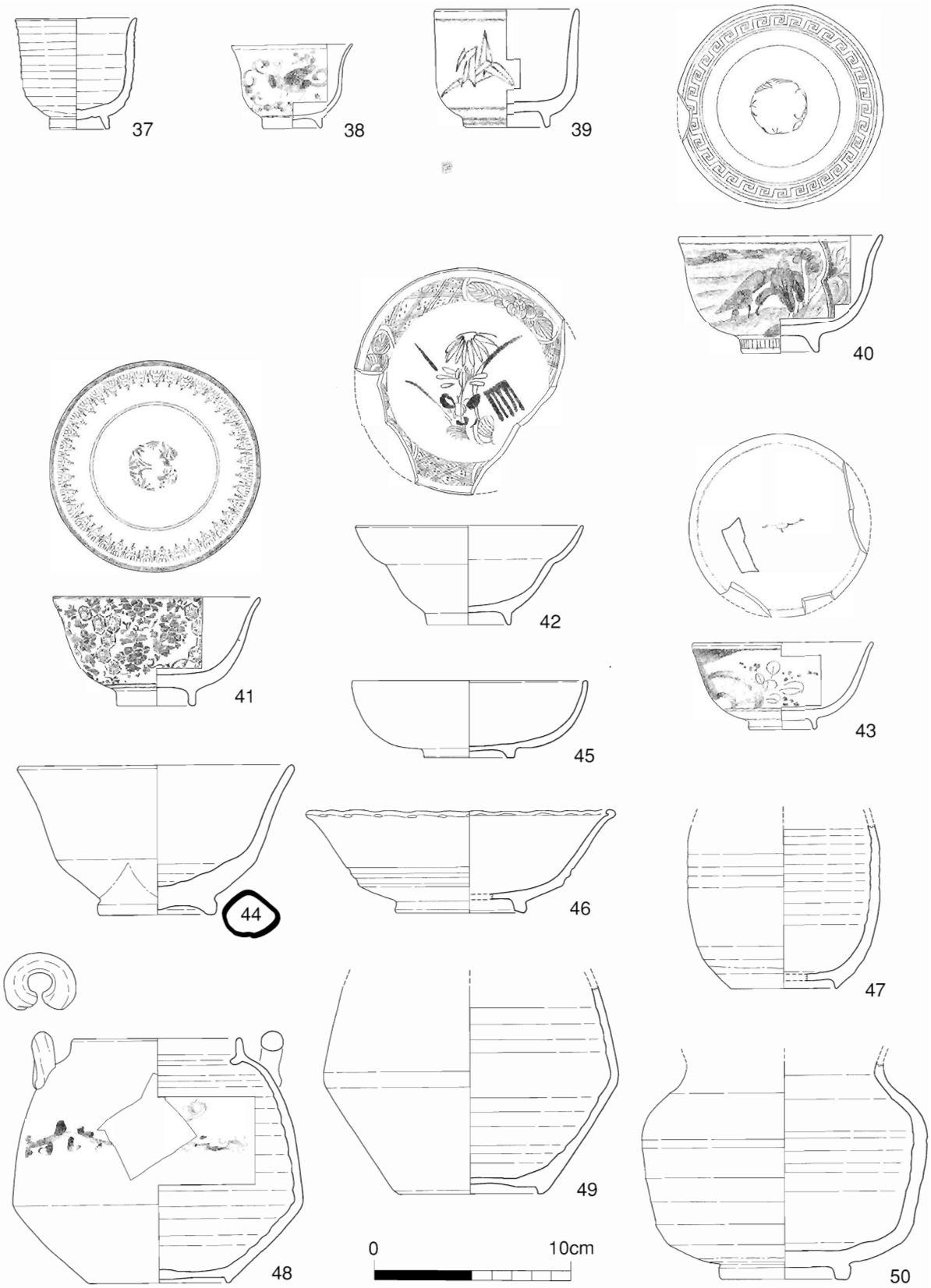
第63図　SX－04（土器溜）出土遺物実測図(4)

G．碗類（第65－37～46図、図版40－１～10）

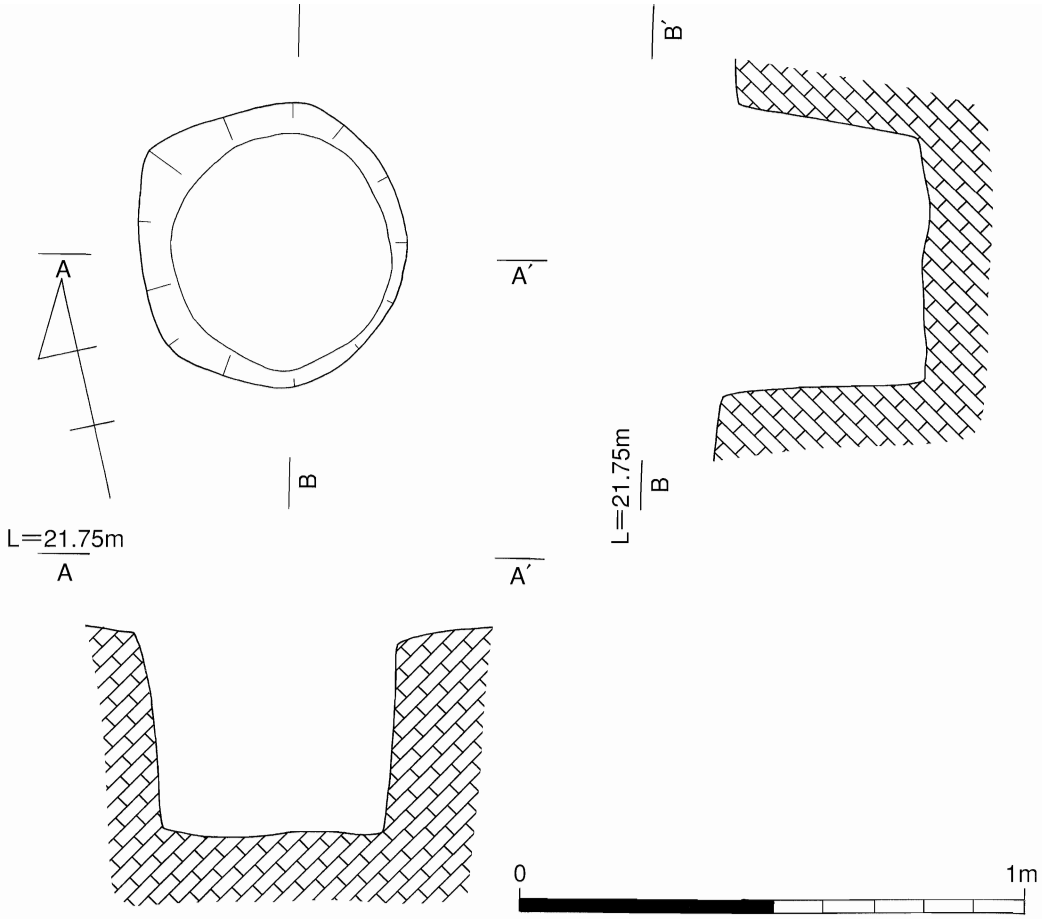
37は陶器製で、口縁部がわずかに反り返る筒丸形の碗である。**38**は磁器製の端反形染付小杯で、器壁は薄い。**39**は磁器製の筒丸形染付碗で、外面の折鶴が描かれている。湯飲み碗と思われる。



第64図　SX－04（土器溜）出土遺物実測図(5)



第65図　SX－04（土器溜）出土遺物実測図(6)



第66図　SK－06　実測図

40～42は磁器製の端反形染付碗で、**40**は呉須による染付、**41**はコバルトによる染付である。**42**は胴部で一度くびれる形状で、染付が焼成不良のためはがれている。**43**は端反形の絵付碗で、やや小形。**44**は陶器製の腰折形碗で、釉薬が胴部下の高台脇付近で山形状に掛け分けられている。**45**は陶器製の半球形碗で、焼成時に釉薬が気泡状になり、斑点になっている。**46**は陶器製の折縁端反碗で、口縁部が並上になっている。

H．壺（第64－47・50図、図版41－１）

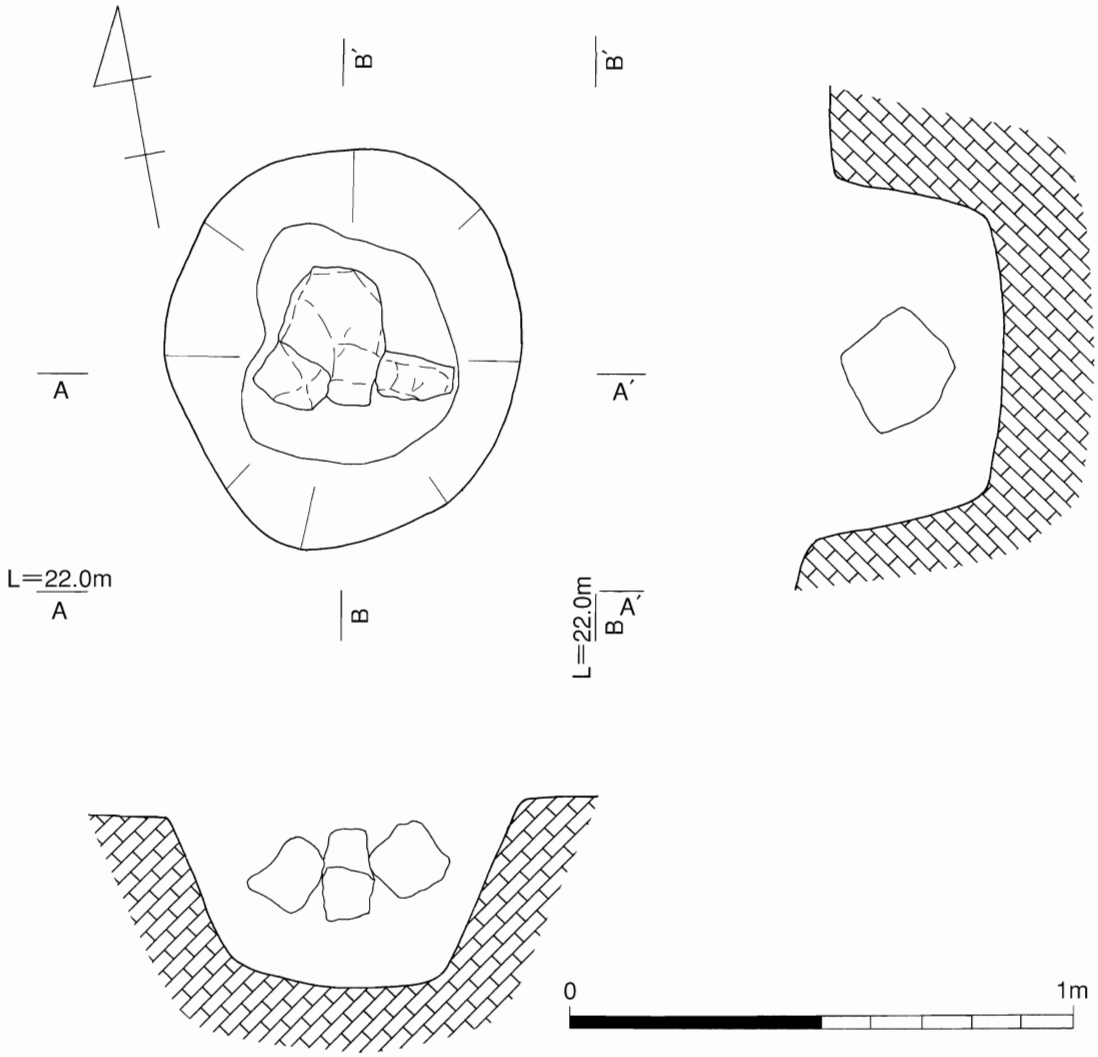
いずれも陶器製で、**47**は筒丸形、**50**は肩張形を呈し、全面施釉されている。

I．土瓶（第64－48・49図、図版41－２）

いずれも陶器製の茶釜形土瓶で、**48**は鉄絵で模様が描かれている。

(3) ＳＫ－05・06・07（第66・67図、図版９－１・２）

ＳＫ－05は調査区の東側にあり、規模は上端径51～55㎝、下端径42～48㎝、深さ40㎝を測る円形土壙である。**ＳＫ－06**は**ＳＫ－05**のやや北西に１ｍところに位置し、規模は上端径50～66㎝、下端径35㎝、深さ50㎝を測る不整円形の土壙である。**ＳＫ－07**は**ＳＫ－06**のほぼ真西３ｍのところに位置し、規模は上端径70～78㎝、下端径40～53㎝、深さ35㎝を測る円形土壙である。覆土内から15㎝前後の石が４点出土した。



第67図　SK－07　実測図

いずれの土壙も時期を判別する遺物は出土しなかったため、詳細については不明である。

（4）ＳＤ－02

ＳＫ－05の真南から平面形がＬ字状の溝状遺構が検出された。規模は長さが南北方向に３ｍ、東西方向1.5ｍ、幅が上端40～46㎝、下端10～30㎝、深さ７㎝を測る。遺物は出土しなかったため、時期や用途など詳細については不明である。

（5）ＳＸ－05・06

ＳＤ－02を挟んで東西両側に石列（西側：ＳＸ－05・東側：ＳＸ－06）が検出された。ＳＸ－05のＳＤ－02の西側、東西方向に伸びるもので、長さは４ｍを測る。使用されている石は加工痕のあるものや自然石とばらつきがあるが、意図的に並べられており石が約20㎝前後埋め込まれているものもあった。

ＳＸ－06はＳＤ－02の東側、南北方向に伸びるもので長さは約２ｍを測る。ＳＸ－05のように埋め込まれたものではないが、意図的に並べて置かれたものではないかと思われる。

2　北側２区

２区は１区の西隣に位置する。１区と同様約10ｍ四方の下段平坦面を持ち、その南側は緩やかな緩斜面となっている。西側には素掘りの直径90㎝、深さ5ｍ以上の井戸が確認されていた。

調査の結果、溝状遺構や石枠、土壙が検出された。

(1) ＳＤ－03

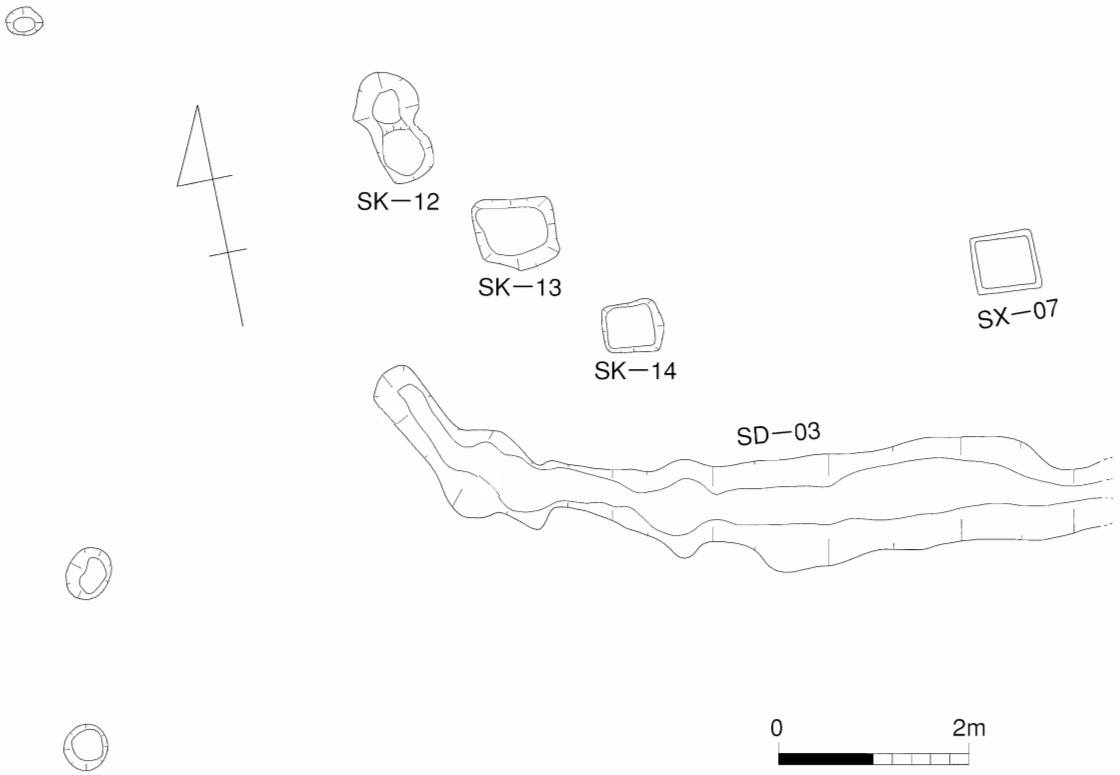
平坦面と緩斜面との境に東西方向に走る溝状遺構が確認された。規模は長さが約12.7ｍを測り、１区の西端で検出された溝上遺構の延長と思われる。幅は上端が60～120㎝、下端が20～60㎝、深さが10㎝を測る。平面形は西側で平坦面を囲むようにやや弧状を呈する。遺構内からは遺物は出土しなかったため時期については不明である。

(2) ＳＸ－07（図版11－３）

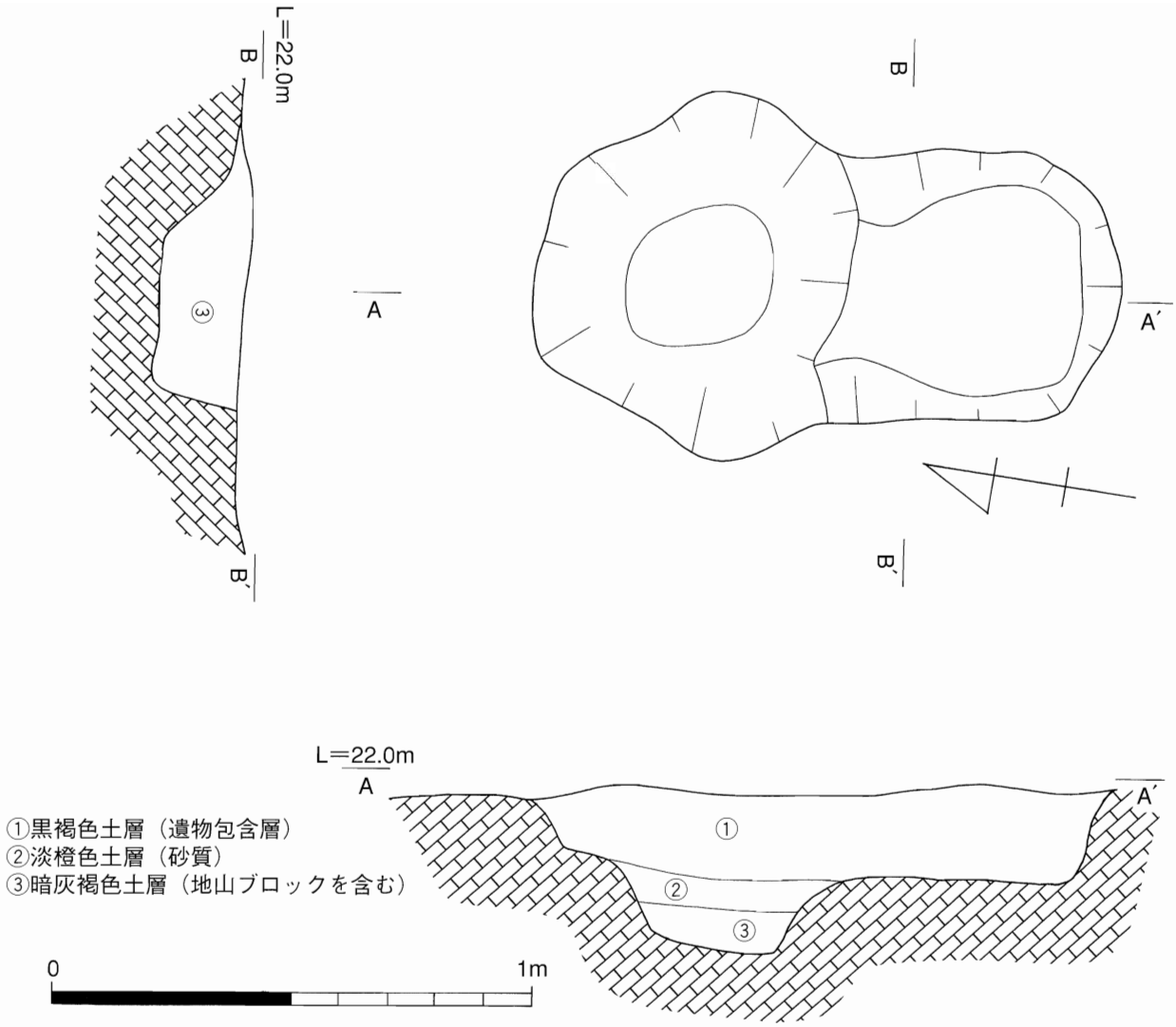
２区の東側から一部が埋もれていた状態で調査前から確認されていた。表土掘削後、石枠であることがわかった。規模は62×62×35㎝で厚さ６㎝を測り、石材を刳り貫いて作られている。内部の埋土から遺物は出土しなかったため時期は不明である。用途は水を溜める役割などが考えられる。

(3) ＳＫ－11（第69図、図版11－１）

２区の中央のやや西側から検出された土壙である。不整円形を呈した土壙と隅丸方形を呈した土壙が組み合わさったような形状である。不整円形側は上端径65～78㎝、下端径30㎝、深さは32㎝を測り、隅丸方形側は上端が55×60㎝、下端が42×48㎝、深さが20㎝を測る。断面形は２段掘りの形状を呈し、不整円形側がやや深くなっている。覆土１層から陶磁器類の破片が出土するが図化には至



第68図　北側２区下　遺構配置図



第69図　SK－12　実測図

らず、円形土壙は淡褐色の砂質土が覆土として入っていた。

(4) ＳＫ－12（図版70）

ＳＫ－11の南東に1.5ｍのところから検出された土壙で、規模は上端が75×90㎝、下端が40×75㎝、深さ10㎝前後を測り、底面は多少凹凸があるもののおおむね平らで、平面形は方形を呈する。覆土２層目から近世末頃の擂鉢の破片（第70図）が出土した。近世末の埋没した遺構と考えられる。

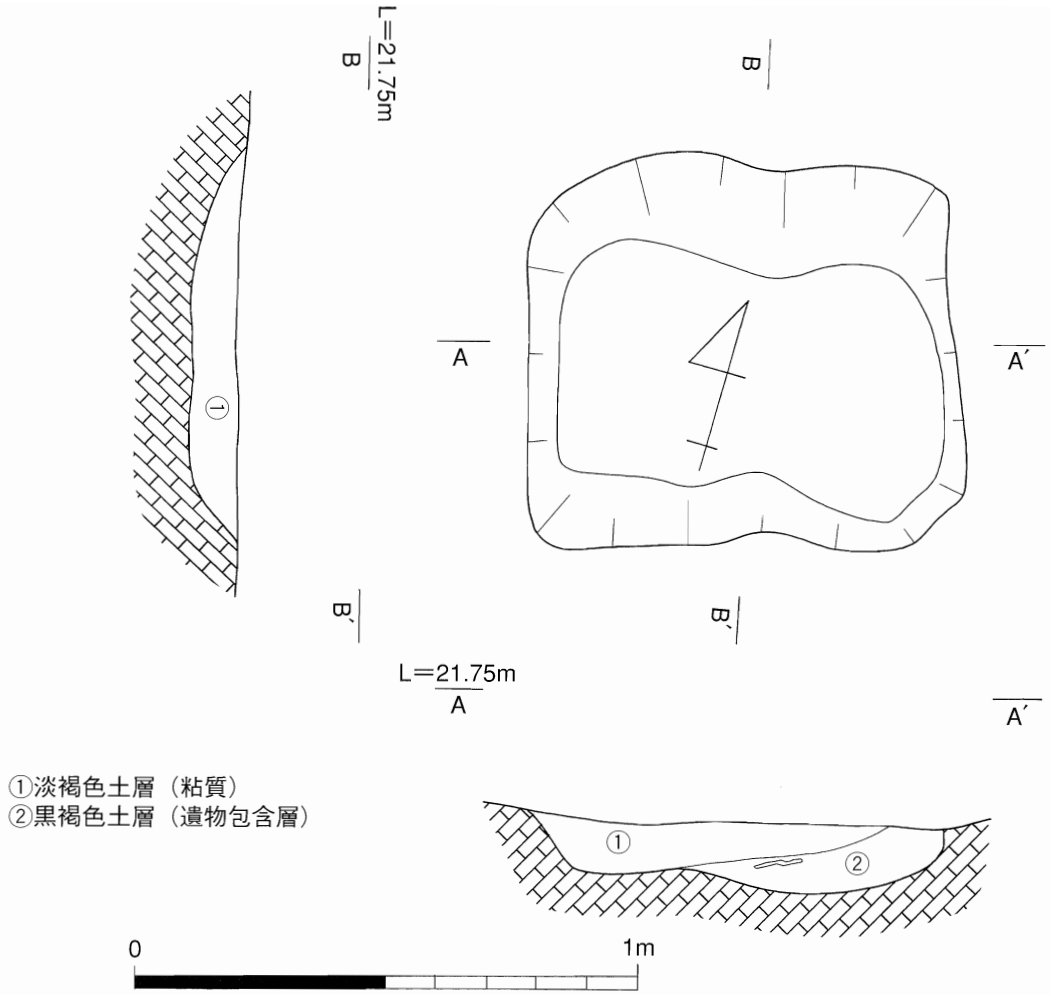
(5) ＳＫ－13（第72図、図版11－２）

ＳＫ－11の南東に1.5ｍのところから検出された土壙で規模は上端が51×66㎝、下端が38×49㎝、深さ32㎝を測り、平面形は方形を呈する。覆土は暗褐色土１層で、その覆土から遺物は出土しなかったため、時期や用途など詳細については不明である。

①　遺物

２区は１区と異なり、上段の平坦面から多く出土している。

Ａ．石器（第74－１図、図版42－１）



第70図　SK－13　実測図

凝灰岩製のスクレイパー。

B．皿類（第74－２～５・９・10図、図版42－２～４・８・９）

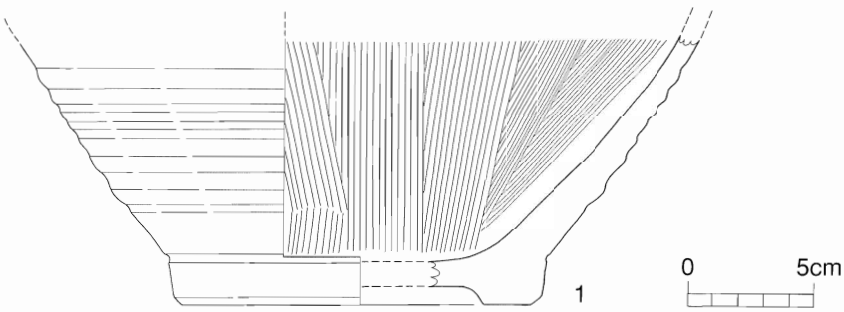
2 は土師質の平形皿で底部に回転糸切痕が残る。灯明皿と思われる。**3** は陶器製の平形皿で、口唇部を内側に折り曲げる形状である。**4・5** は陶器製の八角形皿である。**9** は磁器製の平形染付皿で、見込に蛇の目状の釉剥ぎ痕が残る。**10**は隅切方形皿で、見込には花弁、内側には斜格子文が描かれている。

C．鉢類（第74－６・７図、図版42－５・７）

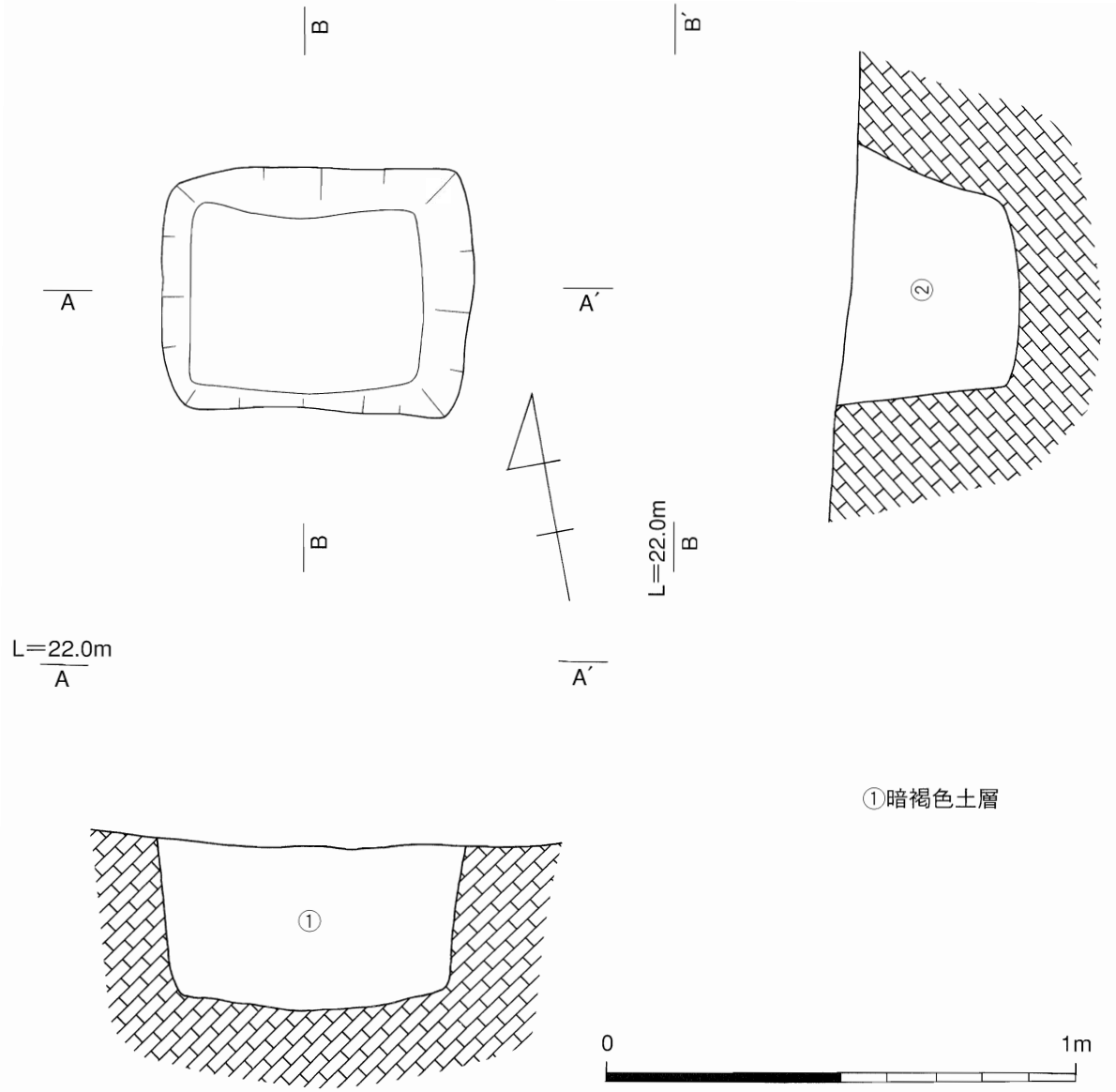
6 は陶器製の鉢で、外面の胴部下にケズリ痕が残る。**7** は陶器製の片口鉢。

D．蓋類（第74－８図、図版42－６）

磁器製の段重染付蓋。つまみがついてあり、外面に吉祥字が書かれている。



第71図　SK－13　出土遺物実測図



第72図　SK－14　実測図

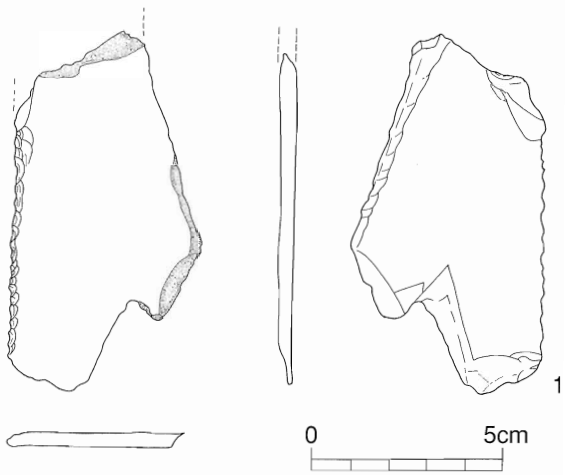
以下は重機による表土掘削中にかたまって出土した陶磁器類の代表的なものである。

A．ミニチュア製品（第75－１・２図、図版43－１・２）

いずれも陶器製。**1** は羽釜の蓋で、全面施釉され、**2** は内面と外面口縁部付近に施釉されている。供膳用もしくは玩具用と思われる。

B．碗類（第75－３図、図版43－３）

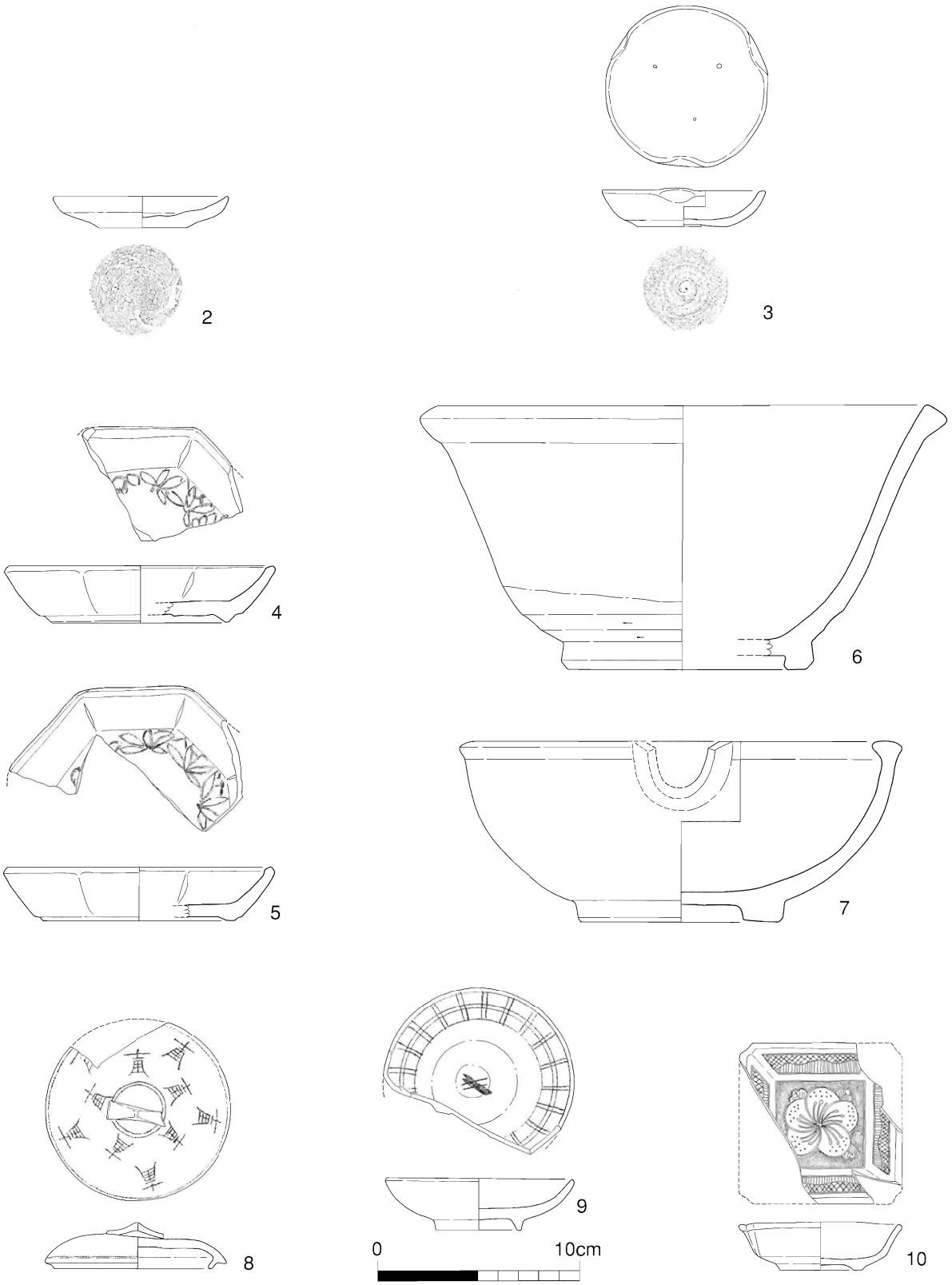
陶器製の湯飲み碗。口縁部が玉縁状になっている。



第73図　北側２区上　出土遺物実測図(1)

C．仏飯器（第75－４図、図版43－３）

磁器製の染付仏飯器。外面には菊花が描かれている。



第74図　北側２区上　出土遺物実測図(2)

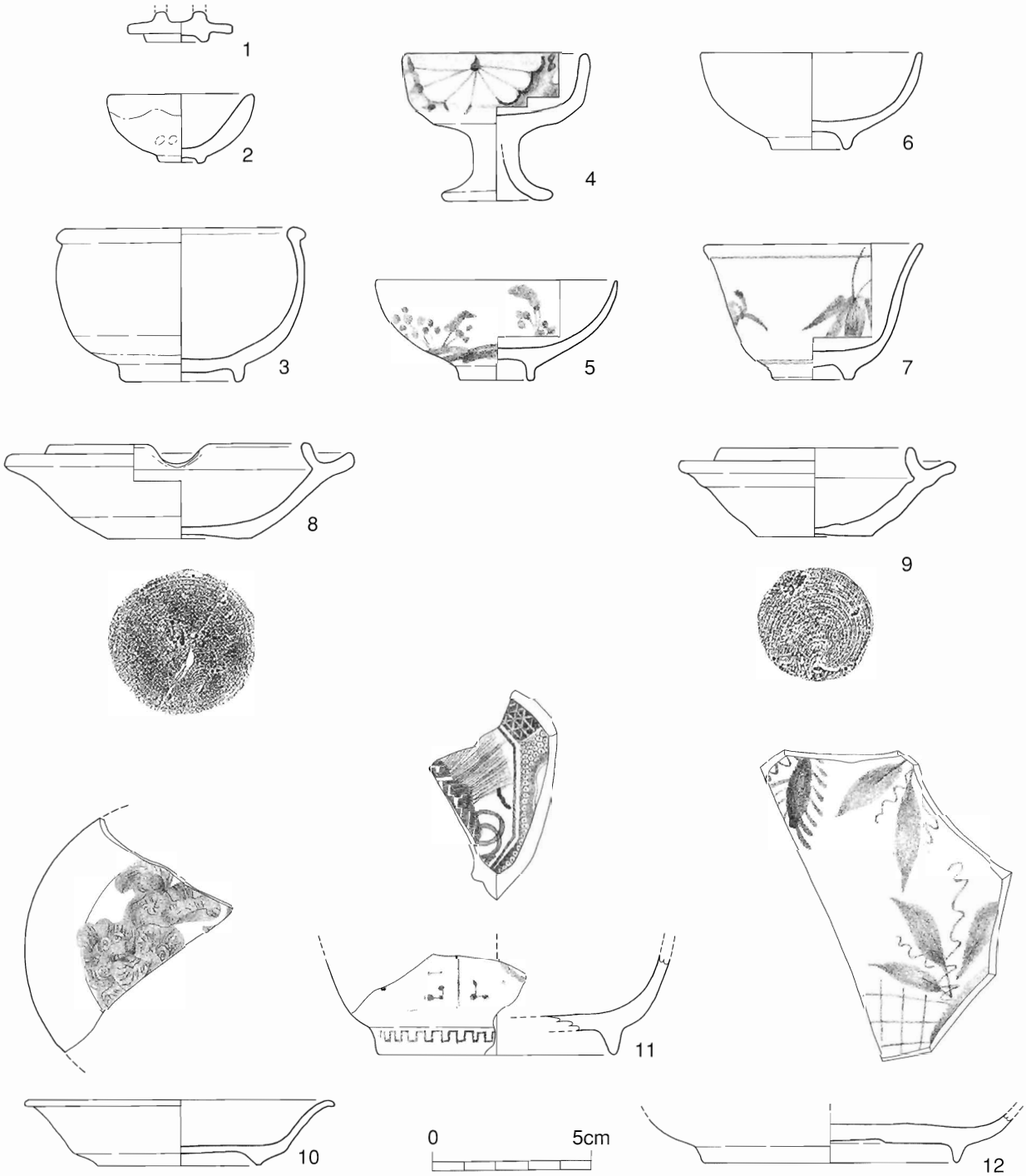
D．坏類（第75－５～７、図版43－４～６）

いずれも磁器製。**5**は平形白磁小杯、**6**は平形染付小杯、**7**は端反形染付小杯。

E．皿類（第75－８～12図、図版43－８～12）

8・9は陶器製の受皿付灯明皿で、底部に回転糸切痕を持つ。**10～12**は磁器製。**10**は端反形の稜皿で、見込に獅子が描かれている。**11・12**は高台がつく形状で、**12**の底部は蛇の目凹形を呈する。

F．蓋類（第76－13～18、図版44－１～５）



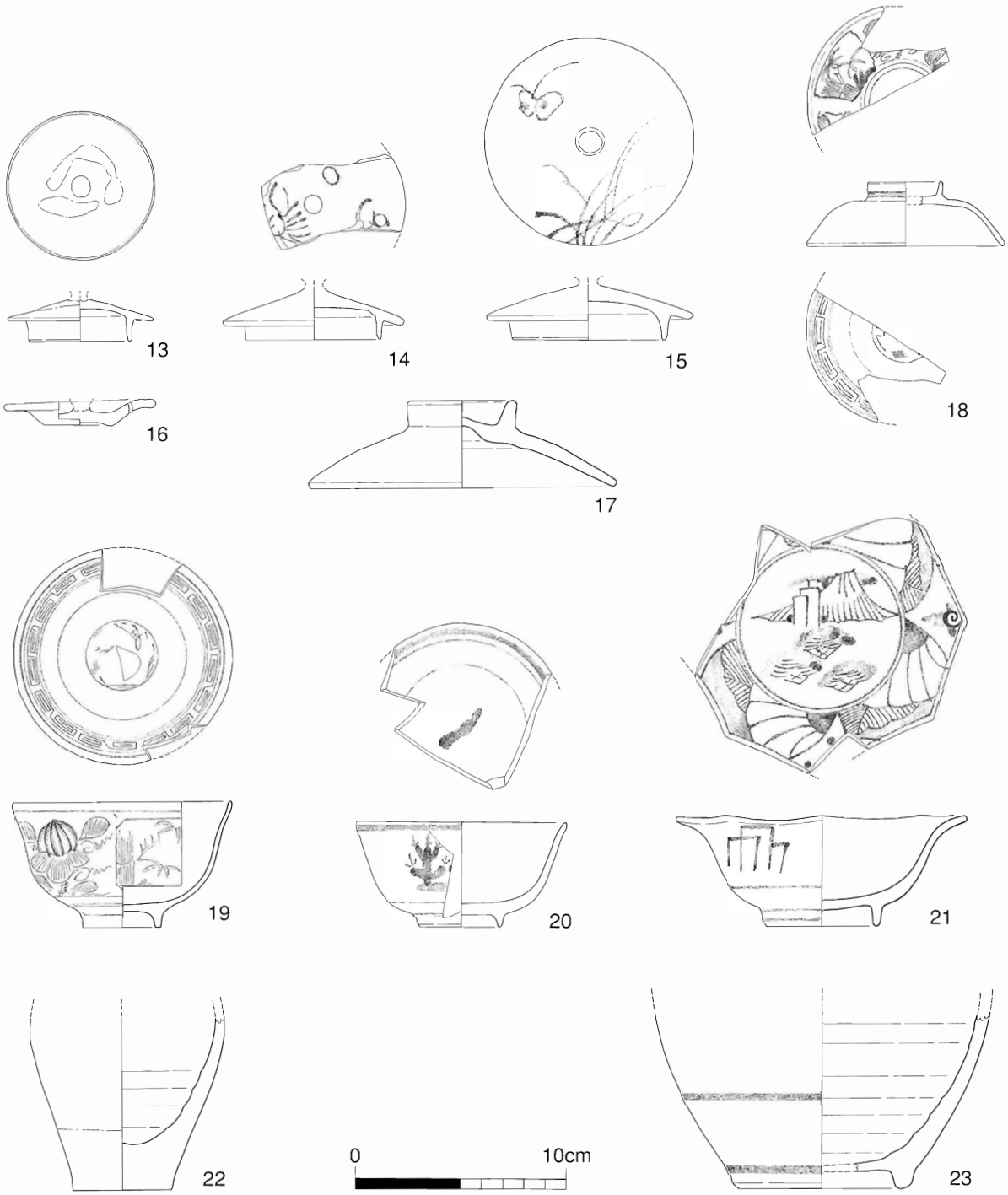
第75図　北側２区上　土器溜出土遺物実測図(1)

13〜15は陶器製の土瓶用蓋。**16**は陶器製の壺蓋で、内側に１つ通気孔のような孔があいている。**17**は陶器製の行平蓋である。**18**は磁器製の碗用染付蓋である。

G．碗　類（第76－19〜21図、図版44－６〜８）

19・20は磁器製の端反形染付碗。**21**は端反形輪花染付碗。

H．壺（第76－22・23図、図版44－９・10）



第76図　北側２区上　土器溜出土遺物実測図(2)

22は陶器製、塗土されている。23は磁器製。

Ⅰ．石製品（第77－24・25図、図版44－11）

24は凝灰岩製の砥石。25は流紋岩質凝灰岩製の硯。

3　北側３区

３区は南北方向にトレンチを３本設定して調査を行った。しかしながら遺構の検出にはいたらず、遺物は表面採集や１層目から陶磁器類の破片や土器片が出土した。

①　遺物

Ａ．石製品（第78－１図、第45－８）

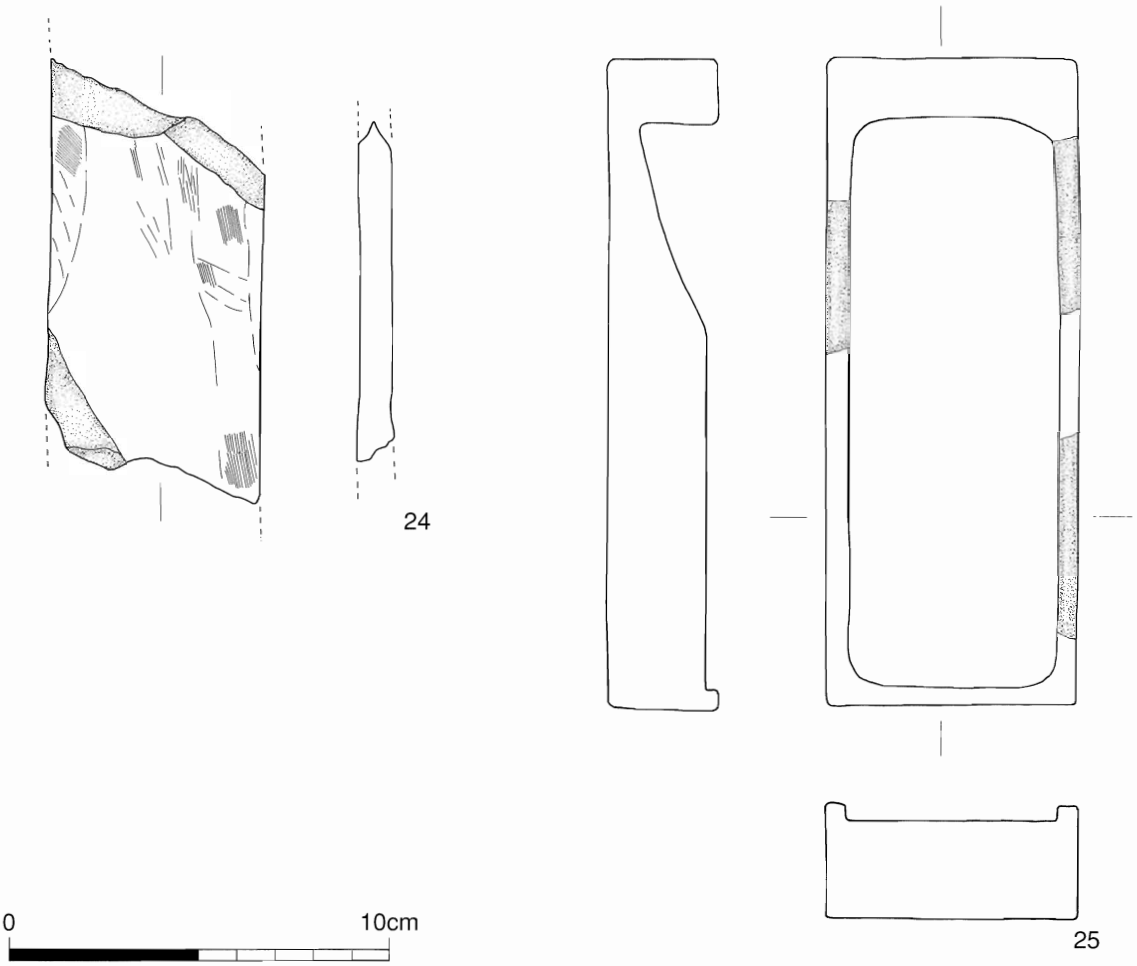
凝灰岩質頁岩製の硯。

Ｂ．皿（第79－２図、図版45－２）

陶器製の受皿付灯明皿。底部に回転糸切痕を持つ。

Ｃ．蓋（第79－３図、図版45－１）

陶器製の土瓶用蓋。



第77図　北側２区上　土器溜出土遺物実測図(3)

D．碗（第79－４図、図版45－３）

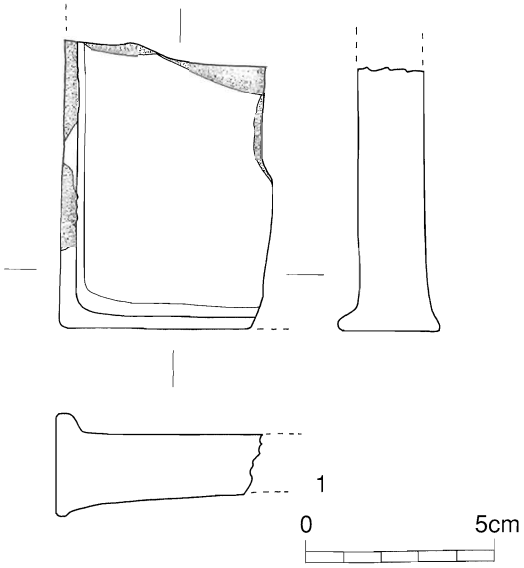
陶器製の丸形碗

E．壺（第79－５図、図版45－４）

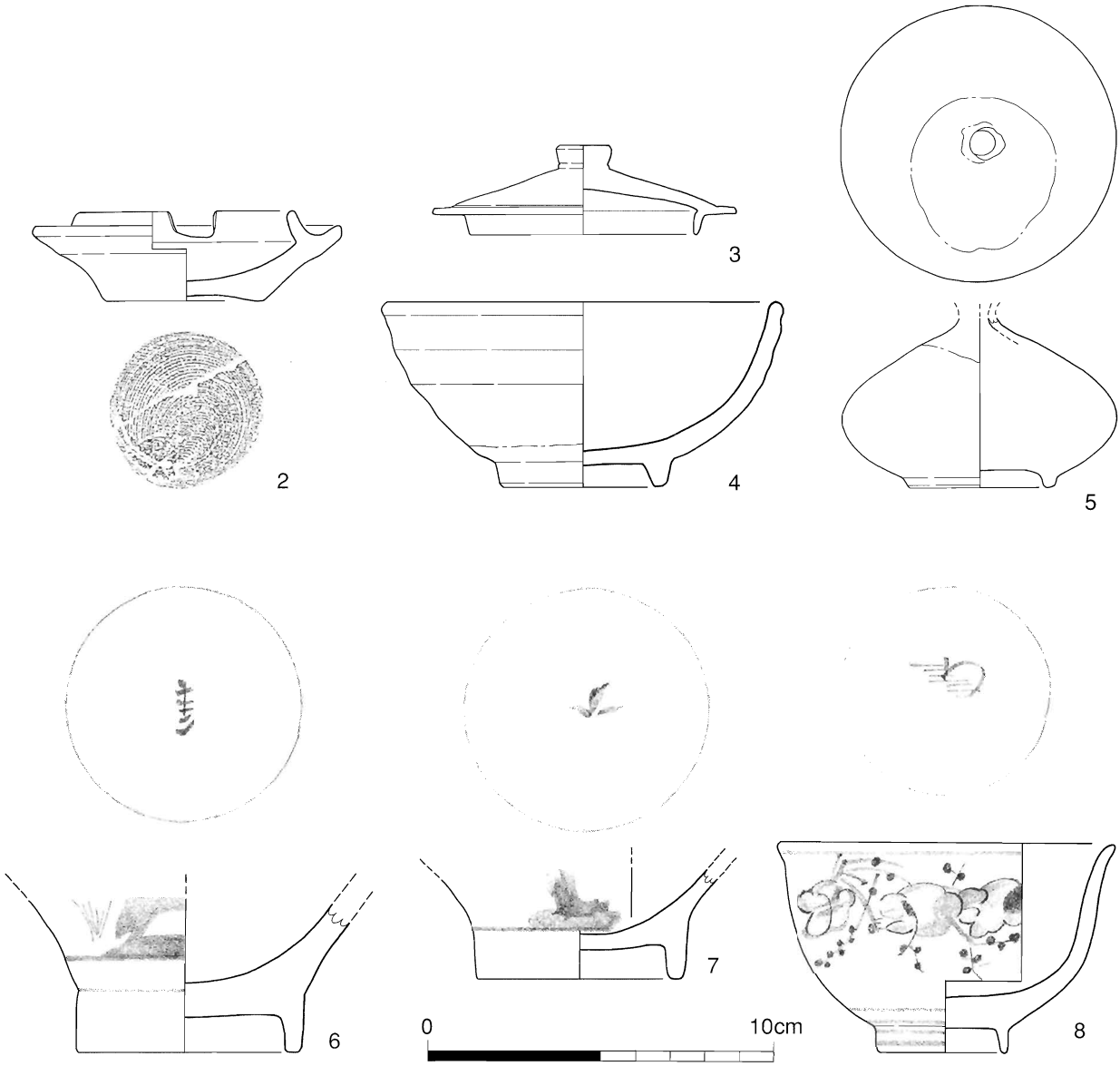
陶器製の胴丸壺。油壺、鬢付け油用と思われる。

F．碗　類（第79－６～８図、図版45－５～７）

いずれも磁器製。**6** は底部に厚みがあり、高い高台持つ「広東碗」と呼ばれるものである。**8** は端反形染付碗である。



第78図　北側３区　出土遺物実測図(1)



第79図　北側３区　出土遺物実測図(2)

4　頂上部調査区

本調査区は東西70ｍ、南北20ｍの範囲に19本のトレンチを設定して遺構の確認調査を行った。地形は緩斜面で東側に伸び、表面観察の段階でいくつかの加工段の痕跡が認められた。そこで調査区を頂上部の東側と中央部とに分けて調査を行った。

調査の結果、頂上部東側から加工段が３つ（ＳＸ－08～10）と溝状遺構が３つ（ＳＤ－04～06）、土壙が３基（ＳＫ－14～17）確認された。頂上部中央に関しては西端がすでに畑などの耕作によって撹乱を受けており、中心部も表土直下地山であり陶磁器類の破片は出土するものの遺構の確認にはいたらなかった。

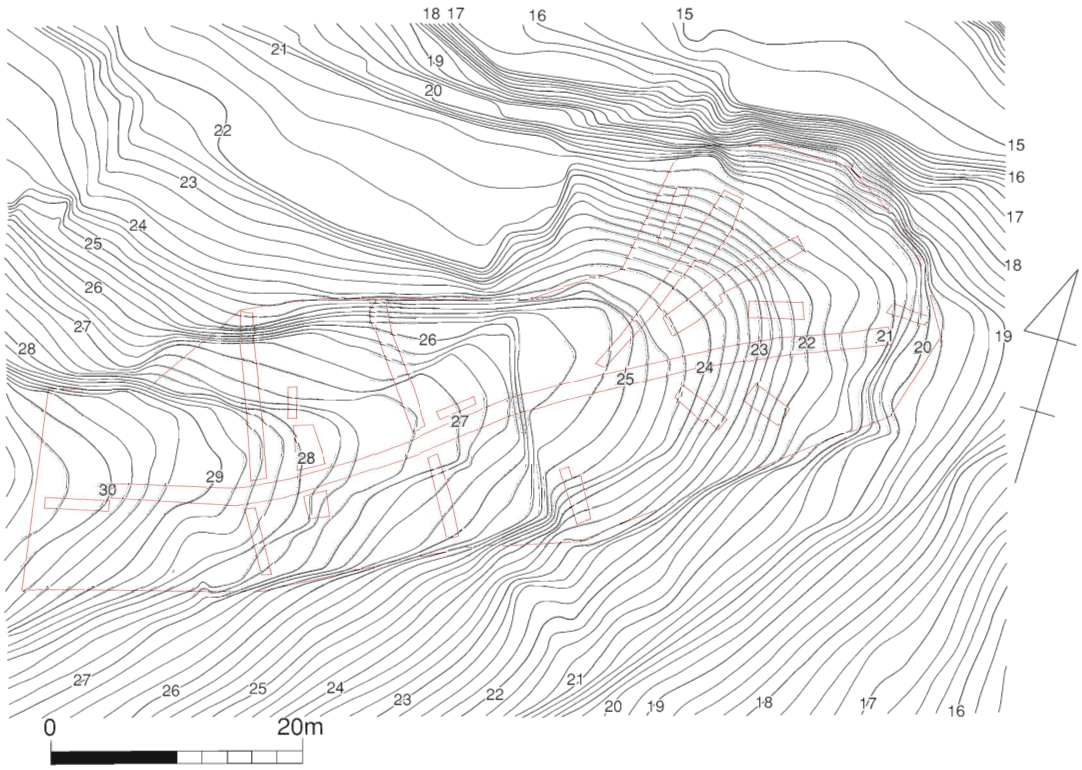
（1）ＳＤ－04・05・06（第82図）

いずれも調査区の南側から検出された溝上遺構で、上下の加工段（ＳＸ－09・10）の間に位置する。これらの溝はＳＸ－09に沿うように北西方向から南西方向に走る。

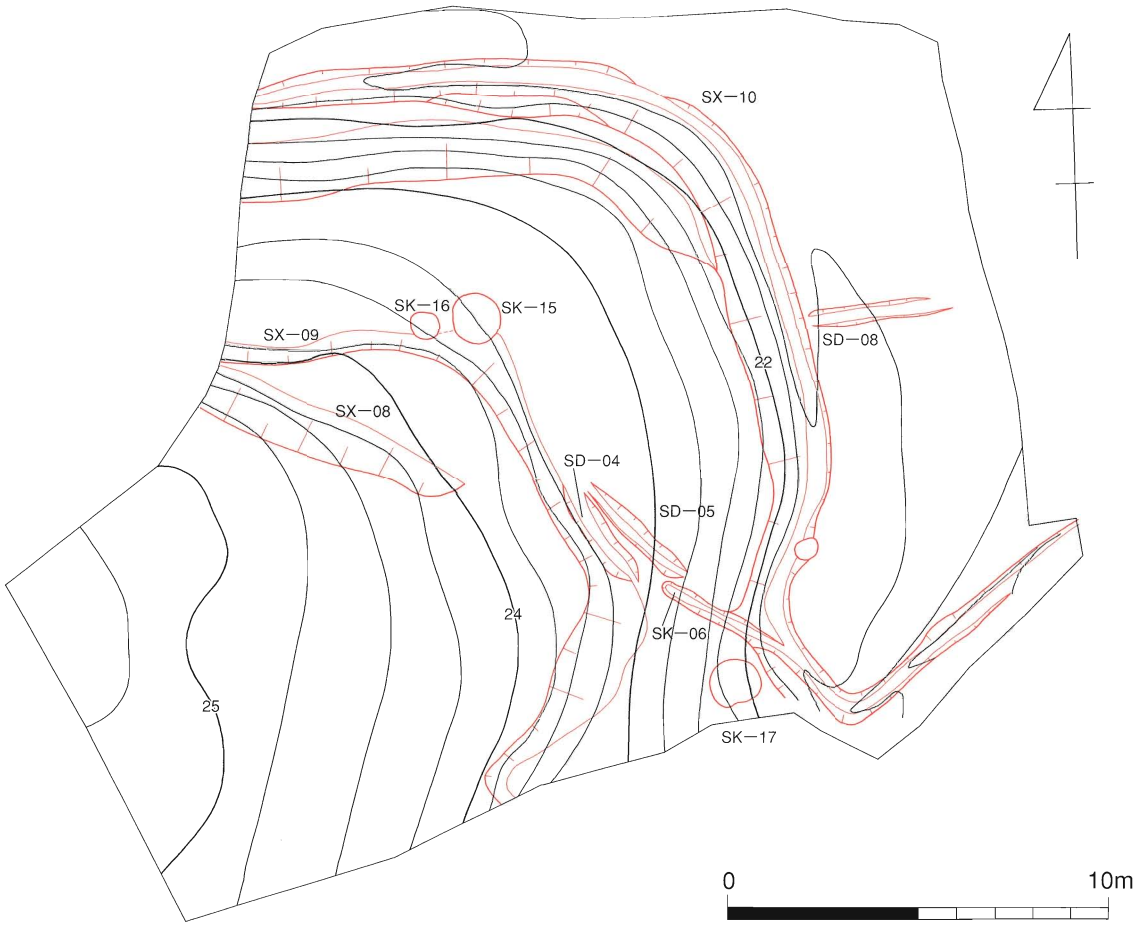
ＳＤ－04の規模は長さが３ｍ、上端幅が１ｍ、下端幅が30㎝、深さが５㎝を測り、ＳＤ－05は規模が長さ3.4ｍ、上端幅が60㎝、下端幅が20㎝、深さが５㎝を測る。

双方とも平面形は直線形を呈している。２つの遺構内からは遺物が出土しなかったため時期や新旧関係などの詳細はわからない。また位置的なことや機能的なことに関しても検討を要するが、次のＳＸ－10につながる溝（ＳＤ－06）とともに関連があると思われる。

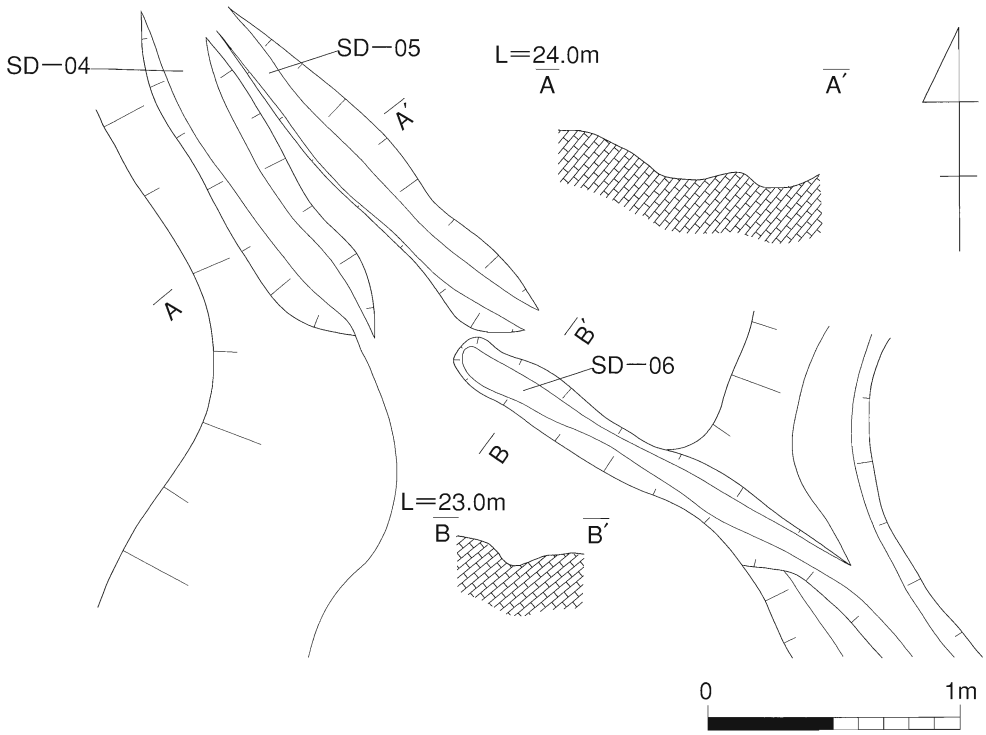
ＳＤ－06はＳＤ－04・05の南側に位置する溝状遺構で、長さ３ｍ、上端幅が50㎝、下端幅が30㎝、深さ５㎝を測り、平面形は直線形を呈する。機能・用途についてはＳＤ－04・05とともに上下の加工段（ＳＸ－09・10）をつなぐ役目があったのではないかと思われる。



第80図　頂上部調査区　調査前地形測量図及びトレンチ設定図



第81図　頂上部調査区　東側遺構配置図



第82図　SD−04・05・06　実測図

(2) ＳＸ－08（第83図）

ＳＸ－08は頂上部東側の西端から検出された加工段で７ｍ以上（西側は廃土置き場にしていたためそれ以上の確認は出来なかった）、高低差は40㎝を測り、北向きに幅２ｍの平坦面が４ｍ程確認できたが、西側に行くに従って平坦面の狭くなりおそらくはＳＸ－09と西側でつながるものと思われる。覆土からは遺物は出土しなかったため時期などの詳細については不明である。

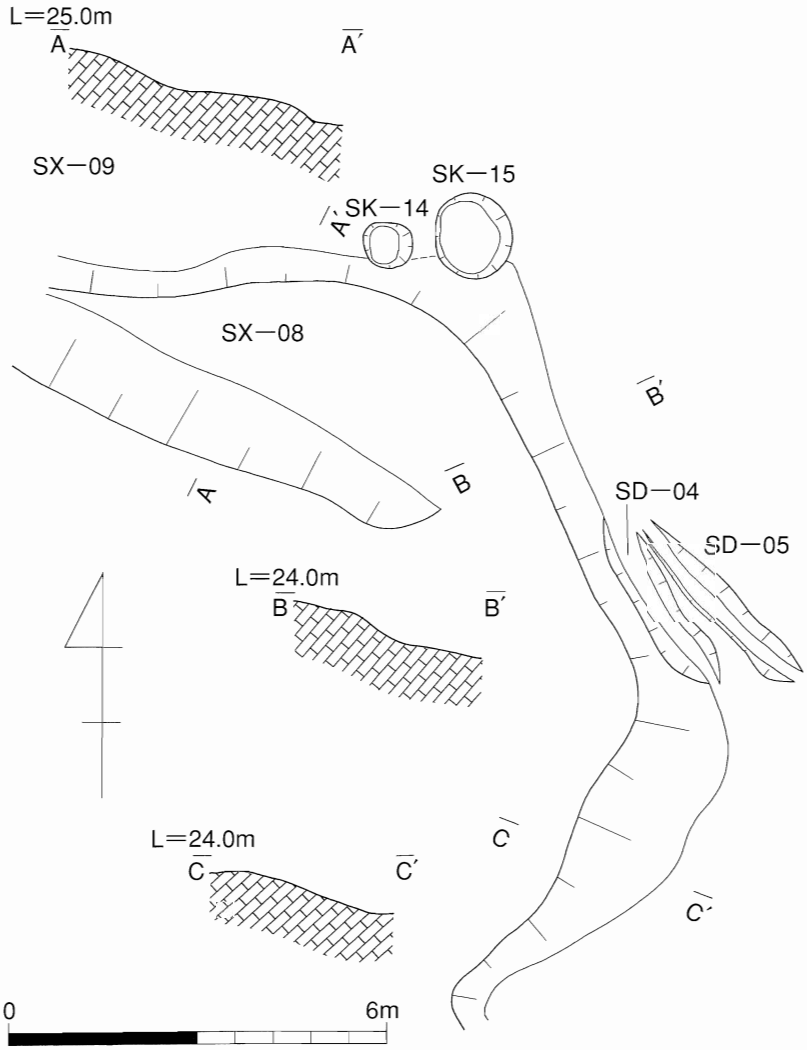
(3) ＳＸ－09（第83図）

ＳＸ－09はＳＸ－08より一段下がったところから検出された加工段で、尾根の等高線に沿うように確認された。平面形は東向きに孤を描くような形状で、規模は長さが24ｍ以上あり、高低差は40㎝を測り、北側・東側では最大で幅約3.5ｍの平坦面が確認できたが、南側に回り込むにつれて平坦面の幅が狭くなり最小で１ｍ未満のところもあった。

(4) ＳＸ－10（第84図、図版16）

ＳＸ－09のさらに一段下がったところから検出された加工段である。一部では２段になっているところもあるが、溝を伴う加工段である。溝は等高線に沿った形で確認された。幅30㎝、深さ８㎝を測る。一部上端で肩部がなくなるところも見られるが、南側で北東方向に向きを変え、平坦面を囲むような形状になっている。規模は長さが32ｍ以上あり、幅30㎝、深さ８㎝を測り、北側では幅約１ｍ、東側では幅約５ｍの平坦面が確認できた。

覆土中から近世末の陶磁器類の破片や土製品が出土している。これらの加工段が造られた時期はわからないが、埋没した時期は近世末期になってからだと思われる。



第83図　SX－08・09　実測図

(5) ＳＤ－08

ＳＤ－08はＳＸ－10の平坦面の中央から検出された溝である。規模は長さが４ｍ、上端幅50㎝、下端幅20㎝、深さ

が５㎝を測り、平面形はまっすぐに伸びている形を呈している。遺物が出土しなかったため詳細については不明である。

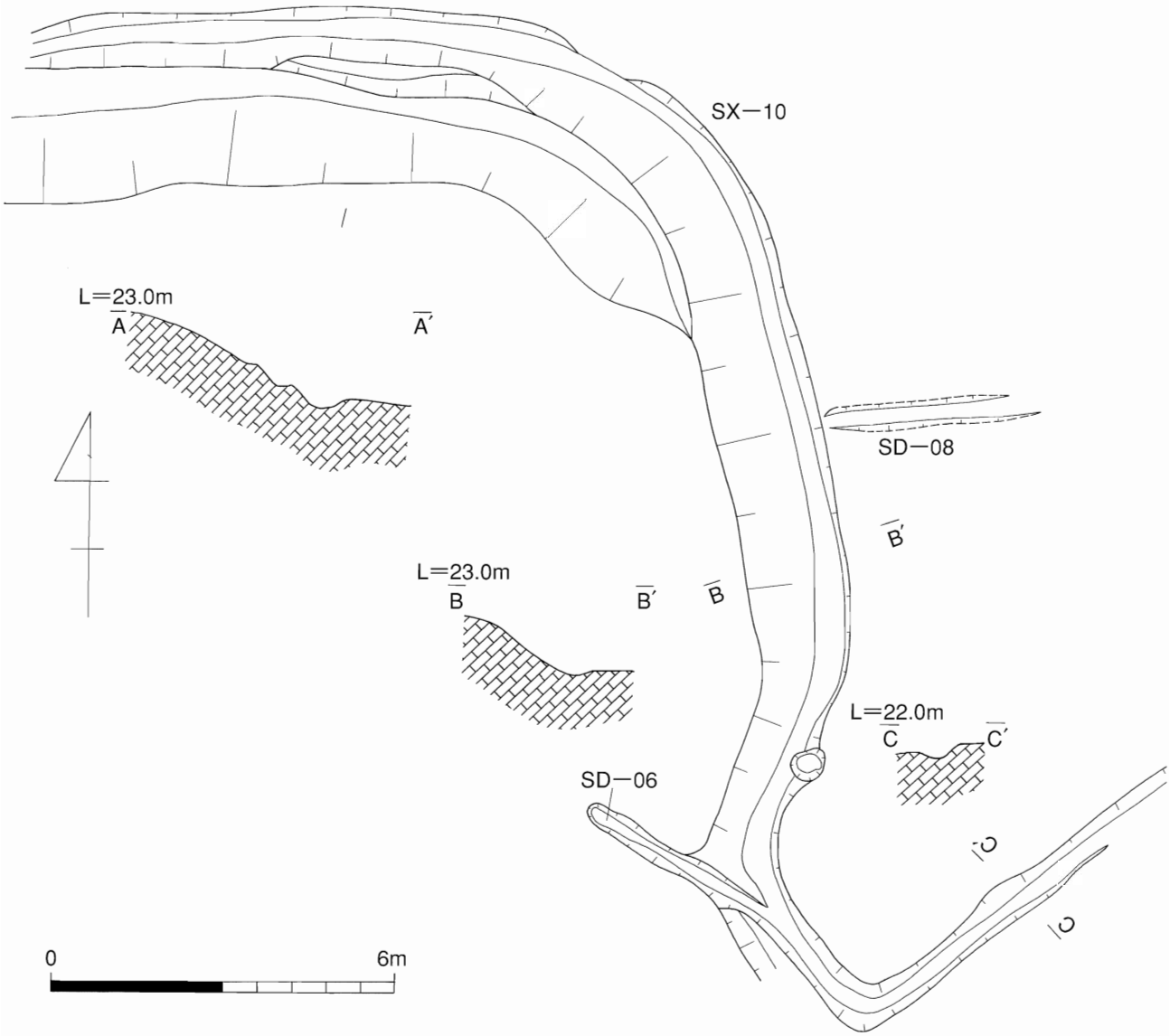
ＳＸ－09・10の間の平坦面からは土壙が３基検出された。

（6）ＳＫ－14（第85図、図版14－１）

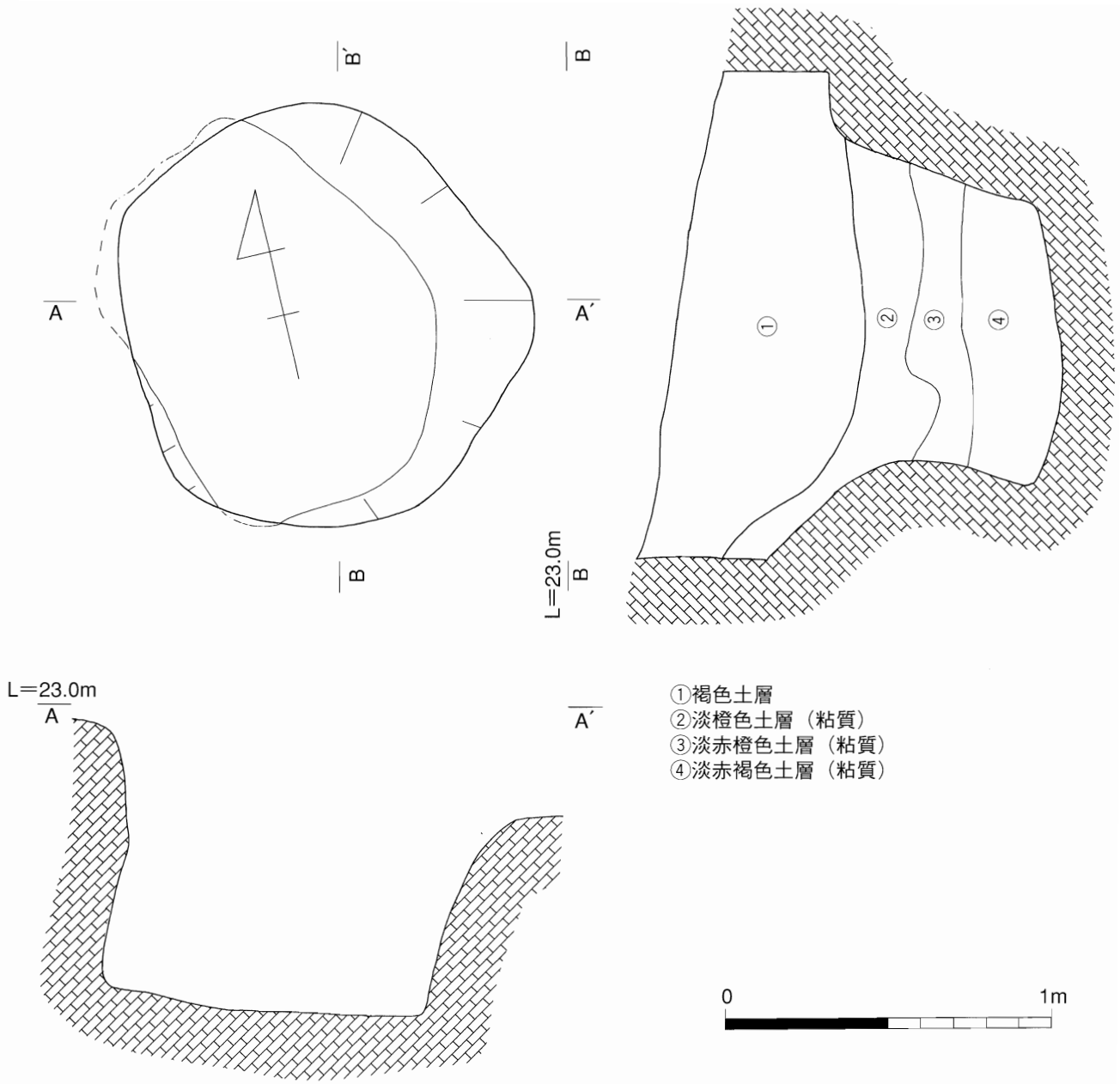
ＳＫ－14は西側から検出された土壙である。平面形は不整円形で、規模は上端径が130㎝、下端径が100～124㎝、深さが61㎝を測る。覆土は３層からなり粘質で比較的固く締まった土が堆積していた。遺物が出土しなかったため時期や用途など詳細については不明である。

（7）ＳＫ－15（第86図、図版14－２）

ＳＫ－15は**ＳＫ－14**に東隣、**ＳＸ－09**の北側から下端に重なるように検出された土壙である。平面形は隅丸方形で、規模は上端が69～79㎝、下端が40～55㎝、深さが21㎝を測る。覆土は３層から



第84図　SX－10　実測図



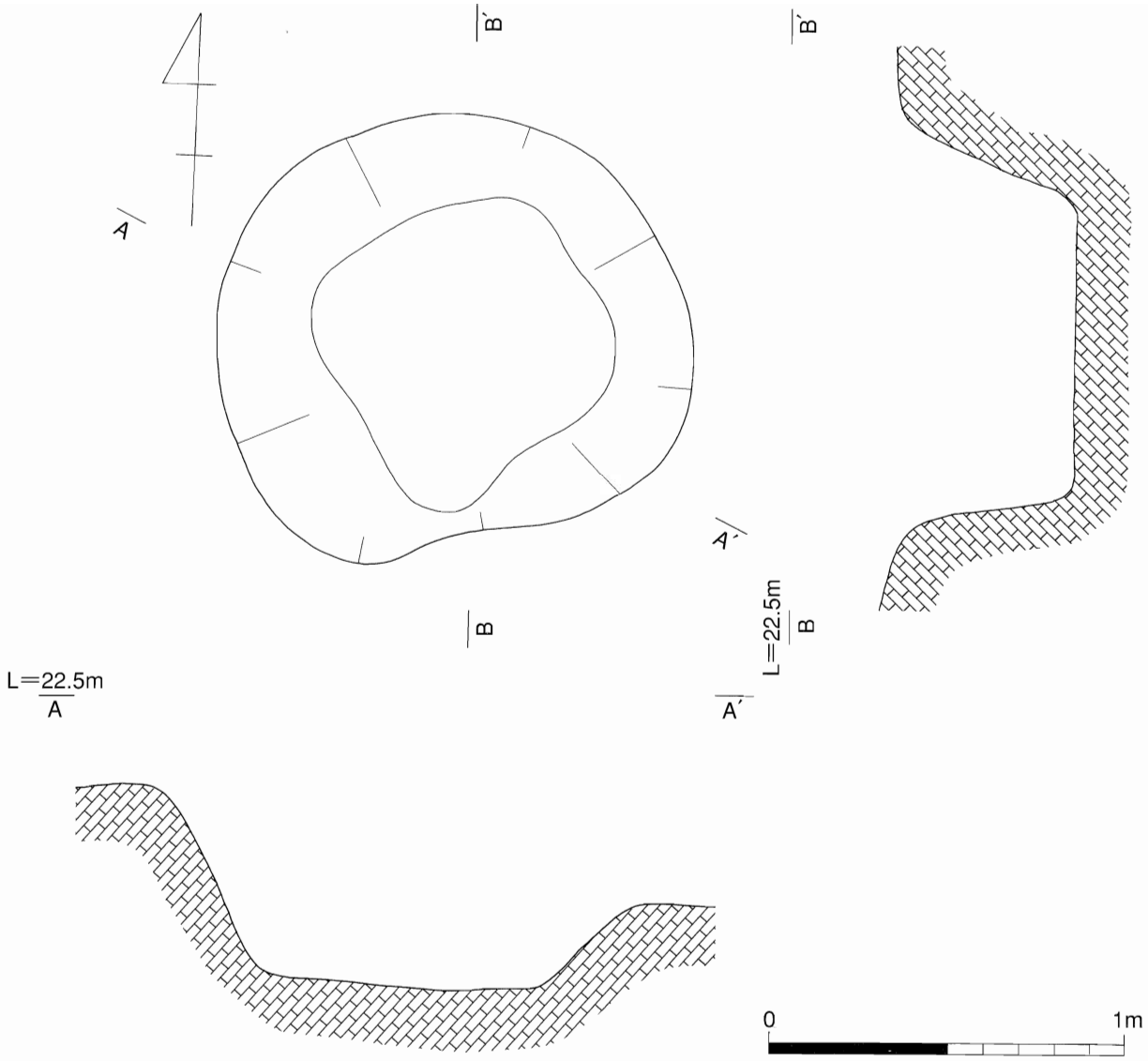
第85図　SK－15　実測図

なり、第３層は炭や焼土を含んだ層であり約６㎝堆積していた。内部からは遺物は出土しなかったため、時期については不明であるが、おそらくは“こ炭焼”の窯ではないかと思われる。

ＳＫ－14よりも検出面が低いことやＳＸ－08に重複していることからこれら３つの遺構の新旧関係はＳＸ－09→ＳＫ－15→ＳＫ－14と考えられる。

（8）ＳＫ－16（第87図、図版14－３）

ＳＫ－16はＳＸ－10の南端、ＳＤ－06の南側から検出された土壙である。平面形は円形で、規模は上端径130㎝、下端径75㎝、深さ35㎝を測る。遺物が出土しなかったため、時期や用途などの詳細については不明である。



第86図　SK－16　実測図

① 遺物

遺物は主に頂上部の平坦面から出土したもので、遺構に伴うものは破片で図化には至らなかった。

A．蓋（第88－１図）

陶器製の行平蓋。胴部上に刻み目が施されている。

B．壺（第88－２・３図、図版46－２・３）

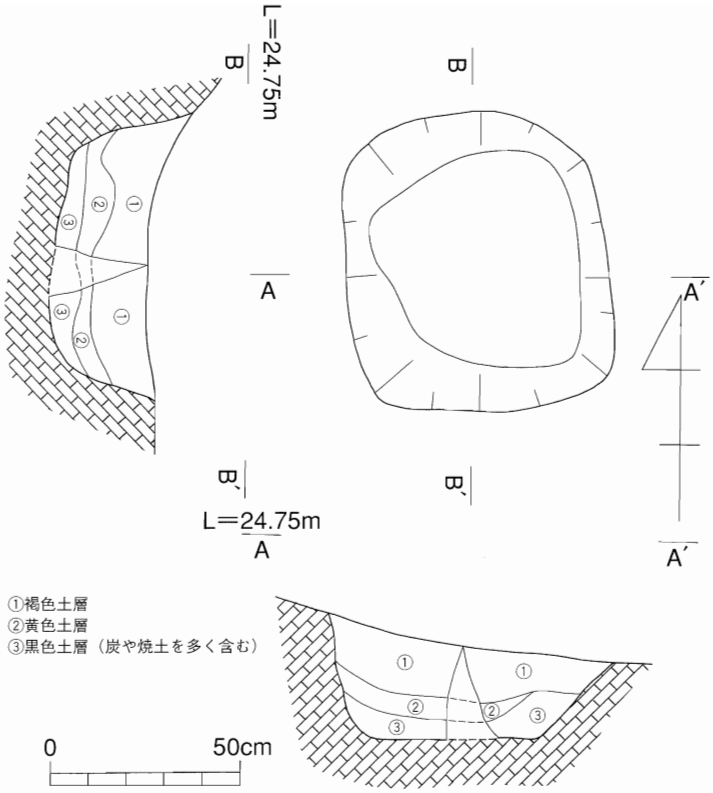
2は陶器製の壺で口縁部には宝珠が、胴部には唐草が線刻されている。**3**は陶器製の壺で外面の胴部は沈線が施され、胴部下にはケズリが施されている。

C．鉢（第88－４図、図版46－１）

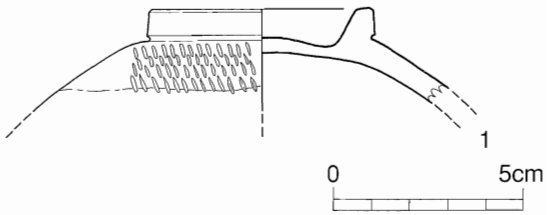
陶器製の鉢で、底部は丸底と思われ，口縁部は外面に折り曲げられている。

D．七輪（第88－５図、図版46－４）

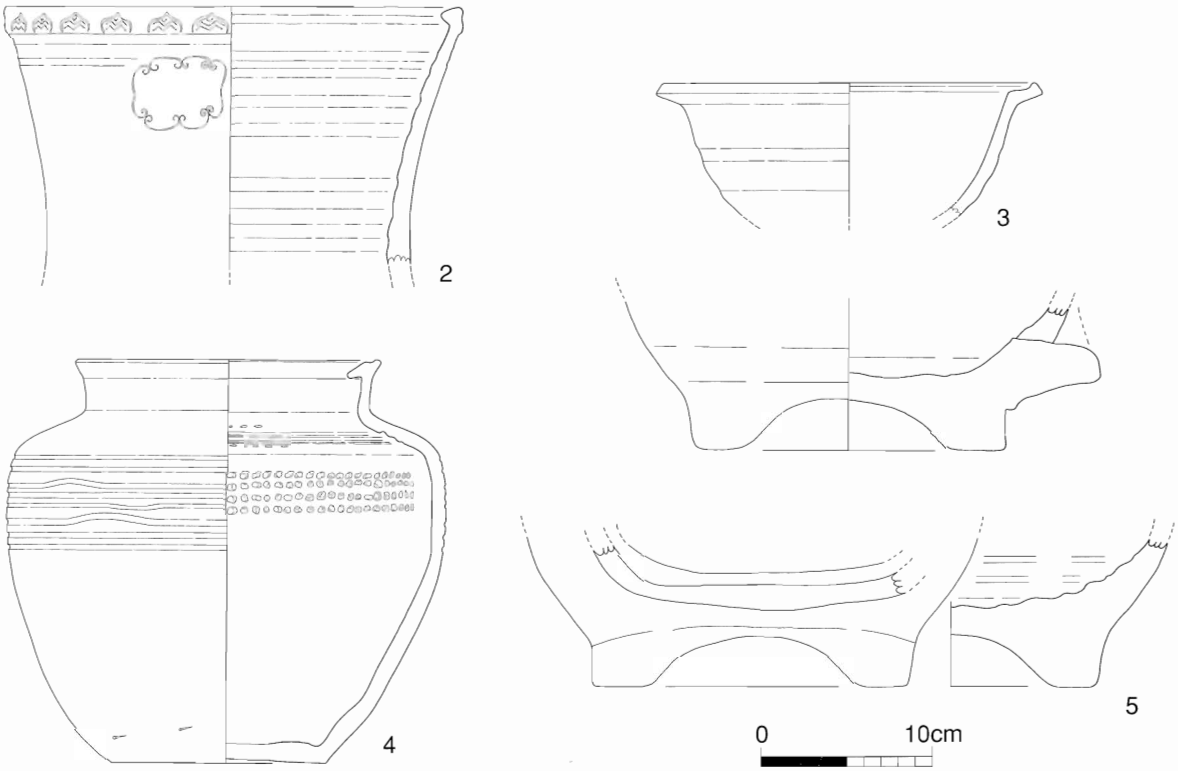
土師質の七輪。開口部の大きい形状で、第51－６図と同様のタイプである。



第87図　SK－17　実測図



第88図　頂上調査区出土遺物実測図(1)



第89図　頂上調査区出土遺物実測図(2)

Ⅳ　ま　と　め

1　遺構について

舎人遺跡は地理的に南側に荒隈城、東側に亀田山（末次城・松江城）、北側に白髪山（白鹿城）が望める独立丘陵的な立地にあり、また荒隈城の城域は広範囲にわたると考えられているため、本遺跡もその一部と考えられた。今回の調査では中世荒隈城に関する遺構は検出できなかった。代わりに近世末頃に埋没したと思われる遺構が検出され、遺構が造成された時期をそれほど下ることはないだろう。頂上部平坦面から旧表土と思われる痕跡があるものの、明確な確証は得られず、それより以下になると痕跡すら残っていなかった。頂上部平坦面には近所の方の話から祠があったらしく、位置については不明だが供膳用の御神酒徳利（第11－１・２図）や、丸石の散乱がそのことを物語っている。中世に頂上部付近を造成し、後世になって畑として下の方まで再利用したと考えられる。

荒隈城跡（小十太郎地区）の調査は500ｍ南に荒隈城跡の詰曲輪があったとされ、文献では尾根づたいに毛利配下の武将たちが陣屋を築いたとされるため、本調査では陣屋やそれに関連する遺構が検出できると期待された。しかし本地区も荒隈城当時の遺構は検出できず、近世末頃の遺構が検出された。

東側調査区では一部が天倫寺の所有地と接し、近所の方の話で周辺に尼寺があったということや享保年間銘（1716～1735年）や天保年間銘（1830～1843年）が刻まれた墓石、寺族のものと思われる円筒形の墓石が廃棄されていることから墓地であったことは間違いない。出土遺物の観点からも供膳に使われたミニチュア製品や小皿類が多く、古銭の出土も一番多かった。これらの古銭は“六道銭”に使われたと思われる。“六道銭”は仏教の六道輪廻思想に基づく風習で、棺や墓壙内に副葬されることが多く、地域によっては枚数や埋葬方法が異なる場合が多い。４号墓の場合、埋立から出土していることから埋める途中で入れたとも考えられる。１号墓と４号墓は土壙の規模が小さくて浅いが墓壙であった可能性が高い。しかし埋葬形態やどのような人が葬られていたかは不明であり、どのように墓が配置されていたなど全体を把握するには至らなかった。

北側調査区は50～60年まで人が住んでいたらしく、調査前に井戸が３つ確認されていた。本調査区は平坦面が作られ、そこに屋敷を作った痕跡が見られた。明確な間取りや地下構造などはわからなかったが、礎石と思われる石や斜面との際にある雨落溝などから住居があった可能性が高い。また調査区外にも平坦面がいくつか見られることからこの尾根の北側には数棟の住居があったと考えられる。出土遺物の面からも東側調査区に比べて七輪や・碗類・蓋類などの日常生活遺物が多く見られる。

頂上部調査区では東向き斜面から溝を伴う加工段が検出された。城郭研究者によると東側に対する意識が強く、谷筋に道を監視・見張りのような役目を持った曲輪ではないだろうかということであった。確かに谷筋には荒隈城から法吉町に抜ける道がかなり昔から使われていたらしいが、加工段の埋土の出土遺物は近世末以降のものが大部分のため、時期的には隔たりがあり、今後検討を要する。

2　遺物について

○土師質土器

小皿・中皿・厨房具が大部分である。小皿は灯明皿として使われていたものが多く、底部に回転糸

切痕を持ち、口縁部に油煙痕を持つ。また目皿は灯明皿と形状的には似ているが、厚みがあり、底部を回転糸切で切り離した後に、「目穴」をあけている。厨房具は七輪・焙烙であり、七輪は２種類ある。１つは“凉炉”と呼ばれるもので、上部に“ボウブラ”と呼ばれる急須を保持するための突起が設けられ、円筒形を基調とし、株に通気孔をもうけた形状で、二重構造のものが多く煎茶道用の炉である。[1] もうひとつは通気孔が大きく受口のようなものがついている形状である。

○陶器

皿類・碗類・蓋類・瓶類・鉢類などバリエーションが多い。皿類のうち、灯明皿として使用されたものは２種類あり、皿形と受皿付である。双方とも底部に回転糸切痕を持つ。それ以外の皿類は高台の持つもの、持たないものに分けられる。碗類は端反形や半球形が中心で、特に半球形碗は「ボテボテ茶」と呼ばれる江戸時代中期から伝わる茶粥を食するための茶碗である。

産地としては布志名系の陶器が大部分で、楽山焼、石見焼が数点ある。布志名焼は寛延３年（1750年）に現在の八束郡玉湯町に開窯されたもので、大きく分けて舟木窯系・土屋窯系・永原窯系の３つに分けられる。特に舟木系は日用雑器に多く焼いており、民芸に大きく影響された。

楽山焼は延宝５年（1677年）に深川焼の陶工倉崎権兵衛が萩から召し抱えられ現在の松江市西川津町市成に開窯したのが始まりである。当初は市成に開窯せず国屋町、小十太郎地区の周辺で窯を開いたという説（国屋窯）があり、その痕跡が期待されたが残念ながら窯道具も出土しなかった。その後一時廃絶したりしたが、現在にいたっている。

○磁器

皿・碗・蓋類が中心である。皿類は小皿が多く、見込に蛇の目釉剥ぎ痕があるものあり、中皿にはコンニャク印判や高台裏には「大明成化年製」が描かれたものもあった。碗類は蓋とセットになるものが多かった。

大半は在地系の意東焼・塩谷焼であり、肥前系は極わずかであった。意東焼は天保３年（1832年）に現在の八束郡東出雲町下意東に松江藩窯として開窯された。天保７年に久村焼を吸収し、本格的に松江藩の直轄になった。天保13年には休窯し、弘化元年（1844年）には廃窯となった。塩谷焼は嘉永年間（1848～54年）に能義郡広瀬町に開窯された。当初は呉須による染付であったが、明治以降になるとコバルトによる染付が施された。明治17年（1885年）に廃窯となった。

以上のように出土した遺物は19世紀後半のものが大部分であり、この本地区も19世紀の終わりから20世紀にはじめにかけて廃絶されたと考えられる。

註

1)『図説　江戸考古学研究事典』　柏書房　2001年

(参考文献)

『角川　日本陶磁大辞典』　角川書店　2002年

『日本やきもの集成　8　山陰』　平凡社　1981年

『権兵衛の国屋窯記録集』　1957年

舎人遺跡

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
1	1層 黒褐色土層	磁器	辣韮形瓶	—	3.4	7.5	5.0	白色	轆轤	透明釉 色絵（緑・朱・鉄絵）	外一笹	上絵付	布志名系	お神酒徳利	13−1	17−3
2	1層 黒褐色土層	磁器	辣韮形瓶	—	3.8	7.4	—	白色	轆轤	透明釉 色絵（緑・朱・鉄絵）	「御神前」	上絵付	布志名系	お神酒徳利	13−2	17−1
4	1層 黒褐色土層	陶器	平形碗	11.0	7.0	5.5	—	赤褐色	轆轤	鉄釉			布志名系		13−3	17−4
5	1層 黒褐色土層	磁器	胴丸形壺	12.2	—	9.6	—	白色	轆轤	青磁釉			布志名系		13−4	17−5
6	1層 黒褐色土層	陶器	肩張形壺	—	—	25.2	19.9	褐色	轆轤	鉄釉			松江焼		13−5	17−6

T−1出土遺物

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
1	1層 黒褐色土層	陶器	平形皿	8.2（推）	4.0（推）	1.7	—	淡赤褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	来待釉			布志名系	灯明皿	16−1	18−1
2	1層 黒褐色土層	陶器	小形擂鉢	13.4（推）	—	—	—	淡赤褐色	—	来待釉			布志名系	薬味用	16−2	18−2
3	1層 黒褐色土層	陶器	小形擂鉢	—	5.8（推）	—	—	淡赤褐色	轆轤	来待釉			布志名系	薬味用	16−3	18−3
4	1層 黒褐色土層	陶器	瓶	—	3.1（推）	—	—	灰褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	来待釉			布志名系	「ペコカン徳利」のミニチュア	16−4	
5	1層 黒褐色土層	土器	平形皿	9.6（推）	5.6（推）	2.2	—	淡橙色	轆轤(右) 底部回転糸切	—			布志名系	皿形目皿	17−5	18−4
6	1層 黒褐色土層	陶器	土瓶用蓋	11.6	7.5	—	—	灰色	手づくね	—			松江焼		17−6	18−6
7	1層 黒褐色土層	陶器	土瓶用蓋	9.6	6.6	4.2	—	褐色	轆轤	白泥釉 呉須	草？	呉須絵	布志名系		17−7	18−5
8	1層 黒褐色土層	陶器	隠元形横手急須	—	5.1	—	—	黄白色	轆轤	飴釉灰釉					17−8	18−8
9	1層 黒褐色土層	陶器	茶釜形土瓶	9.6（推）	9.8	8.7	14.2（推）	灰褐色	轆轤	白泥釉 呉須 透明釉	外一菊花	呉須絵	在地系？	被熱痕あり	17−9	
10	1層 黒褐色土層	磁器	丸形皿	21.0	11.4	3.2	—	白色	轆轤	透明釉呉須	外一富岳図	染付	意東焼	高台裏一ハリ3ヶ所	17−10	19−3
11	1層 黒褐色土層	土器	平形中皿	20.4	8.1	5.8	—	橙色	轆轤	—		外一ケズリ・ナデ 内一ナデ	在地系	内面にススが付着	18−11	19−5
12	1層 黒褐色土層	土器	平形中皿	23.0	8.4	6.0	—	橙色	轆轤	—		外一ケズリ・ナデ 内一ナデ	在地系	内面にススが付着	18−12	19−4
13	1層 黒褐色土層	陶器	皿	—	11.0	—	—	赤褐色	轆轤	透明釉			布志名系	見込一ハリ6ヶ所	18−13	19−6
14	1層 黒褐色土層	陶器	半寸胴形甕	19.6	12.8	24.6	22.5	茶褐色	轆轤	来待釉			布志名系		18−14	19−7

T−2・3出土遺物

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
1	2層 淡橙色土層	陶器	瓶	—	3.8	—	—	茶褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	来待釉			布志名系	「ペコカン徳利」のミニチュア	19−1	
2	2層 淡橙色土層	陶器	受皿付皿	8.8	3.8	2.6	6.2	茶色	轆轤(右) 底部回転糸切	来待釉		灯明皿	布志名系	灯明皿	19−2	
3	2層 淡橙色土層	陶器	受皿付皿	7.3	4.2	3.2	10.2	赤橙色	轆轤(右) 底部回転糸切	来待釉		灯明皿	布志名系	灯明皿	19−3	
4	2層 淡橙色土層	陶器	隅切方形皿	8.5	5.0	2.3	—	黄色	型打	透明釉 緑釉	見込一草花	鉄絵	布志名系		19−4	
5	1層 黒褐色土層	土器	平形皿	—	5.9（推）	—	—	淡橙色	轆轤(右) 底部回転糸切	—		灯明皿	在地系	灯明皿？	19−5	
6	1層 黒褐色土層	土器	平形皿	13.9	7.0	2.2	—	淡橙色	轆轤(右) 底部回転糸切	—		灯明皿	在地系	灯明皿？	19−6	

1号墓出土遺物

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
1	1層 黒褐色土層	陶器	行平用蓋	12.6	5.0	3.1	—	暗褐色	轆轤	来待釉			布志名系		22−1	
2	1層 黒褐色土層	陶器	扁平鼎形有足香炉	14.4	6.0	6.8	14.2	橙色	轆轤	緑釉		ハケ目	布志名系		22−2	

2号墓出土遺物

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
1	1層 黒褐色土層	陶器	平形皿	9.0	4.5	2.3	—	赤褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	来待釉			布志名系	灯明皿	24−1	
2	1層 黒褐色土層	陶器	半胴形甕	9.8	6.8	18.2	13.5	赤褐色	轆轤	来待釉			布志名系		24−2	20−4
3	2層 淡橙色土層	磁器	稜皿	10.0（推）	4.6	2.1	—	白色	型押	透明釉	見込一円刻「寿」	型押陰刻文様	塩谷		24−3	20−3

3号墓出土遺物

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
1	1層 黒褐色土層	陶器	?	—	2.7	—	—	橙色	手づくね型押	透明釉			在地系		25−1	21−1
2	1層 黒褐色土層	陶器	丸形皿	15.4（推）	—	—	—	赤橙色	轆轤	来待釉			布志名系	卸皿	25−2	21−2
3	1層 黒褐色土層	陶器	壺用蓋	10.0	3.7	1.8	—	灰褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	灰釉		把手一亀形	布志名系		25−3	21−3
4	1層 黒褐色土層	陶器	壺用蓋	11.4	5.6	2.4	—	橙色	轆轤(右) 底部回転糸切	緑釉		把手一丸形	布志名系		25−4	21−4

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
5	1 層 黒褐色土層	磁器	碗 蓋	8.8	3.4	3.1	—	白色	轆 轤	透明釉 呉 須	外－牡丹詰 内口縁－雷門 見込－環状松竹梅	染 付	意 東		25－5	21－5
6	1 層 黒褐色土層	磁器	菊花形皿	13.6	8.2	4.0	—	白色	轆 轤	透明釉 呉 須			意 東		25－6	21－6
7	1 層 黒褐色土層	磁器	皿	—	8.9	—	—	白色	轆 轤	透明釉 呉 須	外－唐草文 内:見込－花唐草文		意 東		25－7	
8	1 層 黒褐色土層	磁器	隅 切 方 形 皿	8.0	4.0	2.5	—	白色	型 押	透明釉	内－紗綾文 見込－四弁花	白 磁	塩 谷		25－8	21－7
9	1 層 黒褐色土層	陶器	端 反 形 碗	11.2	4.5	5.0	—	黄白色	轆 轤	透明釉			布志名系	見込－ハリ２箇所	26－9	22－1
10	1 層 黒褐色土層	陶器	端 反 形 碗	11.5	4.7	5.6	—	暗赤褐色	轆 轤	黄 釉	外－笹	錆 絵	布志名系	見込－ハリ３箇所	26－10	22－2
11	1 層 黒褐色土層	陶器	半 球 形 碗	9.6	4.2	7.2	—	淡橙色	轆 轤	飴 釉			布志名系	ポテポテ碗	26－11	22－3
12	1 層 黒褐色土層	陶器	半 球 形 碗	9.8	4.2	8.1	—	暗灰褐色	轆 轤	緑 釉			布志名系	ポテポテ碗	26－12	22－4
13	1 層 黒褐色土層	磁器	丸 形 碗	9.6	3.4	4.4	—	白色	轆 轤	透明釉 呉 須	外－木賊 内口縁－鎖線文 見込－不明	染 付	意 東		26－13	22－5
14	1 層 黒褐色土層	磁器	端 反 形 碗	8.2	2.8	4.2	—	白色	轆 轤	透明釉 呉 須	外－花蝶 見込－不明	染 付	塩 谷		26－14	22－8
15	1 層 黒褐色土層	磁器	端 反 形 碗	9.5	3.7	5.0	—	白色	轆 轤	透明釉 呉 須	外－流水花 見込－「寿」	染 付	塩 谷		26－15	
16	1 層 黒褐色土層	磁器	端 反 形 碗	10.5	3.2	5.4	—	白色	轆 轤	透明釉 呉 須	外－笹・蝙蝠 内口縁－鎖線文	染 付	塩 谷		26－16	22－7
17	1 層 黒褐色土層	磁器	端 反 形 碗	10.2	4.1	5.6	—	白色	轆 轤	透明釉 コバルト	外－花卉 内口縁－鎖線文 見込－波清崩し	染 付	塩 谷	明治以降	26－17	22－10
18	1 層 黒褐色土層	磁器	丸 形 碗	10.8	4.2	5.3	—	白色	轆 轤	透明釉 コバルト	外－流水花 内口縁－鎖線文 見込－宝珠崩し	染 付	塩 谷	明治以降	26－18	22－9
19	1 層 黒褐色土層	磁器	丸 形 碗	8.8	2.8	4.4	—	白色	轆 轤	透明釉 色絵 (朱･コバルト)	外－区割：丸文 見込－不明	色 絵	不 明	明治以降	26－19	22－6
20	1 層 黒褐色土層	陶器	網 懲 利	—	7.3	—	—	灰白色	轆 轤	白泥釉 呉 須 透明釉	外－梅花	染 付	楽 山 焼		27－20	23－1
21	1 層 黒褐色土層	磁器	段 重	12.1	11.2	7.0	—	白色	轆 轤	透明釉 呉 須	外－微塵唐草	染 付	塩 谷		27－21	23－2
22	1 層 黒褐色土層	磁器	折縁面取鉢	13.8	—	—	—	白色	轆 轤 型 押	透明釉 色絵（赤）	外－不明 内口縁－捻潰:花卉 内－区割：花卉・ 唐草・紗綾文	上絵付 口 錆	不 明		27－22	23－3
23	1 層 黒褐色土層	陶器	胴 丸 形 土 瓶	11.3	10.7	11.2	—	灰茶色	手づくね	—			松 江 焼		27－23	23－4
24	1 層 黒褐色土層	陶器	算 盤 形 土 瓶	11.0	8.0	11.9	17.2	赤褐色	轆 轤	来待釉			布志名系		27－24	23－7
25	1 層 黒褐色土層	陶器	算 盤 形 土 瓶	9.4	8.6	11.4	17.4	灰褐色	轆 轤	緑 釉			布志名系		27－25	23－6
26	1 層 黒褐色土層	陶器	擂 鉢	24.0	10.7	11.3		橙色	轆 轤	来待釉			布志名系		27－26	23－5
27	2 層 暗茶褐色土層	陶器	土 瓶 用 蓋	11.6	9.2	3.5	—	淡赤褐色	轆 轤	鉄 釉	外－白梅	鉄 絵 白 盛	布志名系		28－27	24－1
28	2 層 暗茶褐色土層	陶器	半 球 形 碗	10.1 (推)	4.2	7.2	—	黄白色	轆 轤	透明釉	外－宝珠	貫 入	布志名系		28－28	
29	2 層 暗茶褐色土層	陶器	半 球 形 碗	10.2	4.6	7.3	—	黄白色	轆 轤	透明釉		貫 入 印 化	布志名系		28－29	24－2
30	2 層 暗茶褐色土層	磁器	丸 形 碗	8.8 (推)	4.6	5.9	—	白色	轆 轤	透明釉 呉 須	外－草文	染 付	意 東	見込－蛇の目釉剥ぎ	28－30	24－3
31	2 層 暗茶褐色土層	磁器	丸 形 碗	10.6	4.4	6.0	—	白色	轆 轤	透明釉 呉 須	外－捻潰：不明 内口縁－列点・線	染 付	意 東		28－31	24－7
32	2 層 暗茶褐色土層	磁器	輪花丸形 皿	14.0	8.9	4.2	—	白色	轆 轤	透明釉 呉 須	見込－浜景	染 付 口 銹	意 東	高台裏－蛇の目凹形	28－32	25－2
33	2 層 暗茶褐色土層	磁器	端 反 形 碗	10.5	3.7	5.5	—	白色	轆 轤	透明釉 呉 須	外－よろけ縞 潰絵：草文 見込－「寿」	染 付	塩 谷	焼継ぎあり 高台裏－朱銘「□七十力」	28－33	25－9
34	2 層 暗茶褐色土層	磁器	丸 形 碗	14.8 (推)	4.8 (推)	7.0	—	灰白色	轆 轤	透明釉 呉 須	外－群鶴 内口縁－四方襷 見込－環状松竹梅	染 付	塩 谷		28－34	25－8
35	2 層 暗茶褐色土層	磁器	丸 形 碗	15.4	4.9	6.1	—	白色	轆 轤	透明釉 呉 須	外－蔓唐草 内口縁－四方襷 見込－環状松竹梅	染 付	塩 谷		28－35	25－10
36	2 層 暗茶褐色土層	磁器	隅 切 方 形 皿	7.9	3.4	2.4	—	白色	型 押	透明釉		白 磁 型押陽刻文様	塩 谷		28－36	25－1
37	2 層 暗茶褐色土層	磁器	輝 縁 輪 花 皿	19.7	8.5	4.4	—	白色	型 押	透明釉			石 見	見込－ハリ２ヶ所	29－37	25－3
38	2 層 暗茶褐色土層	陶器	行 平	16.0	7.1	9.5	—	橙色	轆 轤 轆 轤	来待釉					29－38	25－4
39	2 層 暗茶褐色土層	陶器	壺 or 甕	20.8 (推)	—	—	—	暗灰白色	轆 轤	鉄 釉 灰 釉					29－39	
40	2 層 暗茶褐色土層	土器	七 輪	19.3	16.8	19.8	—	淡橙褐色	轆 轤	—		外－胴部上：タタキ 下：ケズリ 内－ナデ		２重構造 三足付	29－41	25－6
41	2 層 暗茶褐色土層	陶器	火 鉢	17.0 (推)	13.3	16.4	—	淡茶褐色	轆 轤	鉄 釉 灰 釉		掛け分け		２個体貼付	29－40	25－5

４号墓出土遺物

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
1	1 層 黒褐色土層	石器	砥 石 ?	5.3 (推)	4.6	0.8	—	黄色		流紋岩 （硬い凝灰岩）					32－1	20－5
2	1 層 黒褐色土層	土器	平 形 皿	8.3 (推)	4.4 (推)	1.35	—	橙色	轆 轤(右) 底部回転糸切	—			在 地 系	灯明皿	33－2	

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
3	1層 黒褐色土層	土器	平形皿	9.0 (推)	—	—	—	橙色	轆轤(右) 底部回転糸切	—			在地系		33−3	
4	1層 黒褐色土層	磁器	筒干形 鉢	20.2 (推)	—	—	—	白色	轆轤	—		外−松葉 内口縁−雷文見込−茄子・蝶	塩谷		33−4	20−6
5	主体部3層 黒褐色土層	陶器	平形皿	9.0 (推)	3.0 (推)	2.0	—	橙色	轆轤	鉄釉 黄釉	内−ハケ使用		布志名系		34−5	20−7
6	主体部3層 黒褐色土層	陶器	平形皿	9.8	4.2	2.4	—	橙色	轆轤高台貼付	緑釉	見込−印花 内−ハケ使用		布志名系		34−6	20−8
7	主体部3層 黒褐色土層	陶器	碗 or 鉢	—	7.6 (推)	—	—	暗灰褐色	轆轤	緑釉			布志名系	見込−ハリあり	34−7	

墓域周辺出土遺物

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
1	1層 黒褐色土層	石器	スクレイパー	7.4	3.4	0.9		黒曜石							38−1	26−1
2	1層 黒褐色土層	陶器	瓶	1.7	—	—	—	橙色	轆轤	—			在地系	ミニチュア製品	39−2	
3	1層 黒褐色土層	陶器	瓶	—	2.4	—	5.0	暗赤褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	来待釉			布志名系	「ペコカン徳利」のミニチュア	39−3	26−5
4	1層 黒褐色土層	磁器	瓶	1.9	—	—	4.9	白色	轆轤	透明釉 色絵（朱）	外−梅花	上絵付	肥前系？	ミニチュア製品	39−4	
5	1層 黒褐色土層	陶器	甕	3.1	1.9	2.9	—	暗赤褐色	轆轤	来待釉			布志名系	ミニチュア製品	39−5	26−3
6	1層 黒褐色土層	陶器	端反形 小杯	5.6	2.2	2.7	—	黄白色	轆轤	透明釉			布志名系	ミニチュア製品	39−6	26−4
7	1層 黒褐色土層	陶器	羽釜	—	3.9	—	—	黄白色	轆轤	?			布志名系	ミニチュア製品	39−7	26−2
8	1層 黒褐色土層	磁器	端反形 小杯	6.8	—	—	—	白色	轆轤	透明釉 色絵（朱）	見込−詩歌・笹・鮎	上絵付	意東		39−8	26−8
9	1層 黒褐色土層	磁器	丸形 小杯	6.8	2.2.	2.7	—	白色	轆轤	透明釉			意東		39−9	26−6
10	1層 黒褐色土層	磁器	丸形 小杯	6.5	3.2	4.3	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外−菊花「富□」	染付	塩谷	関西系の絵師による染付	39−10	26−7
11	1層 黒褐色土層	磁器	小杯	—	3.0	—	—	白色	轆轤	透明釉 透明釉	外−草花	染付	塩谷		39−11	26−9
12	1層 黒褐色土層	磁器	練薑形 瓶	—	4.1	—	—	灰白色	轆轤	呉須 透明釉	外−星梅鉢	染付	塩谷		39−12	26−10
13	1層 黒褐色土層	磁器	練薑形 瓶	—	3.8	—	—	白色	轆轤	呉須	内口縁−桧垣 見込−帆掛船・浜景	染付	塩谷		39−13	26−11
14	1層 黒褐色土層	土器	平形皿	8.8 (推)		—	—	橙色	轆轤(右) 底部回転糸切	—			在地系		40−14	
15	1層 黒褐色土層	土器	平形皿	9.0 (推)	5.0 (推)	1.6	—	橙色	轆轤(右) 底部回転糸切	—			在地系	灯明皿、油煙痕−2ヶ所	40−15	
16	1層 黒褐色土層	土器	平形皿	7.2	3.4	1.8	—	橙色	轆轤(右) 底部回転糸切	—			在地系	灯明皿、油煙痕−3ヶ所	40−16	27−1
17	1層 黒褐色土層	土器	平形皿	8.0	4.4	1.5	—	橙色	轆轤(右) 底部回転糸切	—			在地系	灯明皿	灯明皿	27−2
18	1層 黒褐色土層	土器	平形皿	—	3.4	—	—	橙色	轆轤(右) 底部回転糸切	来待釉			在地系	灯明皿	灯明皿	
19	1層 黒褐色土層	陶器	平形皿	8.6	4.0	1.5	—	赤褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	来待釉			布志名系	灯明皿	灯明皿	
20	1層 黒褐色土層	陶器	平形皿	9.0	3.6	1.9	—	赤褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	来待釉			布志名系	灯明皿	灯明皿	27−3
21	1層 黒褐色土層	陶器	平形皿	10.0	4.8 (推)	2.2	—	赤褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	透明釉			布志名系	灯明皿	灯明皿	
22	1層 黒褐色土層	陶器	平形皿	8.2	4.5	1.2	—	黄白色	轆轤 型押	透明釉		貫入あり	布志名系		40−22	27−4
23	1層 黒褐色土層	陶器	腰折形 皿	10.0 (推)	4.6	2.7	—	黄白色	轆轤 型押	透明釉					40−23	27−5
24	1層 黒褐色土層	陶器	変形皿	11.4	7.5	2.0	—	緑灰色	型押	透明釉	外−菊花	陽刻菊花文様			40−24	27−6
25	1層 黒褐色土層	磁器	丸形皿	9.0 (推)	3.1 (推)	2.4	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	内−鳥居・樹 見込−不明	染付	意東	見込−蛇の目釉剥ぎ	40−25	
26	1層 黒褐色土層	磁器	丸形皿	9.2	4.2	2.3	—	灰白色	轆轤	透明釉 呉須	内−斜格子文 見込−格子文	染付	意東	見込−蛇の目釉剥ぎ	40−26	27−7
27	1層 黒褐色土層	磁器	輪花丸形 皿	10.2	6.0	2.2	—	白色	轆轤 型押	透明釉 呉須	見込−浜景	染付 口銹	意東		40−27	27−8
28	1層 黒褐色土層	磁器	隅切 方形皿	8.0	3.4	2.4	—	白色	轆轤 型押	透明釉 呉須	見込−鯛 内−半菊花	型押陽刻文様	塩谷	高台貼付	40−28	27−10
29	1層 黒褐色土層	陶器	壺用蓋	11.4	5.8	2.5	—	灰褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	青緑釉			布志名系	見込−ハリ5ヶ所	41−29	28−1
30	1層 黒褐色土層	陶器	壺用蓋	10.5	6.9	2.1	8.4	褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	来待釉			布志名系	見込−ハリ4ヶ所	41−30	28−2
31	1層 黒褐色土層	陶器	壺用蓋	11.4	5.9	2.4	9.0	赤褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	鉄釉			布志名系	見込−ハリ3ヶ所	41−31	28−4
32	1層 黒褐色土層	陶器	壺用蓋	10.1	4.8	2.6	—	赤褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	来待釉			布志名系	見込−ハリ5ヶ所	41−32	28−3
33	1層 黒褐色土層	陶器	壺用蓋	11.0	5.0	2.8	7.2	乳白色	轆轤(右) 底部回転糸切	透明釉		耳状把手	布志名系	見込−ハリ5ヶ所	41−33	28−5
34	1層 黒褐色土層	陶器	行平用 蓋	10.4	3.2	2.4	—	褐色	轆轤	白泥釉 緑釉		掛分け	布志名系	指頭圧痕、沈線	41−34	28−6
35	1層 黒褐色土層	陶器	行平用 蓋	13.2 (推)	4.0	2.8	—	赤褐色	轆轤	来待釉			布志名系	天頂裏−ハリ4ヶ所	41−35	28−7
36	1層 黒褐色土層	陶器	行平用 蓋	14.8 (推)	—	—	—	赤褐色	轆轤	来待釉	外−松竹梅 内−環状松竹梅	染付	布志名系		41−36	
37	1層 黒褐色土層	磁器	碗用蓋	11.8 (推)	2.3	4.8	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外−菊花	上絵付	意東	三重沈線	41−37	28−8
38	1層 黒褐色土層	陶器	筒丸形 碗	8.1	4.2	6.6	—	灰白色	轆轤	透明釉 色絵（朱・青・白・緑ほか）			布志名系		42−38	29−1
39	1層 黒褐色土層	陶器	平形碗	9.8 (推)	4.7	3.3		乳白色	轆轤	緑釉			布志名系	見込−ハリ4ヶ所	42−39	29−2

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
40	1層 黒褐色土層	陶器	端反形碗	11.6	4.6	5.9	—	黄白色	轆轤	白泥釉 呉須		見込ー鶴 外ー不明	布志名系	焼成不良	42−40	29−3
41	1層 黒褐色土層	陶器	端反形碗	10.3 (推)	4.9	5.0	—	黄白色	轆轤	白泥釉 呉須			布志名系		42−41	29−4
42	1層 黒褐色土層	陶器	端反形碗	10.8 (推)	5.0 (推)	4.6	—	橙色	轆轤	来待釉			布志名系	見込ーハリ3ヶ所	42−42	29−5
43	1層 黒褐色土層	陶器	平形碗	11.4	4.9	4.9	—	淡褐色	轆轤	来待釉			布志名系		42−43	
44	1層 黒褐色土層	陶器	端反形碗	12.0	5.0	4.9	—	黄白色	轆轤	透明釉		貫入	布志名系		42−44	29−6
45	1層 黒褐色土層	陶器	端反形碗	11.0	4.5	5.2	—	白黄色	轆轤	灰釉			布志名系		42−45	29−7
46	1層 黒褐色土層	陶器	端反形碗	11.3	4.8	5.5	—	乳白色	轆轤	透明釉			布志名系		42−46	29−8
47	1層 黒褐色土層	陶器	端反形碗	12.6	4.5	6.0	—	褐色	轆轤	透明釉 緑釉		掛分け	布志名系		42−47	29−9
48	1層 黒褐色土層	陶器	半球形碗	10.2	4.2	7.1	—	黄白色	轆轤	透明釉	外ー宝珠	印花・貫入	布志名系		42−48	29−10
49	1層 黒褐色土層	陶器	半球形碗	10.0	4.6	8.0	—	灰白色	轆轤	緑釉			布志名系		42−49	29−11
50	1層 黒褐色土層	磁器	丸形碗	9.6	4.4	4.8	—	灰白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー二重網	染付	肥前系 波佐見	くらわんか碗	42−50	
51	1層 黒褐色土層	磁器	端反形碗	8.2	3.1	4.4	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー若松 見込ー不明	染付	意東		42−51	30−1
52	1層 黒褐色土層	磁器	端反形碗	10.2	3.4	5.4	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー文 内口縁ー青海波崩し	染付	意東		42−52	30−2
53	1層 黒褐色土層	磁器	端反形碗	9.0 (推)	3.6	5.2	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー流水花 見込ー「寿」	染付	塩谷		43−53	
54	1層 黒褐色土層	磁器	端反形碗	9.8 (推)	4.2 (推)	5.5	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー富士・松景	染付	塩谷		43−54	30−3
55	1層 黒褐色土層	磁器	端反形碗	9.2 (推)	3.6	5.1	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー帆掛船	染付	塩谷		43−55	30−4
56	1層 黒褐色土層	磁器	端反形碗	10.0	4.0	5.8	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー笹・雪輪・鳥 見込ー不明	染付	塩谷		43−56	30−6
57	1層 黒褐色土層	磁器	端反形碗	10.5	3.9	6.1	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー梅花散し	染付	塩谷		43−57	
58	1層 黒褐色土層	磁器	端反形碗	10.6	4.2	6.2	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー軍配・梅・鷺	染付	塩谷		43−58	30−5
59	1層 黒褐色土層	磁器	端反形碗	10.4	3.9	6.0	—	白色	轆轤	透明釉 呉須		染付	塩谷		43−59	30−7
60	1層 黒褐色土層	磁器	端反形碗	10.2	3.6	5.9	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー牡丹詰 内口縁ー雷文 見込ー環状松竹梅	染付	塩谷	焼継ぎあり 高台裏ー朱銘「□七十カ」	43−60	30−8
61	1層 黒褐色土層	磁器	半球形碗	10.9	4.8	7.3	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー宝珠・吉祥字 「□」	染付	塩谷		43−61	30−10
62	1層 黒褐色土層	磁器	端反形碗	11.4	—	—	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー松・鶴 見込ー舟	染付	塩谷		43−62	30−9
63	1層 黒褐色土層	磁器	丸形碗	10.8	3.8	5.5	—	白色	轆轤	透明釉 コバルト	外ー桐 見込ー環状松竹梅 内口縁ー雷文	染付	塩谷	明治以降	44−63	31−1
64	1層 黒褐色土層	磁器	端反形碗	10.4	3.8	6.2	—	白色	轆轤	透明釉 コバルト	外ー笹？ 見込ー不明	染付	塩谷	明治以降	44−64	31−2
65	1層 黒褐色土層	磁器	端反形碗	10.3	3.4	6.0	—	白色	轆轤	透明釉 コバルト		染付	塩谷	明治以降	44−65	31−5
66	1層 黒褐色土層	磁器	端反形碗	10.7	4.2	6.2	—	白色	轆轤	透明釉 コバルト		染付	塩谷	明治以降	44−66	31−3
67	1層 黒褐色土層	磁器	端反形碗	9.0	—	—	—	白色	轆轤	透明釉 色絵 (朱・コバルト・緑他)	外ー花	上絵付	不明	明治以降	44−67	31−6
68	1層 黒褐色土層	磁器	端反形碗	8.5	2.9	4.1	—	白色	轆轤	透明釉 色絵 (朱・コバルト・緑他)	外ー花 見込ー不明	上絵付	不明	明治以降	44−68	
69	1層 黒褐色土層	陶器	大海形壺	7.6	4.9 (推)	6.7	—	灰色	轆轤	灰釉			布志名系		45−69	32−1
70	1層 黒褐色土層	陶器	胴丸形壺	12.3			—	茶褐色	轆轤	来待釉			布志名系		45−70	
71	1層 黒褐色土層	陶器	擂鉢	17.2	8.0	7.9	—	橙色	轆轤	来待釉			布志名系		45−71	32−4
72	1層 黒褐色土層	陶器	撫肩形燗徳利	—	8.0	—	—	淡茶褐色	轆轤	透明釉 鉄釉	外ー「□福」		布志名系		45−72	32−2
73	1層 黒褐色土層	陶器	撫肩形燗徳利	—	7.2	—	—	灰黄褐色	轆轤	鉄釉			布志名系		45−73	32−3
74	1層 黒褐色土層	陶器	算盤形土瓶	10.8	7.8	11.3	16.0	橙色	轆轤	来待釉			布志名系		45−74	32−5
75	1層 黒褐色土層	陶器	算盤形土瓶	11.2	—	12.8	18.4	褐色	轆轤	来待釉			布志名系		45−75	32−6
76	1層 黒褐色土層	陶器	算盤形土瓶	11.3	7.6			褐色	轆轤	来待釉			布志名系		45−76	32−8
77	1層 黒褐色土層	陶器	丸形土瓶	11.0 (推)	10.9 (推)	13.1	16.4	灰色	轆轤	灰釉 鉄釉 白化粧土		鉄絵	布志名系		45−77	32−7
78	1層 黒褐色土層	陶器	算盤形土瓶	10.4	5.7	10.1		黄白色	轆轤	透明釉			石見		45−78	
79	1層 黒褐色土層	磁器	段重	12.2	7.2	4.6	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー六角形	染付	塩谷		46−79	33−2
80	1層 黒褐色土層	陶器	腰張形鉢	16.1	8.3	8.8	—	黄白色	轆轤	透明釉 白化粧土 鉄釉 コバルト	外ー笹	鉄絵	布志名系		46−80	33−1
81	1層 黒褐色土層	陶器	玉縁形皿 (水盤)	24.9	11.3 (推)	6.8	—	灰褐色	轆轤	長石釉 緑釉		流し掛け	布志名系		46−81	33−3
82	1層 黒褐色土層	陶器	折縁浅丸形鉢	21.5	6.2	8.0	—	赤褐色	轆轤	来待釉 黄釉			布志名系		46−82	

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
83	1層 黒褐色土層	土器	折縁浅丸形鉢	18.6	8.0	6.7	—	橙色	轆轤	—		胴部上ーナデ 胴部下ーケズリ	在地系		46−83	33−4
84	1層 黒褐色土層	陶器	寸胴形甕	21.6 (推)		—	—	褐色	轆轤	灰待釉		沈線	在地系	見込ーハリ1ヶ所	46−84	33−5
85	1層 黒褐色土層	土器	外耳丸底形焙烙	34.0	—	—	—	褐色	轆轤	—			在地系	沈線あり	46−85	
86	1層 黒褐色土層	磁器	輪花形中皿	19.9	11.2	3.1	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	見込ー環状松竹梅 内口縁ー梅・斜格	染付	塩谷	見込ー環状松竹梅	47−86	33−2
87	1層 黒褐色土層	磁器	輪花形中皿	20.6	12.0	3.3	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	子	染付	塩谷	見込ー水草 内ー水草・魚	47−87	33−6

北側１区上出土遺物

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
1	1層 黒褐色土層	陶器	受皿付皿	9.3 (推)	3.6	2.6	7.2	橙色	轆轤(右) 底部回転糸切	灰待釉			布志名系	灯明皿	50−1	34−1
2	1層 黒褐色土層	陶器	すっぽん口形皿	20.0	9.1	5.1	—	橙色	轆轤	塗土			布志名系		50−2	34−2
3	1層 黒褐色土層	土器	七輪	—	16.3	—	18.4	橙色	轆轤	—		外ー叩きの後ケズリ 内ー叩きの後ナデ	在地系		51−3	34−3
4	1層 黒褐色土層	土器	七輪	—	17.1	—	19.3	橙色	轆轤	—		外ーケズリ 内ー叩きの後ナデ	在地系		51−4	34−4
5	1層 黒褐色土層	土器	七輪	17.7		—	—	橙色	轆轤	—			在地系		51−5	34−5
6	1層 黒褐色土層	土器	七輪	—	19.1	—	—	淡橙褐色	轆轤	—		回転ナデ	在地系		51−6	
7	2層 褐色土層	陶器	植木鉢	12.4	4.8	7.7	—						在地系		52−7	
8	2層 褐色土層	土器	平形皿	10.8	5.9	1.9	—						在地系	灯明皿	52−8	
9	2層 褐色土層	陶器	平形皿	21.2 (推)	8.6 (推)	6.9	—						在地系		52−9	

北側１区上加工段出土遺物

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
1	1層 暗褐色土層	磁器	平形小杯	6.4	1.8	2.6	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー笹	染付	在地系		53−1	34−6
2	1層 暗褐色土層	土器	平形皿	7.8	4.0	1.6	—	褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	—			在地系	灯明皿	53−2	34−7
3	1層 暗褐色土層	土器	平形皿	8.0	4.0	1.7	—	褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	—			在地系	灯明皿	53−3	34−8
4	1層 暗褐色土層	土器	平形皿	10.6 (推)	5.4 (推)	1.9	—	橙色	轆轤	—			在地系	皿形目皿	53−4	34−9
5	1層 暗褐色土層	土器	円盤形皿	13.2 (推)	5.4 (推)	1.0	—	橙色	轆轤	—			在地系	円盤形目皿	53−5	34−10

北側１区下出土遺物

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
1	1層 黒褐色土層	陶器	人形	5.0	4.0	4.1	—	橙色	手づくね	灰待釉			布志名系	布袋神	55−1	35−1
2	1層 黒褐色土層	陶器	辣韮形瓶	—	4.6	—	7.0	橙色	轆轤	灰待釉			布志名系	「ペコカン德利」のミニチュア	55−2	35−2
3	1層 黒褐色土層	陶器	辣韮形瓶	—	4.0	—	5.2	橙色	轆轤(右) 底部回転糸切	灰待釉			布志名系		55−3	35−5
4	1層 黒褐色土層	磁器	平形小杯	4.7	2.0	1.2	—	白色	轆轤(右) 底部回転糸切	透明釉			塩谷		55−4	35−6
5	1層 黒褐色土層	磁器	平形小杯	4.8	3.8	3.4	—	白色	轆轤(右) 底部回転糸切	透明釉			意東		55−5	35−4
6	1層 黒褐色土層	磁器	丸形小杯	6.9	2.8	2.8	—	白色	轆轤(右) 底部回転糸切	透明釉 呉須	外ー菱 見込ー不明	染付	塩谷		55−6	35−7
7	1層 黒褐色土層	磁器	端反形小杯	5.6	2.5	4.3	—	白色	轆轤(右) 底部回転糸切	透明釉 呉須	外ー鎖線文 よろけ縞	染付	塩谷		55−7	35−3
8	1層 黒褐色土層	土器	平形皿	8.4 (推)	3.5	2.0	—	褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	透明釉 呉須			在地系	灯明皿	55−8	35−8
9	1層 黒褐色土層	陶器	平形皿	8.8	4.3	1.9	—	暗赤褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	灰待釉			布志名系	灯明皿	55−9	35−9
10	1層 黒褐色土層	陶器	平形皿	9.0	4.0	1.9	—	赤褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	灰待釉			布志名系	灯明皿	55−10	35−10
11	1層 黒褐色土層	陶器	受皿付皿	9.3	3.9	3.0	7.0		轆轤(右) 底部回転糸切	灰待釉			布志名系	灯明皿	55−11	
12	1層 黒褐色土層	陶器	六角形皿	10.2	6.2	2.0	—	黄白色	型押	透明釉			意東		56−12	35−11
13	1層 黒褐色土層	磁器	丸形皿	9.8	4.4	2.7	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	見込ー不明	染付	塩谷	見込ー蛇の目釉剥ぎ	56−13	36−1
14	1層 黒褐色土層	磁器	菱形皿	8.2~6.2	5.0~3.2	2.0~1.5	—	白色	型押	透明釉 呉須	見込ー宝珠・巻草・不明	染付	塩谷		56−14	36−2
15	1層 黒褐色土層	磁器	丸形皿	9.7	5.6	2.2	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー雲 内ー雲 見込ー龍	染付	塩谷		56−15	36−4
16	1層 黒褐色土層	磁器	丸形皿	11.5	6.9	2.2	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	見込ー花	染付	塩谷	高台凹形	56−16	36−3
17	1層 黒褐色土層	陶器	碗用蓋	11.0	3.7	2.7	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー鳥・草花	染付	?	安南写し?	56−17	36−5
18	1層 黒褐色土層	磁器	碗用蓋	8.8	3.2	3.1	—	白色	轆轤	透明釉 呉須		染付	意東		56−18	35−7
19	1層 黒褐色土層	磁器	碗用蓋	8.6	3.8	2.9	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー唐草・浜景 見込ー環状松竹梅 内口縁ー雷文	染付	塩谷		56−19	36−6
20	1層 黒褐色土層	磁器	端反形碗	10.0	3.4	5.7	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー草花・うさぎ 見込ー環状松竹梅	染付	意東		56−20	36−8
21	1層 黒褐色土層	磁器	丸形碗	10.6	3.7	5.5	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー桐	染付	意東	見込ー蛇の目釉剥ぎ	56−21	36−9

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
22	1 層 黒褐色土層	磁器	丸形碗	9.2	5.1	5.0	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー桜？	染付	塩谷		56−22	36−10
23	1 層 黒褐色土層	磁器	輪花端反形皿	14.8	8.9	4.0	—	白色	轆轤 型押	透明釉 呉須	内ー八卦・波涛 見込ー山水文	染付 型打陽刻文様	塩谷	高台裏ー銘「壽」	57−23	37−1
24	1 層 黒褐色土層	磁器	丸形皿	18.2 (推)	11.0 (推)	3.2	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	内ー矢羽根 見込ー五弁花	染付 コンニャク印判	肥前系	高台裏ー銘「大明成化年製」	57−24	37−2
25	1 層 黒褐色土層	磁器	丸形皿	20.8 (推)	12.8 (推)	2.8	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー唐草 内ー箒・人物 外ー紐	染付	肥前系	〃 ーハリ3ヶ所	58−25	37−3
26	1 層 黒褐色土層	石製品	硯					白色							58−26	

北側1区下土器溜出土遺物

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
1	1 層 黒色土層	土器	？	6.2 (推)	—	1.6	—	褐色	手づくね	—			在地系		60−1	
2	1 層 黒色土層	陶器	平形皿	8.2 (推)	—	—	—	橙色	轆轤	来待釉	印刻（剣？）		布志名系	灯明皿	60−2	
3	1 層 黒色土層	陶器	平形皿	8.8 (推)	4.0 (推)	1.8	—	橙色	轆轤(右) 底部回転糸切	来待釉			布志名系	灯明皿	60−3	
4	1 層 黒色土層	陶器	平形皿	6.9 (推)	3.5	1.7	—	黄白色	轆轤 型押	透明釉	見込ー印花 （梅・不明）		布志名系		60−4	38−3
5	1 層 黒色土層	陶器	平形皿	7.8	4.0	1.9	—	黄白色	轆轤 型押	透明釉	見込ー印花 （梅・桜・宝珠）		布志名系	貫入	60−5	
6	1 層 黒色土層	陶器	平形皿	7.6	4.0	1.9	—	黄白色	轆轤 型押	透明釉	見込ー印花（梅・桜）		布志名系		60−6	
7	1 層 黒色土層	陶器	平形皿	7.4	3.9	1.6	—	黄白色	轆轤 型押	透明釉	見込ー印花 （梅・桜・宝珠）		布志名系		60−7	38−1
8	1 層 黒色土層	陶器	平形皿	8.5	4.2	1.9	—	黄白色	轆轤 型押	透明釉			布志名系	貫入	60−8	
9	1 層 黒色土層	陶器	隅切 方形皿	7.0	4.4	1.2	—	灰褐色	轆轤 型押	透明釉			布志名系		60−9	38−2
10	1 層 黒色土層	陶器	隅切 方形皿	9.5	6.8	2.5	—	灰白色	轆轤 型押	透明釉 鉄絵 緑釉	内ー菊花	鉄絵・掛け分け	布志名系	重ね焼き痕あり 織部写し	60−10	38−5
11	1 層 黒色土層	陶器	楕形皿	9.2 (推)	5.8 (推)	2.0	—	黄白色	轆轤 型押	透明釉 鉄絵	内ー不明	鉄絵	布志名系	底部凹形	60−11	
12	1 層 黒色土層	陶器	六角形皿	9.0	5.0	2.4	—		轆轤 型押	透明釉			布志名系	見込ーハリ4ヶ所	60−12	
13	1 層 黒色土層	陶器	腰折端反形皿	9.4	4.7	2.0	—	灰白色	轆轤 型押	透明釉 鉄絵	内ー不明	鉄絵	布志名系		61−13	38−4
14	1 層 黒色土層	陶器	腰折端反形皿	8.2 (推)	4.2	2.9	—	黄白色	轆轤 型押	透明釉			布志名系		61−14	
15	1 層 黒色土層	陶器	腰折端反形皿	10.3	5.1	3.3	—	赤褐色	轆轤 型押	透明釉 黄釉	内ー不明	掛け流し	布志名系		61−15	38−8
16	1 層 黒色土層	陶器	腰折端反形皿	11.8	5.6	3.9	—	灰白色	轆轤 型押	透明釉 鉄絵	内ー不明 外ー不明	鉄絵	布志名系		61−16	38−7
17	1 層 黒色土層	陶器	腰折端反形皿	12.8	5.2	3.0	—	黄白色	轆轤 型押	透明釉 鉄絵	内ー草	鉄絵	布志名系		61−17	
18	1 層 黒色土層	陶器	腰折端反形皿	12.1 (推)	4.8 (推)	3.3	—	暗赤褐色	轆轤 型押	緑釉 黄釉			布志名系	底部凹形	61−18	38−6
19	1 層 黒色土層	陶器	変形皿	5.9~9.3	2.8~4.4	1.7~2.0	—	白色	轆轤 型押	透明釉 呉須	外ー折枝松前し 内ー列点・格子・十字		塩谷		61−19	38−9
20	1 層 黒色土層	陶器	稜皿	9.6	4.8	1.9	—		轆轤 型押	透明釉	見込ー刻印「壽」		塩谷		61−20	38−10
21	1 層 黒色土層	陶器	土瓶用蓋	8.3	6.0 (推)		—	褐色	轆轤	透明釉 鉄絵 緑釉	？	？	布志名系		62−21	39−1
22	1 層 黒色土層	陶器	土瓶用蓋	8.3	6.2	2.6	—	灰白色	轆轤	透明釉 鉄絵 緑釉			布志名系		62−22	39−2
23	1 層 黒色土層	陶器	壺用蓋	7.1	2.3	1.7 (推)	—		轆轤	透明釉			石見	つまみ部分ー亀	62−23	39−3
24	1 層 黒色土層	陶器	壺用蓋	9.2	4.7	1.5	7.0	灰色	轆轤(右) 底部回転糸切	白釉 瑠璃釉			布志名系	つまみ部分ー不明	62−24	39−4
25	1 層 黒色土層	磁器	碗用蓋	9.0	3.6	2.5	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー蒔 口縁ー鎖線文		塩谷		62−25	39−5
26	1 層 黒色土層	磁器	碗用蓋	9.0 (推)	3.5	3.0	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー？ 口縁ー雷文 見込ー環状松竹梅		塩谷		62−26	39−6
27	1 層 黒色土層	磁器	碗用蓋	9.0	3.4	2.6	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー鹿・滝・野原 高台裏ー？ 見込ー不明		塩谷		62−27	
28	1 層 黒色土層	磁器	碗用蓋	10.0	3.8	2.9	—	白色	轆轤	透明釉 コバルト			塩谷	明治以降	62−28	39−7
29	1 層 黒色土層	土器	火消し壺蓋	15.8 (推)	5.2	3.5	—	橙色	轆轤	—			在地系		63−29	39−10
30	1 層 黒色土層	磁器	段重	12.4	11.9	4.8	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー青海波紋・花弁	染付	意東？		63−30	39−9
31	1 層 黒色土層	磁器	段重用蓋	13.2	11.5	2.9	—	白色	轆轤	透明釉 呉須		染付	意東？		63−31	
32	1 層 黒色土層	磁器	段重用蓋	9.6	8.3	3.1	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー折枝桜	染付	塩谷		63−32	
33	1 層 黒色土層	陶器	端反端丸形碗	6.1	2.9	5.7	—	灰色	轆轤	透明釉		染付	布志名系		64−33	40−1
34	1 層 黒色土層	磁器	端反形小杯	6.2	3.0	4.3	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー鳥・梅花 高台裏ー不明	染付	塩谷		64−34	40−2
35	1 層 黒色土層	磁器	筒丸形小杯	7.2	4.0	6.1	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー折鶴	染付	塩谷		64−35	40−3
36	1 層 黒色土層	磁器	端反形碗	10.5	3.8	6.0	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー唐草・山 見込ー環状松竹梅 内口縁ー雷文	染付	塩谷		64−36	40−4

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
37	1層 黒色土層	磁器	端反形碗	10.7	4.0	5.6	—	白色	轆轤	透明釉 コバルト	見込ー環状松竹梅	染付	塩谷	明治以降	64−37	40−5
38	1層 黒色土層	磁器	端反形碗	11.6	4.2	5.1	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー車輪・花 見込ー不明	染付	不明	焼成不良	64−38	40−6
39	1層 黒色土層	磁器	端反形碗	9.1	3.3	4.5	—	白色	轆轤	透明釉 色絵 (朱・灰・鉄絵)		上絵付	不明		64−39	40−7
40	1層 黒色土層	陶器	腰折形碗	13.9	5.8	7.7	—	黄白色	轆轤	透明釉		掛け分け	楽山		64−40	40−8
41	1層 黒色土層	陶器	半球形碗	12.0	4.6	4.0	—	褐色	轆轤	透明釉		掛け分け	布志名系	釉が焼成の際、気泡となった痕跡	64−41	40−9
42	1層 黒色土層	陶器	折縁端反形碗	15.4	6.3	5.3	—	淡橙色	轆轤	透明釉		掛け分け	布志名系	口唇部が波状	64−42	40−10
43	1層 黒色土層	陶器	壺	—	5.4	—	9.8	赤褐色	轆轤	来待釉			布志名系		64−43	
44	1層 黒色土層	陶器	茶釜形土瓶	8.5	7.2	12.5	14.8	淡橙色	轆轤	透明釉 鉄絵	外ー樹木	鉄絵	布志名系		64−44	41−2
45	1層 黒色土層	陶器	茶釜形土瓶	—	7.2	—	15.0	灰白色	轆轤	透明釉 鉄絵			石見		64−45	41−3
46	1層 黒色土層	陶器	壺	—	6.4	—	14.6	褐色	轆轤	白濁釉			不明	搬入品？	64−46	41−1
47	1層 黒色土層	陶器	折縁丸形皿	21.7 (推)	10.9	5.1	—	茶褐色	轆轤	灰釉 鉄絵		掛け分け 鉄絵	楽山		65−47	41−5
48	1層 黒色土層	磁器	端反形皿	28.2 (推)	16.3 (推)	3.4	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	内ー海浜・内山		塩谷		65−48	41−4
49	1層 黒色土層	陶器	肩張形瓶	4.4	9.4	25.5	16.0	暗赤褐色	轆轤	来待釉			布志名系	印判あり	65−49	41−6
50	1層 黒色土層	陶器	肩張形壺	10.4	—	—	20.9	暗茶褐色	轆轤	来待釉			布志名系		65−50	

北側２区下ＳＫ一出土遺物

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
1	1層 黒褐色土層	陶器	擂鉢	—	13.8	—	—	淡赤褐色	轆轤	塗土			布志名系		71−1	

北側２区上出土遺物

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
1	1層 黒褐色土層	石器	スクレイパー	9.6 (残)	5.1 (残)	0.4	—	乳白色							73−1	42−1
2	1層 黒褐色土層	土器	平形皿	8.7	4.2	1.6	—	淡褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	—			在地系		74−2	42−2
3	1層 黒褐色土層	陶器	丸形皿	8.2	4.6	1.8	—	黄白色	轆轤 型押	透明釉			布志名系	見込ーハリ３ヶ所	74−3	42−3
4	1層 黒褐色土層	陶器	八角形皿	13.5 (推)	8.8 (推)	2.35	—	黄白色	轆轤 型押	透明釉 鉄釉	見込ー花撃	鉄絵 貫入	布志名系		74−4	
5	1層 黒褐色土層	陶器	八角形皿	13.4 (推)	9.5 (推)	2.7	—	黄白色	轆轤 型押	透明釉 鉄釉	見込ー花撃	鉄絵 貫入	布志名系	蛇の目凹形高台	74−5	42−4
6	1層 黒褐色土層	陶器	片口鉢	20.0	9.8	9.0	—	乳白色	轆轤(右) 底部回転糸切	透明釉			石見		74−7	42−5
7	1層 黒褐色土層	陶器	鉢	24.3	12.1	13.1	—	暗赤褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	黄釉		ハケ目 ケズリの後ナデ	布志名系		74−6	42−7
8	1層 黒褐色土層	磁器	段重用蓋	9.0	7.8	2.3	—	白色	轆轤(右) 底部回転糸切	透明釉 呉須	吉祥字	染付	意東		74−8	42−6
9	1層 黒褐色土層	磁器	丸形皿	9.2	4.2	2.6	—	白色	轆轤(右) 底部回転糸切	透明釉 呉須	見込ー不明 内口縁ー格子文	染付	意東	見込ー蛇の目釉剥ぎ	74−9	42−8
10	1層 黒褐色土層	磁器	隅切方形皿	8.1	4.0	2.4	—	白色	轆轤 型押	透明釉 呉須	見込ー花弁 内口縁ー斜格子文	染付	塩谷		74−10	42−9

北側２区上土器溜出土遺物

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
1	1層 黒色土層	陶器	釜蓋	3.3	2.0	1.0	—	淡橙色	手づくね	透明釉			在地系	ミニチュア製品	75−1	43−1
2	1層 黒色土層	陶器	小杯	4.6	1.6	2.2	—	黄白色	手づくね	緑釉			在地系	ミニチュア製品	75−2	43−2
3	1層 黒色土層	陶器	湯飲み碗	7.8	4.0	4.9	—	褐色	轆轤	緑釉			布志名系		75−3	43−7
4	1層 黒色土層	磁器	仏飯器	5.7	3.4	4.7	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー菊花		塩谷		75−4	43−3
5	1層 黒色土層	磁器	平形小杯	7.0	2.5	3.1	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー草？		塩谷		75−5	43−4
6	1層 黒色土層	磁器	平形小杯	7.6	2.4	3.2	—	白色	轆轤	透明釉 呉須			塩谷		75−6	43−5
7	1層 黒色土層	磁器	端反形小杯	6.9	2.5	4.3	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー笹		塩谷		75−7	43−6
8	1層 黒色土層	陶器	受皿付皿	11.0	4.5	3.0	8.4	暗赤褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	来待釉			布志名系	灯明皿	75−8	43−8
9	1層 黒色土層	陶器	受皿付皿	8.8	3.7	2.8	6.2	暗赤褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	来待釉			布志名系	灯明皿	75−9	43−9
10	1層 黒色土層	磁器	稜皿	9.8 (推)	5.1	2.1	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外ー獅子		塩谷	底部凹形	75−10	43−11
11	1層 黒色土層	磁器	皿	—	7.4 (推)	—	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	見込ー？ 内口縁ー？		塩谷		75−11	43−10
12	1層 黒色土層	磁器	皿	—	8.0 (推)	—	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	見込ー草？		塩谷		75−12	43−12
13	1層 黒色土層	陶器	土瓶用蓋	6.9	4.8	—	—	淡褐色	轆轤	灰釉			布志名系		76−13	44−3
14	1層 黒色土層	陶器	土瓶用蓋	8.5	6.3	—	—	褐色	轆轤	透明釉 灰釉 鉄絵	外ー不明		布志名系		76−14	44−1

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
15	1層 黒色土層	陶器	土瓶用蓋	9.8	7.1	—	—	灰白色	轆轤	透明釉	外－？ 見込－環状松竹梅 内口縁－雷文		布志名系		76－15	44－4
16	1層 黒色土層	陶器	壺用蓋	7.2	3.2	—	5.0	淡褐色	轆轤(右) 底部回転糸切	透明釉	外－？ 見込－環状松竹梅 内口縁－雷文		布志名系		76－16	44－2
17	1層 黒色土層	陶器	行平用蓋	14.5	4.7	4.2	—	赤褐色	轆轤	透明釉 呉須	外－不明 見込－山松 内口縁－？		布志名系		76－17	44－5
18	1層 黒色土層	磁器	碗用蓋	9.2 (推)	3.4 (推)	3.1	—	白色	轆轤	透明釉 呉須			塩谷		76－18	
19	1層 黒色土層	磁器	端反形碗	10.3	3.8	6.0	—	白色	轆轤	透明釉 呉須			塩谷		76－19	44－7
20	1層 黒色土層	磁器	端反形碗	9.8 (推)	3.7	5.0	—	白色	轆轤	透明釉 呉須			塩谷		76－20	44－6
21	1層 黒色土層	磁器	輪花端反形鉢	13.8 (推)	5.2	5.3	—	白色	轆轤 型押	透明釉 呉須			塩谷		76－21	44－8
22	1層 黒色土層	陶器	壺	—	4.6	—	—	橙色	轆轤(右) 底部回転糸切	塗土			布志名系		76－22	44－9
23	1層 黒色土層	磁器	壺	—	7.8	—	9.2	白色	轆轤	透明釉 呉須			塩谷		76－23	44－10
24	1層 黒色土層	石器	砥石	11.8	5.8	1.1	—	凝灰岩							77－24	
25	1層 黒色土層	石製品	硯	17.2	6.6	3.0	—	流紋岩質凝灰岩							77－25	44－11

北側３区出土遺物

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
1	1層 黒褐色土層	石器	硯	7.6 (残)	5.5 (残)	2.7	—	暗茶褐色					凝灰岩質頁岩		78－1	
2	1層 黒褐色土層	陶器	平形皿	9.0	4.5	2.6	6.9	暗赤褐色	轆轤 底部回転糸切 (右)	来待釉			布志名系	灯明皿	79－2	45－2
3	1層 黒褐色土層	陶器	土瓶用蓋	—	6.6	2.6	—	暗赤褐色	轆轤	緑釉			布志名系		79－3	45－1
4	1層 黒褐色土層	陶器	端反形碗	11.3	4.6	4.6	—	暗赤褐色	轆轤	灰釉			布志名系		79－4	45－3
5	1層 黒褐色土層	陶器	胴丸形壺	—	4.4	—	8.0	黄白色	轆轤	透明釉 鉄釉		掛け流し	布志名系	油壺	79－5	45－4
6	1層 黒褐色土層	磁器	碗	—	6.5	—	—	乳白色	轆轤	透明釉 呉須	見込－不明	染付	意東	広東碗	79－6	45－5
7	1層 黒褐色土層	磁器	碗	—	6.0	—	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	見込－不明	染付	意東	広東碗	79－7	45－6
8	1層 黒褐色土層	磁器	端反形碗	9.6	3.7	6.2	—	白色	轆轤	透明釉 呉須	外－梅花 見込－不明	染付	塩谷		79－8	45－7

頂上部調査区出土遺物

No.	出土層位	材質	器形	a(cm)	b(cm)	c(cm)	d(cm)	胎土	成形	染付・釉薬	文様	装飾特徴	製作地	備考	挿図番号	図版番号
1	1層 黒褐色土層	陶器	行平用蓋	—	6.0	—	—	淡赤褐色	轆轤	来待釉			布志名系	刻み目	88－1	
2	1層 黒褐色土層	陶器	壺	26.3 (推)	—	—	—	淡赤褐色	轆轤	来待釉	外－宝珠・唐草		布志名系		88－2	46－3
3	1層 黒褐色土層	陶器	鉢	21.6	—	—	—	淡赤褐色	轆轤	来待釉			布志名系		88－3	46－1
4	1層 黒褐色土層	陶器	壺	17.6 (推)	12.5	23.5	25.0	暗赤褐色	轆轤	来待釉	外－沈線・ケズリ 内－タタキ痕		布志名系		88－4	46－2
5	1層 黒褐色土層	土器	七輪	—	19.5	—	—	褐色	轆轤	—			備前系？		88－5	46－4

図版1

東側調査区　SD－02完掘状況（北側から）

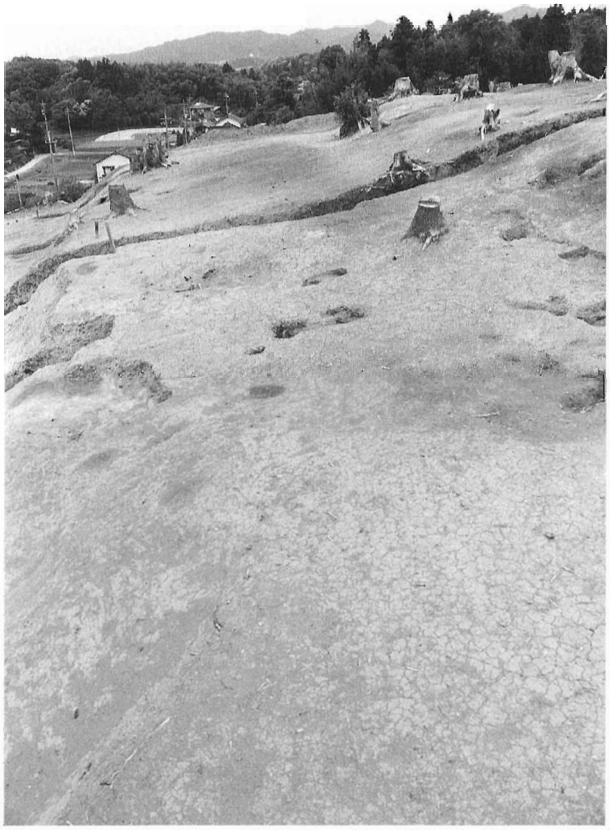
SD－01完掘状況（北側から）

SD－01内遺物出土状況

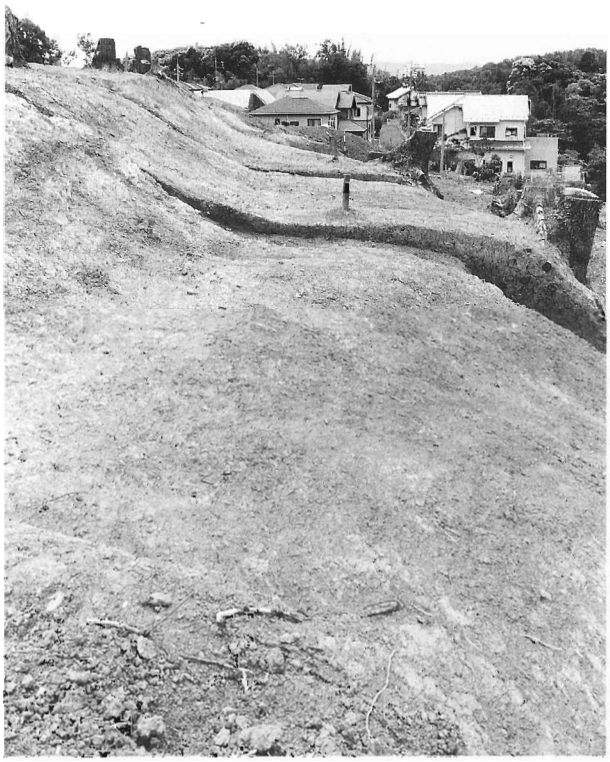
南側調査区　SK－01　土層断面

SK－01　完掘状況（西側から）

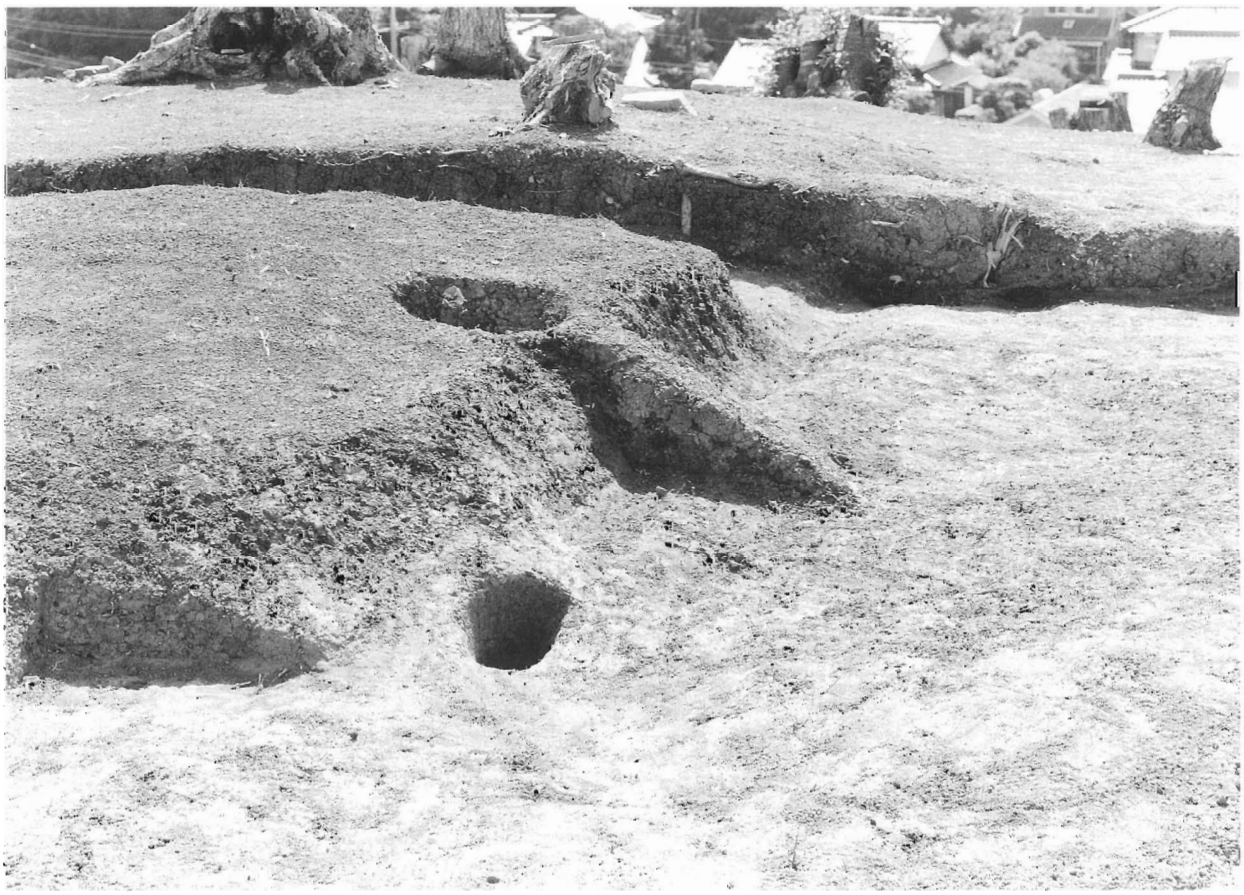
図版3



頂上部調査区　完掘状況（南側から）



完掘状況（北側から）



SX－01完掘状況（東側から）

西側調査区　完掘状況（南西側から）

完掘状況（北西側から）

図版5

東側調査区　１号墓調査前全体（西側から）

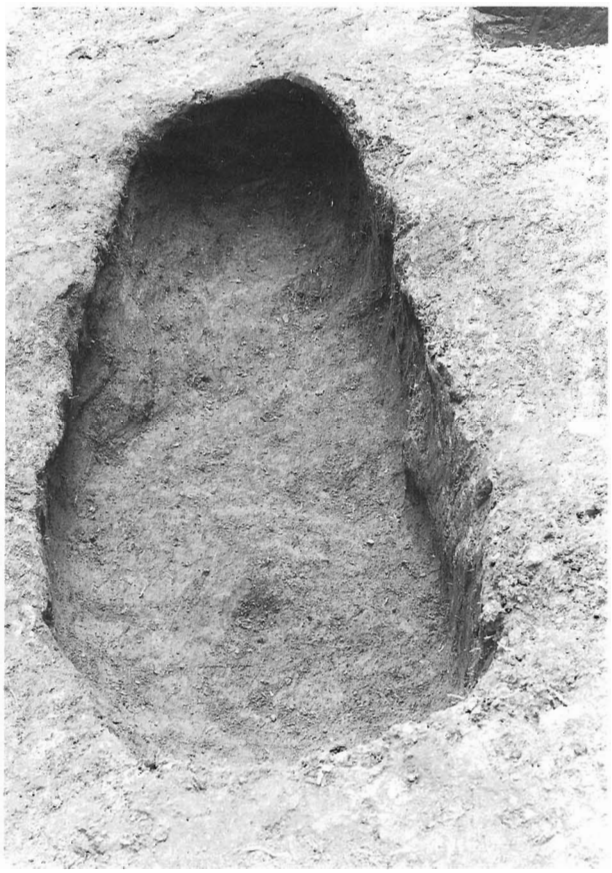
１号墓SK－01完掘状況

東側調査区　４号墓調査前全体（南側から）

４号墓SK－03完掘状況

図版7

東側調査区　SK－02完掘状況

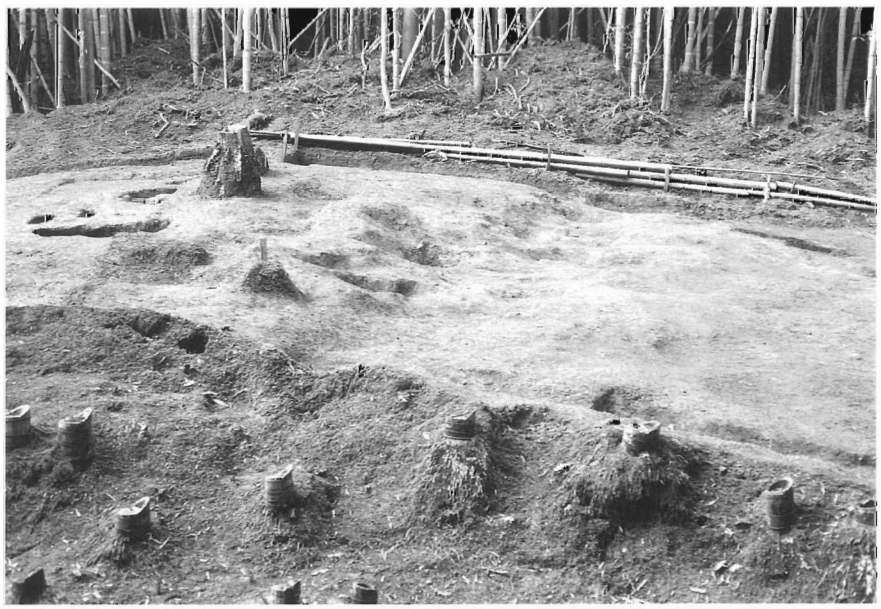


SK－04完掘状況

SX－01完掘状況

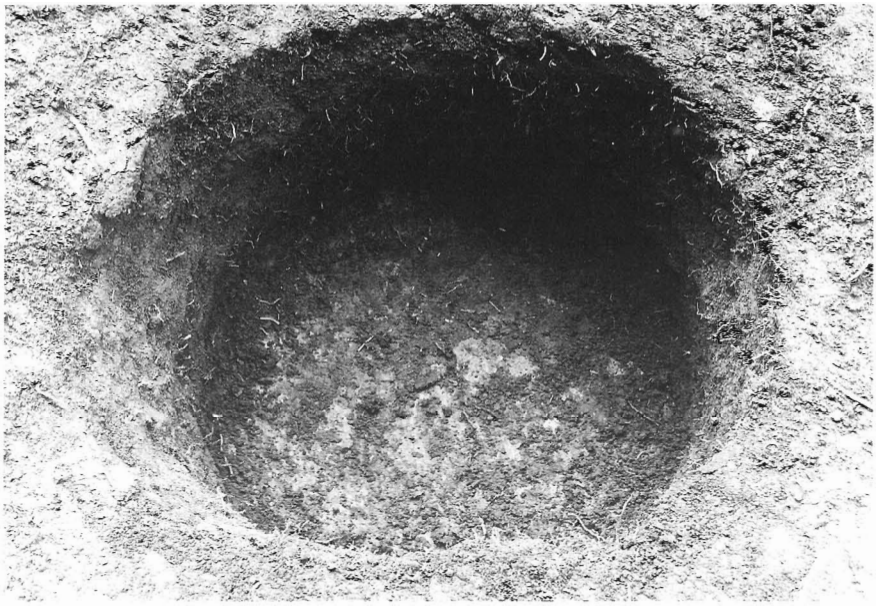
東側調査区
SX－02完掘状況

SD－01完掘状況



SX－02・SD－01
完掘状況

図版9



北側調査１区
SK－05完掘状況

SK－07完掘状況

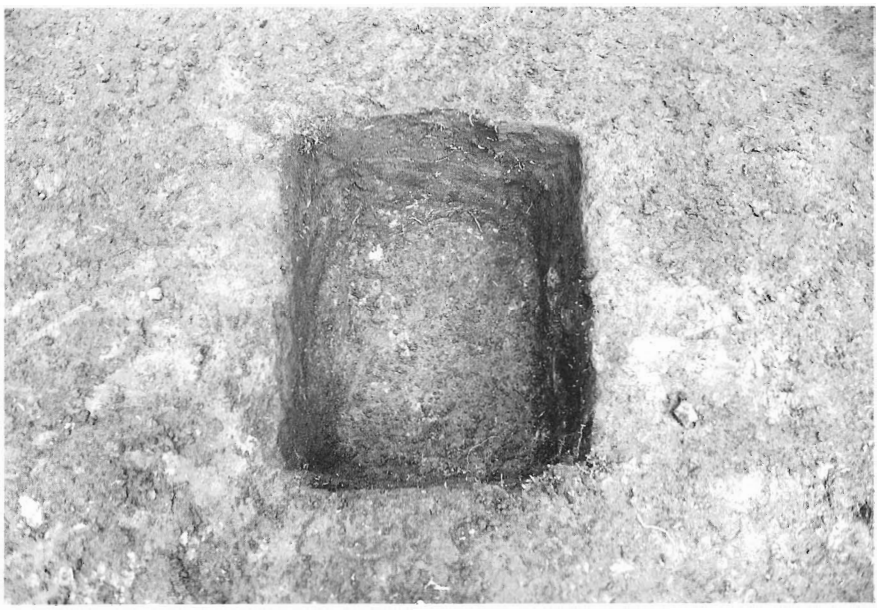
SK－03完掘状況

北側調査１区　完掘状況（東側から）

完掘状況（西側から）

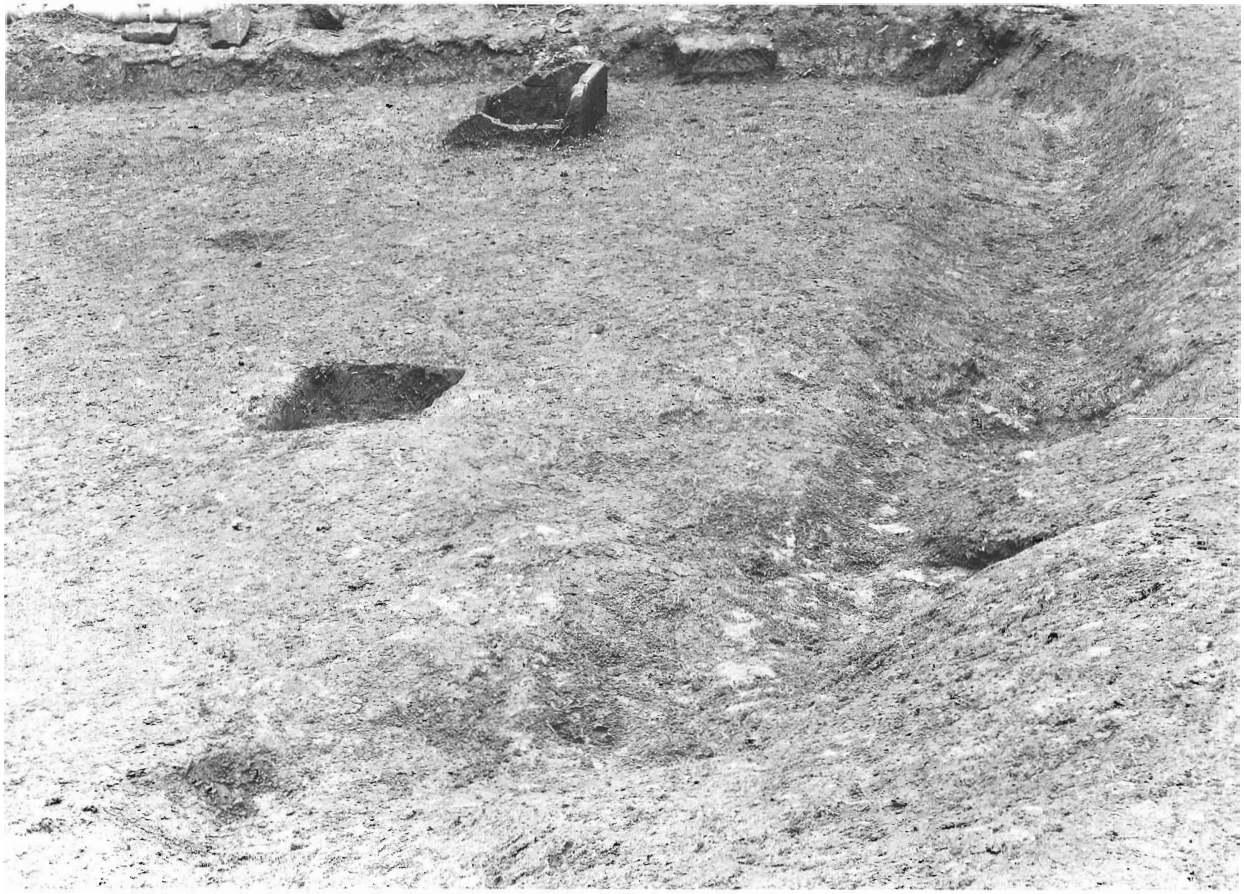
図版11

北側調査２区
SK－12完掘状況



SK－13完掘状況

SX－07完掘状況



北側調査２区　完掘状況（西側から）

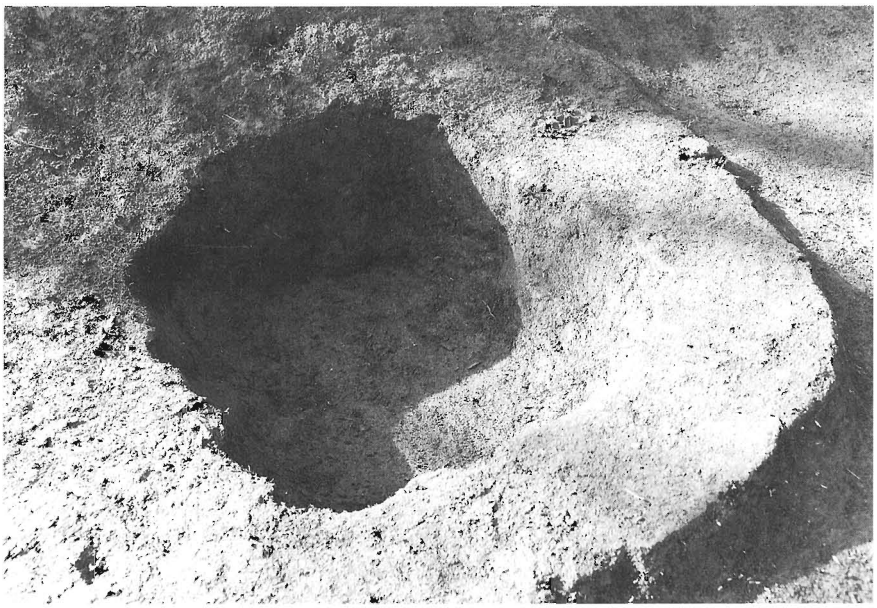
完掘状況（東側から）

図版13

頂上部調査区（東側）
調査前（東側から）

調査前（北東側から）

調査前（西側から）



頂上部調査区
SK－15完掘状況

SK－16完掘状況

SK－17完掘状況

図版15

頂上部調査区
SX－10土層断面図（1）

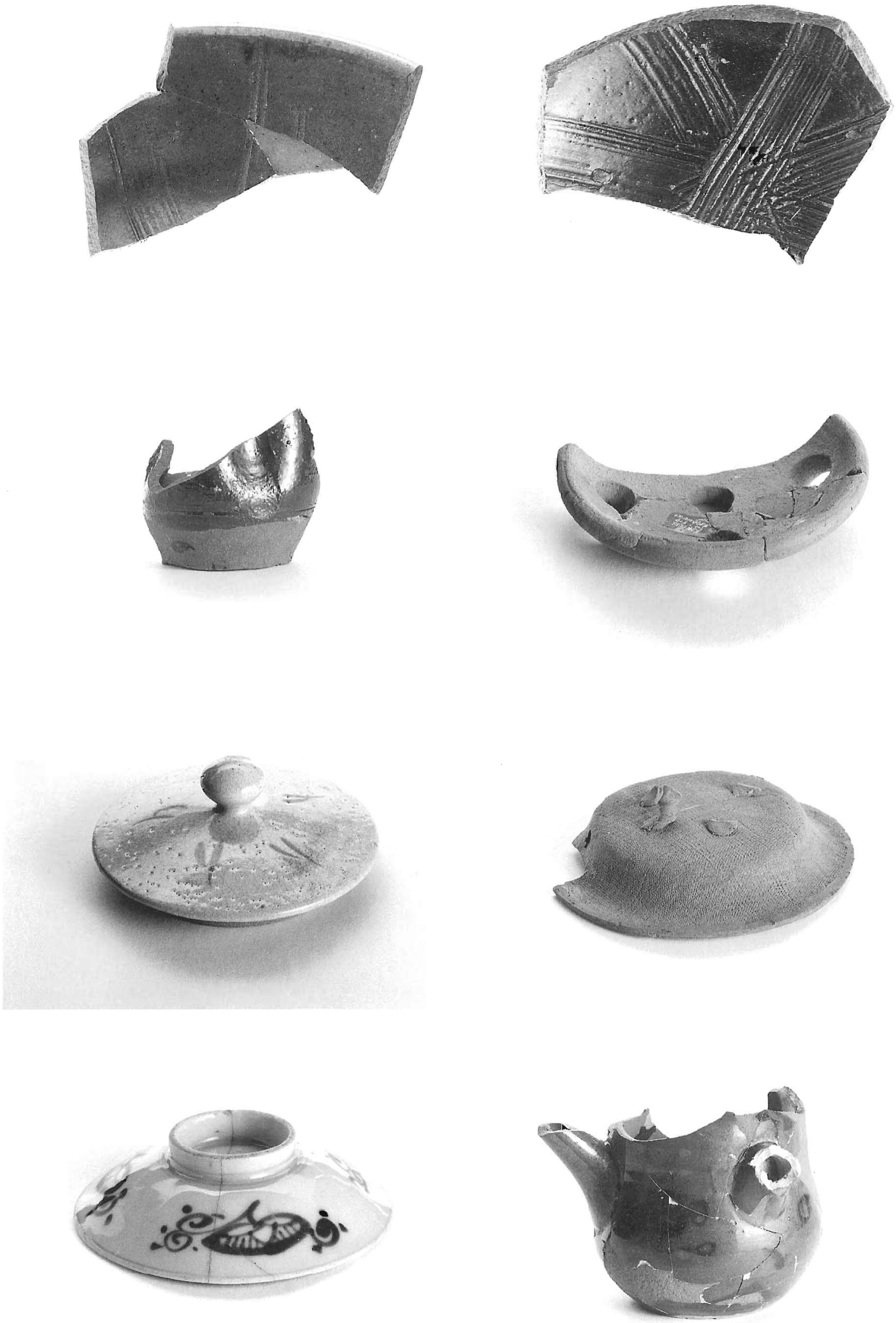
SX－10土層断面図（2）

SX－10土層断面図（3）

頂上部調査区　SX－10完掘状況（1）（南東側から）

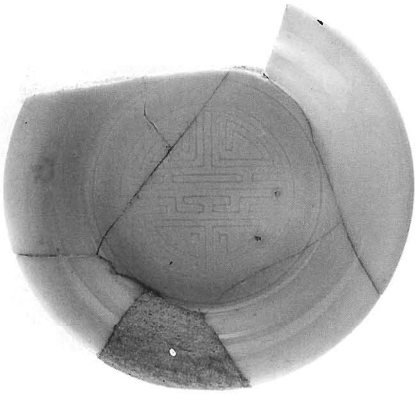
SX－10完掘状況（2）（東側から）

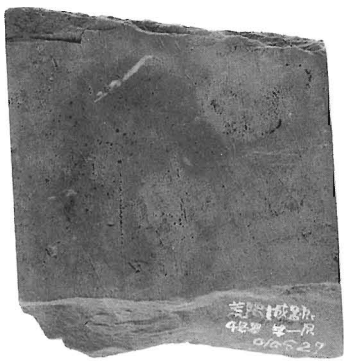
出土遺物

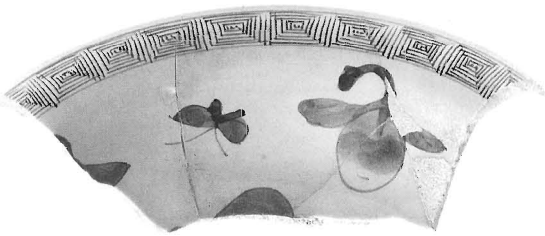


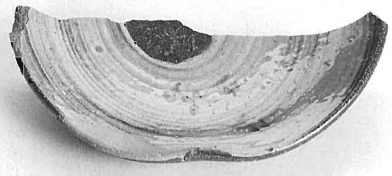
T－1　出土遺物（1）

T－1　出土遺物（2）

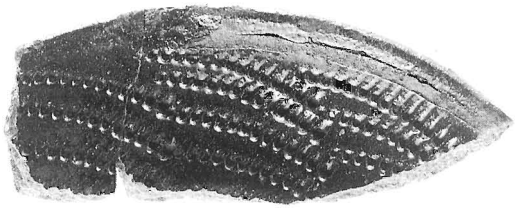


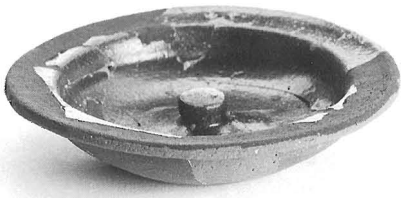


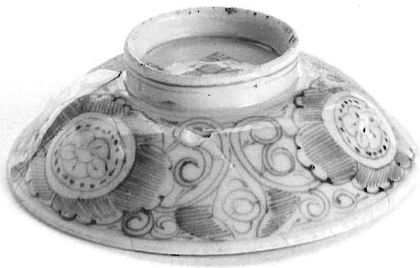


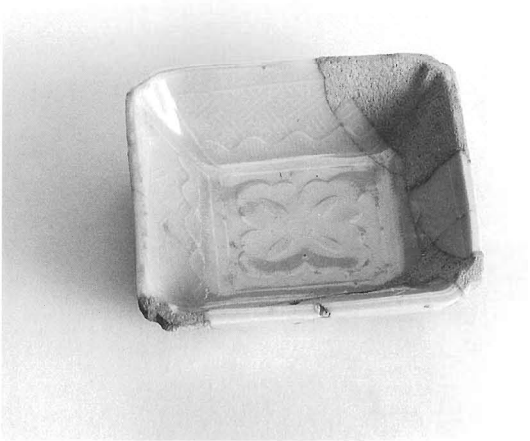


1号墓・2号墓・4号墓出土遺物



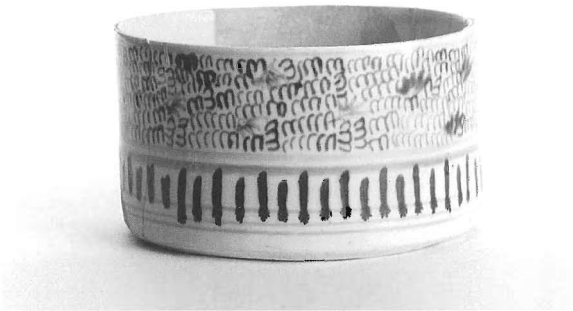


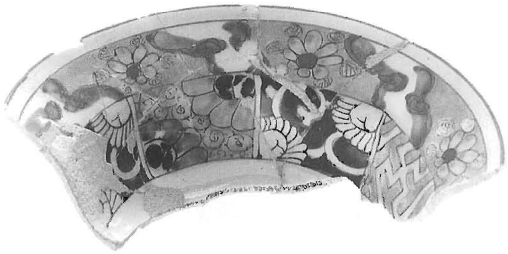




3号墓　出土遺物（1）

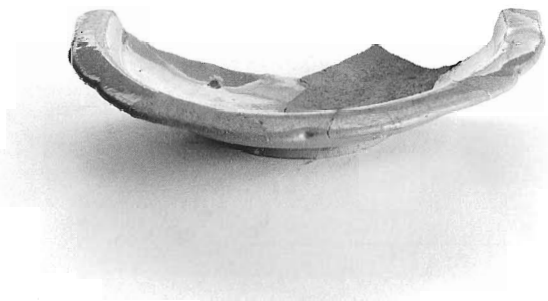
3号墓　出土遺物（2）



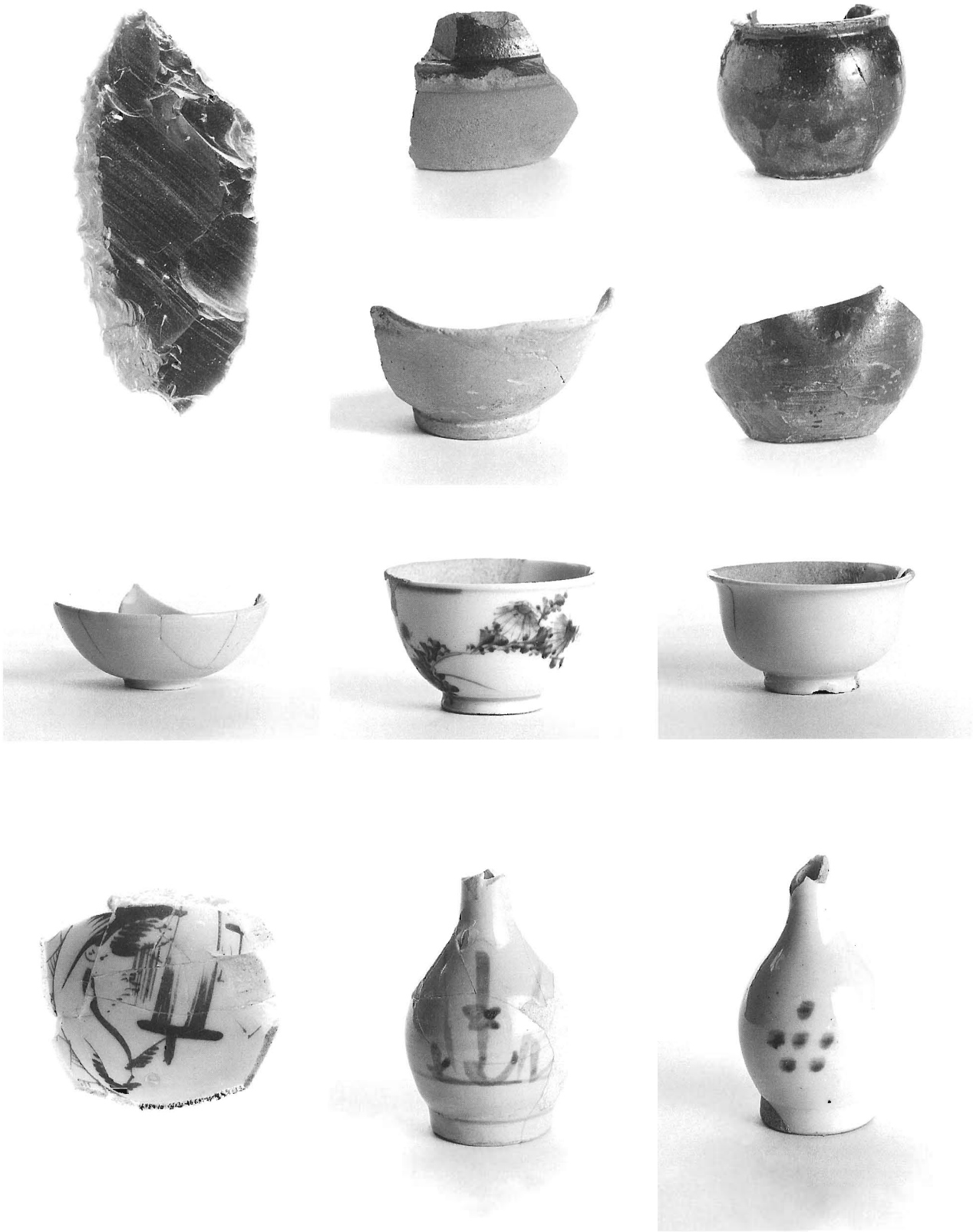


3号墓　出土遺物（3）

3号墓　出土遺物（4）



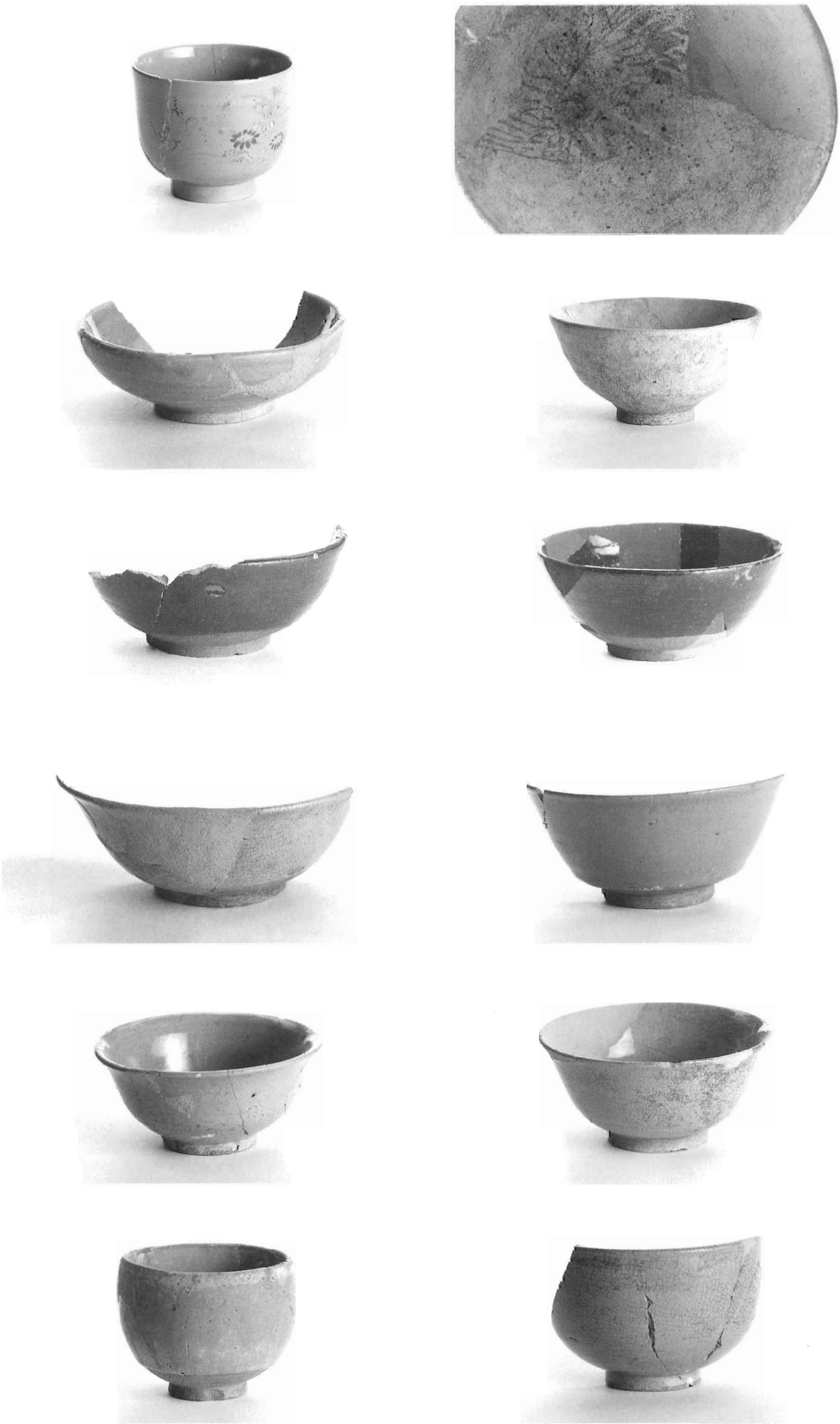
3 号墓　出土遺物（5）



墓域周辺出土遺物（1）

墓域周辺出土遺物（2）

墓域周辺出土遺物（3）

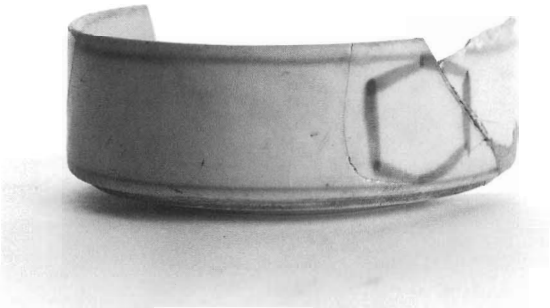


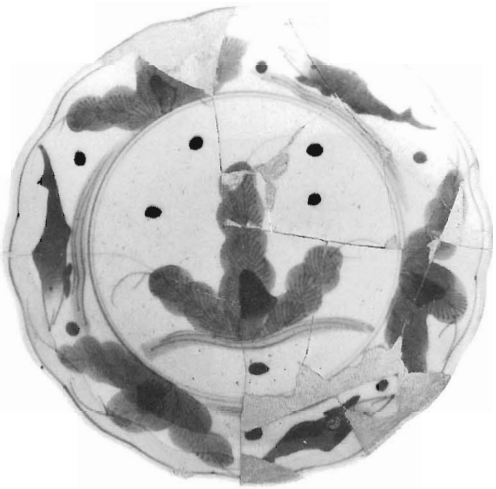
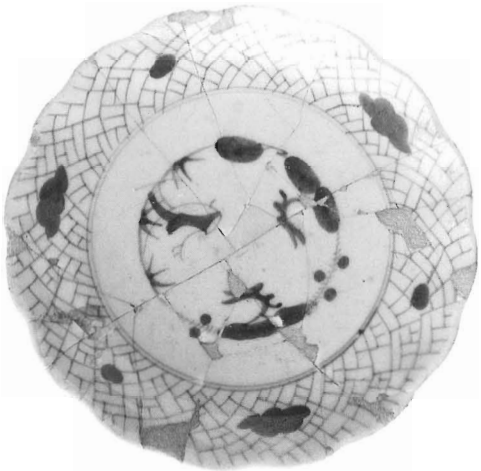
墓域周辺出土遺物（4）

墓域周辺出土遺物（5）

墓域周辺出土遺物（6）

墓域周辺出土遺物（7）



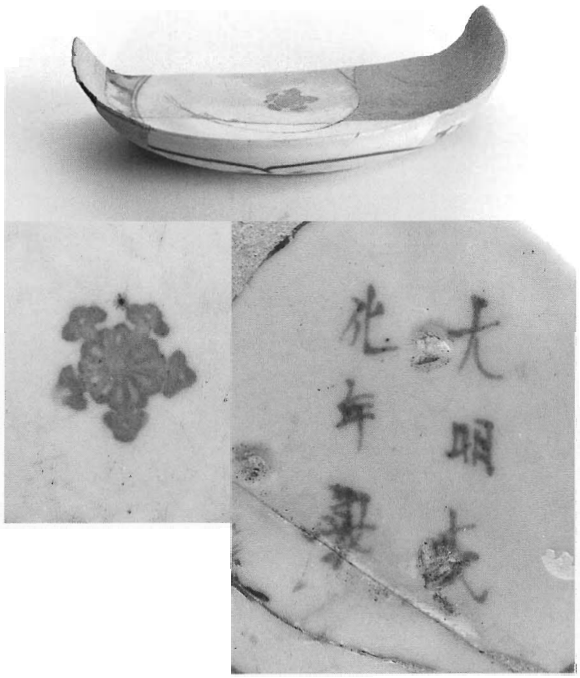



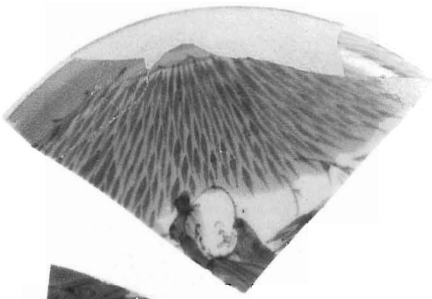
墓域周辺出土遺物（8）

北側調査１区上　SX－06（加工段）出土遺物

北側調査１区下　出土遺物（1）

北側調査１区下　出土遺物（2）



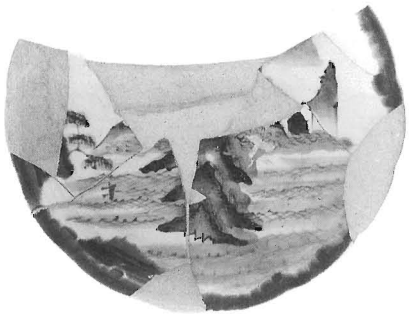


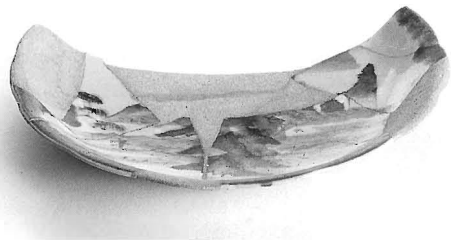
北側調査１区下　出土遺物（3）

北側調査１区下　SX－03（土器溜）出土遺物（1）

SX－03（土器溜）出土遺物（2）

SX－03（土器溜）出土遺物（3）



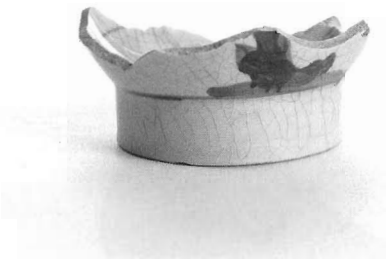


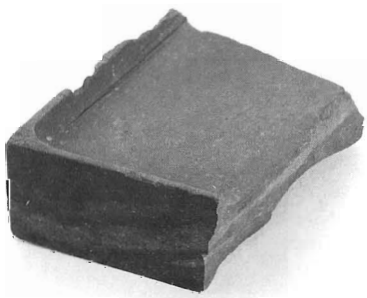
SX－03（土器溜）出土遺物（4）

北側調査２区上　出土遺物

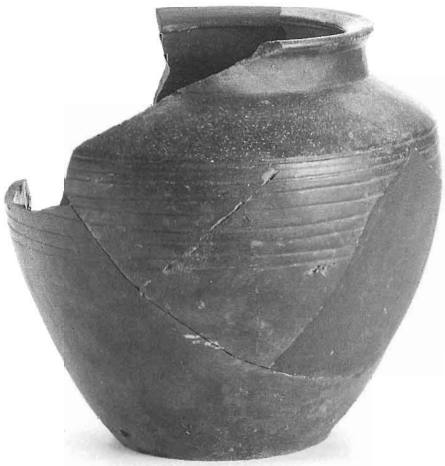
北側調査２区上　土器溜出土遺物（1）

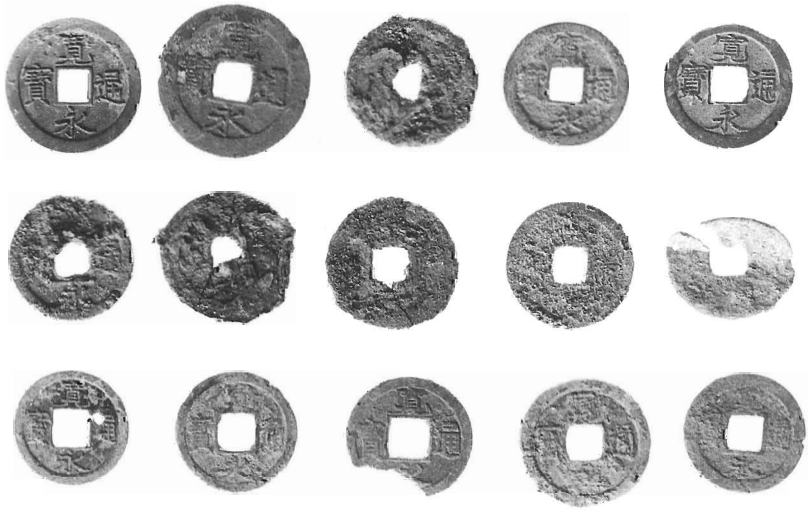
土器溜出土遺物（2）





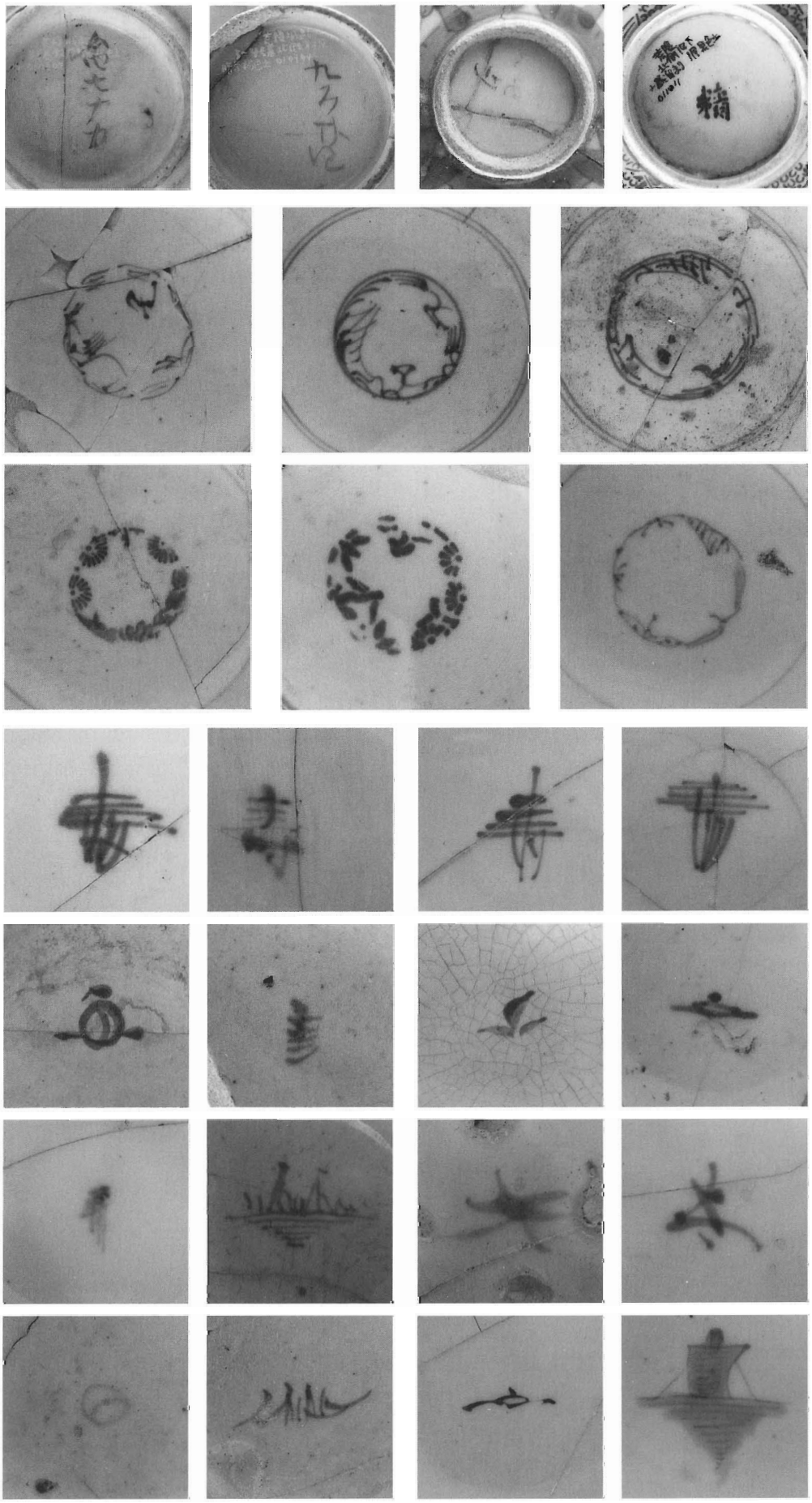
北側調査３区　出土遺物





頂上部調査区出土遺物・古銭

図版47



碗・蓋の見込み部分の文様など

報　告　書　抄　録

フリガナ	とねりいせき・あらわいじょうあと（こじゅうたろうちく）はっくつちょうさほうこくしょ
書名	舎人遺跡・荒隈城跡（小十太郎地区）発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	石川　崇
編集機関	松江市教育委員会　財団法人松江市教育文化振興事業団
所在地	〒690-0886 島根県松江市母衣町180-21　TEL（0852）28-2065
発行年月日	西暦 2002年11月

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
舎人遺跡	島根県松江市国屋町	32201	K－033			2001.11.～2002.4.28	1,300㎡	宅地造成

所収遺跡	各種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
舎人遺跡	散布地	戦国時代？近代	加工段？	陶磁器類	

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
荒隈遺跡（小十太郎地区）	島根県松江市国屋町	32201	K－056			2002.7.13～2002.2.28	1,875㎡	宅地造成

所収遺跡	各種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
荒隈遺跡（小十太郎地区）	散布地	近世末～近代	近世墓・加工段	陶磁器類・石器石製品・古銭	

(仮)とねり団地・(仮)レークタウン国屋造成工事に伴う
舎人遺跡・荒隅城跡(小十太郎地区)
発掘調査報告書

2002年11月

発　行　松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

印　刷　株式会社　谷口印刷
松江市東長江町902-59